

広島県立文書館資料集

10

村上家乗

安政三年・四年

広島県立文書館

凡 例

一 本書は、広島県立文書館資料集10として、広島大学大学院文学研究科日本史学研究室が所蔵する「家乗 続編卷之十三 安政三年」と「家乗 続編卷之十四 安政四年」を、「村上家乗 安政三年・四年」として刊行するものである。

一 本文の表記法は、原文の形に沿うようにつとめたが、読者の便宜のため、次のように改変を加えた。

1 原本には本文のほかに頭書があり、本書ではその体裁をできるだけ尊重して組版を行ったが、都合上、頭書の位置や体裁を変更した部分もある。

2 漢字は、原則として新字体を用いた。異字・当て字・俗字・略字・古字等は、通用の正字体に統一するようにつとめた。明らかな誤字は訂正したが、当時一般に慣用されていた誤字・当て字は改めなかった。また、并（ならびに）は小字で示した。

3 変体がなは、原則としてひらがなに改めたが、助詞に用いられている而（て）・江（え）・者（は）・茂（も）与（と）と、而已（のみ）は小字で示した。また、合体字_カ（より）はそのままだ用いた。

4 漢字の反覆に「ゝ」や「、」を用いているものは、「々」に統一した。「く」は原文のままとした。

5 原本の振りがなはそのまま残した。

6 本文中、記入がない部分や文意が通じない部分には（ママ）、推定できるものには（○○）、なお疑問が残るものには（○○カ）、脱字があると判断される部分には（○○脱カ）、誤って重複したと判断される箇所には（衍カ）などと、それぞれ傍注を付した。

- 7 原文の虫損・破損などで読めない部分は□とし、文字数不明の場合は「」とした。その場合（虫損）（破損）などと傍注を付した。
 - 8 適宜、読点（、）および並列点（・）を付した。
 - 9 平出・闕字は省略した。
 - 10 著者自身が文字を抹消または訂正した部分は、抹消文字の左傍に「と」を付し、訂正文字があればこれを右傍に記した。抹消した文字が不明な部分は■とした。また、頭書部分の文字の右傍に○を付して、数行後に訂正した場合はそのままとした。なお、著者が加筆するなどして誤記を訂正している場合は、訂正後だけを示し、とくに注記しなかった。
 - 11 その他必要に応じて（ ）で傍注を付した。
- 一 本書の解説・校正にあたっては、広島県立文書館古文書解説同好会の有志者のお世話になった。
- 一 本書の解説は西村 晃（総括研究員）が担当した。

目次

凡例
解題

村上家乗 安政三年・四年

安政三年

正月	一
二月	三
三月	六
四月	八
五月	一〇
六月	一三
七月	一五
八月	一七
九月	一九
十月	二一
十一月	二三
十二月	二五

安政四年

正月	九二
二月	一〇一
三月	一〇七
四月	一一七
五月	一二六
閏五月	一三四
六月	一四〇
七月	一四九
八月	一五四
九月	一六一
十月	一七一
十一月	一七七
十二月	一八六

解題

広島県立文書館では、広島藩家老東城浅野家の家中、村上彦右衛門の日記「村上家乗 続編」のうち、安政五年から明治四年まで（一八五八〜七二）の十四年分（巻一五〜二八）を「広島県立文書館資料集」3〜9として、平成十五年度から原則として隔年で七冊刊行した。今回の資料集10では安政三年から同四年まで（一八五六〜五七）の二年分（巻一三〜一四）を刊行する。ただし、これまでは解題と本文のほか、注、村上家関係系図、人名・寺社名索引等を付したが、今回は都合により省略する。

東城浅野家と、その家中である村上家、そしてその三代にわたる日記「村上家乗」、作者村上彦右衛門などの説明は資料集3の解説に譲り、ここでは本書の時期、安政三年から同四年にかけての政治情勢を概観するとともに、広島藩及び彦右衛門とその周囲の二年間の動向を記すことにする。

一 安政三年・四年の政治・社会情勢

嘉永七年（一八五四）十一月四日に発生した安政東海地震、その翌日の安政南海地震以降も、その余震は国内で長期にわたって続いた。安芸地方でその最大の余震は安政四年八月二十五日の朝、伊予灘を震源として発生した「伊予・安芸地震」であった。この地震の振動は短いものであったが、伊予国今治では被害が大きく、今治城内で破損があり、死者も出ている。広島でも大きく揺れ、村上彦右衛門は「去ル寅年十一月五日之震乃ハ

少し強し」と「村上家乗」(以下「家乗」と略称)に記した。安政南海地震を経験した城下の住民は屋外へ仮屋を構えたが、そこで寝泊りするには至らなかつた。東城浅野家屋敷でも損所が生じたほか、彦右衛門の屋敷や東城浅野家家中の多門はこの地震によって少し北に傾き、壁もはがれるなどの被害が出ている。この地震の余震も長く続き、城下住民が戦々恐々であつた様子も「家乗」を通してうかがえる(一六〇〜一六一頁)。

この年は地震だけでなく、閏五月二十一日には、大雨により川の水位が一丈三尺五寸(五一三センチ)まで上がり、三家老の軍勢はそれぞれ定められた持ち場まで出張する事態となっている。幸い大きな被害は出なかつたようであるが、このような家老軍勢の出動は嘉永五年(一八五二)八月の広島大洪水以来六年振りのことであつたという(一三七頁)。安政三年七月十四日夜には城下で落雷があり、那方吟味役所前の櫓が破損するなどの被害が発生している(五三〜五四頁)。なお、安政三年八月二十五日には台風によって関東地方が暴風雨となり、前年十月の安政江戸地震に倍すると称せられるほどの被害が発生し、江戸の広島藩邸で生じた「余り之大変」な被害の状況を、彦右衛門は九月二十三日の「家乗」に書き留めた(六九〜七〇頁)。

さて、「伊予・安芸地震」は被害範囲が限定的な直下型地震であつたが、それとは気付かない彦右衛門は、安政四年八月二十五日の「家乗」に、安政の東海・南海地震のような被害が広範囲に及ぶ海溝型地震を想起し、「今日之地震定而上下諸国共大变二而可有之与被察、天意如何難計、恐怖二堪たる次第也」と書いた(二六一頁)。それはこの日、米国駐日総領事ハリスの出府と江戸城への登城が決まつたという情報を耳にしたことも併せて、我が国の行く末を悲観したためである。

タウンゼント・ハリスは、安政三年七月二十一日、嘉永七年(一八五四)に締結された日米和親条約に基づく初の駐日総領事として来日し、二十三日に下田に上陸した。幕府側では、日米両国政府の合議の上で総領事が派遣されると理解していたため退去を求めたが、通商条約の締結を使命と考えるハリスは納得しなかつた。八

月三日、ハリスはアームストロング大佐その他の士官とともに再び上陸して、下田奉行と会見した。奉行は、目的や権限について尋ねるとともに、領事の派遣に異議を唱えて退去を求めたがハリスは応じず、アメリカ政府へ交渉するまでの間滞在することを認めざるを得なかった。その結果ハリスは五日に上陸し、下田近郊の玉泉寺を総領事館と定めた。十一日に下田奉行はハリスの下田駐在を決め、幕閣に指示を仰いだ。幕閣は十四日に取り締まりを嚴重にすることを条件にそれを承認することになった。

それから一ヶ月後の九月二十七日、ハリスは江戸の幕閣に書翰を送り、日本との交渉を開始するため、日本皇帝（將軍）へ宛てた大統領の親書を手交するため出府することを求めた。下田で奉行と交渉を繰り返すよりも、江戸で幕府要職と直接折衝する方が賢明であると考えたからである。当初幕閣らはこの要求を顧みなかったが、ハリスの出府要求は次第に強硬となった。幕府要職のうち、海防掛の大目付・目付は初めから出府許可の意向を示したのに対し、同じ海防掛でも勘定奉行・勘定吟味役は、これを許せば他の諸国へも認めざるを得なくなるとして、強く反対した。ハリスの強要によって出府を許し、將軍に謁見することになれば、諸侯からの反発を招き、人心が動揺する恐れもあり、幕府首脳部でも意見は一致しなかった。老中のうち堀田正睦（まことむつ）が出府許可を主張したのに対して、阿部正弘（まさひろ）は、猛反対する水戸藩主徳川齊昭（なりあき）の意向を汲んでしばらく出府を許可しないという意見であった。しかし、阿部正弘は安政四年六月十七日、老中在任のまま江戸で死去した。七月十五日、彦右衛門は、阿部の死去に関して「別而近年異国御製御之筋ニ於てハ不容易御心痛も被成、上下倚頼厚趣ニ承及候処、可惜事也」（二五一―二五二頁）と綴った。

阿部の死後、堀田を首班とする幕閣は、ハリスの出府などの問題を延期するよう努めるが、その要求を許可することはやむを得ないという方針へと展開する。七月八日、下田奉行はハリスと会談して出府許可の幕府の内意を伝えた。ただし大統領の親書は直接將軍へ手渡すのではなく、老中を通じるよう求めたが、ハリスはそ

れを拒否した。その後の折衝により、親書は將軍の面前で老中に手渡すこととなった。七月二十四日、幕府は御三家と両卿、溜間詰諸侯にハリス出府許可について内達し、その了解を求めたが、同意は得られなかった。それでも幕府は八月十四日にハリス出府許可を布告した。十月一日には同月十四日の江戸着府、二十一日の江戸城登城と將軍謁見などの日程が発表された。

「伊予・安芸地震」が発生した安政四年八月二十五日、ハリスの出府と登城決定について「家乗」に書いた彦石衛門は、さらに十月二十四日、「江戸表並墨利加官吏登城之義、溜之間詰諸侯方始、御大名様方段々御不居合、夷人者下田表ニ於て種々我儘を働キ、輕蔑之所行不堪切齒様之事ニ而人氣洶々、甚以不案千万之事之由、虚実者不知、風説有之、可懼事也」と切齒扼腕するのである（一七六頁）。

二 安政三・四年の広島藩の動向

安政三年元旦、広島藩家老、三原浅野家当主の浅野遠江忠吉は病氣と称して登城しなかった。三月八日になって、遠江は先代出羽忠敬の五男雅楽（忠英）を養子に迎え、四月二十八日、右近と改名した雅楽に家督を譲り、保養のため三原城に隠居した。

嘉永六年のペリー来航を契機に、広島藩では年寄上座今中丹後相親を中心とする守旧派政権に対する批判が高まり、黒田図書・辻勘三郎（後の将曹）・石井雄之進（後の修理）ら番方藩士を中心に改革派が形成された。改革派は財政再建と遅れている武備充実を目的に、藩政不振を憂慮する浅野遠江と通じて、上田主水・浅野豊後と三家老連署による建白書を藩主浅野斉肅に提出し、政權交代を要求した。しかし、この建白書は保守派年寄二川清記の手に落ち、年寄の評決によって処理されることになった結果、嘉永七年正月に今中らは要路を去ることになったが、それは処罰を伴わない転役・罷免に過ぎなかった。その後、改革派からは用人上席であった

藤田新五郎（兵庫）が年寄役へ引き上げられたものの、それは従来の昇格コースが踏襲されただけで、その他の改革派からの人材抜擢は行われなかった。その後の藩政は、年寄生田筑後と二川清記（安政二年六月死去）を中心に運営されることになった。

この二川・生田政権でも、財政難を理由として武備充実に積極的に乗り出そうとはしなかった。浅野遠江は生田筑後を屋敷に招いて藩政改革の必要性を懇論したが、その効果はなかった。このため意を決した遠江は、言路洞開、人材抜擢、文武引立、財政再建など政策課題を九か条にまとめ、三家老連署で藩主へ直接提言することを上田主水・浅野豊後に提案した。しかし、兩名は直接提言することに難色を示したため、遠江は安政二年十二月九日に単独で藩主斉肅に対して、藩政の中心である御用達所へ遠江自らが出席して藩政に関与すること、年寄生田筑後を更迭すること、沢徳三郎（後の浅野外衛）と辻勘三郎らを抜擢することなどを上言した。斉肅はこれらを承認したが、年寄らは、家老が藩政に関与しないことを決めた五代藩主浅野吉長以来の遺法を理由にこの承認を反故にした。そして年寄の武田大炊を上田主水と浅野豊後へ遣して、斉肅の内旨として遠江の隠居を勧告し、もしこれを拒否すれば藩主の公命として処分することを伝えた。遠江はやむなく隠居するほかなかったのである。

隠居後、浅野遠江は三原で、西洋流練兵を伝習させた家臣を教師として、本藩に先駆けて西洋式銃隊の練兵を行わせる。翌安政四年には三原城西築出に家中の武芸稽古のため吾往館を設置し、年齢層に応じた訓練を実施するようになる。当時、広島の上原浅野家屋敷では「御成之間を始、御不用之御場所段々御取崩二相成、御庭御物数寄も御取除、樹木・大石等其外結構之御道具類悉御売払二相成」った（一五頁）。これを聞いた彦右衛門は、家計逼迫のためと推測しているが、浅野遠江は三原での軍備充実の資金に充てようとしていたと思われる。

広島藩では、安政三年九月、なお一層儉約に努めるよう各役所へ通達している。これは、藩主浅野齐肃が、病氣を理由に半年延期していた参勤交代で、同月十二日に広島を出発するに当たり命じた大儉の親書に基づく。齐肃は、安政二年十月の江戸地震、同三年八月の江戸大風雨による江戸藩邸の被害復旧や、同年十二月に予定されている、広島藩世子浅野慶熾よしたかと尾張前々藩主徳川齐荘なりなの娘利姫との婚礼に備えて、安政元年の大儉令の上になお一層節儉に力を尽すよう、悲痛の親書を年寄へ渡したのである。このことが端的に物語るように、生田政権でも、家中や領内に対して度々節儉を呼びかけるだけで、財政難を理由に武備充実に積極的に乗り出そうとはしなかった。

広島藩三家老のうち上田家では、第一一代当主上田主水安節ちんじが安政三年五月四日に五十歳で死去し、第一〇代当主上田主水安世やすよの子内記安敦やすあつが第一二代当主となり、主水と改称した。したがって、この安政三年には三家老のうち、東城浅野家を除く二家で当主が交代したことになる。なお、上田家では安節死去直後に、彦右衛門を通じて東城浅野家へ五百両の借入れを依頼している。上田家では大変な財政難で、彦右衛門は、上田家では少なくとも差し向き三百両を借り入れられなければ、安節の葬儀もできないという噂を七月六日の「家乗」に綴っている（五一頁）。

生田政権下の広島藩では、安政二年九月、関尚之丞・小幡孫兵衛・小島太郎作・野村良之進・永田完二を抜擢して海防掛専務に任じた。また、浅野遠江隠居後の同三年六月、水主かこ町船手役所に繋がれた官船二九艘を船隊に編制して江波の海上で三島流水軍の教練を行い、同四年三月には武州大森の幕府射場で、広島藩と青山内証分家とが合同で高島流の西洋式大砲の発射演習を行っている。同年九月には江戸深川冬木町と広島楠木村に鑄工場を設けて製砲を試みるようになった。また、安政四年六月に桂貫一郎という浪人の砲術功者を足軽に抱え、比治山藍座役所で鉄製大砲を鑄造し、軍艦のボート（バッテリー）を建造して大須賀川に繋いだことが

「家乗」に見える（二四三頁）。このように、生田政権下の広島藩では西洋式軍備を整備し、海防に取り組み機運は見られるようになるが、財政難を理由に十分な効果が上がったとは考えられない。安政四年四月、広島藩は幕府から津藩藤堂家に代わって江戸東叡山の防火番を命じられたが、これは江戸湾海防役を命じられないよう工作を行った結果であり、広島藩の本意ではないと彦右衛門は「家乗」に書いている（二三〇～二三二頁）。

三 村上彦右衛門と東城浅野家周辺の動向

東城浅野家の用人役、村上彦右衛門は安政三年正月で四十三才となった。翌四年三月十日には、役向きに常々精勤していることを理由に三〇石を加禄され、一三〇石となっている。彦右衛門は天保六年（一八三五）八月に二十二歳で小姓組として召し出され、同十五年一月二十七日に父星右衛門の隠居に伴って家督を継ぎ、用人役、一〇〇石となっているので、それ以来十四年ぶりの加禄であった。村上家四代勇藏、父の六代星右衛門とも禄高は一〇〇石に留まっていたので、この一三〇石は村上家歴代で最大の禄高であった。彦右衛門はこれは「不思議之果報」であるとともに、父や先祖の余沢の然らしむるところと感激している（二二一頁）。なお、彦右衛門は文久元年二月に家司役に就任するに当たり、足知として二〇石を付けられて一五〇石、明治二年七月には版籍奉還に伴い、広島藩の直臣となり、足軽・槍持役料と併せて三〇〇石となっている。

安政四年閏五月二十六日には末子の長槌（安政六年三月に千代雄槌と改名）が生まれたが、たびたび大便が通じなくなり、感冒を発症して熱が出るなど病弱であった。正介（秀山智英童子）・松濃（芙蓉院秋露童女）・幾三郎（実山賢秀童子）・他三郎（義純童子）という四人の子供をいづれも早世させた彦右衛門は、長槌の体調には神経質なほど目を配っている。九月五日には、広島で普及し始めた牛痘を、広島で普及させた功労者の一人である三宅春齡（董庵）に依頼して接種させている。

このほか村上家の縁類では、東城浅野家中の辻清人に嫁いだ梅が安政三年二月十五日に女子を出産している。梅の幼名である恒と命名したが、病気がちなので、同四年に藤之森社で祈祷してもらった上で、竹と改名した。

彦右衛門自身も健康とは言えなかった。安政二年一月から左目に翳(かげ)が生じ、眼痛に苦しむようになり、同年には眼医、灸人、僧侶などに診察や治療を行わせているが、いずれも大きな効果を得ることができなかった。安政三年二月には「昨年秋頃風与按摩を以諸病を療し候事を得、殊外奇効を致し」、「真虫指」と評判の、東城浅野家知行地の世羅郡小童村百姓富助に眼や腹を按摩させ(一七頁)、同年四月には「脈診二妙を得、当時専世上之難病を治」すという安芸郡隠戸の狐師源太郎に依頼して灸治療を行っている(二七頁)。その後は、同年八月十六日に「眼之心持不宜」ことを理由に勤務を休んだことが「家乗」に見られるが、それ以降自身の眼病について触れなくなるのは、効果があつたことの現われなのだろうか。

安政四年一月三日、彦右衛門の槍が、新年祝詞のために訪れた実弟の森岡万之進家で紛失するという「案外至極之珍事」が起きている。供の槍持が森岡家の門内に槍を持ち込み、置いていたところ、同家台所で酒を供されている間に誰かが持ち去つたのである。槍持は周章狼狽し、多門内の者と搜索したが見つからず、その日はとりあえず万之進の槍を借りて帰宅した。翌日、薬師坊に方向を占わせ、刀剣商の川本屋伊助にも依頼し、町方にも手を廻して船留めなども行つたが見つからず、万之進の提案で沼田郡下安村の藤之森社で占つてもらつた。占いは「御抱内同様之近辺之者」が犯人で、祈祷すれば三日のうちには戻ってくるという結果であつた。そこで三日三夜の祈祷を依頼したところ、六日早朝になって、森岡家脇の無常門の大手堀内へ投げ込まれているのが発見されると万之進が言つてきたのである。彦右衛門は、船留めなどを行つた結果、「盗之心中何となく恐怖を懷、右様窃二戻し置候ものなるへし」と、その幸運に胸をなでおろした(九五頁)。武士はその格式

により、外出の際には若党や小者など相応の供を連れ、槍などの道具を携行する必要があった。それを許された武士が、外出時に槍持を携行させないようなことがあつてはならないことを示すエピソードである。彦右衛門は同年四月五日、不慮に備えて川本屋伊助から払物の十文字槍を購入した。

「家乗」では、彦右衛門が日常の勤務の傍らで諸武術を見聞し、自らも武術の稽古に熱心に取り組んでいる様子が窺える。安政四年四月二十九日、彦右衛門は東城浅野家の外記流砲術師範吉本恒之丞から、年来熱心に稽古して業も進んでいるとして免許状の授与を打診された。彦右衛門は最近では稽古に格別熱心とは言えず、業も未熟なためそれを辞去しようとしたが、師範家を継いだばかりの恒之丞から相談相手が欲しいと熱心に勧められ、それを受けることになった。彦右衛門は安政三年十一月二十日に、東城浅野家屋敷で、広島藩外記流砲術師範井上権之丞の弟子による「土筒早合前」と野戦筒の演習を見学したが、同年三月四日に奥弥右衛門の西洋流砲術稽古を見学した時に「誠ニ勇敷、壯觀也」（二九頁）と感嘆したような感想を「家乗」に書き残していない。このことから、彦右衛門は日本の伝統的な砲術よりも西洋流砲術に関心を示しているようにも思えるが、その一方で、安政四年十月二十七日に、肥後国五家村（五箇庄か）の住人で、真田幸村の末葉と称する九度右衛門が秘術として見せた紙張筒の製作台に感心する（一七七頁）ようでは、旧来の知見を脱していないようである。

東城浅野家では、安政四年十一月十五日に当主浅野豊後道興が、家老上田家先代主水安節の娘である忠姫と祝言を挙げた。道興はこの年四十三歳であつたが、この年まで正室を迎えていなかったたのである。正室となつた忠姫はこの年四十歳、九歳年少の長州藩一家老筆頭で周防国熊毛郡三丘村領主穴戸美濃（後に備前と称す）親基に嫁いたが、嘉永六年に離縁となり、上田家に帰って来ていたのである。

上田家文書「安節公御女於忠様豊後様江御縁組一卷」（三原市立中央図書館所蔵）によれば、この縁組は、安政四

年四月十七日に彦右衛門が上田家用人筆頭の吉田藤馬を訪れて内談したことに始まる（同日の「家乗」には「御用向」で吉田を訪れたことしか記述がない）。同二十二日、吉田藤馬が上田家でこの縁組を了承する旨を彦右衛門に伝えたことにより、この縁談は本格的に進行することになる。「家乗」には、五月三日に彦右衛門が上田家屋敷へ縁組内約使者として訪問して以降、この縁談の記事が見られるようになる。この縁談は同八日に広島藩郡奉行小島太郎作を通じて年寄役へ伝えられ、六月十五日になって、上使として用人並に就任した小島太郎作が東城浅野家へ来館し、藩から了承されたことが伝えられた。上使が帰ると即刻道興と先代周防（道博）はそのお礼のため登城している。二人が下城した直後に上田家から吹聴使者として吉田藤馬が東城浅野家を訪れ、その返礼のため彦右衛門は上田家へ向かった。九月二十六日に結納の祝儀が東城浅野家から上田家へ進上されることになり、彦右衛門がその使者を命じられて上田家上屋敷へ向かった。十一月八日に忠姫の結婚道具類が上田家から東城浅野家へ届けられ、同十五日に東城浅野家で祝言が執り行われている。忠姫が乗った御輿は午後三時前に東城浅野家屋敷へ着いた。八丁馬場から城内にかけて、婚礼の行列を一目見ようと多くの人が集まった。彦右衛門義母の仙（慈君）と妻のみつ（家小）も東城浅野家門外まで出て見物した。御輿の行列が表門に到着するに当たり、御輿請取役を命じられた彦右衛門は、家司渡辺宗右衛門と用人堀尾善大夫とともに門内西側でこれを出迎え、上田家の御輿渡役吉田藤馬と並んで御輿の左後ろに付き従った。祝言は夜中まで続き、彦右衛門が屋敷を退出したのは夜中の十一時頃であった（一八〇一―一八一頁）。

東城浅野家では、ペリト来航直後の嘉永六年九月に、財政難や厳格な儉約令の最中にあっても、昼夜油断なく武芸稽古に励むよう家中に対して命じた。その後、家中では軍学（甲州流）・剣術（貫心流・一甫流）・槍術（香取流）・弓術（日置流）・砲術（荻野流・南部流・外記流）・柔術（一甫流）・棒火矢などの武芸稽古に連日のように取り組むようになった。

三原浅野家では大砲の鑄造にも熱心で、安政三年六月十九日、江波で六ポンド大砲の打ち試しを行っている様子が「家乗」に見える（四七頁）。それと競うかのように東城浅野家でも大砲製造を進めている。美作国勝山から森谷慎蔵という、江戸で修行した職人を雇い入れ、東城において六斤青銅製（砲径九・五センチ、砲身二四センチ、重量六〇〇キログラム）カノン砲を製作させたのである。この大砲は八月二十四日と九月十日の両度にわたって試砲が行われた（六七頁）。先代周防（道博）の子出衛（道積）は火術の研究に熱心で、安政三年十一月三日「ドンドロ」（銃の撃発用点火薬である雷末らいまつ）を製造し、彦右衛門に見せたほか、安政四年二月十五日には、彦右衛門を三原浅野家の外記流砲術家沖和多利のもとへ遣わし、焰硝製法について尋ねさせた。

先代周防（道博）の側室から安政四年五月十七日に又吉が誕生したが、その一方で市松（安政元年十月四日生）が同三年三月五日に、助七（安政二年十月十八日生）が同四年十月二十三日に死去した。周防の子出衛の娘於卓（安政元年十月生）が同年五月一日、夙之進（安政二年六月三日生）も同年五月二十五日に死去している。

東城浅野家中では、与力家の一つで、長く用人役を勤めて安政三年三月二十四日に隠居し、子の益之丞に家督を譲った佐藤与三右衛門が同年六月七日に死去した。また、家中でも特に学事に熱心で、越後流軍学書である「武門要鑑抄」の研究のため彦右衛門の屋敷にも出入りしていた由良政太郎が、安政四年閏五月十日に郊外の大芝新庄辺りの川を渡ろうとして流され、事故死した。自殺ではないが、同年三月七日、彦右衛門から遊学を見合わせるよう説得されたことに絶望したのかもしれない。彦右衛門は「当年廿四歳、学問出精二而御銀も被下、追々御用立可申人物二而有之し、可惜次第也」と「家乗」に記した（二三七頁）。

参考文献

- 『芸藩志』（文献出版、一九七七年）
- 『維新史』（吉川弘文館、一九八三年復刊）
- 『維新史料綱要』（東京大学出版会、一九八三年復刻）及び
東京大学史料編纂所『維新史料綱要データベース』
- 『広島県史』近世1・2・近世資料編Ⅰ・Ⅱ（広島県、一九七三～八四年）
- 『広島市史』（広島市役所、一九二二～二四年）
- 『新修広島市史』（広島市役所、一九五八～五九年）
- 『三原市史』資料編一・通史編二（三原市役所、一九七〇～〇六年）
- 『東城町史』通史編（二冊）（東城町、一九七七～九九九年）
- 林保登『芸藩輯要』（芸備風土研究会、一九七〇復刊）
- 小鷹狩元凱『芸藩三十三年録』（元凱十著、一九三〇年）
- 『広島県人名事典 芸備先哲伝』（歴史図書社、一九七六年）
- 『平成新修旧華族家系大成』（吉川弘文館、一九九六年）
- 政治史・茶道史研究協議会編『上田家文書調査報告書』
- 上田家家政史料集成』（広島市教育委員会、二〇〇五年）
- 『近世風聞・耳の垢』（進藤寿伯稿・金指正三校註、青蛙房、一九七二年）
- 三原市中央図書館蔵「上田家文庫」（広島県立図書館複製資料）
- 石井孝『日本開国史』（吉川弘文館、二〇一〇年）
- 宇佐美龍夫ほか『日本被害地震総覧』（東京大学出版会、二〇一三年）
- 『新収日本地震資料』五、別巻二、一（東京大学地震研究所、一九八五年）

村上家乗 安政三年・四年

(表紙)

<p>家乘</p> <p>統編卷之十三</p> <p>安政三年</p>

人皇百二十二代

御諱統仁

弘化丁未御即位、從神武

元年辛酉二年五百十四年

今上皇帝御宇十一年

安政三年龍次丙辰

平天下四年

源家定公 德川家康公十三代、從嘉永癸丑

治国廿六年

源齊肅公 浅野長政公十一代、從天保辛卯

齊家九年

紀道興公 堀田高勝公十三代、從嘉永戊申

家乘統編卷之十三

安政三年丙辰

村上七世彦右衛門邦裕君綽謹記

正月 大

○元日、己未、晴、朝有氷、余寒強、夕暄、慈君奉始何れ茂平安加寿、暁卯上刻起、若水、神拜、廟拜、蓬萊、祝詞、讀書始、吉書始、屠蘇、大福、菌固、右恒規之通礼服ニ而行之、日出頃麻上下着出仕、御登城前於御居間御祝詞被為受、御家司渡辺宗右衛門殿被出、引統子并渡辺雅登一同罷出、御祝詞申上、益御機嫌能御超歲被遊、御身祝御規式等万端無御滞被為濟、奉恐悅候之段申上、日出度与御意被為在、夫於御次周防様江之御祝詞御用達堀尾精一郎迄申上、直ニ出衛様江御祝詞於御部屋申上、相濟御奥江出、老女江謁、於卓殿・鉛之進殿江も御目見仕、五時過退、旦那樣為御礼御登城被遊、遠江様二者御不快ニ而御登城不被成候由、尤御実病ニも不被為在歟之趣風聞承ル也、夕八時揃御礼被為受候ニ付罷出、於御書院御礼申上、奏者御出頭藤川每登殿也、七半時前相濟退、右御礼出掛佐藤与三右衛門、渡辺宗右衛門殿父子江祝詞ニ參ル、御家来中其外祝詞客来数人有之、藤川每登殿・森岡万之進藤、平野藤吉郎江致祝盃、遠江様御用人例年今日御館へ御祝詞ニ罷出、宅江も来候得共、当年者不来、当月予月番也

○二日、庚申、朝雪降、余寒烈敷、後晴、暄、御登城被遊候ニ付早朝罷出、渡辺雅登江頼置、五時過より祝詞回礼ニ出ル、遠江様・主水様江罷出、六丁目御館江罷出、

遠江様二而御客对加沖和多理、主水様二而御出頭福山市之進江謁ス、六丁目様二而者例年之通御目見被仰付、御祝盃頂戴被仰付也、往來左之通回礼、白神・妙慶院・西向寺江參、両寺二而者如例年玉一封持參贈る也

吉田藤馬

福山直衛

河瀬喜和馬

丹羽庄司

野崎千之助

久野秀太郎

井上市太郎

脇本武兵衛

沖和多里

久野八十助

近藤重太郎

森岡万之進

南部要人

坪内久米之助

山村静人

木野一馬

水谷又左衛門殿

山下太八郎殿

佐久間栄殿

田部幾衛殿

岡本主馬殿

右之通相勤、七時過歸宅、供連若党・小者・道具也、森岡・木野・水谷二而祝盃出ル、森岡二而家來認致ス也、留守中祝客少々有之候由、岩崎常介江致祝盃候由也、
〔昨今林茂平太倅勝藏を頼、玄関詰為致候得共、明日者予内二居候二付、今晚帰ス也

○三日、辛酉、晴或曇、余寒烈、嚴凝、御登城被遊候二付早朝罷出、午鼓後御多門

内不残回礼致ス、尤渡辺・佐藤両家江者元日二參候故不參、岩崎二而祝酒出ル、遠

江様今日始而為御席詰御登城被成、尤御身前御礼をも被仰上候由、昨夕主水様・此

御方様被仰合、急彼方様江為御祝詞御出被成、其節被仰值事共被為在候歟二而、今

日者御押被成御登城被成候歟之趣二奉恐察也、夜六半時頃下柳町出火、石津久登殿

火元二而、長谷川勘平殿・堀尾熊五郎殿類焼之由、早速罷出、五時過歸ル、昨年も

今月今晚同所堀田格人殿屋敷焼失、又当年如此、奇事也

○四日、壬戌、朝雪降、余寒、嚴凝甚、巳鼓前より回礼二出、左之通相勤、中鼓前帰、出掛御機嫌伺罷出

一井嘉内 八木広次郎 森直十郎 遠野弥次右衛門殿

藏田和太郎 下瀬孫平殿 松宮空之助殿 辻清人

藤川每登殿 三宅吉左衛門 堀尾精一郎 永井仲之助

吉本恒之丞 松本良伯 菅馬之進 菅多久馬

右之内藏田・辻・藤川二而祝盃致、辻二而昼飯を喰ふ

○五日、癸亥、朝曇、風強、余寒殊烈、御馬御乗初二付、五時出仕、御馬場へ罷出、

尤予月番二而言人出ル也、麻上下着勿論也、内記様^(上田)五半時御供揃二而為御祝詞御出

被成候二付、為御送迎罷出、御居間江も罷出、御機嫌相伺、尤当年々者御祝盃中御

取合せ二者罷出相濟也、午鼓後退、風呂を建、水谷^(又左衛門)君御祝詞御出被成、緩々御

咄被成、其外彼是有祝客

○六日、甲子、晴又曇、余寒冽然、有堅氷、今日御役所初り候二付、例時々平服二而

出勤、主水様九半時御供揃二而為御祝詞御出被成候二付直二相詰、夕七時前退、夕

木野一馬祝詞入来二付祝盃いたす、其外祝客少々有之

○七日、乙丑、曇、余寒強、有堅氷、七種粥之祝、寺社御礼御席詰御登城二付早朝出

勤、一応退、又例時出勤、九半時頃退、石井稽古場射初二付夕方出席、祝客少々

有之、西向寺江^(森屋)兵藏代參申付

○八日、丙寅、曇、余寒緩、午後有風、又寒、午前右海藏寺へ拜參、途湯川兵馬殿・

後藤松軒へ祝詞二参、海蔵寺二■者例年之通年玉一封贈、隠寮へ祝詞二寄、達而被留、酒出ル、少々咄し帰ル、慈君夜中辻へ御出、御宿し被成、乙次郎来ル(藤川)

○九日、丁卯、曇、温余寒少緩、午後成雨、例時出勤、夕八時過退、旦那樣・周防樣・出衛樣御身据・御鏡開二付、例年之通御切餅頂戴被仰付、尤出衛樣御身据者当年始而頂戴仕ル也、告于廟、夜臨時御用向二付渡辺氏へ参、跡二而酒出ル

○十日、戊辰、曇、温、午後成雨、例時出勤、夕八時過退、夜温甚

○十一日、己巳、曇時々雨、温、御具足御鏡開二付御兩殿樣方御切餅頂戴被仰、御用達方坊主を以為持参、袴着、謹而頂戴之、坊主を通、御用達中江恐悦并二御請之義申返ス也、午前具足鏡開上下着二而祝ふ、午時為窺御機嫌罷出、夕又被為召、罷出、夜森仙太郎御用向二而來、跡二而深更迄及寛話、橋本屋周五年始二来

○十二日、庚午、晴、有風、又寒、例時出勤、夕七時前退

○十三日、辛未、晴、寒、朝素読所講釈始二付出席、白鹿洞書院掲示、講師湯川新太郎也、例時出勤、夕八半時頃退、東城与力中夜前出府之由二付、深江静衛・宮崎藤九郎旅宿へ見舞使遣ス、水上源之丞江も同様序故遣ス也、渡辺雅登申値、左伝対読ヲ主与して諸事切磋之会を催し、尤大島五兵衛・佐藤益之丞兩人を相加ヘル、然処今晚佐藤之方含事も有之由二付、同方江引受度旨益之丞方頼候付、同方江参、跡二而例年知行所々差出候雉子之開之由二而酒出ル、外二長喜三太・平野藤吉郎会ス、今夕桑原吉郎二来、祝盃いたす、夕佐々木彦藏殿被来、謁ス、御用向也、就右夜中御館へも出ル

十四日

雨水節

十五日、於御城御用始

一御用人

松村直之進殿

御騎馬頭ら

一御騎馬頭

菅平角殿

町御奉行ら

一御加増

河田平内殿

沖仙兵衛殿

野間直衛殿

右年来出精二付

十五日夕

平鉢

蝶いり付
京菜

八寸

豆ふ
牡蠣
海苔

井 数の子

○十四日、壬申、晴、余寒寛、東城与力為窺御機嫌罷出候処、御家司中不快、出勤無

之二付予出勤、及挨拶、九時頃退出、八木野右衛門方物見江參、御門前左義長拜見

仕、当年も御城内御馬并御家中馬乗通り有之、殿様御透覧被為在候二付、夕迄見物

いたす、馬数余程出ル、御三家様御馬も御出入衆拜借二而被乗也、宮崎藤九郎・牧

野平司・水上源之丞留守中入来之由也、乙次郎朝ら久野秀太郎方江參、夜二入帰ル

○十五日、癸酉、曇、冷甚、凝、与力御礼二付御登城被遊候二付早朝罷出、尤今朝も

御家司中出仕無之二付、上下着二而出、一応退、又例時出勤、夕八時過退、宮崎藤

九郎を夕方招、致祝盃、飯も出ス、暮頃迄話ス

○十六日、甲戌、朝微雨、後晴、朝妙慶院へ參、今朝途中二而辻清人二逢候処、慈

君此間ら御足之裏腫御痛被成候由二付、昼御見舞二兵藏遣ス、各別之御様子二も無

之候由、例時出勤、夕七時過退、今日東城与力弓鉄業前御覽二付、為席詰出、牧野

平司・水上源左衛門・宮崎藤九郎三人也、炮術之業前何れも別而見事也、平司・藤

九郎荻野流種ケ島十匁玉、弓者日置流也、源左衛門者南部流異風十匁玉也、弓者不

射、藤九郎御覽帰り又々来話、出来合酒飯を饗、夜迄及寛話也

○十七日、乙亥、快晴、暄、朝東城旅宿を訪、途平尾宗右衛門殿へ年頭来儀之謝二行、

檜垣捨次郎疾を訪、平野藤吉郎へ祝詞旁二寄、為窺御機嫌罷出、午後御用談二付

渡辺雅登・深江静衛・大島五兵衛来、跡二而酒飯を出ス、辻清人入来之由、夜長

喜三太来候由

○十八日、丙子、朝晴、暄、後風出、又寒、朝例時出勤、夕八半時頃退、今日御番頭

鱈汁 かす味噌
蛤

茶碗飯

平半へい
葛溜り

以上

十八日

河野貫介

宮崎藤九郎明十九日出立罷帰候由、暇乞使差越、此方も使遣ス也

石井大膳殿・郡方御歩行組川河野貫介合隼太為御館入初而被出候二而出而謁ス、風呂を建、

小倉甚右衛門・三宅内外来浴、甚右衛門者跡二而咄ス、酒を出ス、乙次郎藤川江帰ル、夜被為召出ル

○十九日、丁丑、晴、風寒、朝湯川兵藏殿来儀、謁ス、内用談也、例時出勤、夕七時頃退、退出後慈君御見舞二辻へ參ル、大分御快方也、酒出、入夜帰ル

○廿日、戊寅、雨、寒、夕為窺御機嫌罷出、夫方直二六丁目御館江為窺御機嫌罷出ル
○廿一日、己卯、雨、晴、余寒強、夜風烈、朝三上本藏殿来儀、謁ス、革具足被調度由二而内談之趣有之也、例時出勤、夕八時過退、夕又被為召罷出、夜辻清人入来、

慈君兼而今晚御帰り被成候苦二付、御迎下女遣し候処、今日者別而余寒冽敷二付、又々御宿被成也、丹羽庄藏妻安産、男子出生之旨昨夕為知来、夜前歎見舞使遣ス也

○廿二日、庚辰、暁来雪降、後成雨、余寒強、朝例時出勤、夕八半時頃退、夜長喜三太来話、乙次郎昨日方来

○廿三日、辛巳、晴又曇、余寒強、御嘉例之通御屋祈禱二付、明星院被參候二付罷出、明星院へ御饗応出候節相伴仕ル、八時過退、昨日西向寺江得不參候二付、今日兵藏森也代參申付ル、御祈祷之御供物例之通頂戴被仰付也、夜前戌刻前有地震

○廿四日、壬午、晴、春寒殊冽、時々雪飛、朝例時過出勤、夕八時頃退、夕御乘馬へ出ル、深江静衛来ル

○廿五日、癸未、晴、有風、余寒強、朝嚴凝、朝御内密稽古二付御馬場へ出、夫方直二出勤、夕八半時頃退、夕丹羽庄司江庄藏妻おしけ安産之歎二行、達而被留、酒出

廿四日
一御奥小姓

串田弥助殿

上野源之進殿

〔廿六日〕

宝国童子祥月二付妙慶院

へ兵藏為參也

〔同夜有地震〕

ル、小兒無滯肥立、名清松与命候由也

○廿六日、甲申、晴或曇、朝為窺御機嫌罷出、夫より香取流槍見物二出ル、深江靜衛

も願候而見物へ出候之故、同人見合旁出候也、東城徳了寺義量当度仏護寺江用向二

而出候由二而、深江靜衛同道二而來候由、予出宅後二付不調、明朝尚又可來旨申置

帰候由也、極夕被為召候而罷出、夫々夜二入渡辺氏へ会谈、慈君夜辻方御帰リ被

成、項之御腫物又々少々起張之気味二而御痛被成候由

○廿七日、乙酉、快晴、暄也、朝徳了寺來、始而謁ス、先住惠燈方先年申聞候当家系

凶紛失之義、何分ニも心付見出候様惠燈死去之御呉々申置候由二而、其以來も段々

相尋、少之書付類も心を留しらへ候へ共、何も見当候もの無之、尤同寺縁記之如キ

古帳ニ、同寺六世幽照淨信実家村上姓ニ而肥後八代之産、細川家之浪人なる由少々

記し有之もの一冊携來、被見、夫二就而見れハ、先年惠燈方差越候村上家武功私記

も其方之伝來もの相見ゆる、果而予か先年來之愚考ニ符合候由、是觀之ハ惠燈申

候当家之系図与申候も恐クハ右肥後村上家之系図ならん歟と思わる、朝素読所講釈会談

へ出席、夫々出勤、夕八時頃退出、西向寺江兵藏為參

○廿八日、丙戌、快晴、暖、例時出勤、夕八半時頃退、尤間ニ而就御用向御家司中宅

へも參ル

○廿九日、丁亥、快晴、暖、朝弓術へ出、夫々貫心流稽古見物二出ル、深江靜衛見物

頼二依而也、風呂を立、午後為伺御機嫌罷出ル、家小夜丹羽庄次江安産之歎、昨

年おしけ來引越以來も無沙汰いたし候二付旁參ル也、乙次郎も連參ル、酒鮓出候由

冊日

啓蟄節

○晦日、戊子、晴、暖、朝御乘馬江罷出、例時出勤、夕八時過退、牧野平司口上書々役取計方間違之義有之、恐入申出、相愼罷在、予も心付無之候二依而也、今朝徳了寺旅宿江見舞使遣候処、最早未明二出立、東城江罷帰候由、此間之咄振二而者、昨日者嚴島へ渡海いたし、帰候而も少々者逗留も致候歎之趣二付、此間中者見舞も不申遣候処、案内二而不計無沙汰二相成候也、慈君御頸之御腫物今以全愈二いたらす、御歎息被成候二付、広藤道安老門人入沢良庵を呼、診を乞、今日予出勤中二来候由、何分最早格別之事者無之候得共、いまた急二全愈二者至間敷、膏藥等者松本良伯申值候上可恵由申候由也、今朝佐藤益之丞不快を訪也、少者快方之由也、去ル廿五日御家来中着服之義二付左之通り御移檄出ル也

御家来中妻子着服之義者兼而御定之趣も有之候得共、御時節柄二付而ハ一等下品相用、士中之妻子冬縮緬、夏紹、帯ハ緞子之類ハ当御場合屹与致用捨、尤廉有之節杯、御格式相応供人等茂召連候得者、冬絹夏越後等致着用、帯者縹子之類、襟・袖口其外右二類し候品も縮緬等相用候而も随分不苦儀二候得共、左も無之処二而ハ既二一昨年茂相達候通、大概袖以下之下品相用、夏分ハ晒以下、帯ハ呉絹之類、襟・袖口其外右二類し候品茂專絹以下之下品相用可申、御步行組之妻子も右二准し冬絹、夏越後、帯も縹子之類ハ屹与致用捨、冬袖以下、夏晒以下、帯も呉絹太織之類相用可申、足輕以下之妻子者帯・襟・袖口等二至迄一切布木綿之外不苦成、其内二而も上品に紛ハ敷分ハ致用捨、随分儼品相用可申候、且又近来御步行組以上之妻子、下男等も不召連致他行候輩茂有之由、畢當時不得止之義二も可有之

〔江戸御沙汰書之内〕

正月廿八日

(前田齊卷)
松平加賀守

出格之思召を以、以来月次御礼御黒書院御敷居内へ相進、御礼申上候様被仰出之

候得共、右之通二而ハ御格品之統も不相立、町方見回り之者相糾候儀等有之候而ハ当人恥辱ハ勿論之義、上之御外聞ニも相拘候間、左様之義無之様得斗示し合可被置候、其内老年髮容坏茂変候身分ニ而無僕ニ而も御格品之目度相立候廉合等も有之儀ニ候得者、格別其外品ニ寄不得止無僕ニ而致他行候節者、着服を初、帯・袴・袖口其外一切木綿相用、全下賤之振合ニ相做候儀共ニ候得者、先其辺之事ニ候得共、若キ婦女子之輩ニおゐてハ別而之儀、仮令老年たり共、髮容其儘之婦人は可成丈無僕ニ而之他行者用捨可有之候、自然右等彼是之御趣意ニ背、万一不覚を取候輩も有之候得者、嚴重之御沙汰も可有之候条、此段兼而可被相心得候但十五歳以下ハ男女共着服格別之訳合茂有之候得とも、是又随分麗品相用候義專要之事ニ候、右之趣手堅相示し置候様被仰出候間、末々迄不洩様可被相達、別而足輕以下江者人別呼出し、屹示し合被置候様頭々江可被相達候、以上

正月廿五日

御目付中

〔其後諸国寺院ニ有之梵鐘鑄換之儀ニ付、尚又従公儀被仰出之御書付・御触書共四通并御添書壹通共移檄録ニ写置候故略之〕

二月 小

○朔日、己丑、晴、暖気甚、〔今日ハ非番ニ相成也、尤御米銀御武具之方引受也、〔早朝御家中方恐入不及其義旨紙面ニ而申来、御請申出ル、〔例時出勤、夕八時過退、〔附足輕春御貸米切手渡ル、今日米価諸郡米石八拾弍匁也、〔退出後松田謙藏・桑原

三日於御城御大筒奉^頭行被仰付

平田織馬殿

御奥詰^ろ

村越孫六殿

三谷幾三郎殿

右両士御馬回^ろ

右御大筒頭与申御役名唯今迄無之、近年大筒方与申足輕出来候之由二付右之頭なるへし、尤御格式者何之御役名二准候哉未聞

六日、例年之通御裏稻荷社御祭礼之御供物頂戴被仰付候也

吉郎二江、年頭無沙汰二付平服二而祝詞二參、西向寺江も先月廿二日不參候故參ル也、尤住寺^{持カ}へ逢、禪仏寺一件之義二付先達而催促紙面差越候返答申置也、桑原二而酒出ル、乙次郎藤川へ帰ル、家小夜木野へ年始二參り宿ス、松本良伯来、昨日良庵申合、服業者其儘良伯二而、膏藥程良庵^ろの患候筈二致候旨申候由也、今午後佐藤与三右衛門年始祝詞台所迄入来之由也

○二日、庚寅、朝有霧、後晴、又曇、暖甚、今曉寅鼓頃有地震、稍有力且長し、朝炮術稽古二出、夕松本良伯来診、長喜三太来、此間内々頼置候義有之、様子申来呉ル也、夜一甫流稽古見物二出ル、夜寒し、有風

○三日、辛卯、晴、寒、朝素読所講釈江出席、夫^ろ御乘馬江出、其後出勤、夕八半時退、深江靜衛衛明四日出立、東城江罷帰候由、為暇乞入来、此方^ろ者以使暇乞申遣ス、夜家小木野^ろの婦、夜岩崎およし年始二来、於京都芝山様^ろの例年之通扇子三本頂戴被仰付、老女八十野^ろの申聞、御請同人江厚囑置也

○四日、壬辰、夜来雨、寒、朝後雨罷、猶曇、例時出勤、夕八時前退、今朝炮術稽古二出、於京都高謙院様^ろの御年玉与して扇子三本、石盃一ツ頂戴被仰付、渡辺氏へ一緒二来、同方江御請申出ル、乙次郎来

○五日、癸巳、曇時々雨、雪、寒冷強、朝弓術稽古場江出ル、森仙太郎入来、同人二男平之進手跡手本之義を頼、諾し置也、夜森岡弟婦来宿、おますも来ル也

○六日、甲午、晴、余寒纒紆、朝松本良伯来診、慈君今日者大二御快方也、例時出勤、九半時頃退、藤川甚吉後^ろ来、木野伯母君おしつ、お喜代を連御出被成、水谷

〔九日〕
高謙院様御安名

玉峰

慈保様

八十郎も来、夕(森岡)万之進來、おさよも連来、弟婦・子供共入夜帰ル、夕(森岡)炮術稽古二出ル

○七日、乙未、曇又晴、又寒、朝素読所会読二付出席、相濟出勤、夕八時前退、左伝対読之会二付夜夜渡辺雅登・大島五兵衛来

○八日、丙申、晴、春色あり、風冷、午後右神田社江參詣入、出掛山田多喜登江此間妻縁致婚儀相整候歟二行、婦者石内村医師玄祐与申者娘之由也、帰り辻・藤川へ見舞帰ル、辻二而暫話ス、酒餅出ル

○九日、丁酉、晴、風冷、朝御内密稽古へ出、相濟出勤、夕八半時頃退、於京都先月十二日高謙院様岡崎光雲寺二而御授戒御剃髮、御得度被成、御安名玉峰慈保様与申上候出、依之爰元御方々様江夫々御祝義物被進、御家司中・予等三人、其外御医師・女中、御附之者等迄夫々御祝義物被下、予真岡木綿壺反頂戴被仰付也、夕弓術へ出、夜家小妙慶院并妙法寺瘡守社等江參ル也

○十日、戊戌、晴、朝有霜、冷後暖、朝御乗馬へ出、例時出勤、夕八時退、今日坊主中御立入有之、出而謁ス、左之三人也、永井久賀、有田伝甫、村田文喜、夕炮術江出、夕桑原吉郎二来、夜迄話、茶漬を出ス

○十一日、己亥、朝曇後晴、暖甚、夕雷鳴、微雨、朝弓術へ出、午後神田社へ參、池田加賀守江逢、予内存事神闡之義并家内疾病退除安全之祈禱を頼、御初尾銀式両を備也、神酒を出ス、神拝之口訣を聞也、帰り堀尾眠石老人を訪、囲碁、酒飯出、夜迄話帰ル

〔十四日

春分節

○十二日、(庚カ)甲子、曇又晴、霞深、夕寒、〔朝例時出勤、夕八時頃退、〕(由送)夜政太郎当年始
而來

○十三日、(辛カ)乙丑、晴、暄、有春色、〔朝素読所講釈へ出席、又弓場へ出、夫方出勤、八
時退、〕(壬カ)昨日之霞者全細沙之降与見へ、今日木葉上皆白し

○十四日、(壬カ)丙寅、晴或曇、又晴、霞一昨日之如し、暖甚、〔昨夕池田加賀守の祈禱之策
等差越、神鬮之義も中越也、いまた養子等者不差急方二有之趣也、〕朝御乗馬へ出、

〔夕炮術へ出

○十五日、(癸カ)丁卯、晴、夕曇、今日も霞深、細沙降、暖甚、〔朝辻清人方のお梅義今朝安
産、男女子出生、何之滯も無之旨為知来、早速見舞使遣入、至而軽産、小兒も丈武
二而、弥滞無之由申帰ル也、〕朝弓術江出ル、〔例時出勤、夕八時頃退、〕今日御家中
江去ル戌年以來新知御加増之御判物被下候之由二而、旦那様御登城被遊也、〔夜家小
辻へ参、直二宿ス

〔十六日、遠江様近頃御勝
手向殊外御逼迫二而、昨
暮御上納事も誠に御六ヶ
敷候之由、就而者此節御
成之間を始、御不用之御
場所段々御取崩二相成、
御庭御物数奇も御取除、
樹木・大石等其外結構之
御道具類悉御売払二相成

○十六日、(甲カ)戊辰、晓来雨、温、〔朝妙慶院江参、〕炮術稽古二出、〔例時出勤、夕八時退、
〕夕辻江歛・見舞二行、母子共弥滞肥立候由、小兒も何之申分も無之様子也、酒出
〔夜政太郎来、〕御知行所世羅郡小童村百姓富助与申者昨年秋頃方風与按摩を以諸病
を療し候事を得、殊外奇効を致し、追々評判高、近郡近村方慕来、此節者五六十人
も近辺二逗留致居、俄二富を致候由、尤四年前二同所庄屋喜十郎方二而、筑前之僧
右富助を見而忽拜し、扱々其方者徳ある人也、其手を以諸人之病を撫候得者不治事
なし、何とそ諸人を救遣候様二与申候事有之候由之処、其節者何とも不存、夫成二

候由、尤地所御入用有之との事二而、右様御取計相成候趣二者候へ共、其实者全御世帯御取続之御覚悟与全風説有之也、乍併御尤之御義、其外都而御家中大逼迫之由、扱々苦々敷事也

十八日、辻児名昨日左之通命候之由、於梅幼名なり

於恒

廿日、辻へ左之通贈之

着物 一ツ

表 郡内縞
裏 花染木綿
紐 紅絹

肴料 銀壹匁

赤小豆飯 壹器

以上

廿一日、佐藤益之丞快出之由、挨拶二入来

忘居候処、昨年秋方宇賀村江木挽かせきに参り居ル節、風与したる事ヲ撫始、追々効を得二随ひ高評二相成候由、右之富助手者真虫指与申指之由也、右真虫指之者出雲国二老人、江戸二老人有之、皆々富助か如く病を療し候由也、木村伊太郎此間世羅郡方罷帰、逗留中得与見聞致し、少も相違者無之由也、奇事也

十七日、己巳、晴、風吹、朝弓術稽古二出、兵藏蓮教寺江目薬取二遣又也、夜辻へ見舞、兵藏遣又、弥無滞母子共肥立候由也

十八日、庚午、晴或曇、又寒、朝素読所会読へ出席、相濟出勤、夕八時前退、夜左伝会渡辺へ行、家小夜從辻帰ル、母子共愈無滞、昨日小児名を命、おつね与申候由也

十九日、辛未、晴、春寒強、有霜、朝六丁目御館江罷出、九時頃罷帰、夫方出勤、夕八時頃退

廿日、壬申、快晴、寒冷強、朝御乗馬江出、辻江安産を祝し、肴料、郡内縞着物一、赤小豆飯を贈ル也、午後堀尾眠石・岩崎常介囲碁二被来、当年始而故酒を出、夜迄留連也、殿様昨年御頂戴被遊候御判物為御拜見、今日御並様方二も御登城被遊候由也

廿一日、癸酉、晴、寒し、朝弓術稽古二付、例時出勤、夕八時退、辻清人方七夜二付慈君朝方御出被成、予二も参候様案内も有之候得共、予者辞又、慈君夜御帰り被成、御腫物漸此節御全快二趣候故、昨年八月以来始而白昼二御他行被成也、山下多八郎殿明後日江戸表へ発足被致候由二付、夕為暇乞参り、留主二付申置也、帰り

西向寺へ参ル、夜政太郎来

○廿二日、甲戌^(庚カ)、晴、暖、夕曇、夜雨、朝素読所講釈へ出席、夫方炮術稽古見物二卒

与出、直二出勤、夕八時退、西向寺江者昨日参候故今日者不参、朝万^(森園)之進来候由也

○廿三日、乙亥^(辛カ)、雨、寒、朝弓術稽古二出、夜就御用向渡辺氏へ会、至終夜

○廿四日、丙子^(壬カ)、曇時々雨、巳鼓前方渡辺へ行、夕方帰ル、右二付今日者御館へ者不

罷出、夕八半時頃御用向二而主水様へ罷出、御逢被遊、御表御居間へ罷出、御用人者福山直衛出会也、辻清人安産之節之挨拶入来

○廿五日、丁丑^(癸カ)、曇時々雨、夕晴、例時出勤、夕八時前退、御用向二而渡辺へ会、

夕又御用向二而主水様へ罷出、御逢被成、往来共御館へ罷出

○廿六日、戊寅^(甲カ)、晴、寒、朝有霜、午時就御用向出勤、夕御乘馬へ出、見せ馬有、

十六日之記二有之小童村富助爰元呼出二相成、昨日御代官中約合有之候処、何も怪敷義も無之、実事之趣相聞候二付、今日方北御部屋御玄関江呼寄、御家来中不快二有之輩撫揉与試させ候事二相成、夕方方同所へ来、多人数参り撫揉もらい候由、夜

中又々御用向二而卒与出勤

○廿七日、己卯^(乙カ)、晴、暄、朝素読所会読へ出席、夫方出勤、夕八半時頃退、慈君夜

富助江揉せ二御出被成

○廿八日、丙辰、晴、暖、例時出勤、夕八時前退、風呂を建、近隣来浴有之、辻江お恒初雛を祝、当御時合之事故、料二而銀式兩贈之也、今日方富助を呼、予か眼並腹部を揉せる也、慈君并家小も按摩いたさせる也、今日井口・飯田兩流乗初有之由、

〔廿九日

清明

〔^(藤川)乙次郎見ニ參也、殿様御透覽被在候由也、〔夜政太郎来

○廿九日、丁巳、快晴、暖、〔朝富助按摩ニ来、〔弓衛稽古ニ出、〔夕堀尾眠石翁入来

三月 小

○朔日、戊午、雨、〔当月々番受也、〔例時出勤、夕八時頃退、〔朝富助撫摩ニ来、〔乙次郎藤川江婦ル

○二日、己未、晴、〔朝岡田八十太郎来、水谷方差継事一件、此間三村仙兵衛殿同人方へ見へ、内田織馬殿何卒八十太郎へ逢くれ候様ニ被申、来ル七日夕仙兵衛殿同道ニ而被来筈ニ而、大方一応対いたし候得者一件相済可申哉与相考候由ニ而、又左衛門殿方同人へ紙面を以右一件ニ付抑、之取計方不都束之廉も可有之ニ付、其段者如何様とも同人考次第相含、宜取計くれ候様ニ与申趣意申遣し被成候様致度由内談申間、〔六丁目御館ニ而、市松殿今朝以来度々御吐被為在、御難儀被成、三宅春齡江拜診被仰付候之由ニ付、夕方為伺御機嫌罷出、入夜婦掛水谷へ卒与寄、今朝八十太郎申間候義及御内談也、酒出ル、〔慈君夜辻へ御出、御宿被成

〔四日

彼岸桜満開

〔今朝堀尾・藤川江參候ニ付辻へも卒与寄、昨日祝酒之残有之由ニ而出ル

○三日、庚申、晴、暖、〔朝辰鼓頃麻上下着出仕、御登城前於御居間御祝詞申上、出候様江も御部屋江罷出、御祝詞申上、周防様江之御祝詞御用達申上、御輿へも出、老女ニ謁し退、〔午前申上事有之、又出勤、〔辻清人方お恒初難ニ付被招候得共辞而行、〔夕岩崎常介困基ニ来、祝酒を出、夜迄話ス、〔清吉一甫流柔術免許桂辰馬方此間相伝いたし候由ニ而吹聴ニ来、魚一尾持来、此方方も祝し而酒壹樽遣ス也、清

〔六日〕

市松殿御法名

耕雲種月禪童子

〔七日、補心方〕

一真黑鷄鷓 一羽

一極上太白砂糖 一斤

一餅白米粉 貳合

一上酒 八合

右を酒八合之時方鶏

肉・砂糖を入、炭火

二而煮、三合位二煮

詰ル時餅米粉を入、

貳合まで煮詰候之事

右之通二而廿五日分之

服料也

〔九日〕

桃花満開

〔殿様兼而來ル十一日御

発駕被仰出候処、御風邪

吉者元家来三次事也

○四日、辛酉、晴、暖、〔例時出勤、夕八時頃退、堀尾眠石翁此間以來不快之由二付

早朝見舞二行、藤川江も行、乙次郎義去年以來統而逗留為致候へ共、近頃者不絶御

用多二而素読等之温習力を入候事も兼届、且考之義も有之候間、此後者先暫帰し可

申段及噴置也、尤每登殿者御留守故伯母君へ申置也、〔今朝妙慶院被来、小童村富助

義被承及、何卒撫摩を乞度出二而段々厚頼置被帰候由、予出勤中二而不調、〔今日新

庄堤外大芝二於て奥弥右衛門殿方西洋流炮術備打調練有之由二付、雅登同道退出後

見物二行、大炮五挺、小筒七拾式挺、四組二分、進退打有之、誠二勇敷、壯觀也、

〔夕帰掛御館へ出、水谷君御出、夜迄御咄し被成、酒を出、昨日之御返答也、紙面

も御認被成、慈君夜辻方御帰被成

○五日、壬戌、雨、寒、〔朝妙慶院昨日之様子聞二被来、明日午前被来候様申置也、

〔午後為何御機嫌罷出候処、市松殿御不出来之御様子申来、直二罷出相詰、入夜五時

過退也、御実者御事切二被為在候由、恐入候御事也、六丁目御館江者午後雅登伺

二罷出、直二相詰ル也、〔朝由良政太郎隱戸瀬戸二住候者之由、源太郎与申者元漁人

二而至而賤陋朴訥之〔初方〕之仁二有之候得共、脈診二妙を得、当时專世上之難病を治し、

甚其効多候得共、自衛之意毛頭無之、至而異人二有之、此節草津辺二来居、政太郎

も一面致候由、何卒予か眼を為見申間敷哉之旨申来、深切之至也、依而一診之義を

約し置也

○六日、癸亥、曇又晴、〔早朝御館江出、夫方直二六丁目御館へ罷出、終日相詰、入夜

之御氣味ニ而御延引之義
去ル六日被仰出候由也

十三日

海棠満開

十六日、於江戸

一御騎馬筒

森 新太郎殿

十六日早晨

す和会

油揚

御皿

香たけ

連根

みしま

大根

けむ

御汁

みそ

豆ふ苞

椎竹

青味

御坪

こんにやく

御飯

御香物

罷帰、今朝四時市松殿御死去之旨御違有之、麻上下着ニ而老女たつまで御機嫌を伺、夕御沐浴御入館(櫛カ)之節御見合せ仕、其後御棺拜も仕ル、御上屋敷江者入夜罷帰候而御奥へ出、老女八十野迄御機嫌を伺、尤平服也、出衛様御機嫌も右同断也、今晚九時御病氣建ニ而御出興、海蔵寺へ御斂被成、其節御見送りニ者渡辺父子被罷出、予者(平野)与三右衛門煩中ニ付不罷出、留守中平野藤吉郎来、明後八日深厚院殿(光月)十七回忌相当ニ付法事致候得共、当时之義故案内者不致旨申聞候由、茶一袋を恵む也、今日妙慶院来、富助撫摩を致候由

○七日、甲子、朝微雨、後晴、夕曇、朝素読所会読江出席、直ニ出勤、夕八時過退、

西向寺江兵藏(森地)為参、夕辻江行、同方江前記之源三郎を呼、診を乞、如何様人物ニ

不似合之明診也、予者惣体ニ病毒等者少も無之、只心之薄キ処々心下之痞塞、耳鳴眼医等を成候間、心さへ補候得者自然与諸症者退候旨申聞、心を補薬方を伝くれる也、入夜帰ル

○八日、乙丑、晴、寒、朝御乗馬江出、其後御馬養生ニ而為見分出ル、夕御館へ出

ル、遠江様ニ而雅楽様を御養子ニ被成度段今日御願込被為在候由也、遠江様二者追々御退隠之御下拵与内密相聞る也、今日も妙慶院被来、富助今日迄日々来候也

○九日、丙寅、曇、午後雨、朝御内密稽古ニ付御裏へ出ル、相濟出勤、夕七時退、

今朝岡田八十太郎来、兼而心配致只候水谷方一件昨夕内田織馬殿同方へ見へ、三村氏も被参候而示談相濟、何も八十太郎へ被任候与申事ニ相成候之由申聞也、夕水谷へ行、今朝八十太郎申聞候義及御談合也、又左衛門殿ニも御大慶也、木野へも寄、

御平	竹子
ふき	あふら揚
三ツ葉	椎茸
葉山椒	

御菓子

巻頭	せんへい
干くわし	

以上

夕 御茶

さ、け飯

右森岡・辻へ贈

同日、於京師高謙院様御剃髮、御得度被成ニ付恐悦申上、且左之通三人申合差上ル也

昆布料 百疋
杉原紙 壹束

右老女幾田へ文ニ而差出ス、今日之船便ニ仕出ス也

両家ニ而酒出、夜更帰ル

○十日、丁卯、雨、夕晴、寒、朝下瀬孫平殿来儀、小童村富助義被承及候由ニ而様子尋ニ被来候也、最早夜前旅宿へ下り、今晚小童村へ船ニ而尾道迄帰候筈ニ付、其段相咄ス也、何分殊外高評之由也、既ニ檣垣捨次郎杯者旧臘以来暫引籠居、行步等透与不出来程ニ有之候処、富助撫摩ニ而速ニ平愈、此間方快出したす也、尤全体之病者未全快ニ者無之様子也、其外彼是相応之方角有之候由也、例時出勤、夕八時退、夕退出後御武具藏江見分事有之、行也、夕水谷君御出被成、昨日之御返答也、酒を出ス、夜左伝会、雅登・益之丞・五兵衛来

○十一日、丁卯、晴、朝岡田八十太郎を呼、昨日水谷君御出、御答之趣申談也、昼飯を出ス、夕為伺御機嫌罷出、妙慶院此間中度々被来候、富助撫按を被乞候謝也、光明膏与いふ目薬を被惠、風呂を建、辻清人入来、タル十四日光観院三回忌ニ付十三日夕予参候様案内也、慈君ニも御出被成候様申也、橋本屋周五郎来宿、中津屋方慈君御迎ニ来候也、夜由良政太郎来

○十二日、戊辰、晴、寒、慈君早朝方中津屋へ御出被成、草津迄兵藏参ル、夫方者周五郎御供申、相濟也、万之進来候由、同方おさよ六丁目御館へ日々御慰ニ差出候様被仰付、昨日より日之中者終日罷出候由也、例時出勤、夕八時退、夜辻清人入来、今夕弓術江出ル

○十三日、己巳、曇、寒、朝素説所講釈江出席、夫方出勤、夕八時退、岡田八十太郎於御館右水谷之方一件一昨日以来菅生藤之進殿へ度々参候処、菟角留守ニ而得不

廿二日、於東城

一三人扶持

益庵家督

家所玄齡

右之通被仰付候間、医術之義弥以相励候様被仰出

益庵へ者願之通隠居被

仰付也

同日夕

御茶

さ、け飯

右献廟、且森岡へも贈也

廿四日被仰付

佐藤与三右衛門

積年溜飲二而致難儀、氣

根茂薄罷成、御役難相勤

候二付御役祿差上、退隠

仕度段願之趣達御聴、無

余義事二被思召候、尤今

暫致保養相勤候様可被仰

遇候二付、今朝内田織馬殿江参逢対、何も相約り、福田殿方も来ル十八日達し被致

候含之由、双方家内共義絶之所も何も存旨無之由、道具類者直二十八太郎紙面二而

福田之方江戻しくれ候様二与被申聞候由申聞、夕前文之趣二付水谷へ卒与参、委細

二御咄申置、大二御安心也、大島五兵衛方江も卒与参、一昨年以來右一件二付彼是

心配いたし呉候謝辞厚申述ル也、夫江江行、誓願寺者早被参候由二而、最早読経・

酒膳等何も相済居ル也、辻権太郎会、有饗、暮過帰

○十四日、庚午、雨、夕晴、辻法事二付誓願寺江今朝為代参兵藏遣又也、朝為窺御

機嫌罷出、夕射場江出、昨今花見京矢代也、万之進來、酒飯を出、岡田八十太郎

へ一昨年来水谷之方一儀格別ニ心配世話いたし呉、此度落着二至候謝、兵藏を以申

遣、猶紙面二而厚謝し遣又也

○十五日、辛未、晴、暖、朝佐藤益之丞来、同姓与三右衛門積年溜飲二而被困、氣根

薄相成候二付昨年退隠被願候処、御差留二而勤向之廉御甘々被下、緩々保養も被致

候へ共、兎角琺々無之二付、不得已猶又退隠之願書被差出度由二而、同人引籠中二

付為名代願書持参也、就右御家司中宅へ参ル也、例時出勤、夕八時退、岡田八十

太郎昨日紙面遣候謝二来候由也

○十六日、壬申、曇、夕雨、先考廟御祥月二付如恒規宿戒・晨興・礼服・献膳無滞相

勤、先妣廟も奉配祀也、早朝妙慶院江参詣、本照寺へも去ル八日平野光月院殿年回

之節得不参候二付卒与参、妙慶院二而者和尚へ逢、先日度々入来、慈君へ品々被惠

候謝申述ル也、帰掛広藤道安老方二而入沢良庵江先達而慈君御痛所世話二成候謝二

候謝申述ル也、帰掛広藤道安老方二而入沢良庵江先達而慈君御痛所世話二成候謝二

付処、却而迷惑も可致二付、願之通隱居被仰付、

家督倅益之丞江知行高百四拾五石被下置候、且御役向年来出精相勤候二付、隱料并御召下御羽織被下之

隱居料

一五人扶持

右同人

右積年御懇意被召遣候御事二付、此後病氣快節者時二取御奥向其外上々様方江為窺御機嫌罷出候義勝手次第二仕候様被仰付一御馬回筆頭

八木喜真太

一知行高百四拾五石

与三右衛門家督

佐藤益之丞

一 佐藤益之丞

行、中置也、例時出勤、夕八時退、今朝御乘馬へ出ル、夕六丁目様を卷寿し一器

頂戴被仰付、御到来之海苔二而御製被遊候よし也、同勤三人共同様也、夜政太郎来

○十七日、癸酉、晴、暖、午前為伺御機嫌罷出、弓術江出、午後六丁目御館へ為窺

御機嫌罷出、森岡へ寄、酒出ル、福山市之進へ寄、水谷之方福田一件無滞相濟候二

付右挨拶二行也、他適二付内政へ逢、厚申述置也、慈君午後從中津屋御戻り被成、

はつの病氣今以透与無之由、西御門外迄駕籠二而送來候由也

○十八日、甲戌、晴、有風、寒、朝素説所会読へ出席、夫へ出勤、夕八時退、夕御

用向有之、渡辺へ会ス、左之通御移檄出ル

外衛倅

沢喜代槌

右此度近江守様御養子二被成度段御願之通被仰出候、右二付以來様唱之事

一喜代槌様御義名為五郎様与御改被成候事

右之趣可被相触候、以上 三月十八日

夜左伝会二付渡辺江会ス、益之丞風邪二而不会

○十九日、乙亥、晴、暄、朝御用向有之、出勤、御乘馬へ出ル、例時出、午後洪川

流柔術師家新見基次郎方門人業前御覽被遊候二付、予等も見物二出ル、跡二而基次

郎江も謁ス、基次郎者御步行組御蔵戸前方相勤候者之由、門人も皆御步行組也、尤

相手二出候内二者番組も有之候由也、佐々木平左衛門倅猶馬同人門人二而、同人伝

達而御覽を願候故無吃御覽被遊候也、日入頃相濟退、慈君夜前より迂へ御出、御宿し

被成

右自今御用部屋へ出勤

二不及候事

一金子三百疋

菅馬之進

右被召出以來無懈怠出

精仕候二付

一御輿奉行

御免

八木野右衛門

為御祝義金子貳百疋被

下之

一銀壹枚

沢崎幸右衛門

右年来無懈怠出精仕候

二付

一壹人御加扶持

松本良伯

右常々出精相勤家業心

掛宣敷二付

一銀壹枚

每歲被下之

保人俵

由良政太郎

○廿日、(丁丑)晴、暖甚、始脱綿衣、午為伺御機嫌罷出、弓鉄稽古二出ル

○廿一日、(戊寅)曇、温、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時過退、九時揃於素読所席

書有之、御臨坐も被遊、罷出、書生廿四人、下方四人出、暮頃相濟帰宅、足輕以下

者御透覽也、藤川甚吉郎・乙次郎来飯

○廿二日、(己卯)雨、寒、先妣廟御祥月二付早朝西向寺へ参、素読所講釈へ出席、

夫方出勤、夕八半時前退、時々風吹甚

○廿三日、(庚辰)時々風吹、雨振、雹も雜、寒冷、不順氣也、早曉佐藤方与三右衛門

殿様子替候趣為知来、早速見舞、全衝心之姿二有之候処追々居合候二付帰、午前又

見舞、同様也、佐藤方明日四時御用召之奉書到来之旨為知来ル、見舞・挨拶使遣ス

也

○廿四日、(辛巳)庚辰、晴、暖甚、西向寺へ兵藏(森忠)為参、辻へ慈君御見舞二も同人遣ス、明晚

者御戻り可被成出也、上田内記様御出二付例時少し早く出勤、夕八半時退、今日

御用召数人有之、佐藤与三右衛門願之通隠居、家督倅益之丞へ知行高百四拾五石被

下置、隠居料五人扶持、并御召下御羽織被下之、年来御懇意二被召遣候義二付、自

今不快々節者時二取御輿向并二上々様方へも為窺御機嫌罷出候義者勝手次第二仕候

様被仰出也、下地知行百六拾石也、平野藤吉郎御小姓組御取立、御用部屋詰被仰付

吹調二来候由、元家来三次切米壹石六斗壹人扶持小人二御雇二相成、礼二来ル、右

者先君御退隠被遊候節、此者何とそ小人二被召抱被下候様堀尾五郎八通り御願置被

成候処、十三ヶ年振二此度御内願通り相調、予二於ても誠二本意至極也、依之後來

右学事心掛厚致出精候

趣二付

一御小姓組本格
出衛様御御方

桂辰馬

一銀五兩

野原八右衛門

右年来出精仕候二付

一御小姓組並
御取立
御用部屋話

平野藤吉郎

一右同
御銀奉行

小島左源太

右御台所へも時々出勤

御用向相勤候様被仰出

但六丁目御屋敷御用

向茂是迄之通相勤候

事

一御奥錠前話
御免

藤野源兵衛

右為御祝義銀三両被下

大切ニ奉公致候様厚及示諭也、早速告于廟、夕佐藤へ歎二行、与三右衛門今日者大

二宜敷出二候へ共、何分空言多く、全老耄之姿也、畢竟此度退隱之義深く心中二残

念被存候方之所致歎与被察、気毒之次第也、平野へ歎遣遣又、遠江様二而雅楽様

を御養子ニ被成度旨御願之通昨日被仰出候由也、出衛様今日府中辺へ御乗切二御

出被成、御家中御出入之衆も彼是御供被仕、其外御相手相願御連被成候者御馬方等

都合馬数十三匹、殊外御賑敷由也、西御門外へ御召切二而御出被成候由也

○廿五日、辛巳、快晴、朝渡辺へ昨日三次被召抱候普為聴段々厚取持二預候謝旁二行

也、例時出勤、夕八時過一応退、又神尾源兵衛殿門人中十八人相見へ、弓術差矢稽

古前并二的前被入御覧候二付、為見物出、暮頃過退、小島左源太・平野藤吉郎昨日

之吹聴与して来候由也、夜慈君仕る御帰リ被成

○廿六日、壬午、晴、夕曇、夜雨、有電、朝御館へ出、五半時頃六丁目御館へ罷

出、今夕方主水様・内記様御父子様共御招二而御出被成、御取持被仰付、御玄闈

御送迎等仕ル、旦那様も午頃方御出被遊、外二堀尾眠石・松本玄順御取持被仰付

罷出、此節御庭映山紅満開、御亭ニ於て御花見被為在、夫方御奥御居間二而又御酒

被進、御父子様共御機嫌二而九時過御立坐被成、丑鼓頃帰宅いたす也、遠江様御腹

合御宜からず、御職分御務難被成二付御退隱被成度段、昨日御番頭石井大膳殿を以

御用番御年寄衆宅へ御願書被差出候由、雅楽様御養子之義一昨々日御願之通被仰出、

いまた御目見等も不被為済、右様火急二御退隱之御願被差出候者御様子有之事与被

察、御気毒之御事也、松本良伯・由良政太郎入来之由也、慈君佐藤・小倉へ御見

之

一 御步行列加
御勘定所詰

増田吉右衛門

右御趣法方江出勤之事

一 右同断
村方付兼

岩崎瀬平

一 刀差組御抱
被下物並之通
御勘定所詰

徳助倅

平川勘助

右学事心懸厚出精仕候

二付各別を以右之通申

付候間、自今平常素読

所へ致出勤候事

右之余足輕以下者略之

舞被成候由也

○廿七日、^{申出}癸未、曇、夕晴、蒸、朝素読所会読江出席、夫方出勤、夕八時頃退、退

出後遠江様へ此間御養子御願下之恐悦二罷出、此節御退隱御願被仰込中之義二付平

服二而出ル、渡辺雅登一緒二出ル、御客对差脇本広馬江謁し退也、佐藤与三右衛門

義此間退隱致候義御用人中江序之節及噂被呉候様二与申置也

○廿八日、^{乙酉}甲申、曇、寒、朝御乘馬江出ル、例時出勤、夕八時過退、^{乙酉}夙之進殿今朝

俄二御発拵二而、殊外御難儀被成候処、御程克御居合被成也、夜遠江様御目付来候

二付出勤、御奥へも夙之進殿伺与して出ル、夕岩崎常介入来、夜左伝会雅登・五

兵衛来

○廿九日、^{丙戌}乙酉、雨、寒、夕晴、朝為伺御機嫌罷出、佐藤へ見舞、弓術へも出ル、

今夕六丁目御館へ伯耆之国儀天与申談議僧来、真宗之談議有之由二付、夕慈君

并二家小共森岡へ参、右者一昨年頃方不絶当所へ参候高名之談議僧也、何分忠孝之

道を第一二致、甚衆人之教誨二成候説方二而、町方之受も殊外宜、当所住居も叶、

御褒美をも頂戴致候由、何分談議上手之由也、旦那様二も御内々御出、御聴聞被遊

候由、予等も申値罷出候様被仰出、雅登罷出ル也

四月 大

朔日

一 太吉殿御事

○朔日、丁亥、晴、寒シ、当月者御米銀受也、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時頃退、

退出後妙慶院へ参、去月廿四日元家来三次小人御雇二出候義先考江申上ル也、夫方

助七殿

右之通御改名被成候段
席達を以被仰出也

二日

立夏節

六日

御年寄

浅野若狭殿

右死去也、実者去ル三日
夜死去之由也、当年四十
四歳、男子無之、浅野木
工殿二男を養子二被致候
由也

八日於江戸

一御加増五十石

渡辺又三殿

一御御詰

田中此母殿

平野藤吉郎へ御取立之歡二行、達而留、酒を出ス、有合之切手二持參、内々祝し贈、
及晩帰、檜垣捨次郎をも訪、八木広次郎倅来、小童村富助義尋二来候由也、夜政
太郎来

○二日、戊子、薄陰、寒し、午後弓術稽古二出、兵藏下宿を願、遣ス、立夏

○三日、己丑、晴、寒し、朝素読所講釈并二御乗馬江出、例時出勤、夕八時過退、

極夕弓術へ出、風呂を建、辻清人来、夜辻妹来宿、お恒も初而来也、夜由良政
太郎瀬戸源太郎を連来くれる、慈君・家小診を乞、明朝參、灸を可致旨申也

○四日、庚寅、晴、寒、朝源太郎来、皆々灸をいたす、岩崎常介夫婦も来、診を乞、

例時出勤、夕八時過退、夜辻妹母子共帰ル、家小婦寧、宿ス、東城二於て宮崎藤
九郎去ル朔日御用人役・町奉行兼帯被仰付候由為知吹聴申来、今朝飛脚帰候由二付
歎書状遣、且香料並二有合之扇子箱贈也、御年寄浅野若狭殿先達而以來中風之処、
夜前死去有之候由窃二相聞る也

○五日、辛卯、曇、暖、午前出、己斐山榎木谷を越、石内村へ回り帰ル、榎木谷二
而蔵少々採、大島五兵衛を伴ふ、若松も參ル也、夕桑原吉郎二来候由、夜岩崎お
よし来、葉調合之義頼ミ也

○六日、壬辰、雨、寒、朝吉郎二又来、花火拵様之不審尋也、口伝いたし遣ス也、

例時出勤、夕八時退、夜家小従木野帰、政太郎来、夕藤井乙次郎来ル也

○七日、癸巳、晴又曇、暖、朝素読所会読江出、相済出勤、夕八時退、退出後御用
向有之、六丁目御館江罷出、薄暮帰、森岡へ寄、小島左源太江先達而御取立被仰付

若殿様
一御奥小姓

林 又八郎殿

十日

一知行高式百四十石

番吾跡目

龍神出衛殿

一同百石

半大夫跡目

下田唯人殿

一御持弓筒頭与相
唱候様被仰出

御持頭

足輕一組拾七人宛、鉄

炮組五人宛弓組被仰付

一足輕一組廿八宛
鉄炮組五人宛
弓組被仰付

新組御者頭

十四日森岡へも留主見
舞二寄也

候歎二行也、(森島)西向寺江兵藏為參也、(森島)夜左伝会渡辺江行、(森島)浅野若狭殿死去之披露昨
日有之由也

○八日、甲午、雨、暖、夕罷、午後弓術へ出、小島左源太昨日歎二行候謝入来

○九日、乙未、晴、暖、朝御内密稽古二付御馬場江出、相濟直二出勤、夕八時退、

朝辻清人入来、今日射場開、弓会相催候二付来くれ候様申候二付、夕退出後行、松
本良伯・由良政太郎・桂辰馬・菅馬之進へ先達而之歎二行、藤川・堀尾へ行、堀尾
二而者先達而三次御雇小人二相成候挨拶申述ル、辻二而相濟候之後酒出、入夜帰宅、
七疊之間・次之間畳替いたし候二付畳屋喜右衛門停来ル

○十日、丙申、晴、暖、例時出勤、夕八時過退、夕弓術稽古二出、今日畳屋来、相
濟也、周防様今夕御乗船、浦辺へ御出被遊候由、万之進(森岡)も御供二而罷越候之由二而
暇乞二来候由也、自然尾道へ御出とも被為在候ハ、窃二三島屋孝助方江左右をい
たし呉候様家小方頼置也

○十一日、丁酉、快晴、暖甚、朝御乗馬へ出、午後佐藤与三右衛門不快訪、八木野
右衛門へ先達而御役無滞御免之見舞二行、藏田和太郎を訪、坪内久米之助去ル七日
御出頭役被仰付候由二而為知差越候二付、歎二行、木野・水谷へ見舞帰ル、兩家二
而酒出ル、水谷之方大藏離縁之達も兼而之通相濟、道具も去月十七日船便二福田江
送り戻し、何も相濟御安心之由御咄被成也、夜政太郎来、昨日之補記、当六月廿
八日(浅野高徳)幽篁廟五拾回御忌御相当之処、当月へ御取越御法事御執行被仰付候二付、右御
用掛予江被仰付、於御用所渡辺雅登方被申達、奉畏、本意之義奉存候旨御受申出ル

十七日

一名改

尚之丞殿事

関蔵人

十八日

小満節

十九日、西向寺へ左之通

備物為持遣ス、且廿二日

夕八半時来被呉候様案内

申遣ス也

一御経料 銀五兩

一御鉢米 精五升

一御中江 銀式匁

以上

廿一日早晨

酢和会

御皿

こんやく
あふらあけ
れんこん
三ツ葉

大こん
けむ

也、外御目付伊藤徳之助、御作事奉行上野彦三郎御用掛り也

○十二日、戊戌、快晴、覺薄暑、朝四時過る海蔵寺江為見分罷越、八時過帰、伊藤徳

之助・上野彦三郎参ル、茶漬を被出、夕風呂を建、今朝岡田八太郎来、先達而

内々頼置候三島屋孝助頼之尾道町御歩行目付船越寿左衛門へ立入之義、此度寿左衛

門同役谷鹿之助与申者同所へ罷越候二付、同人へ伝語いたし呉候由、且此度同所町

御奉行被仰付候葉師寺小兵衛殿江も徳永源兵衛を以厚頼置呉候間、小兵衛近日同所

へ被罷越候上、孝助義同方へ罷越候様ニ与被中候由ニ而、源兵衛殿方小兵衛殿江之

紙面持来、依之早速書状を添、飛脚屋迄出し置也、全体予か心中者左程迄ニ相頼候

義ニ者無之候得共、八十太郎右様ニ配意いたしくれ候故先其意ニ任、委細之様子も

申遣し置也

○十三日、己亥、晴、薄暑、又有雲、朝素読所講釈へ出席、相済出勤、夕八半時過退、

夕弓術へ出席、来ル廿七日信楽廟廿五回忌御相当之处、急ニ御法事御用掛被仰付、

差問候二付、来ル廿三日江取越法事執行致度、今日御墓所磨与して兵蔵并小人三次

を頼遣ス、西向寺江も口上を以駆合遣候处、同日何も差問者無之旨返答承帰ル也

○十四日、庚子、晴、薄暑、朝炮術江出、一井嘉内明十五日江戸江出立いたし候由、

為暇乞来、午後此方よりも暇乞二行、夫方六丁目御館へ御留守中御機嫌伺与して罷

出ル

○十五日、辛丑、晴、薄暑、朝寒、例時出勤、夕八時前退、弓術へ出、此節竹屋町

下雑喉場ニ而大なる鱧魚を見せ候由、近海ニ而捕獲候由、長式丈余も有之趣也

みそ
御汁 とうふ
しのみ
青み

しらあへ
御坪 こんにやく
香茸

御飯

御香物

油揚豆ふ
ふき
御平 わらび
しみたけ
三ツ葉
木の芽

御菓子

まん頭
巻せんへい
干くわし

夕

御茶
うわ豆飯

○十六日、壬寅、晴、薄暑、朝妙慶院へ参、長喜三太先達弥三郎不快中見舞使遣候

謝入来、御乗馬へ出、例時出勤、夕八時過退、今日川合隼太・新見基次郎為御館入初而罷出候二付、出而謁入、慈君午後西向寺・妙慶院・瘡守社等江御参被成、夜政太郎来、周防様従浦辺御機嫌好今夕被為入候之由也

○十七日、癸卯、晴、薄暑、朝辻清人来、お恒此間中より大便通し悪敷候処、風与陰門へ通候事二相成、其度ニ殊外致難儀候由二付、昨日山中松庵老へ見せ候処、何分些

珍病二付一存ニ難能候間、後藤松軒を呼くれ候様被申、今日来候筈、大二氣遣候由申也、六丁目様を昨日浦辺を被為入御土産之由二而、板蒲鉾二枚頂戴被仰付也、慈君夜辻へ御見舞被成、直ニ御宿し被成也

○十八日、甲辰、晴、薄暑、朝素読所会読へ出席、相済出勤、夕八時退、由良政太郎来、兼而頼置候瀬戸源太郎今夕下瀬へ遣し可申旨申也、夜辻へ見舞使遣入、お恒先同様之由也

○十九日、乙巳、曇、蒸、朝御乗馬へ出、弓術へ出、例時出勤、夕八時前退、来ル廿三日信楽廟御法事執行致候積二付、今日西向寺へ備物為持遣入也、今夕黒田稽古場を御馬場を借用被致、槍術稽古二見へ候二付為見物出ル、辻へ見舞使遣入、夜左伝会、雅登・五兵衛来也

○廿日、丙午、曇、夕々雨、朝由良政太郎源太郎を連来、岩崎之方頼之葉持参くれる也、下瀬へも昨日参りくれ候由也、佐藤益之丞何角之謝入来、岩崎常介法事前為見舞来ル也、森岡万之進午々来、何角見合せくれる也、夜慈君辻方御戻り被成、

廿二日

廟飾

饅頭子 焼饅頭

茶巾餅 干菓子

巻煎餅 御鉢飯

御花

夏菊 石竹

あやめ 朱蘭

金盞花 芍薬

夏唐松

到来

一相良麩 木野

一菓子料 水谷

一菓子 藤川

一同料 岩崎

一同 辻

一香料 森岡

恒も先同様之由也、夜林茂平太妻来、金子無心之義家小迄申聞候由也

○廿一日、丁未、雨、後罷、夕又曇、

村上彦兵衛潤誓廟御祥月、早晨献膳、恒規之通相濟、

村上休誓

廟彦も如例奉配祀ル也、例時出勤、夕八時過退、夜森岡弟婦来宿

○廿二日、戊申、晴、薄暑、

朝素説所講釈へ出席、例時出勤、夕八時頃退、朝西向

寺江兵藏代參申付、前記之通祖母君御年回明日江取越候二付、今夕八半時方招候

人々左之通

西向寺 同弟子 水谷又左衛門殿 藤川每登殿

木野一馬 森岡万之進 辻清人 岩崎常介

平野藤吉郎 石井寿兵衛 長束茂兵衛 岩崎良之進

桑原吉郎二 桑原藤之丞

右之内藤之丞不快之由不来、其余者皆来也、勝手並二下方左之通

岩崎およし 辻妹 お恒不快二付不来 不快二付見へす 森岡後室 同弟婦

同子供兩人 岩崎子供兩人

田中栄作 同人妻

同美五郎 同人妻

久保万治 松本清次 林茂平太 岡野新五

小人国藏 小人三三 西向等僕

右之内茂平太・国藏不来、三次も不快煩之由不来、

永野武八郎料理を頼候二付朝方

来、小回弥十あちら方来、手伝くれる、外二土井理作、御手回庄助当番二付呼而酒

- 一 兎香花 一石井
- 一 同二 長束
- 一 菓子料 桑原
- 一 饅頭 平野
- 一 花 堀尾
- 一 小倉麩 佐藤
- 一 ふき 柴作
- 一 花 茂平太

飯を饗、夕全八半時頃西向寺新發意・同弟子来、於内仏回向有之、相濟獻立之通饗、岩崎常介・森岡万之進相伴、其外も追々来、一緒二酒を出ス、尤遅来之分江者跡二而膳を出ス也、獻立左之通、当時之儀故手輕二いたす也

- 酢和会(壽)
- 蕪根
- 蓮根
- 油あげ
- 白髪大根
- 三ツ葉
- けむ

- 平
- 飛龍頭
- 筍
- 蕪
- 椎茸
- 京菜
- 葉山椒

- 味噌
- 包豆ふ
- 汁
- 椎茸
- 青味

飯
香物から漬

中酒

新盃

- すめ
- とろ、昆布
- 純菜
- めうか小口

したし物

人參葉
針生姜

- かす泥卵豆ふ
- れんこん
- 結ひしき
- 代々大白
- 揚物
- 硯蓋

茶 くわし

茶巾餅

大盆	八寸	酢漬	井
	竹子	小倉麩	うと
	ふき	うと	たて
	あられ揚		
	青粉わへ		
	こんやく		
	うと竹子		
	葛煮		
	椎茸		
	白玉麩		

下方之分皿酢わへ、汁豆ふさい、しみたけ、青み、四寸あん平ふ、葛溜り、酒肴、八寸竹子、ふき、石焼豆ふ、井小倉麩、独活、蓼、酢漬也、田中実五郎母子朝る来、見合呉る、通ひ者家来・下女・実五郎妻二而済也

○廿三日、己酉、晴、朝寒、朝五時頃る西向寺へ参詣、法事中相詰、観無量寿経・念仏・和讃有之、左之通参詣被相詰、森岡万之進者今朝御用向差間候由二而不参候也

岩崎常介

藤川甚吉

平野藤吉郎

岩崎良之進

辻清人代参

田中実五郎

久保万次

林茂平太

前後参詣水谷又左衛門殿、木野一馬、石井寿兵衛、小倉甚右衛門、桑原吉郎二、森岡万之進、佐藤益之丞代参、武内純介母、土井理作、永野武八郎、岡野新五等也、御乘馬江出、夕炮術数放之会有之、予も出、三十五放、吉本恒之丞・矢野源内・

星野武平次等者朝方出、百ツ、放候也、岩崎常介昨日之謝二来、其外出入之者も彼是来ル也

○廿四日、庚戌、雨、寒、例時出勤、九時頃退、直二海藏寺江為清見分罷越、伊藤徳之助・上野彦三郎も参、今日者雨天二者候へ共其儘歩行二而参、見分相濟、和尚達而被留、竹子并到來酒有之由二而被出、七半時過頃帰宅、帰かけ西向寺江参也、慈君夜辻へ御出、御宿被成、於恒も少し者快方之由也

○廿五日、辛亥、晴、涼、例時出勤、夕八時過退、佐藤益之丞先妻年回之由二付、興禪寺へ代参遣ス也、隆玄院^(奥出)昨日京都方無滞帰候由二付、昨日使を以歛申遣置也

廿六日
一遠慮御免
小沢孫太郎殿
○廿六日、壬子、晴、薄暑、今日九時海藏寺御非時二被罷出候付、右時刻出勤、海藏寺和尚・隠居並弟子兩人見へ、挨拶二出、御内廟御回向中落間へ相詰、御非時出候而挨拶二出、酒出候而も又出ル、尤酒出候節者御用掛二而予計出ル也

廿七日早晨
醉和会
菓にやく
蓮こむ
御皿
白か大根
三ツ葉
けむ
みそ
御汁
包豆ふ
しみたけ
青味
○廿七日、癸丑、晴、薄暑、御速夜御法事九時之始故五時過出宅、海藏寺江罷越、供列若党・草履取・道具・合羽籠、駕籠二而罷越、今日者周防様御参詣、御法事中御詰被遊也、夕七時前帰宅、帰掛御館へ罷出、御用達へ謁、右御速夜御法事無御滞相濟候段中上之義申述、退也、途中故西向寺江も卒与参ル、信楽廟御祥月^(行上勇越)_{廿五回忌御相当也}二付、今早晨献膳・献菓子等祭祀之式恒規之通勤之、常称廟も御一緒二献膳仕ル也、遠江様御隠居御願被為仰込置候処、明廿八日四時御用之儀有之、御年寄武田大炊殿・関藏人殿御越之旨大御目付衆方申来候旨為御知有之候由也、就右昨日井上市太郎方予へ一名之紙面二而、不遠内御隠居御家督被蒙仰二而可有御坐、其節是迄之処者皆

青粉わへ
御坪 こんにやく
うと

御飯

人參葉したし

飛龍頭
竹子

御平

ふき
椎たけ
三ツ葉
葉山椒

御菓子

焼まん頭
巻せんへい
ひくわし

以上

夕

御茶

うわ豆飯

共迎為御見合罷出候様被仰入候得共、当時格外御省略之御場合故其義無之、其段同役江も通達致しくれ候様二との趣意申来ル也、御家司中江も同断之由也、依之此方方も猶又右等之節是迄之処者寸志之差上物仕候へ共、当御場合之義御振合如何可被為在哉、内考之趣承度段同人江紙面ニ而予等之所も兼而尋參候処、右之趣申上も仕候処御大慶思召、格別之皆共義差出候ハ、御受納も可被遊候得共、右様格外之御大檢中ニ付、其義者御断被成候与の旨返書ニ申来也

○廿八日、甲卯寅、晴、薄暑、夕陰、明六時過出宅、海蔵寺江罷越、且那樣初座方御參

御詰被遊、何も無御滞夕八時頃罷帰宅、尤直ニ御館へ罷出、御用達中迄御機嫌相伺、御寺御立座後何之相更義無之段、且御寺詰之面々御齋頂戴之御受申上之義、並周防様御代香・御代拜相勤候段申上之義等及噂也、夫々直ニ相詰、夕七時前退、兼而之通今日遠江様へ為上使昨記兩人之衆參上、遠江様御願之通御隠居、御家督雅楽様江諸事御先規之通被蒙仰候之由、就右雅楽様即刻為御礼御登城被成、御下城掛此方様江も御案内旁御出被成、御広間江御通り被仰置候由也、遠江様御受者御番頭石井大膳殿を以御用番御年寄衆宅へ被仰上候由也、全体者御登城之上可被為蒙仰処、殿様御不快之被仰立ニ而御參勤御延引中之事故右之通与相聞ゆ、乍併先年此御方様御家督之節者御発駕之被仰出有之候上被為蒙仰、御礼等も御引続被為受候得共、此度者些御様子も被為在候御振合ニ而、火急ニ御隠居被仰込候義ニ付、被仰付之処右様上使を以被仰出候事与奉恐察候也

○廿九日、乙卯、雨、寒、午時々白鳥辺へ法事之節之謝ニ行、堀尾ニ而暫咄、困某、

卅日

一知行高百五拾石

金右衛門跡日

小山小十郎殿

朔日、於御城

一御中老格

沢 外衛殿

御年寄見習方

右格別之御趣意を以浅野之御称号被下、永々相用候之様被仰出

此御方御用

一御用人役

附足輕
御役料並之通

夕方帰ル、今朝近隣江も同上謝二行、奥田隆玄院江此間京師方帰候悦二行也、且那樣今日方已斐村石風呂江御入治被遊候也、例年之通御相手願候面々御供仕候由也

○卅日、丙辰、晴、寒し、夕曇、朝御乘馬江出、例時出勤、夕八時前退、退出後六丁目方水主町御船屋敷迄法事之返礼二行、夕方帰ル、木野二而酒出ル、極夕御奥へ於卓殿伺与して出ル、今朝以来些御搦搦之御気味被為在也、六丁目様方御脊戸之竹筭三箇拝領仕ル也、今朝雅案様江御隠居御家督之為御歎罷出、御客对差脇本広馬へ謁ス、勿論上下着二而罷出也

五月 小

○朔日、丁巳、曇、午雨小降、後罷、当月者予月番受也、例時出勤、夕八時過退、

於卓殿夜前者少々御居合之処、猶又今午前方御疲勞御増被成、甚御危篤之御様子也、出勤中御容体相伺、極又為窺罷出、先御居合之御様子也、堀尾精一郎今日於御前御用人役被仰付也、留主中為吹聴来候由、夕為歎遣ス也、夜政太郎来、沢外衛殿今日於御城御中老格被仰付、格別之御趣意を以浅野之御称号被下、永々相用候様二与被仰出、且在役中三百俵ツ、年々被下候之由也

○二日、戊午、曇、寒、六丁目様方助七殿御初幟二付、御粽九本昨夕頂戴被仰付也、告于廟、極朝於卓殿御不出来之趣御與付方申越候二付早速罷出、相伺候処、何分追々と御疲勞強く、五半時頃遂二御死去被成、当年御三歳、此御子様者御腹替二も被為在候得共、兎角御生育難被成、絶言語奉恐入候御事也、直二相詰、夕八時過一

堀尾精一郎

御用達

二日、於卓殿御法名左之

通

旭山曙光禪孩女

三日、於御城

一御年寄役
御加増六百石

杉田直馬殿

御用人

同日

芒種節

応退、夕七半時頃又出、御沐浴中御見合せ申上、今晚六時御供揃二而五時御出興、

御病氣建り二而海藏寺江御斂被成候二付、其節御広式御使者之間二而御見送り申上

ル、御棺拜等者不仕例也、服も上下着二者無之、尤六時頃御家司中一同御奥へ出、

御方々様御機嫌を伺、矢張平服也、御出興濟候処二而も又出ル、両度共老女江謁候

迄也、今朝堀尾精一郎入来之由、八木広次郎も入来、此間尾道方帰宅、三島屋方慈

君江之伝言有之、又々可来旨申置帰候由也、森岡方之進法事之節之謝入来之由

○三日、己未、晴又曇、朝桑原吉郎二法事之謝入来、朝素読所講釈江出席、夫方出

勤、午半刻頃退、堀尾眠石老人此間精一郎被仰付之吹調、頼旁入来之由也

○四日、庚申、曇、午前晴、朝堀尾精一郎へ御役成之歎二行、少々咄合事有之、酒

出ル、辻へ寄帰ル、慈君御無事被成御逗留、お恒も追々快方二有之由也、例時出勤

夕八時過退、六丁目様二而助七殿御初幟二付、此間者御粽をも被下置候故、申合候

而輕キ御鉢肴御内々今日差上ル也、全体当時格別之御時合柄二者候へ共、昨年も市

松殿御初幟之節指上候故、当年不差上もいか、与申値、右之通差上也、老女格たつ

へ文二而為持出ス、鯛・大口鰈・鱈三頭、直拾壹錢目也、退出後六丁目御館へ御機

嫌伺、御幟拜見旁与して罷出、帰森岡へ法事之返礼二寄、有合之酒を出ス、極夕帰

ル、杉田直馬殿昨日御年寄役被蒙仰候由、此人者今中丹後殿勤役中少々意二被触候

義有之、御用人より御旗奉行へ被転候処、近年御改政後參政二被復、尚又此度右様

被仰付候也、少し者気慨有之人与聞る也

○五日、辛酉、薄陰、冷氣不堪葛衣、五時^前過麻上下着出仕、御登城前於御居間御祝詞

六日

一 佐藤益之丞御多
門へ御替被下

堀尾精一郎

精一郎屋敷へ

佐藤益之丞

申上、周防様江之御祝詞於御次御用達迄申上、出衛様二者御部屋二而御逢被成、例之通御奥へ罷出退、御奥二而鈆之進殿御幟拜見仕、御床幟也、出衛様御部屋二御飾也、尤鈆之進殿昨日以來少々御吐乳被成候由也、右様鈆之進殿二も当年御初幟二付、申合輕キ御鉢肴差上ル、直九錢目八分也、老女八十野へ文二而為持出ス、夕石井寿兵衛来話、象戯を争、同後室も被来、酒を出、長喜三太も夜中来話、渡辺雅登・森仙太郎今日地御前迄大乘切いたし候由也、仙太郎者相手馬御貸被下候由也

○六日、壬戌、晴、冷氣、入梅也、朝辻清人昨日当番二而祝詞得不来候由二而来、残酒を饗、例時出館、夕八時過、堀尾精一郎・佐藤益之丞御多門屋鋪入替今日被

仰付也、右二付佐藤へ見舞使遣ス、夕射場へ出、夜政太郎来也

○七日、癸亥、曇、常称廟御祥月二付早朝西向寺江詣、帰佐藤江御多門替之見舞二行、益之丞此方へも頼旁二来、堀尾精一郎昨日御多門拜領之挨拶、先日之返札旁二入来也、地御前より吉助来候由但昨日之事、酒飯を饗、帰ス

○八日、甲子、雨終日降、寒し、朝為伺御機嫌罷出、昨朝佐藤益之丞頼之御多門替一件之義二付、昨夕石井寿兵衛を呼、及内談置候義有之也、雅楽様より先達而御養子御願下為御歡罷出候為御挨拶御使被下、例之通御用人中へ御受紙面差出ス、夜豪雨、雷鳴も有之

○九日、乙丑、晴、例時出勤、夕八時退、同半時頃又御用向二付出、旦那様己斐村石風呂へ御入治今日迄二而被為済、御惣体御相応被遊候由、奉恐悦ル也、主水様直二従明日御入治被遊候由也、佐藤益之丞を呼、内談之儀有之、伯耆之客僧儀天法

十五日

一 知行高百五石

大之進跡目

鯨江清次郎殿

二 御切米三拾石

三人扶持
尚衛跡目

荻野好之進殿

一 願之通隱居

荻野尚衛殿

十七日、今日於長安寺芳

雲殿御一周忌御法事有之、

右之趣無屹心得之達此間

有之候事

十八日、於御城

一大御目付

原 伊三郎殿

御先手者頭

一 御先手者頭

寺西要人殿

談殊外勸化上手之由二而高評二付、夜中窃二白鳥万行寺へ行、及聴聞也、兼而閉及候程二者無之様也

○十日、丙寅、晴或曇、例時出勤、夕八時過退、雅楽様方御到来遊はし候由二而御

赤飯老器御取分頂戴被仰也、告于廟、夕石井寿兵衛入来、内談事也、夜左伝会、

渡辺へ会、到来物有之由二而跡二而酒出ル

○十一日、丁卯、薄陰、冷氣、朝佐藤益之丞・湯川新太郎来、皆内談事也、御乘馬

へ出ル、夕弓術へ出ル、為何御機嫌夕方罷出、夜中家小近隣へ被誘、万行寺へ儀

天法談聴聞二参ル、政太郎来(由良)

○十二日、戊辰、薄陰、例時出勤、夕八時退、夕弓術へ出

○十三日、己巳、薄陰、朝御内密稽古江出ル、夫宅二而御用向有之、九時過出勤、

夕八時過退、渡辺宗右衛門殿去年以来何角之挨拶二来儀有之也、夜慈君從辻御戻

り被成

○十四日、庚午、曇、薄暑、夕為何御機嫌罷出、佐藤江御多門替前見舞二行、渡辺へ

昨日入来之謝二行、夕御乘馬へ出、夜佐藤老室近々宅替二付為暇乞被来、藤川お

ちか倉橋島江急二縁談所望二逢、今晚乗船罷越候由、夜前慈君御戻り被成候節右之

様子伝言有之、尚又今日使来、今夕家小二見立旁参候様申来ル、躰ふくさ并二肴料

を贈、家小者辞而不行、全体者前以一応之相談有之之そなる事なるに籠略成事也

○十五日、辛未、雨、寒、諸品御礼被為受候二付早朝方出勤、夕八時過退、島末源

太殿今日御館初而被罷出候二付、出而謁ス、平野藤吉郎入来

一町御奉行

川崎鹿之助殿

御目付方

一御用人並
一郡御奉行

野村良之進殿

大御小姓頭方

一 大御目付同格
一 勤向唯今迄之通

高野茂登殿

御供頭

松平長門守様
御前様

一御傳役

岡村辰之進殿

一御代官

湊 兵馬殿

岡田大記殿

十九日

夏至

○十六日、壬申、晴、薄暑、此間以来足痛、少々腫氣も有之、心持悪敷候二付妙慶院

參詣今朝不能、^(森島)兵藏代參申付也、例時出勤、夕八時前退、今日九半時揃炮術稽古

前御覽被遊候二付罷出ル、五玉通り御覽、予皆中二候得共星者一ツ也、其外惣体今

日者外れ多し、夜慈君万行寺へ御參被成

○十七日、癸酉、晴又曇、朝弓術稽古二出、午後為御機嫌窺罷出、予此間以来足痛

二而困り候二付、夕松本良伯へ診を乞、全不回り方之義少し者脚氣之氣味も可有之

与中、薬を恵也、夕坪内久米之助方近藤重太郎義病氣太切之趣為知越、依之夜中見

舞使遣候処、実者病死いたし候二付、南部要人^{オトク}弟玉之進を養子二願置候由、猶又久

米之助方紙面二而申越也、今日終日佐藤江手伝として兵藏を遣入也

○十八日、甲戌、曇、朝素読所^{会説}講釈へ出席、相濟出勤、夕七時前退、浅野雅楽様二

而遠江様御義為御保養三原へ御出、御逗留被成候筈二付今日御出船、御奥様二も御

同様二御越被成候之由也、佐藤益之丞明日白島屋敷へ引移候由二而、為暇乞来、喜

代植・直人も来候由、夜左伝会、例之兩人入来、家小湿氣之氣味二而、惣身小瘡

を生候二付忍冬風呂を建、今日方浴ス

○十九日、乙亥、晴、薄暑、夕蒸、堀尾精一郎今朝御多門遷移相濟候由二付歛使遣入、

夜前者方除之為素読所借用、一宿有之候由也、例時出勤、夕八時前退、夕近藤重

太郎死去ヲ吊、坪内・木野江も右二付悔二行、水谷へ寄、夜迄話帰ル、妙慶院江も

卒与參ル、十六日怠候故也、出掛堀尾へ遷移之歛二行、達而被留、祝酒出ル、木

野・水谷二而も酒出ル也、堀尾眠石・精一郎頼旁入来、今日夏至也

廿日

一名改

直馬殿事

杉田駿河

○廿日、丙子、晴、向暑、明後廿二日麗照院様御七回御忌御法事二付、今日海藏寺御

(淺野周防道輝室意庭)

非時二被罷出候故、四時頃麻上下着出仕、御内廟御回向中相詰、拜も仕、海藏寺へ
前後挨拶二出ル也、九時過退、夕御乘馬へ出ル

○廿一日、丁丑、雨、蒸、例時出勤、夕八時過退、夕堀尾精一郎入来、御用談也、

夜政太郎来

○廿二日、戊寅、雨、蒸、時々雷鳴、有風、今暁以来腹瀉、心下痛有之、困、例時

出勤、夕九半時頃御断を申退、退出後平臥、熱氣有之、頭痛二而困ル、瀉も益繁也、

夜松本良伯を呼、診を乞、全氣候之感触之由申、薬を恵、慈君も少々御風氣被成

御坐候へ共、格別之義二も無之、今日西向寺不能參詣、兵藏を為參也、今日海藏

寺御法事、御寺詰精一郎罷越候也、御法事二付御茶被仰付候由二而、御重之内牡丹

餅御奥方頂戴仕ル也

○廿三日、己卯、雨罷、夕方晴、今暁以来心下大二快方相成、瀉も今朝方止、尤惣体

未快候故終日平臥、右二付今日為窺御機嫌罷出候義雅登江頼也、堀尾老室入来有

之、今朝藤井音次郎来、松田謙蔵義先達而御小納戸加、御近習組知行取並被仰付候

由為知伝言有之也、御祈祷之御供物頂戴

○廿四日、庚辰、晴、薄暑、朝例時出勤、於御奥之進殿御義今朝以来又々御発搖

之御氣味二而、午後者益搖搦強、御難儀被成候二付、極夕一応卒与退出、又出、夜

四時頃少々御居被成候二付退出

○廿五日、壬巳、晴、向暑、今暁八時頃之進殿御不出来之御様子御奥方申来、早速

廿四日

一 御切米廿四石

二 三人扶持

三 左衛門家督

木谷弥太郎殿

一願之通隠居
木谷三左衛門殿

〔廿五日〕
(進脱カ)
 鈆之殿御法号
 紹菴慧苗禪孩子

〔廿六日、妙慶院へ備物左
 之通

回向料 銀三匁
 靈供米 精一升
 塔婆料 銀五分
 右義純一周忌ニ付備ル也
 〔吉村文哲老此間死去之
 由也、癘症ニ而死候由也

罷出候処、急ニ御差重被成候由、最早御事切ニ被為至、重々之御不幸いかに共中上
 方も無之、奉恐入候次第也、直ニ相詰、一応之御用向相濟、夜明頃退、例時出勤、
 夕八時前退、七時頃又出勤、御用向申談、且鈆之進殿御仕回中御見合せ仕、暮前退、
 又夜亥鼓後出勤、丑刻前退、鈆之進殿御死去被成候ニ付、今日者出勤後午鼓前何れ
 も御輿江罷出、老女江謁、御方々様御機嫌奉伺、御出輿之節御広式御使者之間へ罷
 出候義等何も去ル二日之記ニ有之通也、御出輿者子鼓後也

○廿六日、癸壬午、朝曇、蒸、後晴、午後為窺御機嫌出勤、夕吉田藤馬此間二男拾病
 死を吊、丹羽庄司方ニ而おしけへ先日近藤重太郎死去之悔旁ニ行、西向寺へ此間不
 參ニ付卒与參り、夫方白島ニ而佐藤益之丞先日転宅之賀且与三右衛門病氣訪旁ニ參、
(谷脱カ)
 渡辺雅先達而參居、有合之酒出ル、与三右衛門水腫充滿、昨夕以來少し心下へ付候
 氣味有之、氣遣候由、何分危篤之様子也、藤川江も先日おちか内々縁付之歎ニ行、
 同方ニ而も酒出ル、先方者藤村土佐守与申、從五位下之由、今夕付添參候者婦、委
 敷様子も聞へ、殊外居合宜敷趣ニ而、大ニ安心被致候由也、辻江者皆々留守ニ付不
 寄して帰ル、夏岳君御祥月ニ付、今朝妙慶院へ兵藏(森徳)を為參也、且来ル廿九日義純童
 子一周忌ニ付、備物為持遣、手紙を以同朝輕回向いたしくれ候様頼遣ス也

○廿七日、甲未、晴、向暑強、朝素読所会読へ出席、相濟出勤、夕八時頃退、夜堀
 尾江囲碁ニ行

○廿八日、甲申、曇或見日、向暑強、主水様為時候之御見舞御出被成候ニ付早朝罷出、
 今日者御乗馬日ニ付急ニ御乗馬御見物之義御所望ニ而、御居留被成、夕八時過御立

廿九日、義純一周忌二付
さ、け飯を製、辻・森
岡・石井・長江贈、榮作
方も遣ス也

朔日

一 御加増三拾石

小出保登殿

一同拾石ツ、

渡辺彦太郎殿

丹羽清兵衛殿

座被成、御乗馬之節者御馬場へ罷出、御相手仕ル也、八半時頃退、〔当月十三日東城
宮崎小笹院殿卅三回忌之処、致失念候二付今日焼香、遥拝仕ル也、石井正善院三回
忌速夜二付、花井二白檀香少内仏へ供、佐藤江見舞使遣ス、殊外難儀之由也、夕
堀尾眠石来話、夜政太郎来

廿九日、乙酉、曇又晴、向暑強、蒸甚、義純一周忌正当二付、朝妙慶院へ兵藏代参
中付、法事中詰、焼香致し帰ル也、朝弓術稽古二出、夕一甫流劍術・柔術稽古前
御覽被遊候二付、為席詰罷出、慈君夜中妙慶院并二瘡守社へ 妙法寺也 御参り被成、
夜例会業二付渡辺江会ス

六月 大

朔日、丙戌、曇或晴、蒸氣強、〔当月々番精一郎引受、予御米銀受也、例時出勤、
夕七時前退

二日、丁亥、曇、有風、蒸氣強、〔御用談二而精一郎兩度入来、午時出衛様へ御用
向有之、罷出ル、夕八時頃々出、海藏寺江拜参、先月廿二日麗照院様御七回忌之節
得拜参不仕候故也、暮頃帰ル、今朝御用向二付御船奉行遠藤佐兵衛殿へ行、謁ス、
始而逢候也、此人者當時評判宜敷人之由、真卒之人之様二見ゆる也

三日、戊子、晴、向暑強、〔朝素読所講釈へ出席、直二出勤、夕八時退、慈君・家
小夜妙慶院地藏講へ参

四日、己丑、曇、蒸甚、〔例時出勤、夕八時過退、夕弓術へ出、夜慈君辻へ逗留二

〔四日〕

一知行高九百石

若狭跡目

浅野文之助殿

〔六日〕

小暑節

〔七日〕佐藤与三右衛門法

名

大禅院柏庭玄機居士

行年六十五歳也

〔九日〕

昌寿院様

一御傳役

長谷川半弥殿

一御側詰

松田六之丞殿

一御側詰次席

山田幾太郎殿

山田直登殿

山田都津記殿

御出被成、〔夜木野一馬入来、酒を出入、長喜三太も折柄来話、〕今朝万之進久振二〔森岡〕来

○五日、庚寅、曇、午時前雨一過、夕涼、〔朝御乘馬へ出ル、見せ馬両匹来ル、白神社脇西堂橋去ル朝日夜亥刻前無故而中半崩落候由、尤夕方〔舞カ〕鳴響候故、町方役人出往来を留候二付、人怪我者無之候由、何分御打入以来上之普請者一度も無之、柱計者折々入替二成候義有之候得共、近来之御時合二而夫も手ぬけ二成居候之趣也、

〔佐藤与三右衛門追々不出来之由、見舞使遣入〕

○六日、辛卯、曇、蒸、朝之内者涼、〔朝昨日之見せ馬二番見二来候二付御馬場へ出、

〔右相済出勤、夕八時過退、〕家小此間以来大便通滞二而困り臥、少者暑邪之気味も有之趣也、〔星野武平次明朝出立、東城江罷越候由二而暇乞二来、此度於同処大砲御鑄造有之候二付、何角為締合被遣候也、御武具方足輕小畑甚蔵も附添罷越候也、〕夜政太郎来、〔竹腰恰殿方母義死去之由二而為知来ル也〕

○七日、壬辰、曇、向暑、〔朝素読所会読二付出席、夫方出勤、夕八時前退、〕山中一

庵老被訪、〔坪内久米之助先達悔之返礼入来、〕家小昨記之趣二候処、今朝松本良伯来候二付診を乞候処、暑邪之気味与申、薬を恵、夕方〔通〕大便〔通〕氣有之、大二快方也、

〔八木広次郎昨日入来、〕佐藤与三右衛門今朝死去之由、午後悔使遣入、〔夜佐藤葬式二付興禅寺江兵藏使者二遣入、行列何も在勤中之格を以取行候由、当家先考之節も

右之通り也

○八日、癸巳、終日曇、時々雨、夕涼、〔早朝佐藤江梅二行、竹腰恰殿へも右同断、夫

御住居附

一御広式御用達

木全清三郎殿

十日、此度電光之御馬御放二而、南部立青毛之馬御牽入二相成、左之通名

附夕、上肝之馬之由也

棧

十二日

一大坂御屋敷番

津村龜次郎殿

御代官方

去ル九日於江戸

一知行高三百六拾五石
御本家へ被差戻

藤藏跡目家督

高木宗十郎殿

定江戸御馬回り組

一願之通隠居

高木藤藏殿

方三宅吉左衛門へ先達而祖母君御年回之節花を被恵候謝二行、辻へ見舞、永井老室不快を訪、夫方六丁目様へ為窺御機嫌罷出、森岡へも見舞、午後帰ル

○九日、甲午、雨後晴、夕八時前地震、朝弓術へ出ル、例時出勤、夕八時退、夜堀尾へ囲碁二行

○十日、乙未、晴、向暑強、昨日野崎千之助弟唯之進来、千之助義此度三原勝手被仰付、明十一日夕沙二乗船、三原江引越候之由、千之助勤柄二付為名代暇乞二来候也、朝御乗馬へ出ル、例時出勤、夕八時退、夕弓術へ出、夜会読合二付雅登・精一郎・五兵衛来

○十一日、丙申、晴、向暑烈、朝野崎千之助へ暇乞二行、家内者沖和多理方江参居候二付、同方へ参、逢也、岩崎へ見舞、弓術稽古二出、夜政太郎来

○十二日、丁酉、晴、向暑烈、朝例出勤、夕八時退、夜就御用談渡辺へ会ス、跡二而酒出ル

○十三日、戊戌、晴、向暑甚、早朝御内密稽古二付御馬場へ出ル、佐藤大禅院初七日於興禅寺今朝法事有之旨昨夕為知有之、尤代参・備物等之義断も有之候得共、格別二恩義も有之人之義二付家来代参、法事中為詰、并二靈前へ靈俱相供る也、例時出勤、夕九半時頃退、貫心流劍術稽古前御覽二就夕又出勤、七時頃相済退、極夕方興禅寺江参、全体今朝差問無之候得者予参詣、法事中相詰度心中二候得共、其義不能候故二卒与参ル也、鶏肉煎を製、服ス、今朝万之進来

○十四日、己亥、晴、朝有涼風、後向暑烈、朝御乗馬へ出ル、夕弓術、夜会読二付

年来出精二付銀三枚被下

渡辺へ会ス、有御用談、不及開冊子

○十五日、庚子、晴、朝有涼風、後向暑甚、朝弓術へ出、今日御役所早出仕二付五時過出勤、夕八時前退、堀尾幾之進御裏拜借、槍術業会催候而横門人中多人數參ル二付、夕為見物出ル、折柄旦那様ニも御臨坐御覽被遊、其実者御家来中同方へ出精致候輩之業前夫与なく御覽被遊候御趣意ニ而、御移合有之、幾之進右様催候由也

○十六日、辛丑、晴、向暑烈、朝涼、早朝妙慶院へ參、帰西向寺江も貞善祥月二付參り帰、例時出勤、九半時前退、鼓員吹打御見聞被遊、今朝者焼火之間ニ於て有之候二付、拾壹敷江出席、詰、及見聞也、夜政太郎(由息)来

○十七日、壬寅、晴、向暑劇、朝涼、夜蒸、朝御乗馬并二弓術江出ル、午後堀尾眠石・岩崎常介困碁二来、夕渡辺雅登・堀尾精一郎も見物二見ヘル、夕祭祀之酒を出ス、巖島社祭祀、当年者他国參詣多有之候由也、御供船者川内々飾者不附候由、御裏巖社御祭礼二付、御祈祷之御供物頂戴被仰付、坊主長束千甫持參、謁而御用達中迄御請申帰ス也、当年者大坂御藏屋敷内江巖島明神社御造営ニ而、御供船御用聞共申値差出候由ニ而、当町・中島本町之御供船其形ニ參り候との風聞也、尤右御社者已前御屋鋪ニ有之由ニ者候得共、近年之大地震之節別而信仰之輩多、当度も御用聞町人大家七人中値、大金を出し右様之趣ニ相成候由也、家小夜婦寧、留守之間榮作夫婦来居くれる也、今晚者不宿して帰ル

○十八日、癸卯、晴、朝涼、後暑氣強、土用入也、朝素読所会読へ出席、相濟出勤、

十八日

土用入

同日御役替

一御出頭
二御免

藤川每登

一御用達
二御膳番兼帶

伊藤徳之助

御日付ら

一御日付
一定加り

桂 辰馬

御側方ら

一御出頭差

佐藤益之丞

御用達也

一御側方差

池田万次郎

御中小姓

九半時頃退、今日藤川每登殿四時御用召二而御出頭役御免也、其外も少々御役替有

之、每人殿二者何分勤事向何角兎角粗略多、當時御用達打込候而之勤向二候処、別

而御間合かね候義有之、思召二不被為叶候歟之御振合二而、右様之義与被致恐察、

氣毒成事也、右等之筋二付而者予も是迄度々御内論も申候得共、無是非事也、一右御

用之趣今朝為知来候付、夕方為見舞參ル、佐藤益之丞膝中ヲ訪、内仏へ拜、兎香式

把を供入、辻江見舞帰ル、慈君も御無事二御逗留被成也、酒出、夜迄咄帰ル

○十九日、甲辰、晴、暑威強、有蒸氣、夕曇、例時出勤、九時過退、夕又御旗御透覽

二付出ル、尤外御用向有之候而予者其方江者不出、入夜退、桂辰馬昨日被仰付之吹

調二来候由、夜西鼓後御用向二而又出勤致ス也、今日雅楽様之方先達而御鑄造相

調候六封度之大炮此度御放試、既二今日於江波有之、雅楽様二も為御見物御出被成

候由、依之今日一日此方様へ御用番御頼也、石井寿兵衛今朝入来之由、挨拶事也

○廿日、乙巳、曇、朝少々雨はらつく、涼、朝御乘馬江出、岡本主馬殿来儀、謁ス、

小童村富助儀二付内談有之也、夜中会説二付雅登・精一郎・五兵衛被来、今朝辻

清人入来、此間頼之湧乳湯、昨日八十野へ頼取寄くれ候二付附ス

○廿一日、丙午、晴、暑威薄、朝夕涼、朝例時出勤、夕九半時頃退、極夕堀尾翁入

来、夜迄困菜、昨夕鱸一尾鮮魚見当候二付渡辺氏へ贈る、当春三次被召抱候二付彼

是配意預候謝意也、三次四月中旬以來大病二而困候処、夜前より快出いたし候由二

而礼二来候由也

○廿二日、丁未、晴、炎威強、朝著涼、朝素説所講釈へ出席、夫ら出勤、九時過退、

夕藤本淺藏・西川米藏門人足輕以下之者柔術業前見分二付出勤、七時頃始り暮頃相濟、御透覽も被遊、何れも業前殊外見事二有之、感入也、下女不快二而家来差間、今朝西向寺參詣不能

○廿三日、戊申、曇、炎威強、蒸、早朝雅楽様・主水様江暑中為伺御機嫌罷出、井上市太郎・脇本武兵衛へ暑氣見舞二行、是者昨年あらゝ来候故也、吉田藤馬・丹羽庄司を訪、夫ゝ西向寺江參詣、松田謙藏先達而結構二被仰付候を賀し、桑原吉郎二を訪、午時前帰ル、桑原二而昼飯を出ス、夕々堀尾へ囲碁二被招行、到来之肴有之由二而夜酒出ル、土屋政之進暑氣問安来候由

廿四日

御切米三拾石
三人扶持

熊之進跡目

佐藤平之丞殿

○廿四日、己酉、晴、炎威殊二猛、夜来蒸甚、早朝御内密稽古へ出、相濟出勤、九時過退、堀尾精一郎中暑之由、出勤無之、見舞使遣ス、松尾善二郎暑氣問安入来、下女一昨日以来不快、余程熱烈敷趣二而致難儀候二付、昨夕下宿を願、小回弥十駕籠二而連帰ル也、夕遠雷

○廿五日、庚戌、晴、炎熱、早朝弓術稽古二出、例時出勤、九時過退、永井仲之助先達而見舞之謝入来之由

○廿六日、辛亥、晴、炎熱、夕西北遠雷、昨夕も同断、朝御乗馬江出、棧之御馬を初而拝借、乘、石井寿兵衛を呼、同人弓術之義二付出衛様御内沙汰之趣内密及示諭、夜政太郎来、堀尾精一郎今日快出之旨案内紙面来ル

○廿七日、壬子、朝曇後晴、炎威強、夕西方遠雷、朝素読所会読へ出席、相濟出勤、九時過退、西向寺江兵藏代參申付、夕弓術へ出、吉田藤馬・久野秀太郎・矢野源

朔日

御用人
知行高三百石ニ被成被下
御役料 並之通
足輕

桜井織部殿

一 御普請奉行

伊藤庄七殿

一新組御者頭

内・野口半助暑氣問安入来、夜石井後室入来、夜有電

○廿八日、癸丑、朝曇、蒸、午前々遠雷、終日雨不来、例時出勤、九時過退、夜会読、雅登・五兵衛来

○廿九日、甲寅、晴、炎威、朝有涼風、朝弓術へ出ル、朝辻清人入来之由、兵藏宿江參、留守中石井おたまを頼、来居呉ル、下女も其後瘧ニ成、今以困候由二而不帰

○卅日、乙卯、快晴、炎熱、朝夕有清風、例時出勤、九時過退、夕堀尾へ囲碁二行、常介も參、極夕帰ル、夜辻清人來話、有合之肴を出ス、昨夕小使福藏、御馬捕源吉武芸見分ニ付御馬見所へ罷出、御透覽も被遊也

七月 小

○朔日、丙辰、晴、炎熱、朝夜微涼、当月予手明也、朝例時出勤、九時過退、雅楽

様御用人本庄三大夫今日御立入始而罷出候ニ付、出而始而謁ル也、主水様去ル廿三日以來御痢疾ニ而御難儀被成候之処、夜前以來以之外之御容体ニ被為移、今曉之処ニ而者誠ニ以御危篤之御様子ニ被成御坐候之由也、就右夕方為御機嫌伺罷出、御出頭大矢好左衛門応対、尤御内命を蒙候義も有之、御弓之間へ通り、御用人河瀬喜和馬へ逢、夜前以來之処者全大御霍乱症与申様之御振ニ候所、今朝者御居合御同篇之由也、其御実者今朝御事切之御様子歟与喜和馬申分ニ而も恐察仕也、帰掛御館へ出、慈君夜辻の御戻り被成、夜政太郎来

○二日、丁巳、晴、酷暑如燬、朝木野・水谷・坪内江暑氣問安ニ罷越、六丁目御館江

野村権助殿

一座順御步行頭次席

津川元敬老

藥種料銀三拾枚二被成下

一五人扶持被下
御醫師格被仰付

町醫師

後藤松軒

右近年御咎被仰付候処、
其以來相慎療養^治精出候段
達御聽、生涯右之通被仰
付

罷出、森岡へ寄、午前帰、星野正大夫へも武平次東城之留守を訪、帰掛卒与御館へ
出、八時前退、木野・森岡二而暑払酒出、森岡二而者中飯をも喫、主水様御病氣先
刻以來御勝不被成旨未鼓前御知せ有之、早速旦那様御見舞与して御出被遊、右二付
夕方為伺御機嫌主水様へ罷出、渡辺雅登同伴又、御出頭中村善^{忠左衛門}三郎江謁、退出、夜
御用向話合事有之、堀尾へ行、跡二而眠石翁与困棊、今朝岩崎常介・小倉甚右衛
門・山田多喜登・鱸兵馬・長束千甫暑氣問安入來

○三日、戊午、晴、炎暑難堪、早朝御乘馬江出、夫方素読所講釈へ出席、相濟而出勤、
八時過退、午前^方四辺雷鳴、雲峰疊起、白雨將至如くして終不來、蒸氣殊強、主
水様御病氣追々御差重、御太切至極之旨二付、申鼓前渡辺雅登同道罷出、御容体相
伺、御出頭所詰福山市之進応対、夫方御用人福山直衛江逢、右之御様子二付申合、
相詰候心得二御坐候得共、御附使者等も当度者御断二相成候程之義故、格別御用向
も無之候得者、押而相詰候而も却而御六ヶ敷も可被為在、いか、之御振合二可有御坐
哉、御考振^{次第}承上いヶ様二も可仕之旨申述候処、直衛答而、段々御念入候義、其段者
申上候様可仕、御承知之通御手狭之義二も有之、殊二御席構等も無御坐候間、自然
御用向等も御坐候ハ、又従是可申進、先御引取被成候様二との義二付、任挨拶退出
いたす也、右去ル享和二年大雲院様御卒去之節者詰候趣二不相見、其後文政三年大^{上田主水安庵}
謙院様之節者佐藤翁助相詰候趣也、当度者誠二御大儉之御場合故右之通、一応挨拶二
及候上引取也、旦那様二も即刻為御見舞御出被遊也、夜御用談二付渡辺氏江会又
○四日、己未、晴、炎威如坐甌、朝五時過出勤、九時過退、主水様御養生御叶不被

〔四日御卒去〕

上田主水安節君

御年五十歳、去ル文政四年之御家統二而、三十六年之御在職也、御法号左之通

有恪院殿紹先令終大居士上田之御家二而者唯今迄之処者殿之字無之由二候所、此度者右之通也

成、御死去被成候段夕方御弘メ有之、予者少々腹痛之気味有之、今日者御悔不罷出、

〔就右今日〆七日之間諸事穩便二仕候様、尤普請作事者三日用捨可仕旨御移檄出ル、

〔公辺二而者三日之御穩便一統へ被御出、皆御先例也、〔名倉求馬・伊藤徳之助・室

角左源次・岡田八十太郎・星野正大夫・長束吉之進昨今暑氣為安問入来

○五日、庚申、晴、炎威強、午後過雨一霎、其後益炎熱相加、蒸氣酷、〔朝上田内記様

へ為御悔罷出、麻上下着、御出頭坪内久米之助謁、昨日可罷出処、少々腹痛二而難義仕、延引罷成候段申述、雅楽様二も御養母方之御祖父御定式之御服忌二付、帰掛為御悔罷出、御使番差今井八十郎謁、於三原遠江様御輿様江之御悔も跡二而申上ル也、着服其儘麻上下也

○六日、辛酉、晴、時々出雲、炎熱不堪、〔早朝出勤、夕午鼓退出、〔主水様御卒去二付從殿様為御悔上使御騎馬頭松宮滝次郎殿御出、為御礼旦那様即刻御登城被遊、雅楽様へも御同人被參候由、内記様江者御悔之上使御年寄武田大炊殿、御香奠之上使大御小姓頭堀江太左衛門殿被參候由也、〔吉田藤馬〆昨夕紙面を以此度御凶變二付殊外御差問、御難洪心痛致候由二而、差向金五百兩御借入之義御世話仕呉候様厚頼越、何分當時世上金銀大闊之処、時分柄之義二も有之、外方二而者所詮不相調心痛之由也、其実下法三百金位不相調候而者差向御葬式等之御取計も難被為出来御様子之由相聞、甚以御氣毒千万之義也

○七日、壬戌、朝曇、微雨、後晴、暑威倍酷、蒸氣強、〔立秋節也、〔六半時頃麻上下着出仕、御登城前御祝詞例之通申上、外御方々様江之御祝詞も恒之通相濟也、五半

〔七日

立秋

八日、於海藏寺靈苗様卅
三回御忌御法事有之、堀
尾精一郎御寺詰ニ罷越也

九日

一 知行高百石
御側詰

梶川官兵衛殿

與詰

一 御役御免
御側詰次席

藤田恒之丞殿

下地御側詰也

一 伏見御屋敷番

石河金弥殿

一 御代官

山崎為之進殿

十日

一 知行高式百四拾石

久之助跡目

淺野新太郎殿

時頃退出、午後ノ堀尾へ囲碁二行、岩崎常介会、夕酒飯出ル、夕森岡万之進祝詞
二来、祝酒を饗、石井後室も話二見へる、西向寺江兵藏(森島)為参也、今日者御内輪之
処者御穩便中ニ候得共、御祝詞も有之、御家来中乞巧奠も如恒、御先例右之通之由
也

○八日、癸亥、晴或雲出、残暑如坐甌、早朝御乘馬へ出、朝吉田藤馬・丹羽庄司江
主水様右之御様子ニ付見舞、帰リ八木広次郎をも訪候処、家内不残他適与見へ、門
鎖たり、岩崎常介を訪、夜半雷鳴、微雨

○九日、甲子、晴、時々雲出、残炎実ニ不堪、朝例時出勤、九時過退、井口喜久馬・
河野熊之進残暑見舞二来、夜桑原吉郎二入来、酒を出、暫話ス、夕有地震

○十日、乙丑、暁雷鳴、微雨、朝纔有涼風、晴又曇、秋炎殊烈、早朝就御用向御船奉
行遠藤殿(佐兵衛)へ行、謁ス、昨夕紙面ニ而被逢度旨申来候也、帰宅後直ニ出勤、九時過退、
朝方之進來、盆前借用銀之事申置候之由也、慈君夜妙慶院観音へ御参詣被成也

○十一日、丙寅、晴、朝曇、有風、些涼、午暑如昨、朝弓術稽古ニ出、主水様御遣
体今朝五時之御出棺ニ而禅林寺へ御葬埋被為在候由、右之節御先例者御寺へ旦那様
方御用人御使者、御隠居様方御出頭御使者被進候得共、此度者格別之御断ニ付、御
兼合ニ而御出頭老人為御使者被進、御出頭差佐藤益之丞罷越候由、是又先年者騎馬
ニ而罷越候趣ニ候得共、当度者歩行ニ而参候也、雅楽様方御御用人罷越候由也、
就右ニ付皆共御見送り等二者不罷出例也、兵藏願候ニ付拜見ニ遣ス、長喜三太妻
昨日安産、女子出生之由、夜前・今夕見舞使遣ス、夜木野・水谷へ見舞、兵藏遣ス、

歎二付

一棒火矢方御免

高槻栄次郎殿

一願二付御扶持方二被成

下

菅野求馬殿

十五日、盆会二付墓所江外方燈籠被建候数左之通

先君御墓所へ

藤川 木野 辻 平野

森岡 渡辺

田中榮作

実山分へ

辻 森岡 木野

星野 石井 大島

矢野 小倉 佐藤

渡辺 桑原 岩崎

山田 長 桑原

盛藏

田中榮作

其外者凡毎年之通り也

予此間以来いまた無沙汰致候故也

○十二日、丁卯、曇又晴、午時雷鳴、白雨如将来終不来、秋炎如燦、例時出勤、九時

頃退、夜慈君・家小西向寺・妙慶院・興徳寺・本照寺等へ参、慈君者御戻掛直二辻

江御出、御宿被成、盆前何角多用二而困候付御出被下候様、今日同方より申来候由也、

夜有電

○十三日、戊辰、曇時々晴、夜来蒸気強、今日より御役所廃休也、午後快雨一霎時、

旱枯忽蘇、其後俄二涼、夜西向寺・西蓮寺・明信院・妙慶院・本照寺・興徳寺・興

禪寺へ参、兩且寺江者例年之通壺封を贈也、昨日・今朝兵藏を遣し、一緒内其外知

音之墓へ燈を点しさす也、兩寺江者今朝為持遣し置候也、紹庵殿明日御四十九日之

由二而、御重之内牡丹餅頂戴仕候也

○十四日、己巳、雨振、涼、午後堀尾へ幾之進不快之見舞并二此間索麵之贈謝二行、

木野・水谷・坪内へ御凶變二付見舞二行、木野二而酒出、長喜三太妻安産之歎二も

卒与行、御奥へ昨日御茶子頂戴之御請二出候処、御用向有之、暫見合、夫より六丁目

辺へ行也、夜兵藏を兩寺へ点燈二為参、夜西鼓後方雷鳴殊二甚、雨如建瓶、夜半

後鎮、大震兩三声有之

○十五日、庚午、曇時々雨、朝涼、夕蒸、有雷鳴、雨亦甚、朝小倉甚右衛門此間贈物

之謝二来、森岡万之進・辻清人当日祝詞旁入来、酒麵を饗、堀尾眠石今日剃髮被

致候由、使を以歎中遣す、あちらより吹聴旁二被来、夕同方江困菓二被招行、有酒

饗、剃髮祝意之由也、深町真喜太・武内純介・岩崎常介也、今日海藏寺へ拜参可仕

十八日

一御切米式拾壹石
二三人扶持

民五郎跡目

吉田勘太郎殿

廿三日

処暑

廿四日、妙慶院江備物左
之通

同向料 銀壹兩

靈供米 精二升

塔婆料 銀壹匁

与小姓町迄出掛候所、俄二雨降出候二付帰、其後雲合惠候故終二罷、夜両寺へ点燈
兵藏遣入、夜石井後室来話、夜前之雷八丁馬場西詰右三位小路江出候町郡方吟味
役所前之櫓へ落候之由、櫓少々損候趣也、其外空鞆・日通寺前・矢賀等へも震候由
也 空鞆之云ハ鷹匠町宇野何某殿之屋へ落
候由、日通寺前者杉之木二本裂候由也

○十六日、辛未、快晴、涼、早朝妙慶院へ参、例時出勤、九時過退、波多野権祐善
間墓所へ燈籠を点候謝二来候由、堀尾幾之進此間内不快見舞之謝二来候由、真野
謠五郎今夕七時宅御用、渡辺雅登頼二付当家二而申達入、加席御目付桂辰馬來、今
日右下女出替、部屋頭辰藏娘来也、家小夜辻へ行、宿ス

○十七日、壬申、快晴、朝涼意深、午秋暑強、朝御乘馬へ出、渡辺四郎右衛門・長
喜三太入来、夜家小従辻帰、極夕右堀尾眠石翁囲碁二被来

○十八日、癸酉、朝雨後晴、又曇、夕又雨、蒸、朝素読所会読二付出席、相濟出勤、
九時過退、日那樣今日水主町御船方之水術御見物与して御出被遊、尤此御方樣計屹
与なく御噂二而御出被遊候也、右水術者先年御船頭草井藤一郎・熊野龜太郎讚州高
松へ罷越、致相伝帰候由二而、主馬流与称し、開祖者加藤主馬与申人二而、肥後之出
之由、高松侯之御家中二伝り有之、至而秘術二而、先年高松侯へ （通野斎賢）天祐院様於御城殿
中御直之御頼二而、右両人之者致相伝候由也、當時師範者桑原吉郎二・波田六十郎
之由也、木野・水谷へ見舞使遣、茶巾餅を贈る也、慈君今晚從辻御帰被成筈之処、
未無人二而困候二付、今暫御逗留被成候由、お恒も少々不快之由也

○十九日、甲戌、晴、涼、午暑、夕有風、例時出勤、九半頃退

以上

去ル廿三日於江戸

一 御用人
二 若殿様江御附被成

菅 平角殿

御騎馬頭右

廿四日

一 遠慮

落合保之丞殿

右此度江戸右罷帰候節、馬籠駅右加納駅迄人足相雇致旅行候処、先触書不差出繼立候段達御聴、此儀二付而ハ兼而被仰出之趣も有之候処右之次第、甚以不念之儀二付

廿八日

一 御目付

松井繁人殿

御大筒頭

○廿日、乙亥、曇時々雨、蒸気あり、夕晴、涼、朝御乘馬へ罷出、夕射場へ出、来ル廿六日秀山智英童子十三回忌二付、今日妙慶院へ墓所磨兵藏遣入、尤昨年義純合葬(森島)いたし候故軽ク一通り為磨也

○廿一日、丙子、晴、涼、朝弓術稽古二出、例時出勤、九半時頃退、夜政太郎来(由是)

○廿二日、丁丑、晴、涼、午暑、早朝西向寺江参詣、昨年以來度々頼有之奴可郡宇山村禅仏寺東城町出職一件、御屋敷表之処漸免許二相成候趣内話致置也、住持厚挨拶有之也、素読講釈へ出席、夫々出勤、九時過退、当盆海藏寺拜参懈候故退出後拜

参、和尚暫閑話有之、達而酒を被出、禅話を聞、仏戒俚語与云書を借帰ル、家小夜木野へ行、宿、長喜三太来話、今朝西向寺へ帰掛、内記録へ御臆中為窺御機嫌罷出ル、御出頭坪内久米之介応対也

○廿三日、戊寅、晴、朝夕涼、午後秋暑強、朝御乘馬江罷出、堀尾眠石翁入来、渡辺宗右衛門殿不快之義二付有内話、夜家小従木野帰ル

○廿四日、己卯、晴又曇、蒸、朝例時出勤、九時頃退、来ル廿六日秀山年回二付今朝妙慶院へ備物為持遣、回向之義頼遣入也、浅野雅栄様右先達而御悔罷出候為御挨拶御使を被下、例之通御請紙面を以御用人中迄申出ル、今日御忌明之由也、夕本庄

三大夫就御用向入来、謁、御裏地藏尊御祈祷之御供物例年之通頂戴被仰付也

○廿五日、庚辰、晴又曇、蒸暑、佐藤大禅院殿満七日二付、朝興禅寺江兵藏代参二遣入也、例時出勤、九時退、夕田中榮作を呼、酒を為飲也、夜堀尾へ困棊二行也

○廿六日、辛巳、晴、秋暑酷烈、朝御乘馬へ出、已鼓頃妙慶院へ為代参兵藏為参、

一 御大筒頭

谷口虎之助殿

御側詰方

一 御奥小姓

木村伝吉殿

若殿様御附

一同

三 好栄之進殿

一 棒火矢方

丹羽清兵衛殿

松野蔵三郎殿

八月 大

法事中為詰る也、昨朝松本良伯益前棄謝之返礼与して来、夕小人為蔵武芸見分

○廿七日、壬午、朝曇後晴、秋暑酷酷、蒸氣不堪、夕遠雷、夜有電、昨夕小人為蔵

武芸見分御透覧も被為在、一甫流柔術・八重垣流劍術師者御小人新作与申者之由、

業前驚入也、朝御内密稽古二付御裏へ出、四時頃相濟出勤、九時過退、森岡万之

進来、西向寺へ代参兵蔵申付

○廿八日、癸未、晴又陰、夕西方雷鳴、朝御乘馬へ出、例時出勤、九半時頃退、蒸

熱甚

○廿九日、甲申、晴又曇、秋暑酷烈、蒸氣強、朝渡辺宗右衛門殿不快を訪、兩三日者

少々快方之由也、当春来痰咳兎角不居合、此節者大二肉脱之様子也、其外御多門内

二盆墓所燈籠被建候謝二行、夜眠石老人入来、困棊、足輕西川米蔵明日東城江勤

番為交代罷越候二付、徳了寺江当春借覧之古帳并二先年吉田与一右衛門通り借置候

村上家武功私記共附托し戻ス、厚挨拶申遣ス、古帳之義者当春正月之記二有之

二 日

二百十日

三 日

一 御出頭役
御步行組支配

佐藤益之丞

御用達方

○朔日、乙酉、晴、朝微涼、午後熱不堪、当月予月番受也、朝六半時麻上下着出仕、

御登城前御祝詞申上ル、外御方々様江御祝詞も如例申上、午前雅楽様之御目付久野

次兵衛来候二付出仕、夕亦御用向有之、罷出、雅楽様明後三日より右近様与御改名

被為在候筈之由也、朝森岡万之進来、祝酒出、午飯をも饗し帰ス也、夕堀尾眠石・

岩崎常介入来、困棊、渡辺雅登も見物二被来、極夕当日之祝酒を出ス、長喜三太も

同日、御改名

雅樂様御事

浅野右近様

七日

一知行高百石

善兵衛跡目

伊藤雅登殿

一御切米式拾八石
三人扶持

久馬跡目

大野盛登殿

七日、中島両替店竹内
本伊予 伝右衛門、近來之分

限者二而、近年右様両替
株被仰付、專御勘定所御
用向をも相勤居候処、御
買入米代式万両余も引負
致し、其義此節及露顯、
困留二相成、夫二付而其
筋之御役方彼是不首尾之
者有之候由也

妙慶院へ備

一回向料 銀式兩

来話、夜慈君從辻御帰被成

○二日、丙戌、晴、朝涼、午後秋暑強、二百十日二候得共風之催も無之、快晴也、

朝御乘馬へ罷出、巳鼓前方白鳥へ行、伊藤徳之助・桂辰馬先達而之歎、吉本恒之
丞実母之喪、土屋政之進妻之喪吊、佐藤益之丞へ茶被贈謝、永井仲之助・菅平磨を
訪、藤川・辻へ見舞挨拶事二行、辻二而頼母之残酒出久、午前、夕弓術へ出

○三日、丁亥、晴、秋熱猛酷、午後不堪衣、蒸氣亦甚、朝素読所講釈へ出席、直二出
勤、午下刻退、昨日御機嫌伺者御乘馬之節相濟候へ共、御奥へも御次迄可出処、其
後風与失念二而不出候二付、今日老女へ及挨拶置也、長束六左衛門病死之由、佐々
木平左衛門方為知差越、夕三宅吉左衛門へ御示し事有之、宅二而申達

○四日、戊子、晴、秋熱依然、朝例時出勤、夕未鼓前退、長束六左衛門悔使遣又、
桂辰馬昨日之謝入来之由、昨夕三宅吉左衛門へ御示之御書付文字書損有之候処一
円心付無之、依之恐入申出、夕方不及其義旨被仰出也、大島五兵衛同様也、夜曇、
将雨終不雨、夜間蒸氣強

○五日、己丑、晴、秋熱依然、無少間、朝御乘馬へ出、巳鼓前方御館へ為伺御機嫌
罷出、夫方六丁目御館へ右同断罷出、帰森岡へ寄、同方二而午飯を出、木野・水谷
へ見舞、木野二而日中を避、未鼓頃帰、同方二而酒出ル、一馬先達而以來之不快弥
快、近日出勤も致候積之由也、京都芝山様方例年之通御扇子三握昨頂戴仕、老女八
十野方昨日為持差越候二付、御奥へ今朝罷出候節御請之義同人へ厚相囑置也、夜会
談二付雅登・五兵衛来、夕辻清人入来

一塔婆料 銀壹匁
一靈具米 精三升

八日

おほえ

一金 壹歩

右者三原吉光家諸聖靈は
たいのため祠堂として相
備申金御寺納下され、永
代御退転なく御回向なさ
れ下され候様御頼申上ま
いらせ候

安政三年 村上彦右衛門母
辰八月七日 寿祥院

禪昌寺さま

九日早晨

すわへ

こんにやく

御皿

香茸

油あけ

人参葉

けむ

みそ

御汁

焼豆ふ

粒しみたけ

青み

○六日、庚寅、晴、秋暑強甚、汗如油、例時出勤、夕八時退、夜由良政太郎来、昨日松田謙藏二途二逢、同方先月廿九日御多門転徙、波田野権祐一昨四日遷徙致候由話也、日暮北方雲峰起、有雷電、夜蒸氣強

○七日、辛卯、晴、秋熱依然、夜間覚些涼、朝素読所会読へ出席、相濟而出勤、夕八時退、於京都高謙院様々中元之為御祝義扇子三ツ、文筒紙卅御内々拜領被仰付、渡辺氏へ一緒二来、同方々被達、御請も同方迄申出ル、来ル十日実山賢秀童子一周忌二付、妙慶院へ備物為持遣ス、且明後九日夕方弟子一人来呉候様頼遣ス、夕松田謙藏、波多野権祐へ御多門遷徙之歎使を以申遣ス也、夜中就御用向御奥へ罷出、猶又渡辺氏へ行、及深更帰ル、今夕御年寄武田大炊殿被罷出、暫御用談被為在候由也

○八日、壬辰、朝涼、午後も熱氣稍甘、朝御乗馬江罷出、午前為伺御機嫌罷出、葉研堀禪昌寺二有之候三原吉光家先靈へ祠堂金少々二而も慈君御備置被成候得者、永代退転不致候而可然与兼而申值、先達而以来海藏寺和尚へ頼置候処、下地同寺方禪昌寺並国泰寺之方江も移合置被呉候二付、今日金壹歩為持遣候之処、左之通請取書来ル也

覚

一正金壹歩

右者三原吉光家諸精靈為祠堂料御備被成、致寺納候、永代無怠慢御回向可申上候、為後証如斯二御坐候、以上

安政丙辰年

御糸目 相良ふ
結かん瓢
おろし生姜

御飯 御香物

御平 油あけ
山のいも
牛房
里いも
椎たけ
はす半

輪袖

御菓子

焼まん頭
梨子
棗

夕之御茶者御断申上、明日へ延る也

同日夕

すわへ

皿 油あけ
こんにやく
はすいも
香たけ
人しん葉

みそ

汁 焼豆ふ
しゐたけ
青み

八月

判但印判也

村上彦右衛門殿

夜中復蒸気強、慈君夜半頃御振之気味有之也

○九日、癸巳、曇、蒸気強、又有風、騒々たり、早朝御内密稽古二付御馬場江出、四時前相済、直二出勤、夕八時前退、今早晨利円廟御祥月祭祀如恒規相済、妙円廟配祀も例之通仕ル也、明日実山一周忌二付、今夕七時頃妙慶院所化天倫来、於内仏説經・念仏等相済、酒并二膳を出ス、当時格別御省略之御場合故、一緒内へも一円案内二不及也、田中栄作夫婦・同実五郎を呼、酒膳を饗也、夕松本良伯来、慈君を診し呉ル、全暑邪之事之由申、薬者今朝より患候処少々致加減くれる也、今日者大ニ御快方、尤御食者御進不被成方也、今日六丁目御館江糸ヶ浜与申角力御庭を借用之建り二而弟子を連罷出、相撲之稽古致し候由也、予等も御機嫌伺旁罷出候様御沙汰被為在候趣二候得共、御用向差湊不罷出、夜長喜三太来ル

○十日、甲午、朝曇、又晴、秋熱酷烈也、早朝妙慶院へ参、法事中詰ル、上下着二而参ル也、例時出勤、夕八時前退、夕豇豆飯を製、木野・森岡・辻・石井江贈也、岩崎へも可贈之所、家小風与失念、不贈候由也、夕弓術へ出

○十一日、乙丑、曇又晴、秋熱殊甚、朝御乘馬へ罷出、其後御館へも出ル、夕八時過々白雨、雷鳴最強、去月十四日之夜之雷々も強、七時過雷止、雨者夜亦降、蒸気稍緩、夕堀尾精一郎不快を訪、瘧今以不落、被困候由、夜政太郎来、慈君今夕又々御振之気味有之也

飯 香物

平紅切からし

酒肴

くつ

八寸

玉魁 推たけ
あられあけ

す、け

井

小倉ふ
白いも 茗荷子

内仏飾

餅 焼饅頭 団粉

卷せん餅 ひくわし

なつめ

霊供

花 数種

餡餅 木野ろ

麩井花 森岡ろ

線香 辻ろ

塔婆 木野ろ

五色餅井花 栄作

十三日

○十二日、丙寅申、晴或曇、夕新涼、朝平野藤吉郎来、例時出勤、夕八時頃退、昨朝

松本良伯来診、昨日之雷船入村畑之桔槔江落候由、其外江も落候由二候へ共不飽、

今日堀尾眠石慈君御不快を被訪、予か眼疾之義何分曉与療治を加候様深切二被申

呉候由也

○十三日、丁卯西、曇、朝涼、夕蒸、朝素読所講釈へ出席、相済出勤、九半時頃退、

夕方周防様被為召、六丁目御館へ罷出、七時頃帰、今日者秋月童子君御祥月二付、

帰かけ西向寺江參ル、夕七時松井庫人御用二付名代石井寿兵衛来、御目付加席桂辰

馬來ル也、夜渡辺雅登来、内用向也、此節沼田郡打越村二於て相撲有之筈二而、

此間以来鏡岩・牧ヶ浜・黒岩・平石杯云関取之相撲取段々来居候処、上向江之願者

御国内限之寄せ与申事二而相済候事二候処、右様他国大角力等来候二付、郡方より

差留二相成、下方一統不居合之由、畢竟最初御歩行組辺二役人と一緒二成事を枉而、

実情を上へ不達して取計義有之、右様之次第第二至候之由也、今日江波二而井上之方

町打有之、旦那様為御見物御出被遊、出衛様二も御稽古与して御出被成候由也、夜

月明也、今夕弓術へ出ル、今朝平野藤吉郎

○十四日、戊辰戌、曇、朝涼甚、後暑し、朝御乘馬へ出、其後御館へも出ル、夕弓術

へ出、今朝良伯来診、慈君いまた御熱氣有之由、御食餌少し、夜無月、夜半前ろ

家小吐瀉二而困ル、格別之義二者無之

○十五日、己巳亥、曇、蒸、雨はらつく、朝良伯来診、辻清人入来、例時出勤、九半

時頃退、夕弓術へ出ル、家小今晚以来者居合宜敷、一時之事也、夜無月、夜中

一閉門

松井庫人

右去ル三日煩中他行致候
二付而之御咎也、尤其実
者御番助合之紙面龜見、
氣取違も有之、且右他行
も隣家長束六左衛門病氣
差重候趣二付罷越、見合
候義二而、情合無余義訊
有之候二付、格別を以右
様被仰付候趣也

〔十六日〕

此間上御勘定所門前江、
上田内記様御家来吉田藤
馬・河瀬喜和馬兩人不忠
者二而、私慾等有之趣申
立訴狀貼し有之、訴人之
名前者無之、一家中與認
有之候由也、何者之所為
歟不埒至極之事也

〔去ル十三日從公儀之御

蒸、夜半月明也

○十六日、庚午子、曇、朝涼、後蒸、

〔早朝妙慶院江參詣、伊藤徳之助此間飲二參候謝
入来、例時出勤、夕八時前退、慈君今日者大二御快、御食も御進被成也、夜堀尾
老室慈君為見舞被来、夜政太郎来、予此節者眼之心持不宜候二付暫廢休之義申置、
尤要鑑抄今晚二而軍旅伝迄相濟也、夜雨、少有風

○十七日、辛未丑、曇、涼、時々有風意、

〔朝弓術へ出、為御機嫌罷出、松本良伯来
診、慈君弥御快方也、家来森島兵藏一甫流柔術意治伝授、一昨日渡辺四郎右衛門方
致相伝候由也、昨夕渡辺四郎右衛門此間内室不快見舞使遣候謝入来也、昨朝御年
寄生田筑後殿被罷出、於御居間御密談事被為在候由也

○十八日、壬申寅、晴、涼、

〔朝素読所会説へ出席、相濟而出勤、夕八半時頃退、慈君
今日者愈御快、御月代被成也、打越村相撲之義約ル処兼而之願通り二相成、関取之
角力者今日悉帰り候由也、何分勸進元沼田郡割庄屋山本や何某余程之私欲を巧、右
様上を欺事（熱カ）を就与謀候処、案外早々露頭二至、右様之次第、就而者此節那方江吟味二
出居候之由也、此度東城表二於て御鑄造之大炮去ル十二日鑄込、同十三日模を出候
処殊外好調候由、鑄工者作州勝山之職人二而、牧藏与申者之由、近年藩主方御力入、
江戸ニ於て修業いたし、至而功者之人物之由也、筒名・玉径等之義未聞

○十九日、癸酉卯、曇、朝雨、後罷、夜亦雨、

〔例時出勤、九半時頃退、夜長喜三太来
話

○廿日、甲戌辰、曇、涼、夕晴、暑し、

〔夜又涼、朝為窺御機嫌罷出、午後佐藤益之丞

移檄出ル、此度吹立被仰
付候式歩判六月廿八日
通用之義被仰出候也

但式歩判式片を以小
判壹両二替候割合也

廿二日

一 閉門
御免

松井庫人

今日二而十日振也

去ル十四日

一 遠慮御免

落合保之丞殿

去ル十七日

一 御奥小姓御免
御奥話

井伊隼之助殿

廿四日早晨

いり酒

御皿

こんにあく
めう荷子
しゐたけ
れん根
けむ

江先達而之歛へ行、辻へ見舞、帰三宅吉左衛門へも先日杖竹被惠候謝二行、出掛隆
玄院江見舞、堀尾精一郎今朝以来胸痛二而難儀之由二付、午前訪之、其後見舞使を
も両度遣ス、慈君・家小夜妙慶院へ参、夜長喜三太来話

○廿一日、乙亥、晴、涼、例時出勤、九半時退、夕足輕以下貫心流劍術見分二罷出、
暮頃退、今朝辻清人入来之由、今朝弓術へ出

○廿二日、丙子、晴、涼、夕蒸、曇、早朝西向寺江参、素読所講釈へ出席、夫方出

勤、夕八時過退、夕又御用向二而渡辺氏へ会、慈君堀尾へ御見舞被成候由、今朝
森岡万之進来候由、夜堀尾眠石翁入来、湯川新太郎来、内談事有之也、今朝寺西
小八郎殿被罷在、御居間二於て御人払御逢有之、辰鼓後方午鼓後迄御用談事被為在
候趣也、御同人者御用人二而、御奥小姓筆頭之勤向也

○廿三日、丁丑、曇、涼、夜有風意、不至甚、朝御乘馬江罷出、午前御奥御次迄出

ル、三島屋孝助方書状差越

○廿四日、戊寅、曇、涼、午後少有雨、能称廟御祥月二付早晨祭祀如恒勤之、早朝

御内密稽古へ出、相濟出勤、夕八時過退、今朝万之進來、竹腰恰殿先達而悔参候
謝来儀有之但昨日之事也、夕西向寺へ参詣、堀尾へ見舞、精一郎此間方又々癪再感
之由、尤惣休者宜趣也、夜辻お梅来宿、お恒も来也

○廿五日、己卯、晴、涼、足輕方弓鉄炮改見分、且御透覧も被為在候二付出席、今朝
者上田内記様御忌明為御挨拶御出被成候二付、四時過御館へ出ル、内記様御出之節
御玄関へ御出迎仕、縁板上二而被仰置候也、夕八時頃退、内記様方、主水様御病中

御汁 みそ 苞とうふ 小椎たけ 青身

御糸目 こんになやく せんまい 青粉わへ

御飯

御香物

のつへい

油あげ

牛房

御平

里いも

焼とうふ

香たけ

こんになやく

へち柚

御菓子

焼まん頭

梨子

かき

以上

廿六日、内記様御跡目被仰蒙候二付、先例者為御見合罷出候様二御沙汰も有之候得共、当度者格別之御大儉中二付其義無之、其段一昨夜御家司中之方

御逝去二付度々罷出候御挨拶御使被下、出勤中二付帰宅之上御請紙面差出ス也、

夕方辻清人来、酒鮮を饗、夜お梅も一緒二帰ル、今朝方之進来候由

○廿六日、庚辰、晴、涼、午暑、朝足軽方改見分、稽古場へ昨日之通出ル、内記様

今日御遺跡之義被仰蒙候二付、為御案内御出被成候二付、四時頃出勤、御玄闕へ御

出迎申上、昨日之通也、九時前退、後又兩度就御用向出ル、今朝之御出迎者上下着

也、今朝四時内記様へ御年寄生田筑後殿・武田大炊殿兩人為上使被罷越、御遺跡御

先規之通無相違被仰出、御用番・御寄合等御勤、御座順者此方様御次与被思召候様

被仰出候由也、昨日出勤中丹羽庄司・近藤玉之進為返礼入来之由也、夜慈君・家

小妙慶院へ参、観音堂ニ於て説法有之候由、堀尾眠石囲碁二被来

○廿七日、辛巳、晴、涼、朝辻清人来、素読所会説二付出席、直二出勤、夕八半

時頃退、今早朝渡辺雅登同道、内記様へ御跡目之為恐悦罷出、御出頭大矢好左衛門

出会、麻上下着二而出ル也、西向寺へ兵藏為参也

○廿八日、壬午、晴、涼、例時出勤、夕八時過退、波田野権祐来、々来朝日故善観一

周忌二付、慈君明晩方御泊掛二御出被成候様ニ与申候由、且先達而御多門替欲使遣

候謝も申候由也、中津屋方之助方人を越し、来月祭礼何れも参候様ニ与申越候由也、

夕平野藤吉郎慈君先達而之御不快見舞二来、今日右近様御家督之御礼、内記様御

継目之御礼、遠江様御隠居之御礼、夫々御登城被成候由、遠江様二者右御礼二付一

昨日従三原御船二而被為入候之由也

○廿九日、癸未、晴、涼甚、快晴也、朝弓術へ出、夕為伺御機嫌罷出、御用向有之、

へ一緒ニ中参候也

去ル廿日

一御役御免
並寄合

藤田兵庫殿

御年寄也

廿四日

一御切米三拾一石
三人扶持

一三跡目

渡部一之進殿

卅日

右近様・遠江様御使者御
馬回り

西尾半右衛門

打越村中小屋之相撲今

日迄ニ而相済候由、兼而

晴天七日之所、二日之日

延願候由、然れ共抑々之

手狂事ニ而、勸進元大不

益之由也

同日

知行高三百拾石

代三郎跡目

大石恵太郎殿

極夕ニも亦出、慈君夕々波多野江御出、御宿し被成、松田へも卒与御出被成候由也、

遠江様御土産与して三原酒御到来被遊候由ニ而、御取分頂戴被仰付也、告于廟、

丹羽庄藏一昨日御見小姓御免、外様御中小姓被仰付候由為知越ス也

○卅日、甲申、晴、涼甚、夕暑、例時出勤、夕七時過退、早朝右近様へ、一昨日遠

江様御隠居之御礼、右近様御家督之御礼首尾能被仰上候御歎ニ罷出、御客対松本与

平太謁、夫々内記様へ御跡目御礼之御歎罷出、御出頭栗原甚兵衛謁ス、例時出勤、

今日者右近様御家督、遠江様御隠居之御祝義物被進御使者有之、兼而四時之筈

ニ有之処、夕八時過ニ来、予出会、於御書院御直答被為在也、依而七時過ニ退、右

ニ付麻上下用意ニ而出ル也、慈君夜夜從波多野御戻り被成、夜戌鼓後表御門中柱江

何者歎張訴いたし候由、訴人之名も無之、只此御方様江御披見奉願候由、片仮名を

以認有之候由也、慈君夜前者松田へ御宿し被成、今昼同方ニ而も酒飯を饗し候由也

二日、聿庵頼先生病死被
致候由也、

先生名元協、字(マ)一字

余一、又以俗称与す、春
水先生之孫也、近來狂氣
之様二有之由之処、此度
之病氣者未聞

三日

一御騎馬筒頭

青野保太郎殿

同格ら

一御先手者頭

伴三之丞殿

御馬回ら

一御広式御用役
御藏奉行上席

植田小三郎殿

一御加増三十石宛

石原啓八郎殿

九月 大

○朔日、乙酉卯、曇、有風、暑、蒸、又有雨、朝弓術稽古へ出、例時出、夕八時過退、

日蝕四分半、四ツ時九分ら掛始、八時式分畢、波多野寺多門院(團)へ兵藏代參申付ル、

例年之如赤小豆飯を製、夏秋家内安全を祝ス

○二日、丙戌辰、曇、有風、冷氣稍堪時服、今日香取流槍術出稽古有之、出衛様二も御

出被成候二付、予見物旁願而御供を仕ル、兼而者似島へ御出之御含二候処、風悪敷
候故宇品迄御出、同所南浦之洲二而稽古有之、凡三拾人許也、曉朝七半卯鼓頃ら出、

夜亥鼓前帰ル、江波丸子之不動、宇品之觀音江も參ル也、御船者鯨船・可部式艘也、
御船二而御酒・御した頂戴仕ル也

○三日、丁亥巳、曇、冷、夜雨、御用向有之、早朝ら罷出、夕八半時頃退、公儀坊主兩

人、近藤敬二・野村意御立入初而出候付、出而謁ス、慈君夕方藏田和太郎江戸出立
前見舞旁二御出被成、酒等出候由、夜御用向二而御輿へ罷出、今日右近様ら御肴之

御到來被為在候由二而、御側二而御酒頂戴被仰付也、雅登も罷出ル也、遠江様昨日
御出船、三原へ御出被成候由

○四日、戊子午、晴、暑し、例時出勤、夕八半時頃退

○五日、己未、晴後曇、暑、夕雨、今日煤掃を致ス、田中実五郎・小人三次を頼、来
興る也

○六日、庚申、晴、暖氣也、夜前丑鼓後ら予腹痛甚敷、瀉二成困ル、曉二至松本良伯
を迎、診を乞、全不化之事与申、薬を投、曉以來腹痛者治、瀉も今午後ら罷、右二

〔八日〕上田内記様今日方
主水様与御改名被成候出
なり、右二付御欲二者不
罷出候也

〔三日〕之続

小池亀之丞殿

〔四日〕

歎二付
一御役御免

天野半弥殿

〔御先手者頭頭〕

〔十日〕

寒露節

〔去月廿五日〕夜四時頃方
是迄二無之大風雨八時前
二鎮、御屋形向初五ヶ所
御屋敷共処々損所有之旨、
同廿六出之仕立飛脚二而
從江戸申来候段御連手紙
を以申上有之候出也

付今日出勤得不致、同勤へ案内紙面出入、終日平臥、〔夕〕良伯来来診、〔渡〕辺・堀尾
方見舞使来、〔夜〕長喜三太見舞二来

○七日、辛酉、曇、夕方雨、蒸、〔腹〕合弥快候二付出勤いたす也、尤朝素読所講釈へ出

席、夫方出勤、夕八時過退、〔朝〕堀尾眠石為見舞入来、〔藏〕田和太郎来ル十二日御供

二而江戸出立、暇乞入来之由、〔夜〕御用向二而被為召、御奥へ罷出

○八日、壬戌、曇、暖甚、〔朝〕六丁目御館江為窺御機嫌罷出、々掛渡辺二御用向有之、

參、帰り森岡・木野・水谷へ見舞、森岡二而午饭出、木野・水谷二而酒出ル、水谷

八十郎義嫡孫承祖願之通昨日被仰出候由也、〔夕〕御用向二而罷出、入夜退、〔今〕夕

御年寄関藏人殿御内密御用向二而被罷出候之由也、〔昨〕夕平尾尾宗右衛門殿被来、謁入、

黒田之方借用銀之談事二就而也

○九日、癸亥、曇又雨、暖甚、〔五〕時頃麻上下着出仕、御方々様へ御祝詞如例申上、四

時前退、〔辻〕清人祝詞入来、酒飯を饗入、〔岩〕崎へ堀尾眠石困某二見へ候出二而、予

へも參候様申候二付夕方參ル、入夜帰、祝酒飯之饗あり、〔去〕月廿六日江戸大風余程

之大変之旨相聞ゆる也

○十日、甲子、曇、夕方晴、冷、〔例〕時出勤、夕八半時頃退、〔今〕日寒露節也、〔夕〕弓

術へ出、〔今〕日松本良伯来候出、予愈快、一昨日限二而退薬いたし候段申置せ候也

○十一日、乙丑、晴、冷氣也、〔朝〕堀尾精一郎を訪、夫方湯川兵馬殿江先達而棗被患候

謝二行、藏田和太郎へ明日江戸出立之暇乞二行、達而被留、餞酒出、又木原慎齋・

松本玄順を訪、同方二而達而被留、寛話、夕二至帰、酒鮮を饗、夫方比治山多聞院

〔十二日〕

御發駕御供

御用人

小幡孫兵衛殿

寺西小八郎殿

大御小姓頭

堀江太左衛門殿

御騎馬頭

松宮滝次郎殿

〔十五日、始徹蚊帳〕

〔十八日、此度東城表二於〕

て大砲御鑄造有之、左之

通何も相調、先月廿四日、

当月十日兩度打様も有之

候処、何も無滞、誠二結

構二出来致候由也

青銅製六斤

一迦納短煩車台付 壹挺

但陸軍煩也

波多野善寬墓へ拜、安養院江登り難山二而暫眺望、葉研堀禪昌寺吉光古墳を尋、又

丹羽庄司へ先達而庄藏御兒小姓御免為知之挨拶二行、申鼓頃帰宅、今朝御發駕前之

御登城有之候由也

○十二日、丙寅、晴、冷氣、後暖也、朝例時退出勤、夕八時過退、夕弓術へ出ル、

〔今日四時過殿様御發駕、且那樣為御見立八丁堀例之御場所江御出被遊候由也、万

之進子供兩人連來候由

○十三日、丁卯、晴或曇、暖、朝素読所講釈へ出席、直二出勤、夕八時頃退、夜湯

川新太郎・長喜三太來、今朝水谷又左衛門殿御出被成候由、此間御進物之御使者御

勤被成二付、御祝義被下候御請二御出被成候也、夜月圍

○十四日、戊辰、曇、冷氣、朝御内密稽古へ出ル、吉本恒之丞入來、先日囊を贈候

謝也、夕御用向二而六丁目御館江罷出、入夜帰ル

○十五日、己巳、曇、夕晴、冷氣、例時出勤、夕八時頃退、今日二葉山御祭礼、此

御方様御名代御勤被遊、右近様・主水様共御服中故御宮詰無之候由、夕弓術へ出、

夜堀尾へ囲碁二行

○十六日、庚午、晴或雲出、冷氣強、早朝妙慶院へ參詣、御寄合二付例時少早く出

勤、夕八時頃退

○十七日、辛未、晴、冷氣甚、夕弓術へ出、夕松本玄順來、極夕被為召罷出、夜

星野武平次東城表御用向無滞相仕同帰候由、見舞・欽使遣又

○十八日、壬申、晴、冷氣也、朝素読所会談へ出席、夫々出勤、夕七時過退、夕星

室徑 三寸壹歩五厘
 全長 五尺九寸
 全量 百六拾貫目
 彈量 一貫三百拾匁
 但鉛彈ニして之積也
 右鑄工者備中勝山藩森(美作カ)
 谷榎藏与申者之由也
 同日、右近様・主水様方
 先達而御歎ニ罷出候ニ付、
 御挨拶御使被下也、御請
 紙面例之通り出ス、御兩
 家共手扣無之、然処右近
 様之方御使之者取落し
 之由ニ而、下方通り内ニ
 而跡方御切紙來ル、主水
 様之方二者其義無之、且
 御兩家共御礼濟之御歎ニ
 罷出候御挨拶之御口上者
 無之也

野武平次來、御用向承ル、夜酉鼓頃相濟、夜森岡万之進來ル、備後国矢川村塩川大
 明神へ御代參被仰付、明後廿日出立罷越候由暇乞也、酒を饗、尾道をも通候由ニ付、
 三島屋へ書状を托スル也、慈君夜中辻へ御泊掛ニ御出被成也

○十九日、癸酉、快晴、暖、御用向有之、例時少早く出勤、夕八時前退、夕又被為召
 罷出、今日者予氏祭ニ付赤小豆飯を製祝、夕弓術へ出、今朝星野武平次來、昨夕
 之余談有之也、今日六丁目御館江出羽様御二所様・お竹様御招ニ而、午後御出被成
 候由、右ニ付雅登朝方被出也

○廿日、甲戌、晴、暖、夕曇、夜雨、朝星野武平次來、御用向也、夕未鼓後方神田
 八幡宮へ參、日通寺辺迄逍遙、帰途慈君御迎旁辻へ寄候処、一昨夜以來御腹合悪敷、
 御困被成候由ニ而、御帰不被成、酒出、入夜帰ル、木野一馬夕方入來、酒を出候由、
 辻清人も來候由、今朝武内純介來、同人義去ル十五日黒田弥五左衛門殿方槍術免許
 相伝を得候由也

○廿一日、乙亥、雨、温、例時出勤、夕八時過退、夜堀尾眠石困碁ニ被來

○廿二日、丙子、終日雨、温、誓円(村上其兵衛)廟御祥月、宿戒・晨興・礼服・祭祀如恒規行之、
(村上其兵衛室)
 受安廟も奉配祀也、早朝西向寺江參詣、素読所講釈へ出席、夫方出出勤、夕八半
 時頃退

○廿三日、丁丑、晴、暖、朝御用向有之、出衛様御部屋へ罷出、夫方射場江出ル、
 去ル九日・十日之記ニ有之先月廿五日江戸大風雨ニ付、当御屋敷損所御歩行目付見
 分之書付写之由ニ而大島五兵衛方見せる、余り之大変故左ニ写置也

廿二日早晨

いり酒和会

こんにあやく

御皿

しみたけ

油あけ

れむこむ

人参葉

けむ

みそ

御汁

苞とうふ

小椎茸

青み

御糸目

松茸

さわく

おろし生か

御飯

御香物

のつへい

油あけ

人しむ

牛房

御平

里のいも

山のいも

香たけ

こんにやく

へち柚

御菓子

焼まん頭

蜜柑

烏柿

以上

八月廿五日夜五時を八時過迄大風雨ニ而損所左之通

一 御上屋敷御玄関大棟東ノ方くすれ

一 呼上くすれ

一 御勝手御門内腰掛くすれ

一 先日御出来之御馬屋崩、怪我人七人并十七疋之御馬不残大怪我

一 向御屋敷元部屋崩、御小人即死三人

一 青山御屋鋪御裏門くすれ

一 御守殿御門くすれ

一 榎木下壺番之御藏東ノ方崩

一 御勘定所御藏壺ヶ所崩、火消方入口之分

一 御駕籠置場所崩、御乗物三ツ共小われ

一 稽古場崩

一 坊主部屋崩

一 御駕籠之者・御手回之者部屋くすれ

一 御作事所左右くすれ、中程残

一 瓦多門崩

一 築地御屋鋪御門寄御長屋半方くすれ、御藏壺ヶ所、番所・御茶屋くすれ、津波

二 而材木何国之分ともしれず、数々目かけ石へ流当り、同所近頃御出来之御台

場大崩、同巖島明神様拝殿者其儘

同日夕

御茶

新豆飯

去ル四日

三人扶持

町医師

好村文益

町奉行支配

右父文哲義存生中医業心

掛厚致出精候付、格別を

以文益御医師格之列二被

仰付置候、以後弥以医術

心掛候様被仰出

去ル七日

一知行高百石

直馬跡目

堀場広之丞殿

廿五日

御切米八石

式人扶持

御歩行組

六左衛門跡目

長束森助

一外者東西本願寺くすれ、永代橋・大川橋落る

一御城内損し少々有之、并町家も損し少々有之、江戸中出火十ヶ所余有之、尤大

火無之

一紀州様御長屋、青山通り御裏御門寄拾丁余之御長屋近頃新出来之分惣くすれ

一赤坂御屋敷御門くすれ、御作事方御長屋くすれ、怪我人三人

一青山御屋敷内瓦多門崩、怪人左之通(我脱カ)

小頭代

松次郎

下触

伊三郎

御長柄格

豊藏

御小人

多藏

右同所即死

御長柄格

愛介

御馬屋御小人

啓次

江戸抱御小人怪我人

久之助

惣兵衛

藤五郎

吉兵衛

即死

右之通二御坐候

去ル七日之続

一御切米四拾壹石
三人扶持

七郎左衛門跡目

成田藏之丞殿

二御切米貳拾三石
三人扶持

誠次郎跡目

三好信左衛門殿

去ル十日

二御切米三拾石
三人扶持

衛守跡目

西村徳太郎殿

廿八日、居間開衾炉

去ル十五日

二御広式御用役
御藏奉行上席

奥 守衛殿

去ル十九日

一知行高百石

彦太郎跡目

三宅国吉殿

二御切米貳拾石
三人扶持

夜堀尾へ囲碁二行、今夕御祈祷之御供物如例頂戴被仰付也

○廿四日、戊寅、晴、寒し、夜前御輿通り、御裏之栗御分賜被仰付也、告于廟、慈

君夜前從辻御帰之筈二而、御迎兵藏遣候処、猶又下女宿へ参候由二而序二月末迄御

逗留被成候由也、早朝御内密稽古二付御裏へ出、相濟出勤、夕八半時頃退、大島

五兵衛倅若松手本を書くれ候様先達而五兵衛頼候二付書遣又也、今朝西向寺へ兵

藏為参也、長束森助忌明之由、礼二来

○廿五日、己卯、晴、夕曇、冷氣強、朝吉田藤馬御忌明後無沙汰之由二而何角之返礼

二入来、湯川新太郎入来、例時出勤、夕七時過退、夕弓術へ出、御輿天満宮へ

退出掛拝参仕ル也

○廿六日、庚辰、晴又雲出、暖、午鼓前、行厨を携、東郊へ逍遙ス、小倉甚右衛門、

三宅内外を伴ス、野外秋色佳也、二葉山、尾長を過、矢賀才藏、岩華山上へ登、

眺望、府中江回り帰ル、小倉恒助も行也、風呂を建ル、今日出掛星野武平次東城

帰着之歎二行也、留守中海田屋林八来、化粧井側を仕替くれ候由也

○廿七日、辛巳、晴、冷氣、朝御乘馬へ出、素読所会読へ出席、相濟出勤、夕七時

過退、古江御山、出候松茸不相替頂戴被仰付、告于廟

○廿八日、壬午、晴、冷氣、夕曇又晴、祭礼二付今明日御役所廢休、極々慈君辻方

御戻被成、お梅も母子共来宿、夜清人も来、皆々白神社へ参、森岡万之進、矢川江御

代参無滞相仕回、今昼帰候由二而夜中来、酒を出入、尾道二而三島屋へ寄くれ候由、

同方、書状差越、林則徐陰隲文并二唐墨・銘酒等を恵、万之進塩川明神御札守・神

七之丞跡目

植木清太郎殿

一 御切米四拾五石
三人扶持

一 三跡目

林 要人殿

去廿七日

一 御切米四拾六石
三人扶持

平内跡目

河田直記殿

朔日

御輿詰

勤向只今迄之通

堀謙之助殿

植田賛三郎殿

一 三人扶持

浪人

下間良弼

町御奉行支配

供等を恵也

○廿九日、癸未、晴、冷、辻清人午并ニ夕方来、酒飯を饗、夜三宅吉左衛門室来、同断、夜お梅母子共清人伴帰ル

○卅日、甲申、曇、時雨之意あり、後晴、冷氣強、例時出勤、夕八半時頃退、吉田

儀右衛門殿息兼次郎殿今日御館入初而被罷出候ニ付、出而謁ス、夕射場へ出ル、

山県兵太郎昨年御暇、跡隠居彦一教太郎事妻子を育、無禄ニ而手細等〔上脱カ〕をいたし、身を不崩持居候処、誠ニ困窮、此節不快ニ而饑渴ニも可及様子ニ有之由窃ニ承、甚可

憐義ニ付銀札拾匁内々贈る也、今朝出勤掛堀尾へ見舞旁参り、其節隠居翁へ伝達之義頼置也

十月 小大

○朔日、乙酉、晴、寒冷、堀尾精一郎今以引籠居候ニ付、当月予月番受也、朝御乘

馬へ出、例時出勤、夕八半時頃退、辻清人入来之由、夕弓術稽古ニ出ル、今朝

鳥井雪舟老初而被罷出候ニ付、出而謁スル也、今曉地震有之由、不覚

○二日、丙戌、曇、寒、夜雨、朝為伺御機嫌罷出、槍術稽古御場所へ見物ニ出ル、

極夕々水谷へ行、此間伯母氏御伝言有之候故也、夜迄咄帰ル、酒出ル、伯母氏御内

話、兎角与伯父君御醉狂か、り、毎時御機嫌悪敷、御困之由ニ而御相談有之、御平

日之御事方御嗜有之度旨粗御異見申置也

○三日、丁亥、雨、温、夜晴、主水様御出ニ付早朝罷出、夕七時過退、湯川新太郎

右西洋学厚心掛候付、格別を以御医師格之列ニ被仰付置候、以後弥以精出弟子をも取立候様被仰出

妻当夏以来病氣、重キ容体二者承候へ共、近日者追々快方之由ニ候処、夜前亥鼓頭俄二氣絶致病死候出、扱々咲止千万之事也、今朝悔見舞使遣入、極夕武内純介来、内談事有之、夜迄話入、夜湯川葬式、家来を門前迄見送ニ遣入也

○四日、戊子、晴、暖、例時出勤、夕八時過退、湯川新太郎妻之喪を吊、渡辺四郎

右衛門室を訪、小倉甚右衛門母之不快を訪、風呂を建、極夕弓術、夜家小掃寧宿

○五日、己丑、曇、温、朝弓術江出、御乘馬へ出、御館江出、直二退、慈君午前森岡御出、比治山長性院・多聞院、葉研堀禪昌寺江御參被成、夫右妙慶院へも御參被成候出、朝万之進来、飯を出入、夜雨

○六日、庚寅、雨夕罷、夜晴、暖、例時出勤、夕七時退、朝小倉甚右衛門来、六丁目様右御庭之柿 十一頂戴被仰付、告于廟、夜家小従木野帰ル、今朝辻清人来ル、夜半後有地震、稍有方且長、其後も微震有之由、不覚

○七日、辛卯、晴、暖甚、朝弓術稽古ニ出、素読所会読ニ付出席、相濟出勤、夕八時半頃退、夜会読、渡辺へ会入、猿猴橋町概屋何某宅裏ニ此節菊細工見せ物有之由、夜中慈君・家小見物ニ參、留守中田中榮作来居くれる也

○八日、湯川新太郎亡妻当座法事之由ニ付、光寂寺(藏脱カ)へ代參兵遣入也、

八月廿五日夜江戸之大風雨、同月十二日出之大

○八日、壬辰、快晴、寒、朝御乘馬へ出ル、出衛様御用向ニ而御部屋へ出ル、未鼓頃方六丁目御館へ罷出、森岡江見舞、松田謙藏・波多野権祐へ先達而御多門移徙之歎二行、桑原吉郎ニを訪、波多野ニ而達而被留、酒出ル、夜中出衛様小口御稽古之御相手ニ出ル、松村弥助殿・原田丈大夫殿江御家来中・子弟迄も志有之者者勝手ニ御相手被仰付、多人数出ル、一昨夜方始り隔夜ニ有之由也、畢竟一統射術御引立被

回り船二艘破船、乗組之舟子大半溺死、水主町之者も壱人死候由也

成度思召与奉恐察、御厚思召也

○九日、癸巳、曇、寒し、例時出勤、八時頃退、直ニ御内密稽古へ出ル、今日者急ニ思召ニ而一同江御酒肴被下、予も頂戴仕、真之戰場之心持ニ而上下無差別、兼而者御馬場へ薄縁敷ニ而被下候筈之処、時雨之気色有之候ニ付、御歩行組以上ハ御射場溜ニ而被下也

十日、四疊半之間江衾炬を開

○十日、甲午、晴、寒、朝御用向ニ付永田^完二殿へ行、仕回中之由ニ而逢対者不致也、例時出勤、夕八半時頃退、夜小口御相手ニ御射場^{稽古}へ出ル、今午後有地震、稍長く有力

同日 立冬

○十一日、乙未、晴、冷甚、初而有霜、朝岡本主馬殿来儀有之、謁、銀借用之内談有之也、御乗馬へ出、御輿へ出

○十二日、丙申、晴、暖、朝冷、例時出勤、夕七時前退、夜小口御相手ニ出ル、今晚者山下先生も見へル也

○十三日、丁酉、晴、暖、朝素読所講釈へ出席、相済出勤、夕七時前退、昨日瓦師来、御多門屋根を葺替る也、六丁目御館ニ而たつる文ニ而、此節御庭之菊盛ニ付、明日昼後同勤三人共為拜見罷出候様思召候旨申来、御請返書差出ス也、夜会説ニ付雅登・五兵衛来、且星野武平次を呼、東城表西洋流炮術之咄を聞なり

○十四日、戊戌、快晴、寒、朝御乗馬へ罷出、御館へも卒与罷出、六丁目様江被為召候ニ付、八時過る渡辺雅登同伴罷出、当夏御出来之新御亭ニ而菊花拜見、御菓子頂戴被仰付、夫々御輿御居間ニ而御吸物、御酒頂戴被仰付、入夜罷帰ル、夜小口御

十五日、左之通被仰出

御中小姓筆頭

佐々木平左衛門

山県兵太郎儀御暇被仰付

候得共、祖父与一郎義遂

精勤、且重キ御役をも相

勤候義、各別之思召を以

山県家名御建可被下候間、

相応之人物撰可被申出候

江戸御沙汰書之内、十月

十七日

一外国御用取扱

堀田備中守様

十九日、予御多門屋根南

側瓦葺替今日迄二而皆済

也

廿四日、西向寺へ左之通

備物為持遣ス

一御経料 金百疋

一御鉢米 精五升

相手二御稽古場へ出ル、亥鼓後帰

○十五日、己亥、曇、寒、夕晴、例時出勤、夕八半時過退、極夕射場へ出、夜堀尾

眠石入来、跡二而困甚

○十六日、庚子、晴、寒冷、早朝妙慶院へ参詣、例時出勤、夕七時前退、七時頃地

震稍強、且長し、且北方地鳴強

○十七日、辛丑、快晴、暄、朝御乘馬へ出、御館江も出ル、風呂を建、甚右衛門・

内外夫婦来浴、夜小倉甚右衛門来、同人倅恒助手本之義を頼候二付諾し置也、今日

日周防様・出衛様井上権之丞殿方江同方預之大炮類為御見物川成裏通り、御出被遊

候由

○十八日、壬寅、晴、暄、朝素読所会説江出席、相済出、夕申鼓後退

○十九日、癸卯、晴、暄、例時出勤、夕七時前退、兵藏下宿を願候二付遣ス、夜渡

辺へ会説二行

○廿日、庚辰、曇夕雨、夜晴、夕為伺御機嫌罷出、堀尾精一郎疾ヲ訪、愈快方之趣

也、槍垣捨次郎昨夕より病氣差重候由二付、見舞使遣ス、其後死去之為知有之、三

年来之不快二者有之候得共、昨夕之処全頓死之由也、夜悔使遣し、且家来を葬二会

せしむ、夕波多野権祐先達而以来何角之謝入来、酒を出ス、夜小口之御相手二出

ル、夜暖

○廿一日、辛巳、晴、寒し、例時出勤、夕七時前退

○廿二日、丙午、晴、朝霜如雪、冷甚、夕寒、朝素読所講釈へ出席、夫方出勤、夕申

一僧中江銀一封

但壹匁五分

同日

一槍術師加役

武内純介

右二付毎歳銀壹枚為

師役料被下之

一五人扶持
御小姓組^註

山県虎之丞

右格別を以家名御建

被下

左之通来月初便二東城

へ送る積り也

一茶湯料 銀貳両

右徳了寺へ

一墓所掃除入用 銀貳匁

右松本屋亀次郎へ

廿六日

廟飾

鼓前退、退出後西向寺へ參、住持二逢、来ル廿七日休誓廟百回忌御法事取越相頼度、

前夕弟子壹人差越被吳候様頼置也、夜小口之御相手二出ル、今朝森岡万之進來ル

○廿三日、癸未、晴、寒、朝御乘馬へ出、其後御館へも出ル、夕方感冒之気味二而

頭痛強困、夜早臥

○廿四日、甲申、晴、暖、今日も頭痛強少々悪寒之気味も有之故不能出勤、手紙を以

同役兩人へ案内申遣ス、今日山県家名同苗彦一俵虎之丞へ頭書之通御建被下、武内

純介槍術師加役被仰付候由也、夕万之進來、廿六日夕来候様申置、福山求馬方去

ル廿二日御用人役被仰付、丹羽庄藏方同御兒小姓被仰付候由、夫々為知来ル、兼而

之通来ル廿七日休誓廟百回忌御法事取越執行いたし候積二付、今日備物西向寺江為

持遣ス、廿六日夕八時過る弟子壹人來くれ候様申遣ス也、堀尾方予見舞使来ル、長

喜三太も見舞二来ル、今夕御内密稽古先達而残之面々江御酒被下候由也、今昼後

有地震、地鳴殊強、未鼓前二も又微震有之也

○廿五日、乙酉、晴、暖甚、夜曇、今日も頭痛不治、終日平臥、田中実五郎妻、去

ル廿三日男子を誕、昨日真作与名を付候由也

○廿六日、丙戌、雨、温、夕罷、頭痛快、午前方起、午後理髮、為窺御機嫌罷出、同

勤へも以紙面及案内、休廟御百回忌取越速夜二付、今夕八時過西向寺弟子差越くれ

候様約し置候処、殊外延引、暮前履善来、於内仏読経・念仏・和讃等相濟、茶漬並

二酒を出ス、予・万之進伴ス、全体者住持をも招、辻夫婦も招度候得共、即今之御

趣意二応し格別二省略いたし、万之進計取持旁二招也、依て料理も人を不頼して濟

餅[○] 団粉

焼饅頭 蜜柑

巻煎餅 干くわし

花

菊花 数種

〔昨廿五日

小雪節

○印之処へ

御鉢飯

〔去ル廿三日、於東城

一知行高百石

源左衛門家督
水上甚大夫

一願之通隠居

水上源左衛門

右源左衛門知行高百拾石

也

ス、左之通

膳

す和会

油あげ
こんにやく

皿 蓮根

人しむ
香たけ

けむ 茶花

平 紅切

酒肴 からし

平鉢 こんにやく

さしみ

猪口 からしすみそ

八寸 焼とうふ

香たけ
あふらあけ

みそ

汁 苞豆ふ
小しみたけ

青み

茶碗飯

香物唐漬

葛煮 牛房

人しむ

焼とうふ

あふらあけ

井 蜜柑

茶菓子 茶巾餅

○廿七日、

〔亥、曇、温、夕晴、

早朝西向寺へ参、法事中詰、致焼香、四時頃帰宅、

焼香・遥拝但東城墳墓也、〔素読所会読へ出、夫々出勤、夕七時頃退、御乗馬へ出ル、

出勤中此間森仙太郎從備前引帰候御馬御覽二付、御馬場へ出ル、〔夕岡本主馬殿来儀

謁ス、〔夕田中栄作へ昨夕之残酒を為飲也

廿九日

南庭之柑

廿八顆

北庭之柑

百卅六顆

○廿八日、^壬戌子、晴、暖、右近様御出ニ付五時過出勤、御送迎御玄関へ出、御居間へ

出、御目見も仕ル也、御家督ニ被為成候後始而御目通仕ル也、夕七時過退、堀尾精一郎八月初旬以来瘧疾ニ而久々引籠之処、今日方快出有之也

○廿九日、^癸己丑、晴或曇、風吹寒、午後為窺御機嫌罷出、夕山景彦一來、謁ス、此

度家名結構被仰付候普為聽、且先達而内々致助情候謝也、夜中長喜ニ太來話、夕方寒冷甚、南庭之蜜柑を剥

○晦日、^甲庚寅、晴、寒冷、例時出勤、夕七時過退、朝方之進來、同方内職之島兎角年々不引合ニ付、望人有之活却いたし候由申也、夜小口御相手ニ罷出、南庭之蜜

柑当年も多生候ニ付、御奥并ニ六丁目御館へ内々差出ス也、尤御奥ニ者昨夕出ス、廿七顆ツ、

十一月 小

朔日、改名

精一郎事

堀尾善大夫

○朔日、^乙辛卯、晴、寒、夕曇、微雨、今日方予御米銀受也、例時出勤、夕八半時退、

堀尾精一郎今日方改名、善大夫与申也、例年之通今日知行物成相渡、附足輕御切米も相渡也、相場世羅米石ニ付八拾三匁替之由也、今夕周防様御出被遊、御次へ罷出、御機嫌相伺也、夕御乘馬江罷出ル、夜会読ニ付雅登・五兵衛來、慈君今夕木

野并水谷へ御出被成、両家ニ而酒飯出候由、夜中御戻被成也

○二日、^丙壬辰、晴、朝有霜、寒冷強、午前方出、六丁目御館へ為伺窺御機嫌罷出、往來堀尾善大夫へ改名并ニ先日方快出之歎ニ行、丹羽庄司・福山求馬へ為知之歎ニ行、

右甲州流軍学御相手被仰
付候事

佐藤益之丞

六日

森岡へも寄、檜垣捨次郎跡を吊、平野藤吉郎を吊、捨次郎寺浄法寺へも参、八時頃
帰ル、堀尾幾之進昨日前髪を取候由也、夕堀尾善大夫不快中何角之謝入来、今夕囲
碁へ参候様老人之伝語有之、夕堀尾へ行、渡辺雅登・大島五兵衛・矢野源内・岩崎
常介等会、昨日善大夫快氣祝、幾之進前髪之内祝等有之、残酒并到来物有之由二而
被饗、囲碁も有之也、今朝岡本主馬殿来儀之由

○三日、癸巳、晴、寒冷、朝霜如雪、朝素読所講釈へ出席、直ニ出勤、夕七時退、々
出掛出衛様御部屋へ罷出、■ドンドロ之御製菓を拜見仕ル、猛水を以汞ヲ蝕し、

夫へ烧酎精を瀉、一霎時ニして成、甚奇也、ドンドロ者自然発火之菓、西洋流炮之
口菓ニ用ルもの也、兵学小識ニ其法出ル

○四日、甲午、晴、寒冷強、朝霜多、例時出勤、夕七時過退、夜小口之御相手ニ出
ル

○五日、乙未、晴、寒冷強、夕曇、微雨、又晴、出衛様今暁七時御供揃ニ而古江御山
莊へ御出、夫々近山兎狩被為在、依而願而御供仕ル、雅登も参、其外御檜之御弟子
多人数御供仕、兎数々出候へ共御獲物者無之、夜酉鼓後帰、一場角登殿も御供被仕
也

○六日、丙申、暁晴、有霜、寒冷俄ニ加、午後曇、雪花飛、朝長束茂兵衛来、例時
出勤、夕七時前退、夜小口之御相手ニ出ル、今朝出仕之上出衛様へ昨日之御受御
次ニ而御用達迄申上ル

○七日、丁酉、晴、寒冷強、朝有堅氷、朝素読所会読へ出席、直ニ出勤、夕七時過退

同日、江戸御沙汰書之内

御鞍鏡

阿部勢正弘伊州候

御鞍一口

遠藤胤被但州候

右講武所御開御用骨折相
勤候二付、於御前拝領之

十日、被仰付左之通

知行格

一人御加持
出衛様御側方頭取

石井寿兵衛

筆列星野正大夫次

別紙之通被仰付候間、自
今出衛様御用向諸事見合
裁判可有之候事

但御奥通御免唯今迄之

通

一御側詰
一日參

○八日、戌、晴、寒冷強、朝霜繁、去ル二日岡本主馬殿先達而銀談事取次進候謝与

して来儀有之、其節燈油切手二枚持參被惠候二付、右為謝午後同方へ參ル、主馬殿
留主之由二而後室被逢、厚謝申述、此後右様之義堅及断候段申置也、吉田藤馬口
上紙面二而、当夏主水様御逝去二付急御借銀之義配意いたし候挨拶之由二而、飯
尾、鯛式尾贈来、夕三宅吉左衛門入来、松本良伯方世話人格式直之義二付内談有之
也、跡二而有合酒を出、夜迄話ス

○九日、己亥、曇、寒、夕風雨、雷鳴も有之、御内密稽古二付早朝御馬場へ出、相濟
出勤、夕七半時頃退、昨日吉田藤馬口到来之看、此間岡本口到来之燈油等私二いた
し候も不本意、配分も六ヶ敷候故、今日左之面々を招、油を酒ニ替而看を開く也、
飯糸作之初穂を渡辺氏へ少々贈る也、

渡辺雅登

堀尾善大夫

大島五兵衛

矢野源内

星野武平次

外二辻清人・森岡万之進も窃二噂致し、折柄来合せ、同様二饗、暮過る何れも来ル
也、今日御軍学之御相手、牧野三郎助殿・寺尾源五郎殿初而御館人被罷出候二付出
而謁久、吉田兼次郎殿同道二而被出、明日口土図之御稽古被遊、右之三人日々被罷
出候由也、右三人之衆宅へも為挨拶被来也

○十日、庚子、曇、風烈、時々雪飛、後作霰作霰、寒冷強、風呂を建、例時出勤、

夕七半時前退、大島五兵衛・矢野源内・星野武平次昨夕之謝二来、堀尾口使来、
今日如頭書被仰付有之、石井・山田へ歛使遣久、夜中津屋万之助来、酒飯を饗、

山田多喜登

一 御庭方御用向之義引受
相勤候事

一 御目付勤向時二取見合
被仰付候事

一 右同人

右槍術心掛厚致出精候二
付、為稽古料毎歲銀貳枚
被下之、自今弥以相勤、

御用立候様可仕旨被仰出
一 御次詰加

池田万次郎

出衛様御側方差

同日

大雪節

十一日、江戸御沙汰書之

内

時服十五

(伊達慶邦)
松平奥州侯

上納米仕、御用達ニも相

佐藤益之丞来、同方二男猶人を三宅吉左衛門へ養子ニ所望ニ預候二付、約束可致

哉与存候由二而内々相談有之、至極之義ニ可有之与存候段及挨拶置也、今日出衛様

江北之御部屋を被進、以後御住居ニ相成、為御暮向年々米貳百五拾俵宛被進候旨被

仰出候也、尤右之内当御半知中五拾俵者御借二而貳百俵被進候由也、今日右大雪節

也

○十一日、辛丑、曇、風吹、寒冷強、石井寿兵衛昨日之普為聴与して来、山田多喜登

も同段、午後吉田藤馬へ此間之為挨拶行、石井・山田へ歡二行、堀尾へ先日之礼二
行也

○十二日、壬寅、曇、曉有雪、寒冷強、例時出勤、夕七時前退、々出掛北之御部屋へ
為見分出ル、夜小口之御相手ニ出ル、江戸表先月七日地震余程強、同十五日ニも

尚又強震有之、人心恟々与して不定候由也、尤御年寄衆右之申上者無之候事故、格
別之義ニも有之間敷与被存候事也

○十三日、癸卯、曇或晴、見せ馬來、朝御馬場へ出ル、午後相濟出勤、夕七時前退、

射場へ出ル、今明日射場京矢代有之候故也

○十四日、甲辰、晴、寒冷緩、朝有霜、堀尾善大夫先日輕祝贈候謝入来、午後右射

場へ出、昨今山下稽古場より小出郁三郎殿・原田丈大夫殿も見へ、近来之賑敷射場
也、湯川新太郎忌明二付為謝来、森岡万之進稽古場へ出候而来飯、夜小口之御相

手ニ出ル

○十五日、乙巳、晴、寒冷強、例時出勤、夕七時頃退、夕一昨日之見せ馬二番見二

成候二付被下之

來候二付、御馬場へ出ル

○十六日、丙午、晴、寒冷緩、夕々暖也、朝妙慶院へ參ル、小人国藏亡祖父庄助來

正月七日十七回忌二付、此間取越法事致候由二而茶の子惠來候故、菓子料を遣ス也、

例時出勤、夕七時前退、今朝御乘馬へ出ル、渡辺雅登内室夜前安産、男子出生之

由二付、欲見舞使遣ス也、慈君午前妙慶院へ御參詣、夫々辻へ御出、入夜御戻被

成也、夜小口御相手二出ル

○十七日、辛未、晴、暖甚、朝有霧、御用向二而被為召、午前六丁目御館へ出ル、

森岡・木野・水谷へ見舞歸ル、森岡二而飯を齧、木野二而酒出ル、出掛渡辺へ安産

之歎二行

○十八日、壬申、曇、曉遠雷有之候由、例時出勤、夕七時退、出勤掛北之御部屋へ出

ル、辻清人入來、夜中長喜三太來話、今夕御館二而、吉本恒之丞明後十九日午

後井上權之丞殿被參、於御裏土筒早合前并五十目玉以下野戰筒之業御覽被遊候二付、

其節予等二も罷出、見物いたし候様御沙汰被為在候旨申聞ル也

○十九日、癸酉、曇後晴、暖氣甚、例時出勤、夕七時退、吉本恒之丞鉄炮之会有之

由二付、退出後出ル

廿日之人名

井上權之丞殿

古田要人殿

臼井左平太殿

○廿日、甲戌、晴、暖、朝万之進來、桑原吉郎二人來、兩人共昼飯を出ス、一昨記

之通井上門弟中被出候而炮術有之候二付、夕方御馬場へ出、致見物、早合前三人立

并立膝、火繩業、ドンドロ放、并二野戰筒、神機車仕掛、五十目・式十目・拾五奴

之業有之、且拾式發鉄炮与云筒も有之、異風之業も有之也、神機車仕掛者業二候

成田藏之丞殿
伊藤静太郎殿
安宅三五郎殿
村井平八殿
川崎熊五郎殿

廿一日、御祥月

御菓子
蜜柑

夕

御茶

豇豆飯

廿四日

冬至

廿七日

休廟御祥月二付

へ共、世上一統之様子二列、一等寛二相成候与見へ、勝手二見物出来候也、午後吉田藤馬入来、先達而御借入金無滞御返弁相济候挨拶、且又当暮御借入之義内談有之也、并二当夏及内談置候八木藤弥、中和流炮術伴角馬へ入門致度義相調候事二相成候趣返答有之也、右者御先々代様之節外御秘し二而、他之御家中江指南之義六々敷相成居候之処、此度藤弥懇望二付無屹及内談置候趣も有之候也、右之通二相成候也、伴角馬者八木野右衛門母方之叔父也、夜小口御相手二出、昨夜慈君・家小妙慶院地藏講へ参ル也

○廿一日、乙亥、曇、寒冷強、朝例時出勤、夕七時比退、夜石井寿兵衛を呼、内談之義有之、御用向也、九日之記二有之土図去ル十六日出来二相成候由、今日於御居間予等三人江内々拜見被仰付也、全体流義二不入者者一覽も不出来流法之趣二候得共、予等者勤柄之義故格別を吉田先生儀右衛門へ者御沙汰なし二而拜見被仰付候趣也、難有思召也、小土図与申分之由、三尺四方位之図也、細密なるもの也、今日受安廟御祥月、夕御茶・豇豆飯を献也、辻氏専祐童子三回忌之由二而茶飯来ル也、夜雨

○廿二日、丙子、晴、暖、夜前石井寿兵衛を呼、御用向申談、早朝西向寺江参、素読所講釈へ出席、相济而出勤、夕七時前退

○廿三日、丁丑、晴、寒冷甚、曉有地震、長し、朝御乘馬へ出、午後北之御部屋江見分事有之、出ル、夜中堀尾へ囲碁二行、今夕丹羽庄藏先達而飲二参候謝入来

○廿四日、戊寅、晴、寒冷甚、朝御内密稽古へ出ル、相济出勤、夕七時前退、森岡万之進來、先達而式枚折屏風之画曾谷伊邊江か、せくれ候様頼置候也、相調候由二

焼饅頭

廿干柿

巻せん餅

御茶

牡丹餅

煮込

〔此度於東城大砲御鑄造

御用致心配候二付、左之

通御祝義被下候也

一御肴料金貳百疋ツ、

深江靜衛

宮崎藤九郎

一白銀五枚

吉田与一右衛門

一金貳百疋

星野武平次

一銀拾五匁

小畑甚藏

右何れも日を忘候故爰ニ

追記

而持參しくれる、白鷺・雁也、〔夜小口御相手ニ出ル、今晚御納也、子惣數三千本射ル、出衛様ニ惣御矢數貳万本之余也、〔堀尾善大夫今日不快ニ而出勤無之、見舞使遣ス、〔今日冬至也

○廿五日、己卯、晴、寒冷強、〔例時出勤、夕七時前退、〔慈君辻江御出、御宿被成也、〔夕飯田又市殿江此間内度々預紙面候返書為持遣ス、金拾兩御趣法ニ而借用之義内談有之、申談調候義也、〔夕湯川兵馬殿來儀、先年故十郎次殿借用銀洪滯之返弁方断之義内談也、〔夜御用向有之、渡辺氏へ会

○廿六日、庚辰、晴又曇、冷、朝霜繁、有水、〔朝御乘馬江罷出、〔森仙太郎妹相庭百蔵妻病死之由ニ付、昨夕悔使遣ス、〔此間御とらせ之雁御開被遊候由ニ而、御分賜被仰付也、去ル廿三日吉本恒之丞御脇打ニ被遣、石内村ニ而雁三羽獲帰候由也

○廿七日、辛巳、晴、朝冷、夕暖也、夜雨、〔休誓廟百回忌相当之御祥月也、東城徳了寺へ茶湯料備置候事故、朝上下着廟前ニ謹坐、暫時ニして焼香遥拜ス、献膳者当四月相济居候故今日者不仕也、〔朝素読所会読へ出席、相济出勤、夕七時前退、〔夕射場へ出、〔夜岩崎常介入来、困某、〔夜霧深

○廿八日、壬午、晴、寒冷緩、夕有風、〔朝例時出勤、夕七時前退

○廿九日、癸未、晴、冷甚、後暖、〔朝射場へ出、〔午後堀尾善大夫入来、御用向也、〔夜渡辺雅登左伝対読ニ入来、〔尾道角屋周造与申者、書状差越、岩崎〆届来、三島屋孝助義病氣之処養生不相叶、去ル八日物故いたし候由、十三日之日付ニ而申来也

十二月 大

朔日、来ル十五日於江戸尾州侯之姫君利姫様御入

○朔日、甲申、曇、風吹、寒冷強、当月者非番月也、例時出勤、夕七時前退、左之通御移檄出ル也

輿、若殿様へ御婚礼御整被遊候筈二付、其節御役目左之通被仰付候由

利姫様御入輿被遊候上、御兩敬之御先々并二御家中之輩者御前様与可奉唱、他処向二而者利姫方与可奉唱旨被仰出候、此段不洩様可被相触候

一御結納御使者

十二月朔日

御番頭

浅野広人殿

右御婚礼之義来ル十一日御結納被進、十五日御婚礼御整被遊候筈被仰合、相濟候趣

同副使

御留守居

中野富三郎殿

○二日、乙酉、曇、寒冷、辻清人此間以来風邪二而引籠之由、見舞使遣入、熱有之、食餌不進之由也、夕弓術へ出

一御貝桶受取

御用人

堀田恂之助殿

○三日、丙戌、晴、朝霜如雪、嚴冷、氷堅、朝素説所講積へ出勤、相濟出勤、夕七時退、慈君夜徒辻御帰被成、清人少者快方之由也、線姫君様去月十二日御逝去二付

同副介

御留守居

梶川銀次郎殿

七日之間鳴物停止、諸事穩便、火之元念入候様、尤普請者不苦旨從公儀被仰出候二付、爰元二而も右同様之旨、且又姫君様御姪、若殿様御從妹二被為当候二付、爰元

一御輿受取

御年寄

杉田駿河殿

二而茂御穩便可被仰出処、右様從公儀之被仰出有之候故別段二者不被仰出、其段相心得候様二との義、昨二日附之御移檄出ル也、線姫君様者有栖川家之姫君、將軍家

同副介

中野富三郎殿

之御養女二被為成、常州侯へ被為入候御方之由也、吉田藤馬方御借用之金受取二人来ル也

○四日、丁亥、晴又曇、夕雨、暖、朝辻へ見舞、清人少シハ快方也、何分為指事二者

〔十日〕

小寒節

〔十三日〕

一金貳百疋

佐藤益之丞

右此度香取流槍術業免許

を得候二付御褒美

一 師役料金壹兩二被成下

石井寿兵衛

一金貳百疋

山田多喜登

右益之丞同断

一 御切米六石

一 式人扶持御歩行組

捨次郎跡目

檜垣他人吉

右幼年二付不及出勤、右

二付御切米貳割引之事

〔十五日〕、北之御部屋へ左

無之見ゆる也、帰り森仙太郎妹之喪を吊也、〔例〕時出勤、夕七時退、〔極〕夕弓術へ出、〔夜〕渡辺へ左伝対読二行也、〔尾〕道三島屋へ悔状遣入、香儀壹封内仏へ送ル、慈君の菓子代を御贈被成也

○五日、戊子、曇又晴、寒冷強、〔朝〕六丁目御館江為窺御機嫌罷出也、〔夕〕射場へ出ル、

〔吉〕田藤馬が昨年御再借之百両口御返済之由、為持来ル也、一昨日取二来候分者五百両、此度御借用也

○六日、己丑、曇、寒冷強、夜雨、〔例〕時出勤、夕七時退、

○七日、庚寅、晴、寒冷強、〔朝〕西向寺江兵藏森島為参也、〔素〕説所会読へ出席、相済出勤、

夕七時過退、〔風〕呂を建、〔右〕近様が御到来之三原大根一本御分賜被仰付也、告于廟

○八日、辛卯、晴、朝有微雪、向寒強、〔夕〕御乗馬江出、〔弓〕術へ出、〔夜〕渡辺雅登左伝対読二入来、〔凝〕終日不解

○九日、壬辰、晴、向寒強、〔早〕朝御内密稽古二付御馬場江出、相済出勤、夕七時退、

〔辻〕江見舞兵藏遣入、清人食餌少者進候へ共今以得斗無之、平臥之由也、〔夕〕有地震

○十日、癸巳、晴、寒冷強、小寒節、〔例〕時出勤、夕七時退、〔朝〕松本良伯入来、辻清人追々宜敷趣申也、〔松〕本三珠寒気間安入来

○十一日、甲午、晴、寒威寛也、〔朝〕御乗馬へ、御弓御相手江も出ル、〔湯〕川新太郎此便

利二付新町へ致外宅、今日引移候之由、夕暇乞二来、此方も見舞使遣入、〔夕〕辻清人を訪、弥快、明後日あたりが出勤も可致与存候由也、酒出ル、夜二入帰ル

○十二日、乙未、晴、寒威緩也、〔例〕時出勤、夕七時前退

之通差出ス也

蝶 壹尾

直四匁八分也

同日、御部屋へ女中御供
左之通り也

女中

しつ

さき

半下

兩人

十八日、此間主水様を御
内賜之酒左之通及配分也

壹樽ツ、

渡辺父子

堀尾

同

矢野源内

星野武平次

十九日、左之三人香取流

槍術目録を致相伝候由也

○十三日、丙中、晴、寒氣緩、暖也、朝素読所会読へ出席、相濟出勤、夕七時前退、

頭書之通今日被仰付也、夜御輿へ被為召罷出、御歳暮之御心持二而御酒頂戴被仰付、御賑々敷深更退、御家司中・同勤不残、堀尾眠石・石井寿兵衛・御医師等被為召罷出候也、御取せ之雁之御料理有之也、出衛様明後十五日北之御部屋へ御住居被成候筈之旨席達有之也

○十四日、丁酉、晴、暄、寒威薄、朝御乗馬へ出、六丁目御館二而助七殿此間以來御熱強、御困被成候由二付為伺罷出、夜前以來者殊外御快方二被成御坐候由也、出

掛御輿へ夜前之御受二出ル、辻清人昨日快出之由二而挨拶入来、夜渡辺へ左伝対読二行、昨夕吉田藤馬を紙面二而先達而御借入金御取次申、且昨年御再借之分御返濟二相成候挨拶与して玉の井酒切手七樽惠来、厚意之事故同役江も相談之上致受納、其実者主水様より之御内賜なり

○十五日、戊戌、晴、寒威薄、今朝五時出衛様北之御部屋へ御移徙二付、為御待受早朝御部屋へ罷出、御移之節露露地内へ御出迎申上、御安座之上御居間へ出、恐悦申上ル、式日故継上下二而出ル也、御用向相濟退、夫御館へ出勤、今日者諸品御礼有之也、夕八半時過退、外同役者退出掛御部屋へ恐悦二出ル也、夜北之御部屋へ御召被成罷出、御側二而御吸物・御酒頂戴仕ル、予并二石井寿兵衛計也、予者御用奉候故右様格別二召候也、今朝予も軽キ御看御内々差上也、夕坪内入米之介寒氣問安入来

○十六日、己亥、晴、寒威纒加、妙慶院へ参詣不能、兵藏為参也、御寄合二付早朝

大島五兵衛

大崎和三郎

岩崎良之進

廿日曉、牛田村出火、神田社之下百姓屋之納屋一字焼失之由也

廿三日、御役料并二御

仕向米・御心付米等之切手今日渡ル、附足輕之御心付仕向米も渡ル也

廿三日

一御加増三百石

生田筑後殿

廿六日

大寒節

江戸御沙汰書之内

十二月十三日

松平肥後侯(容保)

出勤、夕七時前退、高謙院様へ寒氣御機嫌伺旁同役申合、西条柿一箱 百差上、今日船便幾田へ文二而差登ス也、貫名先生(海屋)江も書状遣し、枝柿三十三贈之也、当年も格別之御差練を以御扶助渡之員数少々御取捨有之、去暮之振合を以被下候旨、并御役料初諸渡物半方渡之処、今暮限七歩五厘渡二相成候旨、昨年之通夫々今日被仰出、御扶助渡も弥張七歩五厘渡也

○十七日、庚子、曇夕雨、暖、朝右近様・主水様へ寒氣之御安否伺二罷出、久野秀太郎・吉田藤馬・丹羽庄司并脇本武兵衛・本庄三大夫へも見舞帰ル也、妙慶院江も昨日怠候故參ル、井上市太郎へ見舞、折柄通而謁し、堀尾善大夫御館入願之義頼置、吉田二而も右同断、尤同方二而者此間御内賜之御受も厚申置也

○十八日、辛丑、曇、夕風吹、寒威強、夜雪降、朝素説所会説所江出席、相濟出勤、夕七時頃退、六丁目様へ明夕何れ茂被為召候旨たつる申来

○十九日、壬寅、雪曉来積、不盈寸、乍去初而之積雪也、晴、寒威嚴也、例時出勤、夕七時過退、退出後堀尾善大夫同道、六丁目様へ罷出、雅登も跡を被出、渡辺宗右衛門殿も被出、御歳忘れ之御酒頂戴仕ル也、堀尾眠石・御医師不殘罷出ル也、夜亥刻前退、夕木野一馬入来、酒を出ス、予者挨拶して御下へ出も夜迄話候由也、今晚八時時前右近様小姓町御屋敷之内鉄炮鍛冶細工小屋之炭置場を出火、三疊程之庇焼失之処早速消留、大火二者不至候出、此辺を火之手も不見候故皆々不知所、出張二も不及候也、予未寝内火事与申騒キ候しか、其節之事なるへし、九半時前之事也、右二付右近様御差扣被仰出候由也

祖父以來蝦夷地其外御警衛相勤、去ル未年安房・上総御備場御用被仰付、引統内海御台場御警衛被仰付候処、数年格別入精相勤、家来共励方宜、御満足之事二候、依之出格之思召を以向後年輩二も相成候ハ、正四位上可被仰付家格二被成下候、防禦筋之儀相励候様被仰出之

御同候

祖父肥後守蝦夷地警衛被仰付候以來引統御備場御用相勤、度々持場替被仰付候付而者多分之入費連年疲弊二及ひ候趣二相聞候処、去年震災之砌居屋敷・添屋敷とも潰、其上焼失、別而可為難儀与被

○廿日、癸卯、晴、寒氣強、六丁目様へ夜前之御請老女格たつ迄文出ス也、例時出勤、夕七時頃退、今早晨例歳之通餅を製、田中実五郎・小人三次来くれる也、今朝辻清人入来、一昨十九日御家来中御撫育筋不被任御所存候処、色々御差繰を以当年も御扶助渡方去暮之振合を以御患被下候へ共、何分一統勝手向難渋之中、御奉公出精、文武之道不怠致相励候段御機嫌二思召、依之尚又少々宛御心付米近年之振合を以可被下候、当御場合ケ様之御患筋者不二心厚思召二候条、其段何れも相心得、弥以御奉公出精、文武之道実意二相励候様可仕候之旨被仰出也、実二当御場合難有御趣意也、当家井水近年変而悪水二相成、不堪飲用、困候処、田中栄作昨日草津村慈光寺之比丘尼を連来、加持を為致呉候之由也

○廿一日、甲辰、晴、寒氣厳也、例時出勤、夕七時退、朝森岡万之進來、夕丹羽庄藏入来

○廿二日、乙巳、曇、巳鼓後成雪、寒威厳也、早朝西向寺江參、例時出勤、夕七時退

○廿三日、丙午、曇、寒威強、早朝就御用向御旗奉行吉田儀右衛門殿へ行、謁ス、甲州流軍師也、帰り岡本主馬殿へ寒氣見舞二行也、例時出勤、夕七時退、夜堀尾へ行、囲碁也、廿三夜待之饗有之也

○廿四日、丁未、晴、寒威緩、例時出勤、夕七時頃退、六丁目様へ御庭之橙三顆頂戴被仰付也、告于廟

○廿五日、戊申、雨、寒威緩、例時出勤、夕七時過退、去ル廿二日御作事へ職人入来、

思召候、依之別段之訳を以金一万兩五千兩拝領被仰付候、弥入精御備場之儀相励候様可被致候

十二月十六日

別段之思召を以正四位下

松平阿波候（藤須賀寄附）

思召有之二付中将

細川越中候（寄附）

思召有之二付少将

上杉弾正大弼様（寄附）

未年若二候へとも思召有之、少将（廣憲）

松平兵部大輔様

四疊半之間天井・椽共張替呉る也、尤天井者惣張替二者無、繕張替也、鈴木鱸兵馬・上野彦三郎寒氣間安人来、永井仲之助同断

○廿六日、己酉、曉雪纒積、寒威嚴酷、夕氷結、例時出勤、夕七時三步頃退、御役所今日限二而相濟、明日より廢休也、朝吉田藤馬入来、今日方大寒節也

○廿七日、庚戌、晴、寒威強、風呂を建、西向寺江兵藏為參也、終日迎春之設宮々たり

○廿八日、辛亥、晴、暄、寒威紓、夜万之進來、銀談也

○廿九日、壬子、晴或陰、寒威強、未鼓前右西向寺・妙慶院江歲暮之參詣致し、六丁

目御館江歲末之御機嫌窺罷出、森岡・木野・水谷へ歲暮之祝詞旁二行、木野・水谷二而酒出、入夜帰宅

○卅日、癸丑、曇時々雪飛、午後西向寺・妙慶院へ兵藏代參申付、堀尾眠石・同幾之進・小倉甚右衛門・三宅内外・岩崎常介歳末旁昼前迄二人来、夕七時頃歲末之為御祝詞罷出、於御居間御祝詞申上、周防様江之御祝詞於御次御用達伊藤徳之助迄申上ル、御輿へ出、老女江謁し、退出掛北之御部屋江罷出、出衛様へ御祝詞申上、御逢有之也、夜如例田楽を製し、全家歳暮之盃を伝、欣々然、辻清人・森岡万之進來、共二寛話二及、君沢親恩之渥二因而安穩二歳除を祝、不堪感戴

(表紙)

家乗
統編卷之十四
安政四年

人皇百廿二代

御諱統仁

弘化丁未御即位、從神武

元年辛酉二千五百十五年

今上皇帝御宇十二年

安政四年龍次丁巳

平天下五年

源家定公 徳川家康公十三代、從嘉永癸丑

治国廿七年 御寿四十一

源齊肅公 浅野長政公十一代、從天保辛卯

齊家十年 御寿四十三

紀道興公 堀田高勝公十三代、從嘉永戊申

家乘統編卷之十四

安政四年丁巳

村上七世彦右衛門邦裕君綽謹記

正月 小

○元日、甲寅、晴或曇、嚴凝、夕寒氣緩、慈君奉始皆々平安加寿、曉寅中刻起、若水・神拝・廟拝・蓬萊・祝詞・屠蘇・大福・菌固・誦初・吉書恒規之通礼服二而行之、黎明後麻上下着出仕、御登城前於御居間御祝詞被為受、御家司渡辺宗右衛門殿被出、引統子并渡辺雅登・堀尾善大夫一同罷出、御祝詞申上、益御機嫌好御超歲被遊、御身祝御規式無御滯被為濟、恐悅奉り候段申上、夫方於御次伊藤德之助へ謁、御機嫌克御超歲被遊候恐悅申述、且周防様江之御祝詞申上、其後御奥へ出、老女へ謁、五時過退出、退出掛北之御部屋へ罷出、出衛様へ御祝詞申上、御逢有之、畢而退出、帰宅、夕八時揃年頭御礼被為受候二付罷出、於御書院如例御礼申上、奏者御出頭三宅吉左衛門也、七半時頃相濟退、右出掛二渡辺宗右衛門殿父子、堀尾善大夫へ祝詞二參、御家來中其外祝詞客來多人數有之、平野藤吉郎江致祝盃候出、当月者子月番受也

○二日、乙卯、曇、午前雪紛々、夕晴、風吹、寒威嚴、渡辺雅登へ頼置、朝方祝詞回礼二出、々掛御館へ為窺御機嫌罷出、夫方右近様・主水様へ御祝詞二罷出、白神社・妙慶院其外左之方格へ回礼、夕七時三步頃帰宅ス、木野二而昼飯を齧、致祝盃、水谷・藤川・辻二而も祝盃いたす也、六丁目御館江者明日朝夕之内罷出候様兼而被仰出

〔三日、客来彼是有之、八木広次郎江致祝盃候由也
 同日、於江戸旧臘十一日若殿様方御前様へ御結納御祝義被進、同十五日御入輿、御婚禮首尾能御整被遊候由也

候二付、今日者不罷出也、妙慶院二而者如例壹封年玉を贈る也

久野秀太郎 井上市太郎 脇本武兵衛 本庄三大夫

福山覚右衛門 吉田藤馬 河瀬喜和馬 丹羽庄司

水谷又左衛門殿 木野一馬 山村静登 原田丈大夫殿

山下太八郎殿 佐久間 栄殿 田部(辺)幾衛殿 二宮五礼

一場忠次郎殿 松村弥助殿 松宮空之助殿 下瀬孫平殿

山中一庵老 永井仲之助 吉本恒之丞 藤川每登殿

佐藤益之丞 三宅吉左衛門 辻清人 松本良伯

得井満四郎 菅平磨

〔留守中客来渡辺雅登始数輩有之、岩崎常介へ致祝盃候由也、今日回礼供列昨年之通若党・小者・鑓持計也

○三日、丙辰、曇、寒威厳、時々雪霏、主水様為御祝詞今朝五時御供揃二而御出二付、時刻ニ応し出勤、御玄関御送迎罷出、於御居間御機嫌も相伺也、九時頃相済退、〔九時半前より六丁目御館江為御祝詞罷出、御目見被仰付、例年御祝盃被下候得共、当年者外日ニ被下候思召之旨御奥詰沢崎多八郎申聞ル、往来左之通り回礼、森岡二而致祝盃、右様六丁目ニ而御館へ罷出、森岡へ参候節、鑓者御門内へ持込せ置、鑓持之者者森岡之台所へ参り候而酒を給居候处、其間ニ何者歟鑓を盗去候もの相見へ、将帰んとするニ及て一円不相見、家来共大二周章、方々相尋、御多門内之者も色々心配も致しくれ、尋合等も致くれ候へ共更ニ不相知、止事を不得、万之進方之鑓を

借用為致持歸ル也、依て今日者纔回礼して歸ル也、西向寺江も参り、年玉如例贈る也

三宅春齡 南部要人 坪内久米之介 森岡万之進

後藤松軒 沖和多理 久野八十介

○四日、丁巳、曇、嚴寒、時々雪飛、夜嚴凝、昨日之鏑紛失之義、帰宅後得斗致熟考いたし候処、何分案外至極之珍事、甚不審之義二付、夜前早速薬師坊二而方角をも為考候処、何れ近辺之者盜候二相違も無之趣、川本屋伊助へも穿鑿方窃二為頼置、今朝万之進も来り段々考も申聞具候故、彼是穿鑿筋申含、猶同人を頼、下安村藤之森社江参り神卜を請もろふ筈二申談置也、午鼓後る出、左之通回礼いたす、今日者藏田・松田・波多野・桑原・平野二而皆々致祝盃、帰かけ岩崎常介方へ祝詞二行、同方二而も致祝盃也

一井嘉内 渡辺秀之進 八木広次郎 森直十郎

藏田和太郎 岡本主馬殿 松田健藏 波多野権祐

藤井乙次郎 桑原吉郎二 平尾宗右衛門殿 原要人殿

平野藤吉郎 湯川兵馬殿

右之通回礼、申刻半頃帰宅、出掛御館へ為窺御機嫌罷出ル、賀客彼是有之、木野一馬・波多野権祐致祝盃、一馬者夜迄被話、鏑穿鑿之義も頼置也、夜万之進来り、今午後藤之森社へ参、神卜を請くれ候処、盜者夜前薬師坊之占与凡同様、誠二御抱内同様之近辺之者二而、夜前早速西近辺へ持出候得共、いまた幸二不持出候故、直二

〔神司渡辺二者あらず、小林也〕

致祈祷候ハ、兩三日之内二者何となく戻り合可申候二付、今晚三日三夜之祈祷いたし只可申旨申聞候由、神司者渡辺何某と申候由也、御門前津川次兵衛殿屋敷之小者二三藏与中者有之、皆々此者を疑候趣也、同人者一昨年迄堀尾二若党を勤居、同方二於ても手之悪敷事有之、急二暇出候者之由也、於江戸旧臘十一日若殿様御前様へ御結納被進、同十五日御入興、御婚禮首尾能御整被遊候旨、昨夕御年寄衆を被仰上候之由也

○五日、戊午、巳鼓前々雪大ニ降積、尺ニ近し、寒威殊ニ猛冽也、今朝五半時御供揃二而右近様為御祝詞御出被成候付、右時刻を罷出、御玄關御送迎仕、御居間二而御機嫌も伺ふ也、其後御吉例之通御馬御乗初有之、御馬場へ罷出、御規式中相詰、恐悅をも申上、尚又於御次御用達中迄恐悅をも申上ル也、尤予月番二而菅人罷出候也、雪大ニ降候得共、御規式者御仮成ニ相濟也、藤川甚吉祝詞ニ來、認を出ス

○六日、己未、晴、嚴寒凝甚、早朝万之進來、右之鐘今朝同方脇之無常門之処、大手堀内へ窃ニ投込有之候之間致安心候様申聞候也、何分怪敷義也、夜前深更後々今晚へ掛密ニ投込候もの与被考候由、全藤森社人之言之如、偏ニ祈祷之力ニ依候而之事歟、併ながら早速方川本屋伊助へ頼遣し、又万之進方岡田八十太郎へも頼呉、右之兩人方町方之手筋へ速ニ頼込呉、町方方も手回り、船留等も有之候由、彼是二而盜之心中何となく恐怖を懷、右様窃ニ戻し置候ものなるへし、余か高運也、右之趣兼而頼置候先々江早速為知遣ス也、今日御役所出初二付平服二而例時致出勤、昼九時過退、夕々森岡へ鐘を取二遣ス、此間借帰候分戻ス、当家之鐘戻合候所少も損所等

無之、致安心也、今日も祝客少々有之

○七日、庚申、曇、寒威嚴酷也、陰処終日凍不解、人日之祝、例時出勤、九半時頃退、西向寺へ兵藏（森也）為參也、夕御多門内渡辺・堀尾・岩崎之外不殘回礼、風呂を建、夜長喜三太来話、今日も来客少々有之

○八日、辛酉、曇又晴、寒威嚴酷、凝甚、午飯後々祇園藤之森稻荷社江參詣、神司二逢、此間祈禱之礼厚申謝、御初穂銀五両備る也、森岡万之進も参り呉、沢崎幸右衛門も参ル也、尤幸右衛門も此間者万之進同伴参り呉候之由二候得共、今日者私用自分之用事有之候由二而参ル也、及暮帰ル、夜御用向有之、御館へ出ル、祝客少々有之

〔九日〕
節分

○九日、壬戌、晴或曇、寒威強、例時出勤、九半時過退、旧臘十一日若殿様方御前様江御結納御祝義被進、同十二日御入興、御婚礼首尾克御整被遊候御歛として今日惣出仕、御両殿様江御帳付候由二而旦那様御登城被遊、惣回勤者無之候由、若殿様御婚礼済之御例之由也、節分也、夕桑原吉郎二祝詞二来、致祝盃、夜打豆之祝、御身据頂戴之義脱、明日二記ス

〔十日〕
立春

○十日、癸亥、晴、暄、立春也、例時出勤、夕八時前退、渡辺宗右衛門殿為祝詞来儀有之、朝辻清人来、元日祝盃不致候故致祝盃也、夕水谷又左衛門殿御祝御出、祝酒出、夜迄御咄被成、今日退出後海蔵寺へ拝参仕候積二有之候所、留守中家来使二出し時刻移候故止也、昨記之補闕、今日御身据御鏡開二付如例歳頂戴仕ル、於御館山田多喜登執達席を進、御請申出ル、周防様・出衛様方も頂戴被仰付、室角左源

次・石井寿兵衛ヲ紙面ニ而來、返書ニ御請申出ル也、夫々告于廟

○十一日、甲子、晴、暄、早朝ヲ海藏寺へ拜參、四半時帰、隱居和尚をも訪也、夕

為窺御機嫌罷出、渡辺氏へ昨日來儀之謝ニ行、台所ニ而申置也、夕井口喜久馬御叱有之、予宅ニ而申達、加席御目付見合山田多喜登來ル也、夕沖森和多理祝詞入來、

今日御吉例之通御具足御鏡開ニ付御切餅頂戴被仰付、夕方御用達ヲ防主ヲ以宅へ為持差越、袴着謹而頂戴、坊主逢御受申歸ス也、告于廟、今日恒規之通具足鏡開今

早晨祝ふ也、宮崎藤九郎母病氣之處養不叶、去ル四日暁物故被致候由、水上甚大夫（正祝）為知來ル、右近様・主水様ヲ為御祝詞罷出ル御挨拶御使被成下、御受紙面出入ス也

○十二日、乙丑、曇、夕風吹、有余寒、例時出勤、夕八時過退、近藤玉之進祝詞入來、慈君午前ヲ辻江御出、御宿被成、昨日ヲ松浦藤枝殿被來、逗留之由、旧冬以來又々病氣ニ而松浦之方江下り被居候由也、夜左伝会、渡辺雅登被來、大島五兵衛も來、当年始而故跡ニ而酒を出ス、今暁七時前有地震、稍有力、長し、其後夜明方ニも震候由、予者不覺

○十三日、丙寅、曇、余寒烈敷、時々有風、素読所講積初ニ付朝出席、例年之通白鹿洞学規、講師湯川新太郎也、例時出勤、夕八時前退、夕平野藤吉郎來、草書淵海を借ス、夕堀尾眠石老人囲碁ニ入來、酒を出ス、夜迄囲碁、当年八十二歳、矍鑠たる老人也、善大夫も序ニ可致祝盃存候得共、差問之由ニ付不申遣、慈君夜從辻江御歸被成也

○十四日、丁卯、曇、時々雪飛、余寒冽、午時為窺御機嫌罷出、帰掛八木野右衛門方

〔十六日、於江戸

一御加増五拾石

丹羽一馬殿

右常々出精相勤候付

〔十六日、はつ野縁組之庄屋者為吉二者無之、高井村庄屋理右衛門之由也

物見へ行、御門前左義長を致見物、御馬五牽出、森仙太郎父子、得井満四郎父子、佐藤喜代植乗之也、〔森岡万之進おさ代を連来、酒餅を饗、〔辻清人昨日巖島へ御代参相勤候処、午後風強、御船巖島を離かたく、今朝帰候由也、〔六丁目様二而、たつる文二而明夕皆共三人被為召候間、罷出候様申来、御請返書二申遣又也

○十五日、戊辰、余寒猛也、時々雪飛、〔例時出勤、九半時頃退、〔祇園藤之森神司小林土佐守来り謁、此間御初穂備候二付、於神前武運長久、子孫蕃昌之祈念いたしく候由二而、神策并守護を恵、叮嚀之事也、〔天神町葉佃^{實之}居候由、三歳熊を連来、御裏二而御覧被遊、予も致見物也、〔夕方雅登・善大夫共々六丁目様へ罷出、御燂酒頂戴被仰付、御側二於て御盃をも頂戴仕ル也、入夜退、罷出掛妙慶院へ参、室角左源次・沢崎幸右衛門・森岡江も先達而槍紛失二付彼是与心配二預候謝二行

○十六日、己巳、曇、時々雪降、余寒厳酷也、〔例時出勤、夕八時前退、〔橋本屋周五郎来、酒餅を饗、中津屋万之助方はつ野石内村庄屋方所望二逢候故近々遣候筈之由申也、庄屋者為吉事なるへし、慈君二も御出被成候様二与申越候得共御出不被成、余寒強候故也

○十七日、庚午、曇、余寒厳酷、〔朝御乘馬江出ル、〔午後御用向二而永田丹解殿江行、帰掛為窺御機嫌御館へ出、〔夕堀尾へ困棊二被招行、酒飯出、深更帰

○十八日、辛未、曇、余寒少紓、〔朝素読所会読へ出、九時頃出勤、夕八時過退、〔夕辻妹年始二来、恒も来、宿ス

○十九日、壬申、曇後晴、余寒大二緩、〔例時出勤、八時前退、〔辻清人入来、午飯を

廿一日

渡辺雅登

佐藤益之丞

右甲州流足輕備押稽古御用掛被仰付

来ル廿四日御内密稽古

始定日之処、御沙汰有之
までハ不及出場旨夫々江

此間被仰出、畢竟右甲州
流備立追々始候故、是迄

之越後流之操練者先御廢
閣之趣也

廿三日

一御加増五百石
御年寄役

梶川角右衛門殿

御用人上席

廿五日

雨水節

出ス、家小此間以来腹瀉且風邪之氣味ニ而臥、薄暮大御目付中井出衛殿就御用向
御入来ニ付出勤、直ニ退、夕射場へ出

○廿日、癸酉、曇、時々雪飛、夕成雨、温、慈君少々御腹合悪敷、午後迄御平臥被成、
夕為窺御機嫌罷出、午に辻清人来、夜お梅・恒伴帰ル

○廿一日、甲戌、曇、時々雨、寒、朝弓術稽古ニ出、例時出勤、夕八時頃退、家小
快起、矢野源内疝積ニ而難儀之由、見舞使遣ス、夜石井後室家小見舞ニ入来

○廿二日、乙亥、曇、午後雨、温、朝西向寺へ参、辻清人来、素説所講釈へ出席、
例時出勤、夕八時過退、夕渡辺四郎右衛門妻祝詞入来、夜西鼓頃有地震、稍長く
且有力、今日風呂を建、浴

○廿三日、丙子、晴、余寒冽、御吉例之通御屋祈禱ニ付五半時頃出仕、今日者明星
院不快ニ付院代正観寺被来、御料理出候節予相伴仕、夕八時過退、出仕中悪寒之
氣味有之、出宅後頭痛甚敷ニ付臥

○廿四日、丁丑、晴、余寒猛、朝水堅、熱出、頭痛益強候ニ付不能出勤、其段同勤兩
人へ以紙面及案内、御用達中御奥江之案内者追書ニ頼遣ス也、(森島)家来兵藏夜前以来風

邪ニ而臥、此節世上風邪大流行、中二者重キ症も有之由也、予今晚以来兩度発汗
いたし候へ共其割合ニ不快、熱も格別之事も無之様ニ候へ共腰脚強痛、腹内鬱急、
食事一切不進、致難儀也、石井後室為見舞入来、渡辺・堀尾の見舞使来ル

○廿五日、戊寅、晴、余寒強、今日も不快、同様食餌益不進、困ル、三宅内外・矢
野源内為見舞入来、来ル廿九日文恭院様御法事有之ニ付諸事穩便ニ仕、火元念候

(德川家寄)

様御移檄并二来月十日・十一日〔淺野彌長〕顕妙院様百五拾回御忌御法事御修被仰付候間、諸事
 穩便二仕、火元念入候様御移檄、右二付当年者初午神事来月廿四日二仕候様、三之
 丸稻荷社拜參同廿三日・廿四日兩日二相成候旨も夫々御移檄出ル、兵藏今晚致下宿
 也

○廿六日、己卯、晴、余寒徐、夕微雨、予少々熱も醒候得共食味患敷、頭痛甚敷二付
 松本良伯申遣し、夜中来診、何も格別之風〔義〕二者無之候得共、此節流行之風邪者皆斯
 様二而一般之微疫症故、軽キ事といへとも即治いたしかたき由申、薬を患、家内も
 今日者又々頭痛、腹瀉之気味二而平臥故診を乞、薬を患、宝国童子祥月二候得共、
 妙慶院へ代參遣ス事不能、堀尾善大夫・石井寿兵衛為見舞入来、今日渡辺雅登・
 伊藤徳之助・鼓螺方長束吉之進・米原岩之助・野口唯藏・石川東太郎、吉田儀右衛
 門殿江甲州流為入門罷越、雅登・徳之助江者直二采配軍扇之伝授も有之、佐藤益之
 丞も右同断之由、畢竟此度備立稽古始候得者足輕頭を相勤候故也

○廿七日、庚辰、晴、余寒又強、予少々快方二而頭痛大二宜、家小者快起、慈君又御
 頭痛二而御平臥也、小倉甚右衛門・星野武平次・長喜三太為見舞入来、渡辺右使来
 ル、藤野源兵衛病死いたし候由也

○廿八日、辛巳、晴、暖甚、予愈快方也、慈君も今日者御快起被成也、夕松本良伯
 来診、大島五兵衛・湯川新太郎・由良政太郎見舞入来

○廿九日、壬午、晴、風吹、寒、予風邪弥快方二付夕月代、頬髭を剃也、今日於松
 栄寺文恭院様御法事二付御寺詰右近様〔淺野〕之處、御風邪二而御頼二付、此御方様御詰被

遊候由、御名代者主水様御勤被成候由也、〔夜慈君・家小妙慶院江參、安産・小兒安全之呪を授り候由、護符をも被患候由也〕

二月 大

〔朔日、殿様当年御四十一御厄入、御先例之趣者被為在候へ共、当御場合之義、御国元二而之御祝事者被差止、今日於江戸真之御内輪限之御内祝被為在候筈之由也〕

○朔日、癸未、晴又曇、余寒猛冽、〔朝渡辺雅登為見舞入来、〔予昨夕月代剃試候処、未透与快方二者無之候得共、押而例時より出勤仕ル也、夕八時過退、〔例年之通春御指紙渡、予も附足輕之御切米頂戴仕ル也、相場久芳・壹歩米石二付九拾匁替也、〔堀尾眠石翁入来、孫幾之進江渡辺雅登嫡女おてつ縁組之義薄約束有之候由内話有之也、安心之怡申置也〕

○二日、甲申、終日雪降、積寸余、々寒烈敷也、〔今日も悪寒之気味未去候故終日蒲団を被、衾炉を不離也、〔山崎右内・小倉甚右衛門見舞入来、〔松本良伯来診、〔夜中兵藏快由二而歸来ル

○三日、乙酉、晴、余寒如昨、〔朝素読所講釈へ出席、直二出勤、夕八時過退、〔家小風邪今以得斗不致、今日者亦在蓐也、〔渡辺雅登風邪二而今日出勤無之、見舞使遣ス

○四日、丙戌、晴、冷氣強、〔例時出勤、夕八時過退、〔森岡・辻二も不殘風邪之由二候へ共、此間中無沙汰いたし候二付、今日兵藏見舞二遣ス、追々快方之由、尤辻清人者いまた平臥之由也

○五日、丁亥、晴又薄陰、余寒強、〔慈君朝より御平臥也、〔堀尾善大夫風邪平臥之由、頼二付午前為伺御機嫌罷出

○六日、戊子、曇、余寒強、午後成雨、又成霰、終成雪、例時出勤、夕八時前退、堀尾善大夫風邪二而今日方出勤無之、渡辺雅登今日方快出也、丹羽庄藏俸清松義病氣之処養生不叶、死去之旨昨五日之日付二而為知并大切之為知共来、早速木野・丹羽へ悔見舞使遣又也、慈君今日者少々御快方二候へ共、御食事一匁御進不被成也

○七日、己丑、晴又曇、時々雪飛、風吹、余寒猛也、朝素読所会説江出席、直二出勤、夕八時頃退、家小又々頭痛強、臥、慈君今日者大分御快方也

○八日、庚寅、晴、余寒猛酷、終日東山見晴雪、朝堀尾江善大夫見舞、先日頃度々預見舞候謝、且縁組薄約束濟之欲二行、六丁目御館江為窺御機嫌罷出、途吉田藤馬へ去月廿二日御役料御増之為知有之欲、丹羽庄司江清松死去之悔二行、木野へも同斷、水谷江も見舞、未鼓前帰宅、森岡二而午飯を鬻、万之進も先日暫風邪二而困候也、

此節者快出勤も致候由也、山崎右内先日來訪之謝、鱸兵馬先達塩川社供物取帰くれ候謝旁二行也、夕丹羽庄藏此間使虫推謝并今朝參候謝二来

○九日、辛寅、晴、余寒嚴酷、例時出勤、夕八時退、慈君・家小共追々快方也、岩崎常介為見舞入来、渡辺雅登風邪再感之氣味二而猶又今日煩案内有之也、高謙院様方為御年玉扇子三本、洛焼きひし虫推一頂戴仕ル也、同役何れ茂同様也

○十日、壬辰、晴、余寒依然、啓蟄二月節也、例時出勤、夕八時退、已鼓有地震、稍強、地鳴甚、家小今朝方快起、今日顯妙院様御法事御速夜二付日通寺江右近様御寺詰被成候由也、渡辺雅登今日者出勤有之也

○十一日、癸巳、晴又曇、余寒強、日通寺江為御寺詰御出被遊候二付、暁七半時頃御

十日

啓蟄節

館へ出、全体雅登可被出所、風邪未颯破離与無之由二而頼二付予出ル也、六時過退、

〔早朝岩崎常介方逗留之母病氣差重候由為知来二付、早速使遣、且見舞候処、今晚七時過物故之由、行年八十一歳、此間以来流行之風邪ニ感冒之処、昨朝以来胸痛ニ成、今晚以来俄ニ差重、右之次第之由也、五半時頃迄見合帰ル、〔同方江終日下女を遣、助力いたす也、〔夜九時葬式、妙風寺江家来を会せしむ、尤右老人者故喜東次離別之母二而内分逗留之人故、此方之処者病氣建二而出、寺二而之葬式也

○十二日、甲午、曇、微雨、余寒大二緩、〔例時出勤、夕八時前退、堀尾善大夫今日ハ快出也、〔退出後岩崎へ見舞、海蔵寺隱居被參居、酒出ル、〔夜長喜三太・湯川新太郎入来、新太郎者内用談也、〔上方筋此節風邪大流行二而死人殊外多、大坂辺別而甚敷、垂墨利加風与唱、麦藁二而夷船を造、神送を致、誠ニ賑敷、其藁船川口江滿、諸船通行之妨を成候故御停止ニ相成、諸所二而焼捨候様ニ与被仰出候程之事之由、下之方も流行之由、海蔵寺隱居話也

○十三日、乙未、雨、温、〔朝素読所講釈へ出席、直ニ出勤、夕八時前退也、堀尾善大夫夜前以来腹瀉之由二而今日者尚又引籠、出勤無之、夕見舞使遣ス、〔夕桑原吉郎二為風邪見舞入来

○十四日、丙申、風吹、余寒強、時々雨雪、午後稍穩、〔未鼓前々神田杜江參、加賀守宅江行、家小妊娠ニ付無滯平産、出生之小兒安全成長之守護調くれ候様頼、銀貳兩御初穂備置也、達而留、神酒を出ス、申鼓後帰ル

○十五日、丁酉、晴、余寒緩、〔朝冲和多理を訪、焰硝製法之義ニ付内々及尋合也、出

衛様御内命ニ依而也、同方内政去ル八日安産、女子出生之由也、例時出勤、夕八時前退、々出後御用向ニ而渡辺へ会、及暮帰、奥田隆玄院当年六十初度昨日内祝いたし候由ニ而、無屹昨夕肴を惠候故、此方方も今日杉原紙式帖并保命酒一陶内々祝して贈る也、辻お恒今日誕生日之由ニ而赤小豆飯・繪等贈来ル、岩崎常介も来ル十日信(是信カ)是院初七日法事致候由ニ而、明夕非時之案内有之也

○十六日、戊戌、晴、稍暄、夜前以来頭痛悪寒之気味有之、依而今朝妙慶院江參詣不能、兵藏代參申付、例時出勤、夕八時前退、平野藤吉郎入来、森岡万之進同、片岡弘貢此度槍術為修業当地江出候由ニ而昨日為見舞入来之由、出勤後ニ付不遇、同人者島末源太殿門人、鍵槍之達人ニ而、島末門下ニ而者随一之高弟之由也、備前御家老伊木何某殿之家中弘養子ニ參、昨年致家督候也、夕岩崎へ連夜ニ被招行、妙風寺・守山源之助・平野藤吉郎・桑原吉郎・藤井乙次郎杯会ス、夜渡辺へ左伝会ニ付跡ニ而酒出ル

○十七日、己亥、晴、又曇、温、昨夜前以来又々微邪ニ感し候気味与相見、菟角頭痛難治、悪氣有之候候(行カ)、今朝余程発汗いたし少々快方也、堀尾眠石入来、今朝岩崎寺妙風寺へ兵藏代參申付、法事中為詰也、午後渡辺氏へ御用向ニ付会ス、家小夜中白神社へ參、直ニ木野へ行、宿ス、伯母君今以御平臥之由也、夜頭痛、早臥

○十八日、庚子、晴、暖氣稍覺春色、今日も頭痛有之候へ共少々快方也、朝素読所会読へ出席、直ニ出勤、夕八時頃退、退出後御用向ニ而河瀬喜和馬へ行、謁ス、其後渡辺氏へ行、又御館へ出、酉鼓後退、昨日午後奥田隆玄院へ年賀之飲且到来物之

十九日

一御切米四拾壹石
三人扶持

太郎吉跡目

柴田千太郎殿

二同式拾三石
三人扶持

儀助跡目

松浦宮吉殿

廿日、御中老格隱居今中
丹後殿物故之由也

廿三日

一御切米四拾七石
三人扶持

完六跡目

岡田嘉治馬殿

廿四日、御裏御鎮守社之
御供物頂戴仕ル也

謝二行也、夜早臥

○十九日、辛丑、曇時々雨、暖也、例時出勤、夕八時前退、々出後渡辺へ会入、薄暮
帰ル、今日者頭痛大二快方也、悪寒も止、夜半風吹、強

○廿日、壬寅、晴、風吹、余寒又復、冷、朝被為召候而御館へ出ル、夫右渡辺氏へ御
用向ニ会、夕申鼓後帰、夜渡辺雅登左伝対読ニ被来、家小夜木野より帰ル、池田
加賀守へ今朝此間頼置候御札取ニ遣入、御祈禱之策并安産之守調差越也、夜堀尾
善大夫御用向ニ而入来

○廿一日、癸卯、曇又晴、寒し、例時出勤、夕八時頃退、々出掛北御部屋へ出、申鼓
前退、今朝辻清人入来

○廿二日、甲辰、雨、温、朝西向寺江參、帰掛岩崎へ此間法事済之見舞挨拶二行、

素説所講釈江出席、夫右出勤、夕八時退、夕從尾道三島屋御袋不意二見ヘル、家
来者人連来り、直ニ宿入、去冬孝助死後近処方程能養子有之、先居合も能、致安心
候故慈君へ久振御目ニか、り度俄ニ思立来候由也、養子名者栄助与云、当年廿三歳、
実家者鱒屋何某之由也

○廿三日、乙巳、晴、暄、風吹、朝射場へ出、夕御用向ニ而被為召、罷出ル、夜木
野一馬先達而悔ニ參候謝ニ入来、酒を出入、辻妹来宿、お恒も来、山県虎之丞姉此
節逗留之由ニ而付来ル

○廿四日、丙午、晴、夕曇、暖、去ル十二日初午之処稻荷社祭礼延引、今日有之候ニ
付、森岡弟婦朝々来、おさよ・おますも来ル也、藤川甚吉・乙次郎同断、辻清人・

廿六日

春分節

森岡万之進夕方来ル、波多野権祐清太郎を連来ル、米原岩之助母・菅平磨母も来、夫々祭之酒飯を饗ス、森岡弟婦・辻妹も夜皆帰ル、例時出勤、夕八時頃退、今朝御乘馬江出ル、夜雨

○廿五日、丁未、晴、風吹、暖、朝弓術稽古ニ出、例時出勤、夕七時前退、夜渡辺へ左伝対読ニ行

○廿六日、戊申、曇、暖甚、三島屋へ付来候藤平昨朝同方へ返ス也、春分、昨日御中老格隠居死去、今中丹後殿葬式殊外奢侈、僭上之事之由、風評也、夜雨

○廿七日、己酉、曇、寒、朝素読所講会読へ出席、直ニ出勤、夕八半時頃退、夜渡辺雅登左伝対読ニ来、亥鼓後被為召、御奥へ出ル、子鼓前退

○廿八日、庚戌、晴、暖、例時出勤、夕八時後退、三島屋御袋夜辻へ被行、慈君一緒御出、御宿し被成也、夜中御用向ニ而御奥へ出ル、夕中津屋万之助来宿ス

○廿九日、辛亥、晴、寒、雪飛、昨来少々腹痛之気味ニ而困、夜又御用向ニ而御奥へ出ル、中津屋万之助今昼後帰

○卅日、壬子、晴、稍暖、例時出勤、夕八時過退、退出後御用向ニ而河瀬喜和馬江行、謁ス、日之入頃帰、直ニ御館へ出、無程退出、昨夕者あちらる喜和馬來也、一昨廿七日左之通御移檄出ル也

当御大儉ニ付而ハ御家中之輩質素節儉相用、銘々暮向等作略勘弁相尽、武備之義相心掛、取続相勤候様連々御示之趣も候処、追々無何と氣弛、手戻相成、就中客事之儀相甘ミ、御時合不都合之饗応向等いたし候輩も有之哉之趣ニ相聞、

江戸御沙汰書之内

一蝦夷地在住被仰付

小普請組

真崎彦一郎殿

常見栄太郎殿

秋山繁太郎殿

此分計三月之中也

并二吉凶贈物之儀者銀札を以取扱有之候筈之処、近頃流合、品物を以取扱有之、彼是甚心得違、御趣意難応、御年限中者聊無違失兼々御示之趣相守、暮向令覺悟、相凌候様可申聞旨被仰出候

右之趣相組支配方末々迄不洩様可被申聞候

二月廿七日

三月 小

朔日、於江戸

一御側詰

御膳番兼役

松村喜和馬殿

御奥小姓筆頭

御小納戸右

四日、万之進來(森岡)

九日

二御切米式拾九石
三人扶持

愛三郎跡目

庄林左仲太殿

○朔日、癸丑、晴、稍暖、朝御乘馬江出ル、例時出勤、夕八時頃退、暮過方御用向二而御館へ出、夫方又御家司中宅へ参、及深更帰、慈君今晚迂方直二松田謙藏方へ御出、御宿被成候由、三島屋御福老被参候故御出被成候由也、今夕射場へ出ル、○二日、甲寅、曇、夕雨、温、朝御用向有之、御館へ出、夫方槍衛見物物二御場所へ出ス、波多野清太郎来、慈君今晚同方へ御宿被成候旨申来ル也、木野へ見舞使遣ス、伯母君弥御快出也

○三日、乙卯、雨、温、午後晴、有風、朝辰鼓頃麻上下着出仕、御登城前於御居間御祝詞申上、周防様江之御祝詞御次二於て御用達迄申上、出衛様二者御屋形御部屋二而御逢被成、御祝詞申上ル、夫方御奥へ出退、朝辻清人祝詞二来、祝酒飯饗ス、午後渡辺雅登・堀尾善大夫父子入来、囲碁、夕酒を饗ス、当正月元日御礼御帖付之節、御中老格浅野外衛殿大御広間一之間、御家老様御同間之内へ着坐被致、御先例無之義二付御下城後被仰合有之、其後早速右近様(或野)御用人大島鞆負殿を以御年寄

〔九日、御用召

一 御召下御羽織
一 御肴料 下正

渡辺雅登

右御役向出精相勤候二付

一 佐藤益之丞

右軍学出精二付為稽古料

毎歳金三両被下之、自今

弥以相励、御用立候様可

仕旨被仰出

一 御小姓組御雇
一 式人扶持

徳之助俸

伊藤茂登

一金壹両

星野正大夫

右御役向常々出精仕候二

付

一 銀壹枚

山崎右内

右常々出精仕候付

一 御切米壹石
一 御増

衆へ御尋合有之候処、夫切二而何とも御答も不被申上、同九日御歡御帖之節も其儘

一之間へ着坐有之、依之其後度々御催促有之、漸去月廿五日右之御返答被申上候由

之処、被申上方甚熟与無之ニ付猶又被仰合、去ル朔日御年寄武田大炊殿を此御方様

へ御呼寄被遊、段々御存寄被仰述候処、無菟角感服被仕、早速登城有之、夕方猶又

被罷出、来ル端午御帳之節迄二者江戸へ被伺、御先例通りニ可相成旨被申上候由、

依之又昨朝大御目付中を以右一件及落着候迄之処、先古例之通二之間着坐被致候様

外衛殿江被申談候様ニ与被仰遣候由、右之故歟外衛殿今日者登城無之候由也、〔慈君

夜從波多野御歸り被成、三島屋御袋も同様帰候也

○四日、丙辰、晴、風寒、〔出衛様(淺野)昨夕より御腹痛ニ而御困被成候二付、朝卒為窺御機嫌

罷出、〔御乗馬へ出ル、〔例時出勤、夕八時過退、〔退出後牛田出火二付出ル、無程鎮、

田中何某与歟申御歩行組居宅・借屋共焼失之由也、〔家小妊娠ニ付今日穩婆を呼致着

帯、祝義式匆五分遣之、祝酒飯を饗、〔栄作妻をも其節招、酒飯を為祝候由也

○五日、丁巳、晴、稍暖、夕曇、夜雨、〔朝弓衛稽古ニ出ル、〔午後六丁目御館へ罷出、

往来妙慶院へ參、湯川新太郎を訪、片岡貢を島末源太殿方ニ訪、森岡・木野・水谷

へ見舞、水谷ニ而夜中迄嘸帰、木野・水谷ニ而酒出ル、西堂橋普請調、始而通ル、

此度者露橋ニ成、屋根無之、橋も至而鹿薄ニ成也、〔六丁目様ニ而今日耕雲殿御一周

忌ニ付御茶・牡丹餅頂戴被仰付也、〔家小今夕吐有之候由、臥

○六日、戊午、雨、寒、〔例時出勤、夕八半時頃退、〔沢崎幸右衛門多八郎先達而持鎗紛失之御

被是致配意くれ、殊ニ藤森江も度々參くれ候二付、右之謝意二一夕招候而酒を饗度

森岡万之進

右同断二付

一金子貳百疋

菅平磨

右年来出精仕候二付

一御七
藥種料 金壹両

金子元達

一銀式枚

每歲被下之

保人俵

由良政太郎

右每歲被下候御銀前段之
通被成下候間、出掛□事之儀

弥以相励、常々素読所へ

出席候様被仰出

一御小姓組本格

御切米七石二被成下
出衛様御側方

佐久間藤之丞

御次詰加方

一御步行組御履
式人扶持

相合居候処、彼是差間延引二成、依而今夕米參くれ候様万之進江申遣、一応来候筈二

返答申越候得共、猶又差間出来之由二而断申来候故、少々用意之酒肴を万之進迄為
持遣又也

○七日、己未、晴又曇、時々雨、寒、朝素読所会読江出席、相濟出勤、夕八時前退、

沢崎幸右衛門昨日之謝二来候由、今朝由良政太郎来、同人遊学之義二付先達而内
談之趣何分見合候方可然存候段厚及示諭置也、夕射場へ出、西向寺へ兵藏森島為參也、

夜渡辺へ左伝会二付行、芝山様方例年之通御扇子五本拝領仕、老女八十野迄厚御
礼之義申出置也

○八日、庚申、曇、時々雨、又晴、寒、朝御乘馬江出ル

○九日、辛酉、晴或曇、寒、朝射場江出、例時出勤、夕八半時頃退、御家中方左
之通奉書到来ス

御自分儀御用之儀有之候間、明十日四ツ時御屋形江罷出候様御意御座候、以上

三月九日

村上彦右衛門様

渡辺宗右衛門

右奉得其意候旨受而及返書也、其段告于廟、恐入罷在也、右之趣同御役両家并森

岡・辻・木野・水谷・藤川・岩崎へ為知遣也、森岡万之進方も同様明日御用召を蒙
候段為知来也、渡辺雅登方も御用召之義為知来ル也、風呂を沸

○十日、壬戌、晴或曇、時雨、寒、朝御用召之趣石井・小倉へ為知遣ス、就右寿兵
衛石井・甚右衛門小倉為見舞来、四ツ時頃出勤、就御用罷出候段御家中江及案内也、九

嘉仲太保

田宮政之進

一日參

野口半助

一 御小姓組並御取立
御奥附定加

山根榮藏

御歩行筆頭ろ

一 御歩行筆頭

野原八右衛門

御歩行目付ろ

一 御用部屋
書役

富水源五郎

御歩目付ろ

一 御小姓組御取立
御勤定所詰

岡田八十太郎

右其儘御趣法方出勤之事

還俗

一 御用部屋詰
日參

三津井玄賀

滝次郎与改名

時前於御書院御前御用ニ而左之通御懇命を蒙、御加増三拾石拝領仕ル也、御取合御家司渡辺宗右衛門殿也

其方儀役向常々致精勤令満足候、依之加増三拾石遣之

右之通御意有之候ニ付拝聽平服仕、御取合之方江少し向替、御懇之御意を奉蒙、御

加増拝領仕、存掛も無御坐難有仕合奉存候、御請之儀宜被仰上可被下与申述、其段

御取合より申上有之、拝伏して退、其後於御用所宗右衛門殿ろ左之通御書付被相渡

加増三拾石 村上彦右衛門

右一応頂戴、誠ニ存掛も無御坐、忝仕合奉存候、於御前一通御請者申上候得共猶宜敷奉頼候、乍併御承知之通不都束之身前、常々何こそ御用ニも不相立候処、一昨年御褒美頂戴被仰付、猶又当年々様御加増被下置候段、御時合柄与申甚恐入候義奉存候段申述候処、如何様御尤之儀ニ候得共、近來者別而御用多之処御精勤有之、御満足被遊、厚思召を以右様被蒙仰、御本意之儀ニ候与の旨被申聞、夫より同勤へ及吹聴也、今日者渡辺雅登も御召下御羽織、御肴料頂戴有之候ニ付、同人一緒ニ御次江出、御用達江右被仰付候趣申述、右御請御序之節猶宜敷御申上可被下旨申述、其後御目見被仰付候節御直ニも御請申上ル也、退出掛御家司中宅へ為御請罷越、台所ニ而申直、北之御部屋へ出、御側方頭取石井寿兵衛江謁し、出衛様江御吹聴宜申上被呉候様申述置歸宅、右之節も雅登同道いたす也、歸宅之上神拝、告于廟、慈君并家小江も及吹聴也、森岡万之進も今日御切米壹石御増頂戴仕、留守中吹聴ニ來候由也、

御歩行組被召出
鼻紙代並之通
御歩行日付
御先供頭取兼帶
御役料並之通

一 松尾茂三郎

御雇御帳前右

長束清次郎

同書役右

一 御切米五斗
御増

中島庄七

右常々出精二付

一金子式百疋

老女

八十野

右年来出精相勤候二付

老女

一 御切米壹石御増
一 式人扶持

女中

たき

其儘六丁目様御附

一 足輕本格
御次坊主

吉本春悅

当年予四十四歳、被召出以来廿三年、家督并御役成以来十四年二候処、当家始而之百三拾石之禄二相成候者不思議之果報与可謂歟、併ながら全家君并祖考之御余沢之使然処与及感戴也、尤先前之当御役者皆々百三拾石高二而有之し趣也、大島五兵衛・長武左衛門・平野藤吉郎・野口唯藏・桑原盛藏早速来、何角見合、為知等之義取計くれる、尤為知者御家司中・同御役、其外者一緒内他向二而、格別二懇意二致候方角、兩且寺等迄差出也、八時過る六丁目御館江為御吹聴御請罷出ル、今日者己斐村辺へ為御歩行御出被為在、御留守中也、森岡万之進へ逢、右之趣申述置帰ル也、渡辺雅登伴入、森岡へ歎・普為聴旁二行、帰途妙慶院・西向寺御靈々江為御普為聴卒与參る也、堀尾善大夫・同眠石・石井寿兵衛・小倉甚右衛門始歎客数人有之、藤川甚吉郎朝来、辻清人朝来、夕又来、お梅昼後来、直二宿入、木野る使来ル、夕前段見合二預候四人并清人・甚吉郎江吸物取合せ肴二而祝酒を饗、折柄眠石翁夫婦、石井後室ほと吃与なく噂いたし一緒二饗入、寿兵衛・甚右衛門・矢野源内も及噂候へ共、留守或者不快等二而不来、岩崎之方忌中故いつれも不来、右之外者たとひ懇中たり共近年被仰出之振合故手付のし限也、出入之者田中実五郎母子、岡野新五、小回り弥十等来り見合せくれる也

○十一日、癸亥、晴或曇、朝渡辺・堀尾へ為吹聴行、尤渡辺江者歎も兼參候也、渡辺雅登自身普為聴・歎旁二入来、其外来客数人有之、水谷又左衛門殿夕方御出、木野一馬も夜二入来、残酒を饗、長喜大夫・小倉甚右衛門夕方折能来候二付饗入、お梅今晚帰ル、兵藏(森島)付帰入、今曉地震有之候由也、岩崎良之進忌明二付挨拶・歎旁

右自今活花之義心掛、御

用立候様可仕事

但毎歳銀壹枚被下之

右之外足輕以下者略之

十六日早晨

酢和会

香茸

油あけ

すたれふ

木くらげ

蓮根

みそ

苞豆ふ

小しゐ茸

青味

御飯

御香油

葛煮

うと

さんあん

岩茸

くわい

おろしわさび

二来

○十二日、甲子、曇、午後雨、寒、例時出勤、夕八時過退、夕桑原吉郎二・森岡万

之進酒を饗、折柄岩崎良之進をも呼饗、尤極夕之事也、此度甲州流足輕備立稽古御

初二付、予等も同流入門不致候而者見分も不出来、差間筋有之二付、致入門候様被

仰出、依之今朝吉田儀右衛門殿へ行、入門之式相調、機山公画像前(武田信玄)ニ於て神酒頂

戴、誓紙血判いたす、堀尾善大夫同伴、上下着ニ而行、帰掛小幡孫兵衛殿方江も挨

拶被参候様ニとの事二付、同方へも参、台所ニ而申置、手札差置帰る也、供連者若

党・草履取計ニ而参ル也、御側辺並ニ弓鉄師範兩人共参ル也、今朝御槍之御場所へ

出、片岡貢業前を初而一覽ス、何分余程之達者と見ゆる、感心之至也、右同人義当

所逗留中素読所御多門内御不用之間居所ニ御貸被下、式人扶持御仕向、御家来中稽

古望之者者勝手ニ致稽古候様被仰出、依而香取流槍術之御場所へも此間へ出、御多

門江者今日引移候由也、今日も歡客来数人有之也

○十三日、乙丑、晴、暖、朝素読所講釈へ出席、直ニ出勤、夕八時過退、吉田藤馬

其外歡客来彼是有之也

○十四日、丙寅、晴、暖、夕曇、雨、慈君今早晨中津屋へ三島屋御袋を伴御出被成、

小人弥三を頼付遣ス也、朝御乗馬へ出ル、午時を祇園藤之森社へ参ル、公事二付

心願之義有之、御初穂銀式両備る也、帰途雨二逢、野口半助方ニ而傘を借帰也、今

朝波多野権枯来、酒を饗也

○十五日、丁卯、雨或晴、暖気甚、朝片岡貢来謁、例時出勤、夕八時退、今日進藤

竹筍
推茸
牛房
飛龍頭
御平
路
三ツ葉
木の芽

御菓子

焼まん頭
卷せんへい
ふきよせ

以上

夕

御茶

さ、け飯

右森岡・辻へ贈

十七日

彼岸桜満開

彦兵衛殿御館入初而被出候ニ付出而謁ス、今夕北之御部屋江昨年御引移後始而御兩殿様を御招被為在候ニ付、予も被為召候而御取持ニ罷出、御家司中・同勤不殘、其外堀尾眠石、御医師等も罷出ル也、段々御饗応被成、深更ニ及御立坐被遊、其後退出仕ル也、賀客彼是有之、三島屋栄助の書状差越、塩魚を恵也

○十六日、戊辰、雨、暖、先考御祥月ニ付今早晨祭祀恒規之通相濟也、尤秀光廟も如例奉配祀也、早朝妙慶院へ參、和尚二逢、此間御加増拜領ニ付為寸志銀壺両備る也、

例時出勤、夕八時退今朝御寄合有之ニ付例時、此度御加増拜領ニ付、去辰霜月物成増渡

三石式斗、同暮御扶助七歩五厘渡之増渡壺石八斗之米切手式通相渡、御勘定奉行星野正大夫右手紙ニ而為持來、忝致謹戴候段及返書、告于廟、家内へも為戴、謹而拝領仕也、北御部屋へ昨日之御札ニ出ル也

○十七日、己巳、曇又晴、夕又曇、暖、朝弓術へ出、夕森岡へ行、此度御切米御増之祝酒を饗ス、同所御多門内不殘飲之返札ニ行、入夜帰ル

○十八日、庚午、雨、夜有風、朝素読所会読へ出席、今日者旦那様御臨坐被遊、相濟出勤、夕八時頃退、平野藤吉郎來

○十九日、辛未、雨、午後晴、暖、例時出勤、夕八時前退、夕六丁目様江被為召、善大夫同道罷出、雅登も跡る出ル、今日者御花見之御催ニ而且那樣を御招被遊、御取持ニ被為召候也、大田屋惣助・中屋新助与申町人之女兩人出候而有舞、御透覽被遊也、皆幼年ニ候へ共殊外善舞面白し、尤三絃等を以囃し、其段心中甚痛入候也、其後御饗応被為在、御酒頂戴仕ル也、彼是及深更御立坐被遊、丑鼓後帰宅

廿二日夕

御茶

青豆飯

右森岡贈

同日夜、慈君・家小森岡へ歎二行、饗有之候由、今朝万之進來、其義を中候故也

廿三日

源平桃満開

廿六日

穀雨節

廿七日、棒火矢有之、左之通被仰出也

島本甚内殿

同広右衛門殿

丹羽清兵衛殿

矢部音門殿

○廿日、壬申、快晴、暖寒、朝御乗馬へ出、午後御多門内不殘歎之返礼二行、夫々直二白鳥辺返礼勤いたす、及暮帰、辻二而酒出ル、帰途桃林堤を遶り帰ル、此節満開与見ゆる、尤薄暮二及候故遠望者不分明、遊人帰路渡口喧騒たり、夜慈君從三島屋御戻被成、三島屋お袋も同断也

○廿一日、癸酉、雨、寒、例時出勤、夕九半時過退

○廿二日、甲戌、晴又曇、寒、夕温、先妣御祥月二付早朝西向寺へ參、新発意二逢、妙慶院同様銀巻両備る也、且常称・能称兩廟五十回忌来月七日へ取越度意粗咄し置、住寺者先月上京、本山御用向二付来春迄被相詰候之由也、素読所講釈へ出席、相濟出勤、夕八時頃退、夕弓術へ出

○廿三日、乙亥、曇或晴、暖、朝御乗馬へ出ル、夕森岡後室おますを連入來、饗ス、三島屋お袋今晚船便二而被帰、尾道喜代兵衛船也、船場迄兵藏付遣ス、人を付送り可申与申候得共、不及其義旨達而断二付任其意人を者不付也

○廿四日、丙子、晴、暖、例時出勤、夕八時過、今日御步行組辺歎二預候方角へ返礼二兵藏遣ス、尤御小姓組も遠方住居之分江者先使二而返礼申置也

○廿五日、丁丑、曇後雨、温、朝弓術稽古ニ出ル、例時出勤、夕八時過退、西向寺兩御墓所磨今日兵藏并二田中実五郎・三次兩人を頼遣ス、雨天ニ成候故墨漆入候義不出来、磨計いたし候由也

○廿六日、戊寅、曇、暖、午前御三丸内主水様御向屋敷内、夫々六丁目、水主町御船屋敷内辺返礼勤ニ出ル、吉田藤馬方ニ而八折柄御用向之義も及咄合、木野ニ而夕

島本金太郎殿之進

殿様当年御暇年被為在候得共、御人少二付当年者御暇被下間敷旨御用番御老中牧野備前守様へ御留守居御呼寄二而御書付を以御達し有之候由也

廿九日夕

海棠満開

廿九日

酒肴

八寸

湯田楽
木の芽味噌

井 鰻糸作り

猪口 胡椒
醤油

平鉢 鱺 焼て

吸物 蛤

花すし

以上

茶を被出、桑原二而洒出ル、長束茂兵衛方二而達而留、酒を出ス、日之入過帰宅、木野一馬夫婦共風邪之由二而平臥也、八木広次郎唯今迄那方御歩行目付相勤罷在候処、去ル十九日御免之由話也、今日穀雨節也

○廿七日、己卯、晴、寒、朝素読所会説江出席、夫出勤、九半時頃退、今日島本甚内殿門弟子少々被連被罷出、於御馬場三十間之棒火矢業前被人御覧候二付、為見物罷出候之様御沙汰も被為在候由二付出ル、五十目五寸、三十目五寸之筒二而三十間之鬼形有之也、中り者悪敷もので見ゆる也、右二付周防様二も御出被遊、於御次御機嫌相伺ふ也、星野武平次娘此間方風邪二而難儀之様子二付今朝訪之、今晚以來不相勝、殊外氣遣候由也、然処至夕病死之趣承候二付見舞使遣し、猶又悔使ス也、当年八歳之由也

○廿八日、庚辰、晴、寒、朝島本広右衛門殿被来、謁、昨日之御挨拶也、松田謙造為飲入来、吉本恒之丞来、諸武芸御覧被仰出候二付、炮術之方予二も出候哉相尋候二付、当度者御格式之御覧故罷出段答置也、例時出勤、夕八時過退、岩崎四十九日逮夜之由二而被招候得共、用事湊居候二付慈君御出被下也、一緒内彼是會、饗有之候由也、夕長喜三太来話

○廿九日、辛巳、雨、寒し、朝岩崎寺へ兵藏代参申付、星野正大夫父子を吊、射場へ出ル、明日足輕交代便二付東城徳了寺江来ル五月七日常称廟五拾回忌之義申遣、茶湯料相備、松木屋亀治郎へ墓所掃除之義頼遣し、入用銀式匁遣し置也、宮崎へも右之趣申遣置也、御歩行目付松井八郎夜前致病死候由、傷寒症之由也、足冷二付

当夏秋中時ニ取足袋相用申度段昨日於席渡辺雅登江申出置候処、今日御家司中ノ紙面ニ而勝手次第仕候様被仰出候旨申来、御受返書差出也、海棠花満開ニ付極夕渡辺雅登・堀尾善大夫を招、花見ニ托し軽キ酒香を饗、先達而御加増拜領之祝意を含而右之通り也、折柄矢野源内・石井寿兵衛・小倉甚右衛門・三宅内外をも取持旁招也

去ル十五日

一御切米式拾四石
三人扶持

良左衛門跡目
高橋篤之丞殿

一御切米式拾式石
三人扶持

喜十郎跡目
喜十郎跡目

石家芸之儀近々致執行、御用立候様可仕旨被仰出

同十四日

一近江守様御用達役

池内次郎左衛門殿

御側詰御膳方頭取

一御役御免

定江戸御馬廻り組

玉置 貢殿

四月廿八日、江戸御沙汰書之内

松平頼地讚岐守候

廿八日之内

異国船為防禦大坂安治川・木津川
両川口御台場御取立、大炮据付候

松平出羽守候

異国船渡来之節武州神奈川御警衛

(久松勝成)
松平隠岐守候

御船をも御備被仰出、木津川口

右同文言之内、安治川二ヶ所御台

被仰付候、臨時出張之積相心得、

二ヶ所御台場其方へ御預被遊候、
場被遊御預、武州本牧御警衛之儀
防禦之手筈嚴重可被申付置候
松平出羽守も大坂表警衛被仰付候
(定卷)
者御免被成候
間可申合候

思召を以
正四位上
御同候

朔日

一 思召二而左之通改名之

由

梶川讚岐

右御年寄角右衛門殿事

也

一 知行高百貳拾石

嘉左衛門跡目

上坂毎次郎殿

二 御切米三拾石

三人扶持

直大夫跡目

藤川次郎兵衛殿

四日、西向寺へ備物左之

四月 小

思召を以
少将
御同候

○朔日、壬午、晴、暖、当月子月番受也、矢野源内・石井寿兵衛・小倉甚右衛門・

三宅内外昨夕之謝与して入来、例時出勤、夕八時退、辻清人・波多野清太郎来、

片岡貢先達而以来風邪二而難儀之由二付見舞使遣ス、今日田中実五郎御墓所之墨

沢入ニ行かれる、兵藏も遣ス、尤夕方参候故少し残候由也、慈君夜辻へ御出、御

宿被成、お恒此間々少々熱有之候由也

○二日、癸未、晴、寒、午前為窺御機嫌罷出、三島屋幸助方書状差越、お袋去月廿

六日無滞帰着之由二而、逗留中之挨拶厚申来也、田中実五郎猶又今朝西向寺へ行く

れ、墨漆・しつくり等何も相濟候由也

○三日、甲申、晴、寒、朝素説所講釈へ出席、大学相濟、今日小小学也、例時出勤、

夕八時前退、家小夜前木野へ卒与見舞二行、一馬夫婦共未得斗不快由也、夜慈君

従辻御戻り被成也

○四日、乙酉、晴、寒、朝例時出勤、九半時頃退、甲州流足輕備立稽古去月廿六日

通

一御経料 銀五両

一御鉢米 精八升

右常称廟之分

一御経料 銀五両

一御鉢米 精八升

右能称廟之分

一銀四匁 僧中江

右兼合

〔五日、此度買入候十文字

槍之拵目録左之通

一身 〔広隆作
在銘

但宝蔵院当流之形

芸州住藤原広隆通稱銘ア
ル也

一太刀打 千段卷
黒ぬり

一金具 銀着せ

但二所目釘無双

金具銀無垢

〇始、今日三度目之定日也、仍而為拜見退出後御裏へ出ル、頭并組共いまた熟与手

二不入趣二者候得共、何分越後流之心得方与者大二様子も替り、予等か愚考之所不能也、〔夕右近様御中屋敷内其外歎之返札残を勤ル、七半時前帰宅、〔西向寺へ備物為持遣し、且六日夕八半時之案内申遣、承知之返答申帰ル也、〔星野正大夫方当座法事之由二而、専立寺へ兵藏代參二遣ス也

〇五日、丙戌、晴、朝冷後暖、〔朝為窺御機嫌罷出ル、〔御法事前二付掃除をいたす也、

〔森岡弟婦并水谷伯母君泊掛二来也、〔永野武八郎明日料理之下拵二来呉る也、〔先達而川本屋伊助〇十文字槍之扨物持来見せ候所、幸当春不慮之一件後心寄居候二付、

直段等切磋二及置候処、此方望通二致候趣今日申来候二付、直二買入る也、同人へ

弓箭水葵縁頭之分大小修覆之義去ル二日申付置也、柄糸者昨年高謙院様〇拜領之分歩狭く難用候二付、右之分を以取替、本五歩糸二いたす也、〔四疊半之間炉を塞

〇六日、丁亥、晴、寒、〔例時出勤、夕八時頃退、〔朝石井寿兵衛見舞入来、〔八半時過

西向寺新発意弟子履善来、於内仏回向 阿弥経 念仏、和讃 右再遍 文章、右相濟於座敷非時并酒を出ス、台曳者予曳之、緩々談話、暮前二相成、退出也、今日招候方格

左之通

西向寺新発意 同 弟子 藤川每登殿 木野一馬

辻清人 森岡万之進 岩崎常介 石井寿兵衛

桑原吉郎二 平野藤吉郎 水谷伯母君 辻 妹

森岡後室 同 弟婦 同 子供兩人 岩崎常介妻

一血留 一金繩
一鎗卷

一石突 鉄

但水返之仕付銀象眼

一柄 赤燈

一鞘 一青色羅
一紗ぬり

但形者略之

以上

六日

廟飾

餅 団粉 饅頭

卷煎餅 上ひくわし

茶巾餅 御鉢

御花

鈴掛 あんらじ 躑躅

山吹 蛙手 蘇枋

木蓮 仙台萩 椿

金盞花

布施

一式匁 住持

一壹匁 弟子

右之内藤川每登殿差岡、甚吉郎名代二来、木野一馬不快、森岡後室・岩崎室共不快

二而不来、其余皆来、尤万之進者勝手見合くれ候二付、座敷江者酒之節計出、其外婦

人組者勝手二而膳出ス也、出入之者田中栄作・同実五郎、其外家内之者不残、小回

り庄八、小人国藏・三次を呼、三次者先日以来墓所磨等頼候二付、今日も台所見合

二頼候也、料理者永野武八郎也、小回り弥十も見合呉る、出入之者当番岡野新五・

土井理作・林茂平太も呼而酒飯を饗也、辻妹者夕方より来、直二宿、山県娘も付来

ル也、通ひ弥十娘を雇ふ也

献立

生盛けし酢

皿 ごんにやく
白髪大根
ミしまのり
青すたれふ

油あげ

けん ほう月

みそ

汁 苞豆ふ
粒しる茸

青味

飯 香物唐漬

糟泥卵豆腐

平 大椎たけ
竹筍

三ツ葉

葉山椒

台曳 さつまいも衣揚
青結昆布

中酒

浸物 よめ菜
花生姜

吸物 すめ
松露
めうか小口

新盃

一五分 僕

右当度る増也、先例者壹匁、五分、三分也

右二付到来物者制節録

二委細記候故略之

東城徳了寺ニも御墓所有之二付、去ル朔日足輕交代便例之通茶湯料備、

松本屋龜治郎へ墓所掃除之義頼遣ス也

一銀貳両 茶湯料

一銀貳匁 松本屋へ掃除入用

右之通遣し、且宮崎へも右之趣為知遣ス也

五日

一御歩行頭

松井主馬殿

一郡廻同格

花房清之丞殿

御代官也

硯蓋

にしき豆ふ 押くわゐ

蓮根 揚物品々 香茸ふり芥子

三ツ物

平鉢

こんになやく さし身 白か大根 赤のり 猪口 からしみそ酢

酢漬

井 三ツ葉

小倉麩

八寸

漬香茸

生玉麩

山の芋小口

井

わらひ 白わ会

茶菓子 焼まん頭

下方之分台曳なし、皿も酢和へ、其外も具少々替る、酒肴者二種、八寸、久煮煮、井、わかめ、こんにやく、す醬油也、木野る当六月十日要精院殿廿五回忌之処、来ル十日取越致法事候ニ付九日夕參候様、家小者八日夜々參候様案内申来ル也、

片岡貢不快耽々快方ニ無之困候由ニ付、見舞与して菓子一箱贈る也、同養祖父主計先年先君御不快之節親切ニいたし呉候処、平太夫主計事也、隠居後之名也 昨年死去之節病中之様子も不承、無沙汰ニ過候ニ付聊右之恩意を謝候心持ニ而右様贈ル也

○七日、戊子、晴、寒、夕暖、曇、早朝西向寺江參詣、法事中相詰、四時頃帰ル、回向者観無量寿経再遍也、供列者若党・小者・道具ニ而參ル、左之通參詣被詰也

堀尾眠石

辻清人

石井寿兵衛

平野藤吉郎

前後參詣之方格左之通

森岡万之進

岩崎常介

藤川甚吉

木野代參

桑原吉郎二

一割奉行

吉田直太郎殿

帳場二者田中実五郎参り呉ル、其外昨日呼候者不残参り、法事中詰呉ル也、例時出勤、夕八時過退、夕方堀尾眠石翁を招、困基跡ニ而昨日之残物を以膳并ニ酒を出ス、水谷又左衛門殿も今夕中上御出被成、一緒ニ饗ス、今日者袴着ニ而会^待ス也、料理者何も昨日之通、尤酒肴、わらひ白和会、こんやくさし身を減し三種ニする也、夕辻清人来、夜妹一緒ニ帰ル也

八日、吉田与一右衛門去ル二日病死之由、水上甚大夫方為知来ル也、実者去月十日頃死去之由二候得共、養子等之義二付披露延引ニ相成候也、当年六十五歳、荻野流炮術之達人、且弓・劍術等も免許ニ而、其外博識之人物ニ而有之候処、可惜事也

八日、己丑、晴、暄、朝御乘馬へ出ル、未鼓前六丁目様江為窺御機嫌罷出ル、途白神社へ拝参、先達而予御加恩拜謝之意御初尾を備ル也、帰掛御館へ出、岩崎へ此間法事之節之謝ニ行、西川理三郎・堀尾老人参り居、困基有之候ニ付致見物、入夜帰、酒飯出、御船頭山中権之丞も参居、始而逢、緒方愛蔵婦近頃同方へ迎候由ニ而、岩崎へも今日始而来候由也、今日八丁馬場ニ而乗切有之、通掛り不計致見物也、馬數二十計、大御小姓頭衆刃初内外御役方之衆被乗也、片岡貢不快之義家来、竊ニ東城江申遣候処、養祖母甚氣遣候而昨翌日出足、為見舞出浮、今夕素説所へ参候由也、懇厚之段感入候事也、家小今晚、木野へ行、宿也

九日、庚寅、曇、薄暑之意あり、御用向有之、五半時前出勤、夕八時前退、今夕弓術・炮術御覽ニ付為席詰、当年久振ニ而御格式之御覽也、依て予等者業者不致也、極夕相済退、弓術廿一人、炮術十一人也、得井満四郎四ツ矢皆中也、退出後木野へ連夜ニ被招参ル、水谷又左衛門殿御出、興徳寺者退坐後也、伴角馬子参ル与去ル、外者差問之由ニ而客なし、膳酒出ル、亥鼓頃帰

十日、辛卯、曇、午後雨、温、朝木野法事ニ付興徳寺江参ル、法事始り遅候ニ付少

十二日

立夏

之間詰而未済内ニ帰ル也、(木野一馬室)智鏡院当十月廿七日十七回忌をも一緒ニ取越候之由也、
例時出勤、夕八時頃退、夕弓術へ出、夜家小従木野帰也

○十一日、壬辰、雨、温、朝弓術へ出席、午前為伺御機嫌罷出、北御部屋江も御用
向有之、罷出ル、夕長喜三太入来、極夕方夜へ掛有雷鳴電、雨亦甚

○十二日、癸巳、曇、夕雨、例時出勤、夕八時過退、堀尾眠石此間之謝入来、夕射
場へ出、立夏節也、夜雷鳴

○十三日、甲午、雨、曉雷鳴、夕晴、有風、寒し、例時出勤、夕八時退、御家司中
方紙面ニ而今度御加増之御礼明後十五日四ツ時可被為請旨被仰出候、此段申遣候様
ニとの思召ニ候との旨、追書ニ麻上下着用、尤当御省略ニ付差上物ニ者不及候旨申
来、受而奉得其意、忝仕合奉存候旨返書出ス也、告于廟

○十四日、乙未、朝晴、巳鼓後曇、雨、夕罷、朝御乗馬へ出、夕御館へ出、小倉甚
右衛門方到来之品有之趣ニ而夕方參候様申、全体可辞候得共、昨年以來彼是厚意之
趣も有之候故參ル、酒鮮を出ス、山田多喜登会、行掛片岡貢不快を訪、後室へ始而
遇、今以疼痛不治、食餌も不進之由也

○十五日、丙申、曇、夕雨、一昨記之通ニ付四時前麻上下着ニ而出仕、於御書院御加
増拝領之御礼首尾能申上、奏者御出頭佐藤益之丞身前之御礼相濟、直ニ席詰いたす、
森岡万之進も今日御礼申上也、御礼済後相詰、九半時過退出掛御家司中宅へ回勤罷
越也、万之進今朝来、今日九時揃於素読所席書有之ニ付出席、御臨坐被為在也、

暮前相濟、書生卅六人何れも見事ニ出来也、当年者書生江為御褒美諸口紙三帖ツ、

十五日

御歩行日付掃役
御先供頭取兼帶
御役料並之通

山中十兵衛

廿一日早晨

酢和会

御皿

香たけ
油あけ
すたれふ
木くらけ
大こん
けん

御汁

みそ
すと豆腐
しみる茸
青み

御坪

わらへ
うと

御飯

御香物

御平

竹子
椎たけ
ふき
油あけ
山のいも
三ツ葉
葉さん椒

御菓子

卷煎餅
焼饅頭
吹寄

以上

被下置、予る申達、足輕以下も六人有之、跡二而御透覧被遊、家来兵藏(森島)も出ル也、

堀尾幾之進・藤川甚古為挨拶来、小倉甚右衛門昨夕参候謝与して入来之由

○十六日、丁酉、雨、極早朝妙慶院江参詣、例時出勤、夕八半時前退、木野一馬先

達而法事之節之返礼与して入来、酒を出ス、極夕御用談有之、渡辺氏へ罷越

○十七日、戊戌、晴、暖、鼓頭御機嫌与して御館へ罷出、夫御用向二而吉田藤馬

へ罷越、及応対、帰掛丹羽庄司留守を訪、福山覚右衛門江先日歡之返礼二行、今日

吉本恒之丞稽古場江江波鶴崎へ巷町之稽古二出候由二付、午後堀尾へ頼置、見物二

行、予も鬼形角老玉ツ、放也、日之人頃帰宅、帰途湊近辺迄遣還する也、今日於射

場御覽之祝し弓会有之候由二而万之進來、酒飯を饗候由也

○十八日、己亥、晴、夕曇、夜雨、朝素説所席書(会説)へ出席、相済出勤、夕八半時過退、

極夕岩崎常介并長束茂兵衛を招、酒を饗ス、岩崎およしをも申遣候へ共、此間内衛

痛難儀、未透与不快由二而不来、先達而御加恩之節常介者忌中二而不来、茂兵衛も近

来者誠二速々數候故、御役所引不意二呼二遣し一緒二饗し候也、辻於恒此節引痘(痘)い

たし候由二付見舞兵藏遣入、無滞追々次第を踏、順二日立候由也

○十九日、庚子、雨、夕々晴、寒し、朝六丁目御館へ被為召罷出、四半時頃帰、直二

出勤、夕八半時過退、佐藤益之丞夕方内用談二而來、暫話候故跡二而手製之河漏を

饗し、有合之酒をも饗する也

○廿日、辛丑、快晴、朝御乗馬へ出ル、且那樣今日る己斐村石風呂へ御入治被遊也、

同役雅登も御相手を願、罷越也、夕射場江出ル

夕 御茶

青豆飯

廿七日早晨

生盛けし酢

蕨蓴

白髪大根

ミしまのり

すたれふ

油揚

蓮根

三ツ葉

けむ

御皿

白みそ

苞豆ふ

小しゐ竹

青み

葛煮

玉川麩

かんひよう

香茸

おろし生か

御坪

御飯

御香物

から漬

よめなしたし

○廿一日、壬寅、晴後薄陰、始覺薄暑、朝弓術へ出席、例時出勤、午鼓頃六丁目御館へ御用向ニ付罷出ル、帰掛木野・水谷へ法事之謝ニ寄、未鼓頃帰、一応御館へ出退、夕又射場へ出、潤誓廟御祥月ニ付今早晨祭祀如恒規行之、休誓廟も例之如奉配祀也

○廿二日、癸卯、雨、寒、朝吉田藤馬御用向ニ而來、謁、素読講釈へ出席、四半時頃退濟、直ニ出勤、夕八時過退、退出後西向寺江參、極夕又御館へ罷出ル

○廿三日、甲辰、雨、午後罷、朝御用向ニ而吉田藤馬へ行、謁、夫右近様ニ而井上市太郎江も行、謁也、射場へ出、午後矢野源内御覽之節星込之祝し炮術会催候由ニ而案内有之候ニ付出席致ス也、家小夜辻へ行、宿ス

○廿四日、乙巳、晴、稍有薄暑之意、夜寒、例時出勤、夕八時退、井上市太郎夕方昨日予罷越候為御答來、謁、就右夕又御館へ出ル、慈君朝夕辻へ御出、直ニ御宿被成、家小者夜同方帰ル、お恒引痘弥順快之由也、国泰寺前楠木地藏之脇立両童子此度妙慶院へ新ニ寄附いたし候ニ付、今日來迎会有之、国泰寺へ衆僧迎して參、行列ニ而遷移、見物成群集候由、開眼供養者去ル十六日ニ有之、其節も国泰寺へ參、供養いたし候出也、何分妙慶院当院主者奇特之僧也

○廿五日、丙午、曇、夕雨、温、朝弓術并御乘馬御相手ニ出ル、例時出勤、夕八時頃退、渡部廉之助明後日東城表へ回村出立之由、暇乞ニ來、東城宮崎・深江等江之伝言頼置也、神尾源兵衛殿へ紙面ニ而先達而石井寿兵衛通り内談之儀相調候挨拶厚申來、且酒二樽、鱒魚二尾被患也、右内談事者同方所持之征矢廿五本内々被差出、

御平
 飛龍頭
 大椎竹
 籜
 山薯蕷
 三ツ葉
 葉山椒

御台引
 衣揚れん根
 青こんぶ

御菓子

焼饅頭
 まきせんへい
 ふきよせ

以上

夕

御茶

さや豆飯

廿八日

小満節

為御答礼藤放拾挺代金五兩御贈ニ相成候義也、但正金也、段々小内も有之、内実者同方難渋二付全御武具方へ御買入ニ相成ル也、右神尾方到来之鱒ニ尾御内々御奥へ差上ル也、然ル処猶又右之内壱尾者頂戴被仰付也、夕弓射二出ル

○廿六日、丁未、雨、夕有風、寒、朝為伺御機嫌罷出ル、夕昔平磨御叱、差扣被仰付、予宅ニ而申達、御目付松井庫人為加席来ル、右者昨日御供中御印付之傘用候之由、右二付而之御答也、御目付桂辰馬も御示し有之也

○廿七日、戊申、雨罷、寒、信楽廟御祥月、如恒規今早晨祭祀無滞相勤、尤常称願も来月七日之処、当年者五拾回忌辰ニ候得共御取越仕、今朝一緒ニ献膳仕ル也、早朝西向寺江參詣、帰岩崎常介從弟之喪を訪、且此節石風呂へ入治中ニ付其見舞旁也、およしも今以齒痛・腹痛難治、難儀いたし候由也、例時出勤、九時頃る六丁目御館江御用向有之、罷出、未鼓頃帰ル、夕辻清人入来、夕射場へ出

○廿八日、己酉、快晴、朝寒、不順気也、朝御乘馬へ出ル、例時出勤、夕八時頃退、吉本恒之丞昨日・今日共来候由之処出勤後ニ而不遇、然処今日ハ家小へ炮術之方ニ而来月相伝致度義有之、其段噂申度候旨申聞候之由也、夕射場江出ル

○廿九日、庚戌、雨、寒、袷衣ニ羽織を襲、朝吉本恒之丞来、予炮術年来執心ニ致稽古出精、業も宜候ニ付免許状相授度之旨申聞ル、依厚及挨拶、尤近年者格別出精いたし候与申ニも無之、業等も至而未熟之事故、免許状杯授候而も却而流義を汚し候様ニも可相成候間、及断度旨申述候得共、故繁音本右衛門先生存生中既ニ其含も有之候処不慮ニ死去有之、其後者恒之丞自身之処未皆伝ニも無之内故、彼是及延引候義、予方

朔日

一知行高百三拾五石

直三郎跡目

南部弥八郎殿

一御切米式拾石

三人扶持

加左衛門跡目

原権八殿

三日、今度炮術免許相伝

二付謝義左之通贈之

一樽代 銀五兩

一肴料 同式兩

外二差寄當時御家来中ニ相談相手も無之事故、何卒相授度旨ニ而段々厚意も申聞候故、任其意厚謝述置也、朝弓場江出ル、午後北之御部屋へ罷出、御館江も罷出

五月 大

○朔日、辛亥、晴、暖、吉本恒之丞昨日申聞候趣ニ付、早朝麻上下着ニ而同方江參、渡辺雅登伴ス、恒之丞上下着ニ而出会、炮術年来執心、業前も宜敷、依而免許相伝可致旨覺書付を以申聞、且書伝者目錄以来次第之業前一通り濟候上ニ而可相渡旨申聞、吸物ニ而祝盃、跡ニ而肴式種ニ而酒出ス、外も多人数相伝有之、森岡万之進も目錄致相伝也、巳鼓頃帰宅、直ニ出勤、夕八時頃一応退、又香取流槍術御覽ニ付為席話出ル、香取流槍術御覽者当年始而也、人数三十一人、何れも常々出精故業前見事也、尤勝負口者無之、形入身計也

○二日、壬子、晴、稍薄暑、吉本稽古場ニ三拾匁玉以下抱町ニ江波へ出候ニ付、四ツ半時過ル渡辺雅登同伴出丁、尤今門ヲ網打船ニ而參ル、昨日丁許候面々不残出ル、予も三十日・拾五匁置丁、式拾匁・拾匁抱丁を放す、抱者八丁、置丁者五丁也、入夜五時頃帰宅

○三日、癸丑、曇、將雨後晴、風吹、寒、朝四時頃御館へ出、夫方主水様御館へ、今般同御方様御妹於忠様御義旦那様江御縁組御所望被遊度、御内約被仰進候御使ニ罷越、御勝手御玄関を通り、御弓之間へ着坐、夫方御出頭坪内久米之助出会、誘引ニ而御書院三之御間江通り、同所ニ而御用人福山覚右衛門出会、御口上申入、無程御

渡辺雅登目錄相伝二付肴料金百疋贈之候由也

同日

御上屋敷江

一鯛 二尾

御下屋敷江

一鱒魚 二尾

北御部屋江

一同 一尾

右之通御奥通御内々差上

ル也

返答申出、御手付鬘斗被下之、其後吉田藤馬・河瀬喜和馬も出而挨拶有之也、退出

直二御館二出ル、供連者若党一人、槍持・草履取也、当御省略中二付雨具者不為持

候也、無程右御返答与して吉田藤馬御館へ見へる、予受引仕、其外何もあちら様御

振合御同様也、右御内約被為濟候趣御家来中江心得席達二而被仰出、一同奉恐悦也、

夕八時過退、吉本恒之丞へ一昨日免許相伝之謝為持遣ス也、先達而御加恩拝謝之

微意を含、今日輕キ御看御内々御方々様江差出ス也、渡辺宗右衛門殿江も折柄到来

之鱒魚有之、幸二贈也、夕弓術へ出ル、先達而河本屋伊助へ申付置候大小之修覆

相調、昨日持来ル也、夕方六丁目様方御庭前之竹筥三根頂戴被仰付候也、告于廟、

今朝有地震

○四日、甲寅、曇、有風、夕雨数点如雹、寒し、例時出勤、夕八時前退、吉本恒之

丞昨日贈物之謝入来之由、夜御奥方竹根子三本頂戴被仰付也

○五日、乙卯、曇、終日有風、寒冷、不堪着時服、当年者絶而不覚程二冷氣充物有之、

家二者今以衾炬を不塞、夜も袷衣二羽織を襲候様也、朝五時頃麻上下着出仕、御登

城前於御居間御祝詞申上、其外御方々様御祝詞例之通申上相濟、御奥江も出、四時

前退出、午後渡辺雅登方江囲碁二被招行、夕洒出ル、堀尾父子并岩崎常介同会、当

年者二男千之進初職之由也、夕方辻清人祝詞二来候由也

○六日、丙辰、曇、寒、朝四時頃御用向二付御年寄生田筑後殿江行、応対有之也、

例時出勤、夕八時過退、夕射場へ出、百射を致也、片岡貢方紅魚一尾贈越、先達

而此方々病中見舞遣候謝与見ゆる也、夕桑原吉郎二入来

〔七日〕

一 女中被召出
被下物並之通

小倉甚右衛門娘

たみ

甚右衛門右之御礼与して

来候由

○七日、丁巳、雨、寒、常称廟五十回御辰二付早朝西向寺江參詣、祭祀者去月廿七日

江取越、信楽廟御一緒二相濟候也、帰り岩崎へおよし不快を訪、素読所会読二付出

席、夫々出勤、夕七時前退、夜岩崎へ被招參ル、今日者お喜久宿下之由二而有響、

堀尾眠石会、全体今夕々囲碁二被招候得共、敬日故固辞スレ共再三申越候二付夜二

入行也

○八日、戊午、晴、午後有夏色、風者猶寒、御縁組御内約被遊候段今日郡御奉行小島

太郎作殿を以御年寄衆江被仰入、太郎作殿五半時頃見へ候二付罷出、兩度挨拶二出

ル、午鼓後退、夕辻・藤川江去月法事之節且辻江者先達而お恒引痘無滞相濟候

悦旁二行、吉本恒之丞へも先日之挨拶旁二行、辻二而洒出ル、暮前帰宅、慈君御無

事二御逗留被成、明後晚御戻被成候由被仰也、夕神尾源兵衛殿来儀、謁ス、過日征

矢御受納御答礼御贈之挨拶也

〔九日〕

一 御步行頭次席

其儘御番外

島本甚内殿

棒火大師家

一 大御小姓

足利庫之助殿

鈴木八十郎殿

古田要人殿

○九日、己未、晴、薄暑之意あり、例時出勤、夕八時前退、平野藤吉郎法事之節之

謝入来、御馬へ出、夕六丁目御館へ為伺御機嫌罷出、今朝射場へ出、今夕神尾

源兵衛殿へ先達而贈物之謝二行、中置也

○十日、庚申、朝雨、無程罷、終日曇、薄暑、例時出勤、夕八時頃退、夕射場へ出、

百射をいたす也、川本屋恒右衛門江先達而買入候十文字柄こき直し、鞆新出来之義

昨朝申付置也

○十一日、辛酉、曇、夕雨、始薄暑を覚、朝者寒、朝射場へ出、慈君夜前御戻り被

成候筈之処、お梅乳を痛候之由二付猶又御留り被成也、片岡貢病氣快由二而挨拶二

家所佐一郎殿

阿部文三郎殿

永富易次郎殿

野崎左門殿

八島兵馬殿

十四日

今朝神田へ社參、途奥弥

右衛門殿之門前を通候処、

門内二大炮五挺出居、立

寄而觀之、^{（土指）}短迦炳青銅

製車台付也、此節日々江

波二而打様し有之、御年

寄衆見分有之由也

十五日

芒種節

来、^{（沖）}和多理飲二入来

○十二日、壬戌、朝雨、後罷、夕晴、夜亦雨、薄暑、^{（例）}時出勤、夕八半時過退、夕

射場へ出、^{（小倉）}甚右衛門娘今晚御下屋敷へ上り候由為知来、飲使遣ス、^{（森岡）}弟婦

并万之進も同方へ来候由二而卒与来候由也

○十三日、癸亥、晴、薄暑、^{（朝）}小倉甚右衛門へ娘被召抱、并二昨夕上り候挨拶二行、

直二素読所講釈へ出、相濟出勤、夕八時過一応退、夫方直二出仕、一甫流劍術・柔

術御覽之席詰いたし、日入頃退、^{（夜）}岩崎およし先達而之飲且当春以来何角之挨拶与

して来、有合之酒を出ス

○十四日、甲子、晴、薄暑、稍覺夏景、^{（朝）}神田社へ參詣、当春御加恩拜謝之意御初穂

一封備る也、^{（炮術）}へ出、^{（朝）}辻清人入来、慈君今晚御帰被成候二付御迎差越候様二

与申、お梅乳之種物口二成、大ニ快出也、^{（慈）}君夜徒辻御帰被成也

○十五日、乙丑、晴、薄暑応節、^{（芒種）}節也、^{（朝）}射場江出、^{（例）}時出勤、夕八時後退、

^{（今）}日六丁目御館江土屋政之進、活花之門人・相弟子等同道二而出、数瓶活花いたし

入御覽候由、依て明夕迄之内、何れも申合見物二罷出候様御沙汰被為在候趣小島左

源太を以室角左源次方申来也

○十六日、丙寅、晴、向暑之意あり、^{（昨）}記之趣二付朝六丁目御館へ出ル、御表御居間

方二之御間、三之御間御通之間方御書院、御使者之間へ掛四十余瓶有之、景盆も三

面有之、麗敷事也、右挿手者多分身を持候町人共之由、依而花器等皆々立派也、茶

巾餅口取二而御茶頂戴被仰付、出掛片岡貢旅亭を訪、明後日日出立、東城へ帰候由也、

〔十七日

周防様御妾腹之御男子御出生被為在候趣席達を被仰出候事

〔十九日

此間御出生之御名左之通被為付

又吉殿

右之趣〔虫損〕□□之席達有之、

但御奥向二而者様唱との義例之通り也

〔於江戸殿様藤堂〔高敷〕和泉守

様御替、東叡山火之御番被為蒙仰候由、全体当

年者是非何れそ之海防御手当不被為蒙候而者不被

為濟趣之処、段々御手入二而当度も又火之御番被

為蒙候趣也、当御場合御国之御為者誠二以御仕合

妙慶院へも帰掛参詣之積二而出候処、御下屋敷二而案内手間取候故、出勤時刻へ差扣不能参、依而兵藏代参申付也、〔森島〕帰宅直二出勤、夕八時過退、夕射場へ出、片岡貢為暇乞入来之由、夜家小帰寧、宿ス

○十七日、丁卯、雨、寒、朝射場へ出、午後妙慶院へ参、昨日不得参故也、興徳寺

江も卒与参、六丁目御館二而今四ツ時頃御男子様御誕生被為在、何之御滞も不被成御坐候之由、早速為何御機嫌堀尾善大夫罷出ル也、夜中渡辺雅登左伝対読二入来

○十八日、戊辰、雨罷、終日曇、朝素読所会読二出席、直二出勤、夕八時過退、今日六丁目御館へ渡辺雅登被出也、夜家小従木野帰、兼而明晚同方家内伴帰候筈二有之処、一馬先頃以來痰咳之気味二而菟角困候由二付断也、夫故今晚帰也

○十九日、己巳、曇、蒸意あり、朝御乗馬并射場へ出、例時出勤、夕八時過退、退後六丁目御館江今日御名付之恐悦与して罷出、尤御誕生之恐悦も一緒二申上る也、例之通上下着也、御次二而御吸物・御酒頂戴被仰付也、森岡へ寄、木野一馬不快を訪、今日者少し咳も遠き方之由也、何分些疲も見へる也、世並屋新八葉を服候由也、酒出ル、水谷江見舞、深更迄咄し帰ル、同方二而も酒出ル也

○廿日、庚午、晴、薄暑、朝炮術稽古二出、夕貫心流劍術御覽二付罷出、堀尾善大夫風邪二而今日煩無出勤、一井嘉内此間從江戸帰着之由二而入来之由

○廿一日、辛未、晴、風寒し、夕西北雷鳴、朝弓術へ出ル、例時出勤、夕八時過退、素読所へ御給仕、稽古見物二出、夫々申鼓後六丁目御館へ為何御機嫌罷出ル、帰森岡へ寄、酒を出し暮合迄話し帰ル、清水様二而真恭院様御逝去被成候二付三日之間〔森真院〕

之事二候得共、乍併御本
意二者不被為在御事与窃
二奉恐入候也

〔廿二日

入梅

〔廿二日、岩崎保之進へ与
候名字・花押

信守

叔正

守之字



申叔時曰、信以守物民生
厚而德正

左成十六年伝

〔廿三日

御屋祈祷之御供物例之通
頂戴被仰付也、告于廟

〔廿七日

一杉原紙 式拾帖

鳴物停止、普請者不苦旨昨日之日付二而御移檄出ル也

○廿二日、壬申、晴、薄暑、朝夕者寒し、〔朝素読所講釈へ出席、相濟例時出勤、夕八
時前退、〔麗照院様御祥月二付退出後海藏寺江拝参、帰掛西向寺江参詣、七半時頃帰
宅、〔今日入梅也、〔芝山民部権大輔様・昌姫様御婚姻先月廿七日首尾能御整被成候
由、同役三人之中江御蒸物料与して金式百疋被下、雑掌中へ御家司へ書状二而一緒
二来ル也

○廿三日、癸酉、晴、薄暑与いへ共涼し、〔朝弓術稽古へ出ル、〔夕六丁目御館へ御七
夜御内祝恐悦与して罷出、麻上下着、御次二而吸物・御酒・御蒸物頂戴被仰付、七
半時前帰、〔岩崎保之進名字・花押を与へくれ候様先日常介頼候二付、昨調与ふる也、
〔夜堀尾へ囲碁二行、鮭之饗あり

○廿四日、甲戌、晴、薄暑、〔朝炮術稽古二出、〔例時出勤、夕八時頃退、〔岩崎常介此
間保之進へ名字与候謝入来之由、〔波多野権祐家内へ出生之小兒へ、綴而衣物二仕立
為着候様ニして三十三処継切を患む也、昨日清太郎持来候由、厚意之事也、〔辻清人
入来、於梅乳之痛、お恒腹合共快全之由申候由也、〔夕弓術へ出、〔夜慈君妙慶院地
藏講へ御参被成、家小も参る也

○廿五日、乙亥、快晴、朝寒、午薄暑、〔朝弓術へ出、例時出勤、夕八時過退、〔御鎮
守天満宮へ拜ス、今日者土屋政之進・木村喜斎・吉本春悦活花を献備致候由二而、
六七瓶挿有之、且徘徊連中へ敷掛行燈献し有之、兒輩太鼓を打、殊外賑敷候也、文
字も段々献し有之、〔夕又射場へ出、〔夜慈君・家小御鎮守へ拜ス

渡辺雅登

一諸口紙 五束

菅馬之進

一同 三束宛

矢野源内

森岡万之進

山田多喜登

星野武平次

小島左源太

同日妙慶院へ備物左之

通

一回向料 銀三匁

一靈供米 精苞升

一塔婆料 銀五分

以上

晦日、松本屋より過日差

越候燈籠積

下々物

一四角藏掛屋根

此代式匁五分位

○廿六日、丙子、快晴、薄暑、夏岳君御祥月二付朝妙慶院へ参、途藏田和太郎留守へ

先達而於かめ縁付之歛・見舞旁行、和太郎当年詰越被仰付候由也、冲和多理へ歛之

謝二行、午前炮術へ出、夕弓術へ出、夜慈君辻へ泊掛二御出被成

○廿七日、丁丑、朝之内曇、晴、薄暑、朝西向寺江兵藏為参也、朝弓術へ出、素説

所会説二付出席、直二出勤、夕八時頃退、出勤中於席堀尾善大夫左之趣被申達、

厚御受申出ル

御自分儀外記流炮術得免許候段達御聴、御満足被思召候、依之御袴着一折、袴

地袴下被下之

御着 一折 料二両金百疋

袴地 一下 同 三百疋

右之通金子台へ据被相渡、御受申出、相済同役兩人江及吹調、夫方御次へ出、御用

達中迄猶御受申上、退出掛御家司中宅へ為御請参ル、帰宅、家内へ吹調申聞、告于

廟、右頂戴之品者御用部屋方回しくれる也、今日渡辺雅登も予同様目錄相伝之御祝

義杉原紙式拾束被下也、其外も段々同様之儀有之、森岡万之進も諸口三束拜領仕ル

也、万之進右之吹調与して来候由、夕宝藏院槍術御覽二付罷出ル、堀尾幾之進・

伊藤茂登・八木藤弥三人也、山村静登見合与して罷、外二金子熊之進・畑口莊吾打

槍与して出ル、跡二而右三人之業前御所望被遊、相済候処二而三人共御目見被仰付也、

暮前退、来ル卅日義純童子三周忌二付妙慶院へ備物為持遣シ、且同朝輕法事執行之

義口上書二而頼遣ス也

是より四匁、六匁、八匁
位迄

下物

一 六角くりん屋根

此代八匁位

是る式拾匁位迄

一 燈籠杭 壹本

此代四匁位、六匁、八

匁、拾匁位迄

右之通殊外念入候燈籠与

見ゆる也

〔廿七日〕

一 御歩行頭次席

勤向御歩行頭之通

原 八大夫殿

一 七人扶持被下

被召出 益見侍

川崎斧三郎殿

右炮術心掛厚致出精、業

も宜二付、格別を以被召

出候二付此以後弥以精出

候様被仰出

○廿八日、戊寅、晴、夕曇、薄暑、〔朝炮術へ出、〕例時出勤、夕八時過退、〔風邪感触
之氣味二而頭痛有之、夜中早臥発汗、〕夜長武左衛門入来

○廿九日、己卯、晴、薄暑稍進、〔夕申合弓会有之、出席

○晦日、庚辰、朝曇後晴、向暑之意有、夕曇、〔義純童子三回忌相当二付朝妙慶院へ兵

藏代参申付、法事中詰ル也、〔朝炮術並二御乘馬へ出、〕例時出勤、夕八時過退、〔東

城幕所江于蘭盆会二点し候燈籠大破二付調替之儀、過日小畑孝次交代便之節松本屋

龜治郎の申越、其後新調入用積書も差越、就而八宮崎之方も考振申来候二付、燈

籠杭共六匁ツ、之分二而申付くれ候様二与今便申遣、兵藏の手紙二而頼遣さす也、

〔久野八十介歎二入来之由、〕夕弓術へ出、〔夜雨降、蒸、去ル十九日以來照統候二付

処二依田水乏敷、挿秧難出来場所も有之由之処、誠二好湿也、〕池田加賀守へ兼而約

之安産之護符今日取二遣ス

一 御騎馬筒

佐久間織衛殿

一 五人扶持被下

被召出 田十郎侍

近藤常次郎殿

右棒火矢心掛厚致出精、以下上二

同文

一 棒火矢方

近藤嘉七郎殿

一 式拾人扶持被下

被召出 御輿詰

左兵衛侍

寺尾雅之丞殿

朔日

一郡御奉行

桜井織部殿

御用人

二御用人並之勤向
相勤候様被仰付

小島太郎作殿

郡御奉行

三日

二女中並 中居
被下物並之通 弥生

二助七殿 右同人
御附

右者久保万治娘也

朔日之続

一御騎馬頭同格

勤向御騎馬頭之通

蒲生織之助殿

町御奉行

二大御日付格
町御奉行

閏五月 小

○朔日、辛巳、雨、夕罷、涼、当月者予非番月ニ候得共、渡辺雅登風邪ニ而今日出勤無之候故、予御用向引受る也、例時出勤、夕八時頃退、極夕射場へ出ル

○二日、壬午、晴、夜蒸、雨、朝御乘馬へ出、夕御館へ出、伴角馬炮術之門弟、吉本恒之丞門弟中合、炮術会於御場所八木藤弥引受催候由ニ付為見物出、伴之方方十人計見ゆる也、森岡万之進右会へ出、相濟候後來話ス、酒飯を饗ス、今暁京橋町能良屋孫三郎与中町人之二階出火、尤二階限ニ而消留、速ニ鎮候由、此辺ニ而者不知

○三日、癸未、雨、涼、朝素読所講釈へ出席、夫方出勤、夕八時頃退、辻清人入来、慈君明晩者御戻可被成由申候旨也、夕弓術へ出

○四日、甲申、雨罷、又曇、時々はらつく、蒸、朝炮術稽古ニ出、例時出勤、夕八

時前退、其後又出勤、御旗業前御透覧ニ付御馬見所へ出ル也、夜慈君從辻御帰被成

○五日、乙酉、曇、時々雨はらつく、蒸甚、朝夕弓術へ出

○六日、丙戌、晴、向暑、朝炮術稽古ニ出、例時出勤、夕八時頃退、夕六丁目御館

へ為窺御機嫌罷出、木野へ見舞、一馬弥快由也、伯母君者今以眼痛御困り也、酒出入夜帰

○七日、丁亥、晴、向暑甚、朝弓術へ出、素読所会読へ出、夫方出勤、夕八時前退、留守中森直十郎来、御趣法方ニ而銀借用致度由ニ而内談ニ来候由也、夕又同人倅滝次郎を差越、紙面ニ而様子尋越ス也、從是可及返答旨申置也

今村文之助殿

御勘定奉行方

一 御勘定奉行

津田三十郎殿

一 郡回り

佐々完六殿

御目付方

一 御目付

山田幾太郎殿

御側詰次席方

浅野每登殿

先月廿九日於東城

一 知行高百四拾石

与一右衛門跡目

吉田与九郎

百六拾之跡也

一金三百疋

貢父隠居

片岡弘

右炮術得免許候二付

○八日、戊子、曇或晴、向暑甚、有蒸氣、矢野源内を呼、昨日直十郎内談之儀様子合

相尋候処、下地三木幸次通り之取引折々有之由二付、矢張其伝二而示談可申旨同人

中、其段直十郎へ及返答置也、朝炮術へ出、堀尾眠石先達而小梅贈候謝入来、極

夕弓術稽古二出

○九日、己丑、曇、風吹、蒸甚、朝御乘馬へ出、例時出勤、夕八時退、極夕弓術へ

出、夜雨

○十日、庚寅、暁雷鳴、夜来雨亦不罷、已鼓後る雨罷、猶曇、涼甚、例時出勤、夕八

時頃一応退、猶又出勤、御船歌御透聴有之、御馬見所へ出ル、六丁目御館へ備前之

旅僧罷出、今明日午後法談有之由二付、慈君二も御出被成候様万之進方中越也、

夜半頃松本良伯来、極密内談之儀有之、由良保人倅政太郎義昨朝内用二而川上西原

辺へ罷越候処、今朝迄不帰候二付段々穿鑿いたし候得者、とふ歎帰途新庄大芝辺方

川を涉り可帰与存候之処、此節川水高く候故、誤而流死候もの相見へ候由二而、彼

是尋合せ候而も相違無之事与被考候出内密申聞、扱々驚入候、不愆之事共也、同人

者当年廿四歳、学問出精二而御銀も被下、追々御用立可申人物二而有之し、可惜次

第也

○十一日、辛卯、曇、涼、朝弓術へ出、慈君午前より森岡へ御出入、夜御帰被成、

兼而之旅僧法談御聞被成候之由、今日者旦那様・出衛様二も御出被為在、御内々御

聴聞被遊候之由、予等も聴聞いたし度候ハ、申合罷出候様昨日無屹被仰出候二付、

雅登・善大夫被罷出、予者少々用事も有之、不罷出、由良政太郎死骸江波島之一、

一諸口五束

右同人

右弓術得目錄候二付

九日

一知行高百石

嘉藤跡目

中野久次郎殿

十六日

小暑節

芝山様御婚儀被為整候

二付

一御肴料 金百疋

一御樽代 同式百疋

一御小袖料 金五兩

右御一統様方被進

二町下二掛り居、今夕連帰候之由二而、表向者病死之申出有之也

○十二日、壬辰、曇、極夕方雨、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時過退、退出後頭痛有之、臥

○十三日、癸巳、曇、夕晴、向暑強、朝素読所講釈江出席、相濟例時出勤、夕八時頃退、夕射場江出ル、夜渡辺へ左伝対読二行

○十四日、甲午、朝曇、後晴、向暑強、朝四時より江波島鶴崎へ玉町稽古二出、渡辺

雅登同船二而參ル、尤森岡万之進も伴參候二付本安川方行、百目玉拾貳町菅玉放候、

渡辺雅登・森岡万之進・山田多喜登・大崎和二郎・星野武平次・小島左源太・伊藤

茂登・岡田八十太郎・増田吉右衛門出ル、恒之丞者勿論出丁也、夕七時過相濟、入

夜帰ル也、夕方水谷又左衛門殿御出被成、酒を出、亥鼓頃迄御話し被成也

○十五日、乙未、曇又晴、向暑強、朝射場へ出、例時出勤、夕八時退、裏之竹棚仕

替、其外少々直し事有之、万之進を頼、朝方来くれる

○十六日、丙申、晴又曇、夕雨一過、向暑甚、早朝妙慶院へ參詣、御寄合二付五時

過出勤、夕八時退、夜前渡辺四郎右衛門を呼、十文字槍鞘塗之義頼置也、右鞘下地

者先達而川本屋恒右衛門取次二而槍師甚七へ申付、新出来二致ス也、今日方小暑節

也、芝山様二而先般御婚儀被為整候御歛雜掌中迄書状を以申上、御肴料金百疋三人

中合二而差上ル也、今日之船便二差登候事

○十七日、丁酉、曇、向暑強、朝御乗馬へ出ル、巳鼓頃有地震、稍強、同刻方江波

島二町稽古二付出ル、今日も雅登同船、万之進も伴、百目玉五丁菅玉并式拾匁玉・

一 御帶地料 銀三枚

右周防様方御内々昌姫様へ被進

一 御肴料 金百疋

一 杉原紙 三帖

右御家司方被差上

一 御肴料 金百疋

右御用人三人方申合差上ル

三拾目玉抱放五丁壺玉ツ、放す、入夜五時前帰ル

○十八日、戊戌、雨、終日涼、朝吉田藤馬入來、公事二付内用談有之、例時出勤、夕八時過退、森岡万之進來、飯を出

○十九日、己亥、雨罷、午後將晴夕又作雨、涼甚、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時頃退、終宵雨降甚

○廿日、庚子、終日雨不罷、夕雷鳴両三声、夜有風、朝砲術稽古二出ル、丹羽庄司登坂留守中見舞之謝二入來

○廿二日、辛丑、雨終日不罷、夕時々有間歇、朝弓術稽古二出ル、例時出勤、夕未鼓前方出水、壺丈三尺五寸二至、御人数出ル、依而直二詰、至薄暮水落壺丈壺尺余

二至退、右二付六丁目御館江者善大夫被出、出水備防二至候者嘉永五年八月以來、六年振也、処々堤決等有之趣相聞候得共未詳説者不聞也

○廿二日、壬寅、雨罷、午後晴、向暑甚、有蒸氣、早朝西向寺江參詣、素説所講釈へ出席、例時出勤、夕八時頃退、昨日之出水壺丈三尺余与雖、其実者余程之大水二有之、所々堤危キ場処多有之候得共皆防留候之由也

○廿三日、癸卯、晴、向暑劇、先達而砲術相伝之祝意を含、渡辺雅登申合砲術之会を催し、今朝六半時方始、夕八時過相濟、出席之者へ握飯・煮物二而出入、景物を出

- 廿三日 景物
- 一 酒 一樽切手
- 一 半紙 壺束
- 一 薄皮餅 六十
- 以上三品

渡辺雅登

矢野源内

森岡万之進

山田多喜登

吉本恒之丞

伊藤茂人

星野武平次

小島左源太

大崎和三郎 岡田八十太郎 増田吉右衛門

右之外ニ足輕辺九人程出ル也、右相濟候後吉本恒之丞を呼、吸物・酒・鮓を饗、祝之微意を表、森岡万之進も来ル、外ニ星野武平次を呼

○廿四日、甲辰、快晴、向暑強、朝涼、有霧、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時過退、

星野武平次昨日之謝ニ来候由、矢野源内頼事有之、来ル、西向寺江兵藏(森島)為参也

○廿五日、乙巳、快晴、夕有清風、午向暑強、早朝御乘馬へ出ル、例時出勤、夕八

時退、夕堀尾眠石翁入来、夜辻妹来宿

〔廿六日卯中刻

男子出生

同日、竹ヶ鼻ニ於て打首
兩人有之、内一人者元此
御方様小人ニ而、先年御
暇出候与八与申者之由、
是迄度々追放被申付候所、
又々立歸惡盜業を働候ニ
付而刑罪ニ被行候由也

○廿六日、丙午、晴、朝涼、午前向暑強、家小今晝寅刻頃産之催有之、卯中刻安

産、男子出生致ス、母子共何之滞も無之、小児も至而丈夫也、早速田中栄作妻来呉

る也、右男子出生之趣同勤兩人へ手紙を以案内申出、木野・森岡・水谷・辻・藤

川、其外近隣岩崎等へ為知遣ス、丹羽庄司へも紙面ニ而為知遣ス也、岩崎常介・森

岡万之進・小倉甚右衛門・長武左衛門・堀尾老室・石井後室・矢野内政杯歎・見舞

与して早速入来、石井後室者直ニ被詰呉也、渡辺・堀尾より使来ル、夕森岡万之

進・辻清人・大島五兵衛・星野武平次・堀尾眠石入来、清人・万之進江者酒飯を出

ス、万之進者おますを連来、辻妹今朝以来乳を痛ミ困ル、夕發熱、発汗ニ相成、夫

方痛和らく也、夫故今晚も宿ス也

○廿七日、丁未、晴、向暑強、有蒸氣、母子共弥無滞肥立、尤小児今日者大便通し稀

成方也、堀尾善大夫始彼是歎・見舞客来有之、平野藤吉郎暫話、酒を出ス、西向

寺江兵藏為参、夕白雨、雷鳴も有之、暫時而霽、夕松本良伯辻妹を来診、最早快

廿八日

土用人

小児名

長槌

由申也、折柄小児を診しくれる、惣体丈夫之由申、通し遠きも為差事ニも有之間敷旨申也、辻妹午後者快起也、今日も石井老室・栄作妻終日頼、夜中も宿也

○廿八日、戌申、曇、朝涼、其暑、(其カ)有蒸氣、土用人也、小児夜前も終宵通し少く、惣体者何も相替儀者無之候得共、何分些心懸ニ付早朝山中碩庵老を請し、一診を乞可申与申値、石井寿兵衛を頼、同方へ参もろふ也、午前来儀有之、小児を診しもろふ、至極丈夫、胸下も殊外宜敷候故何も心掛之儀無之、畢竟火強候処、少々蒸_{温メ}し過候故通し遠相成候ニ而可有之、随分清涼ニ致し、薬少々服し候ハ、可宜旨被申聞、薬を被恵、今朝松本良伯猶又来診、碩庵老同様ニ申也、慈君今間内方御腹瀉ニ而御困り被成候故乞診、薬を恵、暑邪之事与申也、渡辺雅登其外歎客彼是有之、小児今日三ヶ日ニ付名を長槌与命る也、告于廟、夕石井寿兵衛を呼、名酒を饗、今朝之勞を謝、長槌今日産髪をたれ湯浴致し候処、其以来益以宜敷、大小用通しも頻ニ有之也、午_前後予血忌御構無之ニ付、勝手次第出勤候様思召ニ有之旨御家中方紙面到來、御請返書差出、無程致出勤也、夕八時頃退、夕白雨、無雷鳴、快涼

○廿九日、己酉、晴、暑氣強、夕有涼風、午後北御部屋へ御用向有之、罷出ル、夕辻清人来、於梅・恒共伴し帰ル、堀尾老人入来、善大夫勤向等之義ニ付、段々内話之趣有之也、夜岩崎およし見舞入来、同方三男保之進を武内純介へ養子ニ所望有之由ニ而内々相談有之也

六月 大

三日

大暑節

〔七夜二付祝義

一肴料 銀三匁

一樽代 同貳兩

右 蓐母へ

一銀壹兩

田中榮作妻

一銀貳匁

田中実五郎

一同壹匁五分

森島兵藏

一同貳匁

御船手
佐兵衛

但へちを恵候付

一同壹匁 下女

献立

鱈魚
大こむ

○朔日、庚戌、晴、暑、朝夜涼、今日を予月番請也、暑之御早出勤二相成候故五半時

前出勤、九半時過退、〔山中碩庵老来診、長槌愈宜敷旨被申候由、腹帯も其節落灸等

いたし被呉候出也、〔夕岩崎常介来、夜水谷又左衛門殿御出、有合之酒を出ス

○二日、辛亥、朝曇後晴、暑、〔四ッ時過北御部屋ニ而しつ安産、御女子御誕生之由、

石井寿兵衛が中来候二付、早速御様子伺して罷出、何之御滞も不被為在、御丈夫

二被成御坐候之由、御館へ為伺御機嫌罷出、〔松本良伯来診、〔今朝石井稽古場へ南

部要人門人を連稽古二来、弓術有之候出也

○三日、壬子、朝雨はらつく、蒸暑、〔例時出勤、夕八時過退、尤朝素読所講釈へ出、

〔長槌愈無滞、今日七夜之祝いたし候二付蓐母へ祝義為持遣、并田中榮作妻、同実五

郎へも祝義遣し、家来・下女へも遣ス也、〔石井後室此間以来日夜共不大方世話いた

し被呉候得共、昨朝を者北御部屋へ被罷出候故被帰、昨今者榮作妻一人二而相濟也、

〔今早朝北御部屋へ罷出、御小児様へ御目見仕ル、御生出者御丈夫二御見へ被成也、

〔今日七夜之祝二付夕方左之通招く也、近隣之婦人格別世話二者不相成候得共、当時

之義なから心持事も有之、招く也

木野一馬 辻清人 森岡万之進 岩崎常介

小倉甚右衛門 岩崎室 森岡後室 同子供兩人

堀尾老室 石井寿兵衛 矢野室 三宅室

渡辺室 田中榮作家内不残 蓐母 佐兵衛

吸物 蛤

小付めし

小豆飯

酒肴

井うりもみ
うを

葛煮

焼かまほこ
玉ふ

八寸

しみの竹
干瓢
焼とうふ

鉢

章魚
さし身
蓼

猪口す
醬油

以上

〔四日、北御部屋御小兒様
御名

於榮殿

当度（虫退）□石井寿兵衛ゝ差上
候由也

右之内一馬・清人不来、水谷君も御閑暇なれば御出被成候之様申上置候へ共御出無之、松本良伯も同断、波多野清太郎朝ゝ来候二付留ル、夜桑原吉郎二并木野一馬室・丹羽庄藏室来り、折柄吸物・酒を饗ス、木野伯母氏・辻妹者兼而御不快、妹者差間故態与不致案内、岩崎室も不快二而不来也

○四日、癸丑、朝曇、後晴、炎暑、有蒸気、朝五半時頃出勤、夕八時前退、北御部屋御名付二付退出掛罷出、石井寿兵衛迄恐悦申上候也、尤平服之儘也、渡辺室朝之内入来、跡仕回手伝被呉也、三宅吉左衛門其外歛并昨日之挨拶客来有之

○五日、甲寅、晴或曇、炎暑、朝松本良伯入来、為伺御機嫌罷出、御多門内へ歛之謝二行、辻清人来、酒を饗し候由、菅平磨も折柄歛二来、合せ一緒二饗し候由也、夕弓術へ出、夜長武左衛門為見舞深更迄話ス、松栄院様御逝去二付今日ゝ七日之間鳴物停止諸事穩便火元別而念入候様、尤普請作事者今日一日用捨仕候様二与の旨被仰出、右姫君様御姉君之由、依而若殿様御叔母、御前様御実父方之御叔母二被為当、夫々御忌服被為受候由也

○六日、乙卯、曇、朝雨降、後罷、蒸暑、例刻出勤、夕八時前退、矢野源内・星野武平次暑氣間安入来、今日退出掛北御部屋江於榮殿伺与して出ル、弥御滞不被成御坐候由、夜前御穩便被仰出候二付、今日ゝ素説所其外諸稽古場共廢、是迄普請作事不及用捨与被仰出候分者諸稽古廢休者無之候得共、公辺之御振合二被准、此度ゝ右之通二相成也、公辺二而八御向殿様御忌服等被為請候様之分者普請作事有之分二而も、御場所御差間与申振二而学問所罷、夫二准して諸稽古事も廢休二至候由也

○七日、丙辰、時々曇、蒸暑、例時出勤、夕八時前退、永井仲之助・高木来助安産悦、菅馬之進・藤井乙次郎暑問安入来之由、岩崎常介此間之謝二来、兼而之三男保之進武内純介へ所望之儀、弥内約相濟致安心候之旨申候之由也、西向寺江兵藏為參也、深夜有涼颺

○八日、丁巳、晴、炎暑、佐藤大禪院昨日一周忌之所、忘居候而代參も不遣候故、今早朝興禪寺へ參、夫々妙慶院へも參、院主へ逢、安産之吹調申述、夫々六丁目御館江御機嫌窺罷出、森岡・木野・水谷へ先達而之挨拶、暑氣見舞旁二行、坪内へも見舞、午鼓前帰宅、木野二而暑扨酒出ル、御館江御機嫌伺罷出、北御部屋江も御栄殿伺与して出ル、弥無御滞御肥立被成候由

○九日、戊午、晴、暑烈、朝例時過出勤、九半時頃退出、長槌弥無滞、明日二而二七夜二付山中之方者明^今日限致退葉候筈二申値也

○十日、己未、晴、暑^威酷烈、夜有涼颺、例時出勤、夕八時頃退、木野要精院殿廿五回忌相当二付、木野より茶黍飯来ル、此方々も有合之品内仏へ備候也

○十一日、庚申、晴、暑威嚴酷、夜有涼颺、長槌夜中者大用通し無之、今日も菟角通しかね候二付山中碩庵老申遣し、夕方来診、惣体者宜敷候得共、何分火勝之見故炎暑之御通滞二者成かち、致油断候得者便秘二相成、如何共致方無之候間、宮參頃迄者実張与服薬為致可然与被申、被患薬、其後追々快通二相成也、何分頻二湯浴為致候様二与被申也、腹合患敷、気分不佳候故夜早臥、菅馬之進妻昨日安産、女子出生之由、岩崎へ飲使遣又

十二日、桂何某、名者嘉
一郎ト歟申候由

〔後に承候へ者貫一郎
之由也〕

十三日

ハツテイラ

ハツテイラト云ハ端舟ニ
テ、伝馬船ノ如キモノ也
トソ

○十二日、辛酉、晴、炎暑、森岡万之進方弟婦夜前安産、女子出生、母子共何之滯も

無之旨為知来ル、早速為歎、見舞兵藏遣ス、例時出勤、夕八時頃退、井上市太郎・

原要人殿・池田加賀守暑氣問安来、夜森岡へ見舞二行、母子共弥無滯、小兒も至而

丈夫也、酒出ル、桂何某云、西洋流炮術者先達而足輕ニ御抱有之、いまた年若ニ

者有之候へ共炮術者至而功者、本大坂者之由、其者之申立ニ而、比治山藍座役所ニ於

て先達而以来鉄造之火炮段々御鑄建ニ相成、近頃異国船造之船も造試有之、既ニ此

間船卸、乗試有之、大須賀川ニ暫繫有之、万之進も見物ニ参候由、同人話也、尤船

者四間計之小船之由也、所謂フレガツト、中分共歟、夜有涼風

○十三日、壬戌、晴、朝涼、午炎熱、御番頭弓削左膳殿為御館入被出候ニ付早朝出勤、

同勤一同ニ出会及挨拶、直ニ相詰、夕八時頃退、夕七時支配下宅ニ於之御用有之、

伊藤茂登・土屋政之進來、加席之御目付松井庫人也、夕丹羽庄藏安産之歎ニ来、折

柄酒を出ス、慈君夜森岡へ御出被成也、母子共弥無滯、今日名を命候由、予此間

以来腹合悪敷困候ニ付、松本良伯へ葉を乞

○十四日、癸亥、晴、炎熱、夜有清風、早朝御両家様へ暑氣御機嫌伺して罷出、井

上市太郎・脇本武兵衛・本庄三大夫を訪、久野秀太郎・吉田藤馬・丹羽庄司・久野

八十助を訪、吉田儀右衛門先生を訪、近来歴々之御役衆殊外軍学出精有之由ニ而、

槍門前二六、七本も有之、供待之家来門内ニ充滿したり、夕八半時頃御用向有之、

出勤、及暮退、明十五日小島太郎作殿為上使五半時過此御方様并主水榊江御出之由

也、長槌夜前者又大便通し遠候故、今朝碩庵老を迎、診を乞、何も相替儀者無之候

十五日、北御部屋御七夜之御祝去ル八日之所、御穩便ニ而御延引、今日御祝被成候ニ付、御館方退出掛卒与恐悦ニ罷出、其儘上下着ニ而出、平日なれば平服之儘出候例也
 例年之通今日附足輕夏御貸米切手渡、米価諸郡米石ニ付百式匆替之由也

得共、何分火強く候由被申、葉少々加減有之、時々甘草を濃振出為飲候様被申也
 ○十五日、甲子、晴、朝些有清風、後炎威最酷、今日上使有之ニ付出勤之面々麻上下着候様被仰出候ニ付、朝五時過麻上下着仕出勤、兼而右上使相濟候後、上田様へ御吹聴之御使者予相勤候様ニ与の御事ニ付、其覚悟ニ而出ル、昨記之通五半時過上使御用人並小島太郎作殿御出、小書院ニ於而且那樣御出会被遊、上田主水様御妹此御方様江御縁組被仰出候旨御意之趣被仰上候之由、奉恐悦候也、右之節御玄関薄縁敷江予御迎送仕候也、右相濟候後御次へ罷出、御用達迄恐悦申上ル、其節周防様・出衛様江之恐悦も右同様申上候也、上使相濟、即刻為御礼御登城被遊、御下城無程主水様方為御吹聴御用人吉田藤馬御使者ニ相見、先後度々挨拶ニ出ル、受引者渡辺雅登仕、於御書院御逢、御直答被遊、御手自御熨斗被下之、其後十畳敷ニ而吸物・御酒被下、是又雅登相伴也、右藤馬退出後無程余予為御使者主水様へ罷越、麻上下着、供連両若党、道具・挟箱・草履取・合羽籠也、主水様ニ而表御玄関正面脇三ツ割之処方上ル、刀者持上ル也、御取次安井常之進少し出浮相待候ニ付其所へ參、豊後様御使者与して罷越候、宜敷御案内可被下与申、直ニ同人案内ニ而御使者之間大衝立之内へ着坐、無程御出頭坪内久米之助出会、挨拶有之、同人案内ニ而驚之御屏風有之八畳之間江通、刀後ニ置着坐、御茶・多葉粉出、夫方御用人河瀬喜和馬出会、御口上申述、一応退、又出候而御口上之趣申上候、無程御逢被成、御返答被仰述候而可有御坐旨被申聞、夫方吉田藤馬・福山覚右衛門出会、挨拶有之、又御側御用達中川太左衛門出会、挨拶有之、其内ニ又久米之助出、兼而頼置候ニ付御逢之御場所へ案

内可致由二而、一緒ニ參、御書院下地見合、何角打合せ置、此節太左衛門も參ル、
 一応帰席、無程又久米之助案内ニ而御書院へ出、尤御書院取付之御間より者河瀬喜
 和馬誘引也、主水様一之間へ被成御坐候ニ付、二之間へ罷出、喜和馬名披露有
 之、是江与被仰候ニ付少し左へ開キ御敷居近く進候処、御返答之御口上被仰述可申
 上旨御請申上、又是江与被仰、御取合も御側近進候様挨拶有之、一之間内御側近
 まで摺寄參候処、御手自御鬘斗被下、幾久与御意有之、平伏而鬘斗鮑を戴、直ニ懷
 中して退、元之席へ帰候処ニ而又御使者太儀与被仰、又平伏而御取合へ向御請申述、
 又一応平伏而退出、八疊之間帰席、夫方喜和馬挨拶ニ被出御一統様名之御返答ニ被出、
 其後藤馬・覚右衛門挨拶ニ被出、又覚右衛門御鹿末之御吸物・御酒被下候間緩々祝
 候様主水様被仰候旨被申出、御請申述ル、夫方又喜和馬被出、相伴被仰付候との事
 二而挨拶有之、此御間余り熟し候之故御書院三之御間へ參候様ニとの事ニ付、久米
 之助案内ニ而參ル、喜和馬も被參、同所ニ而ひれ之吸物、取肴ニ而祝盃出、一応相
 済引而又吸物・新盃出、肴式種ニ而献酬致ス、藤馬・覚右衛門・久米之助間ニ而挨
 拶有之、通ひハ坊主也、程々ニ頂戴し、御請を申納盃を乞、御請之義厚申述候而退
 出、喜和馬御玄閑まゐら戸際ニ御出頭御取次敷台迄被送出也、帰かけ御館へ出、御
 返答之御口上御直ニ申上、何も滞義無之段申上、七時少過帰宅仕也、夜中御奥へ被
 為召罷出、今日主水様名御到来之御肴御披キニ而、御酒頂戴被仰付也、御家司中・
 同勤も皆々出ル也、慈君名桑原へ御出被成、住吉祭ニ而饗応有之候由、松本玄
 順入来

〔十六日〕

浅野外衛

右御留守年於大御広間年頭・五節旬其外不時御帳付候節、大御広間二之間敷居際江着坐候様被仰付候事

○十六日、乙丑、晴、炎熱難堪、夕遠雷、早朝主水様へ昨日御縁組之儀被仰出、為恐悅麻上下着罷出、御出頭中村忠左衛門出會、夫方妙慶院へ參ル、例時出勤、九時過退、貞善童女祥月二付西向寺へ兵藏代參申付、去ル三月三日之記二有之御中老格浅野外衛殿大御広間二於て御帳付之節着席之一件、從來之通二之御間敷居際江着坐被致候様二与今度改而被仰出、其段昨夕大御目付より申來候由也、巖島市当年者殊外人出多、町中賑ひ候由、尤御供船者当年も不出候由

○十七日、丙寅、晴、炎威強、夜有清風、右近様今朝五時御供揃、此度之為御歎御出被成候付、繼肩衣着出仕、九時頃相濟帰宅、巖島祭礼二付御裏御鎮守之御供物如例頂戴仕、告于廟、夕堀尾へ囲碁二行、酒出ル

○十八日、丁卯、晴、炎威酷、朝夜者有清風、好氣候也、御縁組被仰出之御歎御帳付二付五時出仕、御帳始前御次江出、恐悅申上、御目見も被仰付也、周防様江之御歎も御用達迄申上ル也、九時頃退、夕弓術へ出

〔十九日〕

立秋節

○十九日、戊辰、晴、余炎如燬、夕白雷鳴、立秋也、朝例時出勤、九時過退、山中碩庵老來診、長槌弥宜考通二參候趣被申候由也、辻清人入來、夜快雷雨鳴

○廿日、己巳、曇、蒸、朝御乘馬へ出、御館江も出ル、少々腹痛之氣味有之、困ル、腹脚灸治、今朝神田八幡社江兵藏代參二遣し、御初穂を備、長槌守護之も頼遣ス、宮參後相調可申旨申聞候由也、極夕堀尾老人來話、夜雨降、雷鳴、涼し、森岡万之進挨拶二來候由

○廿一日、庚午、曇、有蒸共全体暑氣減也、例時出勤、九時過退、夜渡辺へ左伝対

廿二日、竹原奇童昨辰年
注進書書拔

百姓久右衛門倅

寅之助

一去々寅五月十日出生

一脊丈三尺式寸

一胴廻り式尺壹寸

一手足太ク、別而太股之

辺十歳位之者之様見へ

候事

一声曇り大人ニ似たり

一食料凡五、六合

一酒貳合計飲候事

一重サ三貫目余之石を白

由ニ持遊候事

一体之目方六貫目余

一手裏五寸壹歩

一足裏七寸五歩

以上

讀二行也、辻清人入来

○廿二日、辛未、晴、残暑烈、朝夜者涼意あり、朝素読所講釈へ出席、直ニ出勤、九

時過退、夕西向寺江參詣、夫、松田健藏・波多野権祐・桑原吉郎二江安産歎、何角

之挨拶二行、原要人殿江も暑氣問安之謝二行、出掛岩崎・菅馬之進方安産之歎、保

之進武内へ養子内約濟之歎旁二行、桑原ニ而達而被留、酒出ル、夜迄話し帰ル、加

茂郡竹原西野村奇児此度御捨扶持被下、為御請当所へ出、今日南御屋敷江出、梅梢

院様御覽被成候由、当年四歳ニして十歳許之童之如力、七貫目之重を挙、食料六合

計、猶乳をも飲候由也

○廿三日、壬申、快晴、朝涼、午後熱、野原八右衛門弓会ニ付早朝射場へ出、午前

為伺御機嫌罷出、右近様御到来之三原西瓜一切御分賜被仰付、告于廟、拜味、

夕御射場溜へ算木立稽古見物ニ出、心下痞痛之氣味あり、食餌難進候故夜早臥、

三宅室七夜招之謝入来

○廿四日、癸酉、晴、朝涼、午後残炎如燬、深更後涼、朝例時出勤、夕午鼓退、今

日も終日食料寡少、別而残暑不堪、夜早臥、尤心下微痛者止也

○廿五日、甲戌、晴、朝涼、午後炎熱、朝射場へ出、例時出勤、夕八時前退、周防

様去ル廿二日晚潮御乗船、廿日市辺へ御出之御振ニ而巖島へ御渡海被遊候処、今昼

被為入候由、当年も巖島芝居評判善候由、惣体当年者市立近年之人出之由也

○廿六日、乙亥、晴、朝涼、午後炎熱、早朝白島御抱内歎ニ預候方格へ返礼二行、

山中碩庵老江挨拶旁參、謁ス、辻ニ而酒飯出、午鼓前帰、心行寺由良政太郎墓所へ

〔廿八日、波多野權祐へ赤飯贈候節、先達而三十三処切を被惠候二付酒切手一枚添贈る也〕

參、同寺靈供料を備、聊知己之微意を呈也、明後日四十九日之由也、〔帰宅掛御館へ為伺御機嫌出ル也、〕夕射場江出ル、〔室角左源次ノ紙面ニ而竹原之奇童寅之助明朝六丁目御館へ罷出、御覽被遊候筈二付、中値為見物出候様御沙汰被為在候旨申来也〕
○廿七日、丙子、晴、残炎強、〔今朝御下江者雅登・善大夫被出候二付予者不出、〕例時出勤、九時過退、々出掛北御部江御用向有之、出ル、〔今日長槌宮參二候得共、敬日二付明日江延祝候筈也、〕西向寺へ兵藏為參、〔神田社へ過日頼置候守護を取二遣ス、肌之守差越也〕

○廿八日、丁丑、朝曇、白雨之気色ニ而雷鳴、雨降、甘澍也、〔長槌宮參内祝いたし候二付、予麻上下着ニ而長槌を抱神拜、廟見仕ル也、〕白神社へ兵藏代參申付、御神楽料・御初尾を備、守護を受歸ル也、〔赤飯を製、木野・水谷・辻・森岡・波多野・吉本等へ贈る、其外当春御加増之節、祝物を請候而已ニ而祝酒をも不出候、松田健藏・上野彦三郎へも序ニ贈る也、小人三次を為持遣ス、其外石井・岩崎・榮作・佐兵衛杯江も贈、山中碩庵老へ赤飯へ肴を添、穩婆へ同肴料添贈る也、〕田中実五郎来、見合くれる也、〔夜家小木野へ卒与見舞、吹聴旁二行、々掛白神社へ長槌を為參、木野ニ而白江腰を掛させ歸る也、〕今朝例時出勤、九時過退、〔夜涼〕

○廿九日、戊寅、晴、涼甚、〔朝高木平太郎弓会二付射場へ出席、〕夕為窺御機嫌罷出ル、〔午後雷鳴、雨降〕

○卅日、己卯、晴、夜来涼甚、午後暑し、〔例時出勤、夕九時過退、〕夕雨、涼し、〔昨朝方之進來〕

七月 小

〔廿九日夜、吟味役若月準二殿養家之弟本安橋川二而溺死、袴帶刀二而六丁目下毛保二掛り居候之由、白投与申風説也、準二殿二者江戸留守之由也

〔三日、北御部屋二而於笨殿御宮參之由二而、御赤飯一重御内々二而頂戴之仕ル也

〔四日

処暑節

〔南御屋敷二而殿様御妾腹之御男子捨之丞殿一昨二日御逝去被成、今晚御葬式被為在候由、昨年御出生、御産母者朝尾彦造娘之由也

○朔日、庚辰、雨、有風、涼甚、〔当月御米銀受也、〔例時出勤、九半時前退、〔午後風雨罷、有蒸氣、〔極夕々北御部屋へ出、入夜退、兼而内々御願申上置候茶湯御稽古之御相手也、今夕々御稽古御始被成、御指南者土屋政之進也、千家古流之由、御相手者予・雅登兩人内々願候而罷出也、〔此間内者俄二涼冷甚、作毛等二も当り可申哉与被考候程二有之処、今日者稍蒸氣二復る也

○二日、辛巳、晴、残暑復強、〔朝炮術稽古二出、三拾目玉異風を打也、〔夕御乗馬へ出、〔長槌昨夕以来大便通し無之、只管眠多候処、山中之薬を用、夕方々通し有之、平氣二復スル也、〔夜渡辺へ左伝対読二行也、〔従公儀被仰出之御移檄写し二通御添書二而出ル、一通者此度箱館表二於て箱館通法（案）と云鉄錢鑄立被仰付、蝦夷・松前・箱館三ヶ所限通用之筈二付、心得違無之様二との義、一通者今般築地講武所御構内二於て御軍艦教授所御開、阿蘭陀方献上之蒸氣船二而操練相始り候間、御旗本・御家人并二倅・厄介等二至迄有志之罷出、修行可有之、且又万石以上以下陪臣之儀も主人々々見込之者稽古御差許可相成旨之御移檄也

○三日、壬午、晴、残暑強、〔朝弓術へ出、〔素読所講釈へ出席、夫々出勤、九時過退、〔長槌今日者通し能、物体も殊外宣布也、〔昨夕金子元達来、長槌を診し呉、物体宜布候へ共業者不絶用候方宣布由申候出也

○四日、癸未、晴或曇、残暑強、〔慈君早朝妙慶院へ御参り被成、院主へ家小無滞安産之挨拶、杉原紙三帖を贈る也、直二松田・波多野へ御出被成、〔例時出勤、夕九時過

〔五日朝、霧深甚、巳上刻頃稍晴〕

退、〔朝石井寿兵衛・湯川新太郎入来、吉本恒之丞末女不快之所、昨夕病死之由二付悔使遣又也、〕処暑也、〔慈君入夜御帰被成〕

○五日、甲申、晴、残暑烈、〔朝六丁目御館へ罷出、森岡へ寄、午飯を出入、平野藤吉郎へも安産之節之謝二行、午前帰、夕射場へ出、北御部屋御茶御相手二出候、夜戌鼓頃退〕

○六日、乙酉、晴、夜来蒸気甚、午時残炎不堪、〔例時出勤、九時過退、〕夜蒸熱、難快寝

○七日、丙戌、晴、残暑酷、蒸気亦強、〔日出頃麻上下着出仕、御登城前於御居間御祝詞申上、周防様江御祝詞御用達迄申上、出衛様二者御表御部屋二而御祝詞申上、五半時退、々出掛用事有之、隆玄院を訪、西向寺へ兵藏（森地）為参也、〔午後堀尾眠石・岩崎常介入来、困棊、渡辺雅登・堀尾善大夫も夕方被来、夕方佳節之祝酒を出入、夕

辻清人祝詞入来、酒を出入、石井後室も同断、〔夜雨一過〕

○八日、丁亥、曉来雨降、風吹、涼、午後風罷、雨晴、〔朝炮術稽古二出、三拾目玉を放、森岡万之進午前々来、終日処々小繕事等用事を致しくれる、夕酒を饗、夕堀尾善大夫御用向有之、入来〕

○九日、戊子、晴、涼甚、〔御年寄杉田伊賀殿先達而從江戸帰着二付、今朝例之如御意御達与して御入来二付早朝出勤、午鼓頃退、〔午後射場へ出、夕波多野権祐安産歎、何角挨拶兼入来、酒を出入、且那樣今日川下へ御出被遊、御獵之由二而洗尾魚（鰯）三尾御奥通頂戴被仰付也、告于廟、夕地震有之、輕し、地鳴も有之也〕

十三日

二百十日

○十日、己丑、晴、朝冷氣也、朝吉本恒之丞・湯川新太郎入来、例時出勤、九半時頃退、昨日主水様より先達而為御歡罷出候御挨拶御使被成下、如例御受紙面二而御用人中迄申出ル也、堀尾善大夫今日風邪二而出勤無之、見舞使遣ス

○十一日、庚寅、晴、朝暮涼、朝射場へ出ル、夜兵藏を他家之寺白島辺之分へ為參也、長槌北御部屋へ出候也、夜蒸

○十二日、辛卯、晴、朝涼、後炎熱、朝兵藏東中通り辺他家之寺へ兵藏為參也、例時出勤、夕八時前退、夜兵藏又西向寺々江為參也、夜蒸氣強

○十三日、壬辰、朝曇、雨落、後晴、蒸氣強、二百十日二候得共風之意者無之、播磨辺方上者当月朔日余程之大風二而、兵庫沖二而者破船も有之候由風説也、夜妙慶院・西向寺・本照寺・興徳寺・興禪寺・清住寺等へ參、兩日寺二而八例年之通一封ツ、呈ス也

○十四日、癸巳、曇、時々雨はらつく、炎蒸甚、夕八時頃方海藏寺へ拜參仕、日入頃帰宅、帰途空鞆渡舟場方雨降出ス、終宵不罷、夜兩寺へ兵藏を点燈籠二遣ス也

○十五日、甲午、雨罷、炎熱、蒸氣強、長武左衛門入来、午後堀尾へ囲碁被招行、雅登・常介会、夕酒・茶出ル、夜慈君妙慶院・西向寺へ御參詣、直二辻へ御出、御宿被成也、御老中阿部伊勢守様御卒去被成候二付、從今日三日之間鳴鳴物停止之旨御移檄出ル也、同侯者十六ヶ年之御勤役二而、当年卅九歳二被為成候由、御在勤中御拝領物・御賞し筋等度々被蒙仰、殊二一万石之御加増も御拝領被成、殊之外御盛二御勤被成、別而近年異国御製御之筋二於てハ不容易御心痛も被成、上下倚頼厚趣

二承及候処、可惜事也、尤近頃格別二御心勞被為在候二付而者、何となく御気分御疎破与申様二被為在候由、此度之御卒去も御變死之様二も風説有之也、岩崎常介寺へ燈籠を点し候謝入来之由也

○十六日、乙未、晴、秋暑輒劇、蒸氣亦強、例時出勤、九時前退、地御前吉助来、酒飯を饗、夕方去、妙慶院朝夕共差岡有之、不能參詣

○十七日、丙申、晴、炎熱、朝些涼、朝妙慶院へ參、夫方松本玄順隱栖を訪、当春以来度々之挨拶有之也、辻清人入来、中元二不来候故酒飯を饗候由、夕森岡万之進お増を伴来、酒を饗、小倉甚右衛門娘養父入二付被招来候由也、夕弓術

○十八日、丁酉、晴、炎蒸甚、夕涼、素読所会読始殊二遅候故不及出席、已鼓後出勤、九半時過退、湯川新太郎入来、取替銀返弁及遲滞候断二来候也、一統今一際武芸稽古筋之儀相心掛、年若之輩・子弟等者猶更之義、惣而甲斐々々敷可致出精旨被仰出、右二付此御方様方之御添書共両通御移檄出ル也、移檄録二記之

○十九日、戊戌、晴、朝纔涼、夕曇、炎蒸猛、夜雨、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時前退、北御部屋へも出ル、夜渡辺雅登左伝対読二被来、佐藤益之丞寺へ燈籠を点候謝入来之由也

甘日

白露節

○廿日、己亥、曇、蒸熱甚、白露節、朝御乘馬へ出、松本良伯中元葉謝之礼入来

○廿一日、庚子、晴又曇、蒸熱甚、朝弓術へ出ル、例時出勤、夕九半時頃退、夜北御部屋へ茶御相手二出ル

○廿二日、辛丑、曇、時々雨、蒸氣強、朝西向寺へ參、素読所講釈へ出席、直二出

勤、夕八時頃退、夕射場へ出、体中不佳、夜早寝、長槌大便通し菟角間遠二而十八日方以来今朝通し有之様之事なれ共、惣体者少も申分者無之、小水者誠二繁々通し有之也、夜雨降、風吹

○廿三日、壬寅、暁来風収、雨止、蒸氣猶不衰、朝射場へ出、渡部廉之助弓会也、午後炎氣如燬、夜雨降、雷鳴

○廿四日、癸卯、暁来雷罷、雨亦罷、蒸氣未罷、朝山崎右内御用談二而来、及長談、已鼓後出勤、夕未鼓頃退、々掛北御部屋へ出、申鼓前帰、夕又雨降、雷鳴終夜不罷、時々雨暴、雷者震二不至、地藏尊御供物頂戴仕候也

○廿五日、甲辰、雨罷、猶蒸、夕又雨一霎過、蒸氣醒、例時出勤、夕八時過退
○廿六日、乙巳、晴、朝涼、又曇、蒸、夕暴雨一過、後涼、朝炮術稽古へ出、吉本恒之丞御用向有之、来、跡二而及緩話、午飯并二夕茶を出、夕佐藤益之丞昨日俸兩人軍学御相手被仰付候為吹聴入来、亦暫話又、夜慈君從辻御帰被成、お梅も一緒二来宿、恒も来ル也、今日秀山忌日候へ共妙慶院へ代參今朝之内失念、及延引也、

夜大二涼

○廿七日、丙午、快晴、新涼、朝堀尾善大夫不快を訪、最早快、今朝方出勤之舍之由也、大島五兵衛・小倉甚右衛門へ中元前嘉儀贈物之謝二行、素読所会読へ出席、直二出勤、夕八時過退、妙慶院へ昨日之延引代參并西向寺へ代參兵藏遣又也、左之通今日席達を以被仰出也

裏御門通行相止候儀、去ル嘉永元申年相達候趣も候処、来月朔日方通行致候事

二相成候間、何も申年以前之通可被相心得候事

右之趣席々江可被相達候、以上 七月廿七日

七月廿三日江戸御沙汰書之内

(菑川青昭)
水戸前中納言様

御内願之通海岸防禦并御軍製御改正等之御用御免、御懇之上意有之、御手自備前勝光之御差之御脇差被下之候由也

夕射場へ出、夕辻清人入来、酒鮮を饗、夜中於梅一緒二帰ル
○廿八日、丁未、晴、夜来涼甚、午後曇、朝御乘馬へ出、例時出勤、夕八半時退、夕松本良伯来、沢梅陽老人書之全幅之掛軸を恵、予当春御加恩を祝呉候由、兼々之噂有之候二付、及厚謝也、書者元吳仲圭題美子久青山仙境図詩也
○廿九日、戊申、曇、蒸、夕雨、風吹、朝射場へ出、桂辰馬引請弓会也、夜長武左衛門来話、予者北御部屋へ茶御相手二出ル

脇差被下之候由也

前中納言様二者抑以來異船御打払之方專御議論被為在候由二候へ共、思召通不被相行、終二交易等御許し、諸港御取開与申様之御振二相来、(成力)当时之御老中様方与者御論常二不合、依て右等御免之義御願被成候由風説有之也

六日

秋分

御免許二付儀右衛門殿へ左之通御贈有之也

一干鯛 一折三枚

八月 大

○朔日、己辰、晴又曇、不涼、朝六半時頃麻上下着、出仕、御登城前於御居間御祝詞申上、周防様江之御祝詞御次二而御用達迄申上、出衛様江御祝詞御表御部屋二於て申上ル、夫方御奥へ出、退出、今日々蝕卷分之余、曇二而不見、夕渡辺へ囲碁二行、眠石翁・常介会ス、極夕酒出ル、午後眠石翁入来、囲碁、芝山様方中元之御祝義として例年之通扇子三本頂戴被仰付

一晒式疋 料銀五枚
一御樽代 金三百疋
右御使者二而御贈

一袴地一下 料銀貳枚
右別段佐藤益之丞を以御贈也、儀右衛門殿も御

樽肴被差出也、小先生兼次郎殿其外御相手之衆も御祝義御贈被成也

七日、妙慶院へ備物左之通

一回向料 銀貳両
一靈供米 精三升
一塔婆料 銀壹匁
以上

九日早晨

酢和会
蕨蓴
油揚
蓮根

御皿

木くらげ
人しん葉

けむ

○二日、庚戌、晴、風吹、冷氣也、早朝、江波島鷓崎へ抱町稽古二出ル、渡辺雅登同船二而行、夜二入、戌刻後帰ル、今日者三拾匁玉拾町之抱を三玉打也、辻清人昨無沙汰之挨拶二来候由

○三日、辛午、晴、涼甚、朝素読所講釈へ出席直二出席勤、夕八半時頃退、森岡万之進來候由

○四日、壬子、晴、朝冷後涼、今日、御役所早出勤止、巳鼓頃出勤、夕未鼓後退、退出後神田八幡宮へ参詣す、池田加賀守へ家小安産、小児無滞且守護度々調くれ候謝二行、神酒を出ス、帰辻へ寄、お恒今日者両度吐乳有之、熱強氣遣候由、尤格別

之義与者不相見、山中碩庵老を迎、診を乞候由、酒を出ス、暮過帰ル、木野外姑御出御宿し被成也、夜六丁目様々今日川上二而御獵之記月魚三頭頂戴被仰付也

○五日、癸丑、晴、冷氣、午後薄暑、朝弓術へ出、夕方御乘馬へ出、外姑氏今晚御帰被成、夕酒鮮を饗、今朝辻へ見舞、兵藏を遣ス、お恒快方之由也

○六日、甲寅、曇又晴、夕暑、秋分也、正四時頃麻上下着出仕、今日吉田儀右衛門殿、甲州流御軍学御免許被差上候二付度々出会、及挨拶、膳出候上四寸予引之、小先生御相手衆も被出、御料理出ル、是者十疊敷也、引業者勿論予者不仕也、御免許御相伝相濟候処二而、於御次御用達迄恐悦申上ル也、夕七時前退出、夜北御部屋へ茶事御相手二出ル

○七日、乙卯、曇、時々雨落、冷氣、朝弓術へ出、素読所会説へ出席、四半時頃出勤、夕八時過退、来ル十日実山三回忌二付妙慶院へ備物為持遣し、且九日夕弟子菅人來

御汁 みそ 豆腐才 粒しゐ茸

御飯

御香物

御坪

香茸 薄藪 さわく結ひ干瓢 おろし生か

御平

飛龍頭 牛房 冬瓜 椎たけ はずいも 輪ゆ

御菓子

五色餅 粟 ふとう

同日夕

皿 酔わへ

みそ

汁 豆ふさい 青み しゐ茸

めし 香之物

くれ候様頼遣ス也、西向寺へ兵藏為参、夕六丁目御館へ為同御機嫌罷出、銘酒・御吸物頂戴被仰付、入夜退、森岡へも卒与寄也

○八日、丙辰、快冷氣、朝御乗馬へ出、夕炮術へ出

○九日、丁巳、晴、冷氣、後暑し、不遷廟御祥月二付早晨祭祀如恒規相濟、妙円廟も

如例奉配祀也、例時出勤、夕八半時頃退、夕妙慶院弟子摘玄来、於内仏回向念仏相濟、茶漬・酒を出ス、跡二而田中栄作夫婦・実五郎を呼、茶漬・酒を饗、余者何れも不能案内也

○十日、戊午、曇、午後暑し、朝炮術稽古、且来ル十四日江波へ出丁之筈二付玉持有

之、其方見合也、例時出勤、夕八半時比退、今朝妙慶院へ慈君御参被成、法事中御詰被成也、予者右玉拵之方有之ニ付不参也、主水様へ御到来之由、棕子鳥二羽頂戴仕ル也、夕妙慶院へ墓参、夫松本玄順を訪、今朝増田吉右衛門を以内々中越候義有之候ニ付訪也、岡部群助与申者硝石製之妙術を覚居候由二而、其儀ニ付及尋合也、深更婦、増田吉右衛門も参居、酒を被饗也、右岡部群助与云者先年長州村上家之義ニ付彼是配意を乞候岡部簡斎事也、当时医業を改、炮術師二相成候由也、今朝桑原吉郎二此間御内々被下物之御礼ニ来也

○十一日、己未、曇、涼、右近様近日三原表へ御出、為御暇乞御出被成候処、善大夫頼二付子御送迎罷出、五時出、九時頃退、夕弓術稽古ニ出ル也

○十二日、庚申、曇、涼、朝吉本恒之丞・金子元達来、御用向也、例時出勤、夕七時過退、森岡万之進來、拜領之年魚を恵、水谷又左衛門殿へ紙面来、先伯母速証

平紅切
からし

酒肴

八寸冬瓜
あられふ
しる茸

す、け

井小倉ふ
茗荷子

小僧布施

銀 壺 匁

内仏飾

餅 焼饅頭 干くわし

巻煎餅 棗 団粉

花

靈供

十日夕

豇豆飯

御茶

但昨夕之処延引、今夕一

緒二献之也

右飯岩崎・石井へ贈也

院殿卅三回忌来ル十五日相当ニ付、十四日夕連夜ニ参候様御案内申来、茶一袋御惠被成也

○十四日、辛酉、曇、時々微雨、冷氣強、朝吉本恒之丞来、素読講釈出席、夫方出勤、夕七時前退

○十四日、壬戌、曇後晴、蒸、堀尾眠石翁此間より歩行少々六ヶ敷由ニ付見舞、巳鼓前江波へ丁稽古ニ出ル、渡辺雅登同伴也、今日者百目玉筒、張筒土山仕掛、鑄筒榻台ニ而拾式丁、拾四丁之稽古也、夕方相濟帰掛ケ直ニ水谷へ行、酒膳之饗あり、寺者夕方早く来濟候由、守矢繁太郎母・南部要人妻等会也、今朝伝福寺へ者参ル也

○十五日、癸亥、曇、暑し、復時服ニ愜、夜蒸甚、今朝味木彦兵衛殿初而被罷出候ニ付、例時方早く出勤、初而謁ス、久保玉泉与云坊主も御立入、初而罷出候ニ付謁ス、夕八半時過退、極夕射場へ出、夜北御部屋へ御用向ニ而罷出、御月見之御相伴、御酒等御側ニ而頂戴仕ル也、月纒時晴、初更後有陰翳、当夏以来米価追々騰貴、此節志石百拾七匁許ニ至、惣体御領内者米出来宜敷由ニ候得共、他国米不来候故右

之通り之由也、今午後中津屋万之助来、酒飯を饗し、夕方去ル

○十六日、甲子、曇、炎蒸、御寄合ニ付早出勤、夕八時過退、退出後妙慶院へ参詣、

江戸本阿弥光円讚州高松侯松平頼胤へ御呼寄、帰かけ巖島へ社参致候由ニ而当所へ参り、先

達而以来四丁目辺ニ逗留罷在候由、依而今日御腰物類数々鑑定被仰付候ニ付、折柄予指料も二腰長束茂兵衛へ頼、鑑定を乞、左之通致鑑定候之由、一通り之鑑定而已者料物等者不受、折紙・下札等を請候得者極金之多少ニ応し銀数之定メ有之、謝義

を取候由也、今日鑑定被仰付候内ニ而も則重之御脇指、貞宗之御短刀者希代之御道具、極メ者式百五拾枚以上之折紙付候趣申、殊之外称美いたし候由也、右光圀者當時江戸本阿弥家之内ニ而も三人衆与唱候鑑定上手之壹人之由、誠ニ感心之物与茂兵衛も申居候也

一 無銘刀 新身豊後高田 弓箭縁頭之分

同脇指 天文関兼道 水葵縁頭之分

一 同刀 新身伯耆守信高 大小揃四歩一縁頭之分

同脇指 大和大椽正則 同

右何れも作者下也、惣而下作者式拾枚迄之代金付、中作者五拾枚迄之代金付、上作者五拾枚以上之代金付候由也、夕雷鳴、夜月暗シ

○十七日、乙丑、暁来風強、已鼓頃微雨、後晴、風和、蒸気亦紓、朝弓術且御乗馬へ

出、夕木野へ見舞、洒出ル、一馬眼病弥快、此間々致快出候由也、水谷へ此間之謝

二行、今日も本阿弥へ御刀参候由二付、予も亦昨日之残左之通鑑定を頼也

一卷掛大小之分 一腰

刀 長船祐定正真 金拾五枚代付可申候由

脇指 無銘 濃州岩卷 金五枚代付可申由

一身鞘計 式尺四寸之刀 一腰

無銘 越前関兼植 金拾枚代付可申候由

右之通致鑑定候出、尤外ニ不断差之分大小一腰も為見候へとも、目及び不申旨申候

由也、夕佐藤益之丞入来、二男益人義猶人、事也、三宅吉左衛門方へ猶又達而所望二預候故、及内約度旨申候之由也、今朝之風二而高潮満、新開土手其外草津方西往還筋大二損候之由、余程之高潮二而草津湊之波戸を越ル程二有之候由也、如何様今夕見受候処、堀川辺杯余程溢候趣也

○十八日、丙卯寅、曇、雨はらつく、後晴、又曇、涼、朝素読所会説へ出席、相濟出勤、

夕八時過退掛御武具役所へ出、日入頃帰、夜北御部屋へ御相手二出ル、夜長武左衛門来

○十九日、丁辰卯、曇、夕雨、稍冷氣、朝弓術へ出、例時出勤、夕七時頃退、慈君早

朝方六阿弥陀へ御回詣被成也、今日も本阿弥へ御武具方罷越候序有之候故、此間内之刀類へ不残下ケ札を為認呉候様長束茂兵衛・三宅内外へ頼置候処、夫々相整、夕方内外る差越呉る也、左之通

祐定刀 正真ト相見申候 金拾五枚代付可申候

無銘中 濃州岩卷ガンマト相見申候 金五枚代付可申候

無銘スリ上刀 豊州統景ト相見申候、金拾枚代付可申候

無銘中 濃州兼道ト相見申候、金五枚代付可申候

無銘刀 伯耆守信高ト相見申候、金七枚代付可申候

無銘中 越前正則ト相見申候、金參枚五兩代付可申候

無銘スリ上刀 越前兼植ト相見申候、金拾枚代付可申候

右下ケ札調料者一二付金壹朱宛之由、折紙調料者式拾枚迄金壹分、三拾五枚迄同式

廿一日

寒露節

廿四日早晨

白みそ

御汁 苞豆ふ
小椎茸

青み

生盛けし酢

蕨弱

白髪大根

御皿

あふらあけ

すたれふ

香たけ

青み

御飯

から漬

したし物

御坪

新香茸

なまふ

おろし生姜

御平

飛龍頭

松茸

牛房

人しむ

山のいも

京菜

輪柚

分、五拾枚を壺両壺歩、百兩枚を式両式歩与申様の割合之由也、慈君夜二入御帰被成、辻へ御寄被成候由也、石井後室御同伴被成也

○廿日、戊辰、雨終日不罷、夜風強、夜半後風止、空晴、月如霜、朝渡辺四郎右衛門入来、兼而頼置候鎗鞘地出来之由二而持来見せる

○廿一日、己巳、晴、冷氣、朝弓術へ出、例時出勤、夕八半時退、平野藤吉郎入来、寒露節也

○廿二日、庚午、晴、冷氣強、朝西向寺江參、炮術稽古場へ卒与見物二出、直二素読所講釈へ出席、相済出勤、夕七時前退

○廿三日、辛未、快晴、朝冷氣強、後暑し、朝御用向有之、御館へ出ル、御乗馬へ出、夕炮術稽古二出

○廿四日、壬申、快晴、朝冷氣強、能称廟五十回忌御相当御祥月也、依て今早晨祭祀恒規之通行之、御法事者当四月取越二而相済候也、早朝西向寺江參詣、例時出勤、夕七時前退、昨日御山之松茸十本拝領被仰付、告于廟、今朝出衛様を御獵之鮎五頭

頂戴仕、是又告于廟、夕射場へ出、夜渡辺へ左伝対読二行也

○廿五日、癸酉、朝曇、蒸、後晴、朝五半時頃地震暴発、皆々大ニ驚駭、俄頃二而鎮去ル寅年十一月五日之震をハ少し強し、早速為伺御機嫌御館并二北之御部屋へ出ル、御方々様御機嫌被為替候義も不被成御坐、御建前・御蔵等所々損所も出来候得共格

別之事者無之、予御多門も少々北へ傾候様二、処々壁之損し有之也、六丁目御館江

者早速善大夫為伺御機嫌被出、夕八時前退、其後も時々小震有之也、森岡方見舞

御台引琉球いも
しそ穂

衣あけ

御菓子

焼まん頭

さわし柿

みかん

夕

御茶

さつまいも

さ、け飯

右藤川へ贈也

廿五日夜

始徹蚊帳

去ル廿三日於国泰寺祝

国開堂有之、御名代御年

寄生田筑後殿被勤候之由

也

廿五日之記、牧野備前守

様与有之者予誤記也、矢

張堀田侯御演達之由、牧

野侯二者至而御不同意之

由也

使差越、辻者清人入来、両家共別条者無之、尤辻之方者壁等余程損所出来候由也、

御多門内彼是より見舞二預ル、此方より使を以夫々見舞申遣ス也、町家所々潰家、

怪我人等も有之由二候得共、いまた実説を不聞、今日之地震先年より者強し与いへと

も、皆々先年之覚有之候故、家外へ仮屋を構、臥二者不至也、江戸表二而者亞墨利

加官吏登城之義御治定二相成、去月廿六日御老中牧野備前守様下新部屋二於て諸

向へ取調之義御演達有之候由、何分溜之間諸侯方も多分御不同意之由、当時堀田

備中守様・久世大和守様御執政御不評与申事也、同廿八日二者惣出仕二而御評議有

之筈之由、未其説を不聞、何分今日之地震定而上下諸国共大変二而可有之与被察、

天意如何難計、恐怖二堪たる次第也、夕快晴、風出、蒸気止

○廿六日、甲戌、晴、涼、朝御乗馬へ出、弓術へも出ル、森仙太郎其外彼是地震見

舞之謝二来也、終日時々震氣有之、夕申鼓前後両度少し有力、入夜無震、昨日之

震所々損し有之、土蔵等之破損大分有之、東辺老人菅人壁二被庄死候も実説之由也

○廿七日、乙亥、快晴、朝冷、後暖、朝素説所会説へ出席、相濟而出勤、夕七時退、

時々微震有之、夕八半時頃之震稍有力、森岡万之進・小倉甚右衛門入来、今日西

向寺へ兵藏代参申付、妙慶院へも為参、御墓所不残無難之由也、他之石塔者大分倒

居候由也、夜半より雨

○廿八日、丙子、暁来雨、朝雨罷、後晴、又曇、寒し、今暁七時頃地震有力、例時

出勤、夕八半時頃退、午鼓後有震、夕弓術へ出、夜北御部屋へ御相手二出ル

○廿九日、丁丑、曇、寒し、午後吉田藤馬江御用向内談事有之、時候見舞旁訪之、

夕高木来助弓会ニ付出席、夜木野一馬入来、酒を出ス、夕微震有之
○卅日、戌寅、晴、冷氣也、例時出勤、夕七時退、今曉有震、其後夜中迄不覺震

八月十一日江戸御沙汰書之内

加判之列 京都所司代方(安宅)
脇坂淡路守候

所司代 本社御奉行方(忠良)
被叙侍從 本多中務大輔候

美濃守与御改

寺社奉行 御奏者番(勝勝)
加役 板倉周防守候

廿八日右同

壹万石高二
御加増被成下
若年寄

本郷丹後守殿 (泰固)

御側衆方

同十三日

宗 (義和)
对馬守候

朝鮮之信使来聘、对州易地之義兼
而相達置候趣も有之候処取計方行
届、御趣意之通相整、彼国方相願、
其旨御聞届被遊候様相成候段一段
之事ニ被思召、就而者彼国へ往復
等費用も不少儀可有之処、猶此上
簡易省弊之義、彼方掛合方等手数
相懸、可為難儀と被思召候付、出
格之訳を以金式万両被下之

同十四日

大御目付 (頼貞)
土岐丹波守殿

御鎗奉行 (政憲)
筒井肥前守殿

御勘定奉行 (重謙)
川路左衛門尉殿

御目付 (長範)

鶴殿民部少輔殿 (尚志)

永井玄蕃頭殿

御勘定吟味役 (元邦)
塚越藤助殿

亞墨利加官吏江戸参上之儀御差許
相成候ニ付而者、出府并当地逗留
中、且登城、御目見并老中応対等
之手続等迄申合、万端引請取調候
様可被致候

九月 大

○朔日、己卯、晴、暖、当月予月番受也、例時出勤、夕七時前退、当夏以来家内無

六日

霜降節

事之祝、例年之如小豆飯を炊、祝ふ也

○二日、庚辰、晴、煖甚、今日煤掃いたす、田中実五郎・小人三次昨年之通来くれる也、夕夕為伺御機嫌罷出、六丁目様二而助七殿御髪置御内岩井被マ為在候由二而、御赤飯壺重箱頂戴被仰付、告于廟、夜亥鼓後有地震

○三日、辛巳、曇、寒き方也、夕晴、朝素読所講釈へ出、相済出勤、夕七時前退、

夜又御用向二而御奥へ出ル、有地震、稍強し、夕堀尾眠石入来

○四日、壬午、晴、寒、朝六丁目御館へ為伺御機嫌罷出、午後帰宅、直二出勤、夕七時退、今朝出掛三宅春齡へ寄、長槌接痘之儀を頼、幸明日序有之候故、朝之内差越候様二与申聞ル也、其積二いたし頼置候、出勤中吉田藤馬入来之由、此間予參候挨拶旁御用向を含来候由也、夜北御部屋へ御相手二出ル、今日者地震之氣無之

○五日、癸未、晴、冷氣強、朝射場へ出、為窺御機嫌罷出、其後御用向有之、又出、夕岡本主馬殿此間来儀之挨拶二行、藏田和太郎留守を訪、松本良伯去々月沢三五之書

惠候謝二行、土屋政之進へ茶之湯世話二成候謝、佐藤益之丞へ二男益人三宅吉左衛門へ養子内約済之歎、三宅へも同断行、辻へ見舞、暮頃帰宅、辻之方先達而之地震余程損所有之趣也、昨記之通今朝長槌を三宅春齡方へ遣、痘種を点し囉ふなり、田中実五郎妻を頼、兵藏を付遣ス也、来ル十一日今一応差越候様二与申帰る也、今午後波多野権祐来、去ル朔日善寛三回忌無案内之挨拶也

○六日、甲申、晴、冷氣也、霜降也、例時出勤、夕七時退、尤朝之内御備稽古見物二御裏へ出、御馬養生江も卒与出ル也、堀尾善大夫症積二而出勤無之、見舞使遣ス、

夕湯川新太郎来

○七日、乙酉、晴、暖温甚、夕有蒸氣、朝素読所会読へ出席、相濟出勤、夕七時頃退、主水様今夕為時候御見舞御出被成、折柄御留メ被遊、御饗応被進候二付、夜中為御取持御奥江被為召、罷出、御取持仕、御酒頂戴仕ル、御立坐之節御書院台所江御送り罷出、御出之節表御玄関江雅登被出也、西向寺江兵藏為參也

○八日、丙戌、晴、温暖甚、不堪時服、長槌接痘今日方灌水之順ニ有之、稍起張いたす也、午前為窺御機嫌罷出、六丁目様今日古江御山屋敷大髭山へ茸狩ニ御出被為在候由二而、松茸九本夜中頂戴仕ル也、夕曇

○九日、丁亥、曇、時々有日光、温暖甚、今曉地方町出火之由ニ付出ル、尤当辺江者鎮火ニ知れる、竈数六軒程致焼失候由也、尤半時頃帰宅、朝五時麻上下着為御祝詞罷出、恒之通御方々様へ御祝詞申上ル、午後堀尾眠石・岩崎常介困基ニ入来、夕節句之酒を饗、渡辺雅登も被来也、辻清人・森岡万之進為祝詞入来、祝酒を饗ス、長武左衛門も来、久野八十介妻病死之旨久野大平方為知来ル、尤昨日之事也

○十日、戊子、晴、暖、夜寒、例時出勤、夕七時前退、夜渡辺雅登左伝会ニ入来、然ル急ニ北御部屋へ罷出候様申来、兩人共御相手ニ出

○十一日、己丑、晴、冷氣、朝六半時前地震有之、稍強、長槌種痘愈順ニ日立、今日方灌膿也、朝三宅春齡江檢定ニ遣ス、殊外順症、真痘ニ相違も無之由申帰、痘種をも取候由也、兵藏并実五郎妻を付遣ス也、午前為窺御機嫌罷出ル、庭前之柚子此節色付美敷候処、殊之外御好物ニ被為在候由ニ付、御内々御奥へ差出ス、然る処

十三日

御目付役
御役料並之通

桂 辰馬

筆列只今迄之通

御移り二八王子柿十三頂戴被仰付也、告于廟、名倉求馬弓会二付午後射場へ出、尤問二而御用向有之、御輿へ出ル

○十二日、庚寅、晴或曇、寒し、例時出勤、夕七時頃退、今晚寅鼓前出火有之、出ル、牛田村あけ八幡之近所焼失之由、速二鎮、夜渡迎雅登左伝会入来

○十三日、辛卯、晴、寒し、朝素説所講釈へ出席、相濟而出勤、夕八時過退、佐藤益之丞来、兼而頼し同方着具御武具蔵二預有之を、当家之座敷二而風入を為致呉候様申、具足箱一荷差置帰候由也、六丁目様へ今日讚州小^豆島真光寺遊林与申僧御呼寄二而、一向宗法談御聴被遊候由、予等へも暇二罷在候へ者聴聞二罷出候様二との御振合二付、退出後善大夫同道罷出、暮過迄有之、相濟而於御次にしめ・握飯・御酒之御した頂戴被仰付也、帰り掛森岡へ卒与寄也、夜月色清潔

○十四日、壬癸、晴、寒し、夕曇、朝松村弥助殿被来、謁、同方身前之義二付極密被頼候義有之也、夕為窺御機嫌罷出、御輿二而女中向御通し稽古有之、暫く見合ス也、桂辰馬昨日御目付本役被仰付候為吹聴入来、昨日・今日於射場京的有之候由、夕万之進來、酒を饗

○十五日、癸巳、晴、夕曇、温、今日二葉山御祭礼、殿様御名代旦那樣御勤被遊候二付早朝出勤、夕七時前退、御社詰者主水様之由、右近様者三原御留守故也、夜長武左衛門来、家内向菟角不和合、第一父子之間不睦旨内密申聞候二付、段々及異見置也、長槌種痘弥順症、今朝^ら皆々痲を結、昨日・一昨日あたり者少々微熱を生し、夫丈氣重之方二有之候処、今日者平氣二復スル也、夜四時前有軽地震

○十六日、甲午、晴、暖、後或曇、早朝妙慶院へ参、久野八十助妻之喪を吊、八十助者三原へ御供二而罷越、留守中之由也、例時出勤、夕七時頃退、夕輕地震有之也、長槌痘悉結痂いたし、弥無滞今日酒湯を引也、夜北御部屋へ御相手二出ル、今日細六郎牛田御山屋敷を拜借、出稽古いたし、旦那様・出衛様御見物二御出被遊候由也、人数五十人許出候由也

○十七日、乙未、晴、暖甚、朝一井嘉内を訪、不遇、此間松村弥助内頼之一件二付而訪候也、御館へ為窺御機嫌罷出、今日長槌酒湯之内祝并予氏祭之祝を兼而いたす也、尤一円外へ之案内等者不致、田中栄作家内を不残呼、吸物・酒を祝す也、慈君午飯御祝被成候後辻へ御出被成、直ニ祭礼迄御逗留被成筈也、吉本恒之丞来、御用談、時刻移候故午飯を出ス、尾道之町人灰屋重助与云者、三島屋々之伝言申来、通し而謁ス、三島屋方養子不埒ニ而当春欠落いたし、又々先之養子喜一郎義段々取持人も有之、帰縁いたし候由也、当春預置候本類戻くれ候様ニとの伝語申也、明日旅宿繩屋伊三郎方まで為持遣ス筈ニ申置也、夕森岡弟婦来、万之進も迎ニ来、子供兩人も来、祝之酒飯を饗ス、今朝地震有之

酒 一陶

肴 一尾

但三升、代銀六匁
但代三匁五歩之こち也

廿一日

立冬

夜亥鼓前兩度有地震

○十八日、丙申、晴、暖氣甚、朝一井嘉内を訪、在宿ニ而謁ス、素読所会読江出席、相濟出勤、永井仲之助養父三休体今晝病死之由ニ付、使を以悔見舞申遣ス、其後知せも来也、夕七時頃退、家小・長槌今晩々辻へ参宿、明朝神田社へ参詣いたす筈也、

○十九日、丁酉、晴、暖甚、夕俄ニ曇、雨将落終不成雨、今朝兵藏(森島)を辻へ遣し、長

廿二日早晨

白みそ
豆ふす
御汁 小椎たけ
青み

酢わへ

御皿

油あけ
香たけ
薺蕪
れん根
たいこん
けむ

御飯

御香物

御坪

白わへ
こんやく
くわゐ

のつへい

油あけ
やきとうふ
こんにやく

御平

牛ほう
にむ参
松たけ
里いも
へち袖

御菓子

まん頭
柿
みかむ

榎・慈君・家小神田社へ参候由、六丁目様へ旦那様・出衛様御招被遊、夕方御出被

遊、予等も御取持旁二被為召、八半時頃罷出ル、当年も御庭へ菊を御作らせ遊は

し、屏風之形を作り、幕釣、毬鉢植等之細工も有之、殊外御立派二出来候也、今日

之御催しハ右御菊見、且先達而助七殿御髪置御祝之御心持与奉恐悦也、御茶菓子御

口取之御下夕頂戴、夫々御側二而御吸物・御酒頂戴仕、猶御次二而夜食も被下候也、

夜亥鼓後退、家小・長榎夜従辻帰ル、丑刻前地震余程強く長し、今日も例時出勤、

夕八時前退也、今日留守中田中実五郎夫婦見合せ呉る也

○廿日、戌戌、晴、寒し、朝御乗馬へ出ル、夕見せ馬有之、出ル、御輿へも出ル、

慈君今晚辻より御帰被成候筈之処、猶又達而留候二付御留被成候由也

○廿一日、己亥、晴、寒し、例時出勤、夕七時退、々出掛北御部屋へ御用向二而罷出

候所、於栄殿御閉之気味被為在、御困り被成候二付暫見合、暮頃退

○廿二日、庚子、晴、暖、今晩八時頃於栄殿又々御困り被成候御様子二付、北御部屋

へ出、六時前退、誓円廟御祥月今早晨献膳、右御振合二付家小代予而務之、其内子

も帰宅致候故、献茶・献菓子勤之、何も恒規之通相済、休受安廟も如例配祀仕候也、

於栄殿八島周軒老江御診御頼二而四時前被出候故、又北御部屋へ出、周軒老へ初而

謁ス、何も格別之御容体与者不被申上、今朝者大二御居合被成候方也、例時出勤、

夕七時退、々掛北御部屋へ出ル、弥御居合御宜敷由也、今日西向寺参詣不能、兵藏

代参申付也、今朝佐藤益之丞入来、先達而頼之着具風入相済戻ス也

○廿三日、辛丑、朝曇、後晴、又曇、暖、朝御乗馬へ出、午前香取流槍術見物へ

以上

御茶

新豆飯

琉球芋

廿六日、御結納并御祝義物左之通被進候由

一千鯛十二枚 一折

一御小袖 一かさね

一御帶 二筋

一御樽 一荷

右御縁女様江旦那様

一千鯛五枚 一折

一御樽代 金三百疋

右主水様江旦那様

一千鯛三枚 一折

一御樽代 金式百疋

右主水様へ周防様

一千鯛三枚 一折

一わた 五卷

出ル、今日者初穂祭ニ而出席多候也、夕八時過ル弓術稽古ニ出、今日者石井寿兵衛引受弓会也、於榮殿夜前以来者益御居合御平体之由ニ付、今日者御伺二者罷出候也、辻清人入来、慈君明晩御帰被成候由也

○廿四日、壬寅、時雨之気色あり、寒し、例時出勤、及暮退出、極夕水谷又左衛門殿法事之謝ニ御出、酒を出、寛々御咄被成、夜慈君從辻御帰被成也

○廿五日、癸卯、晴、暖、例時出勤、夕七時前一応退、入夜又々出勤、無程退、今朝望月登殿御館入初而被罷出候故出る、始而謁スル也、為御礼宅へ被来候由

○廿六日、甲辰、快晴、暖、今日就吉辰御結納御祝義被進、御使者兼而予へ被仰付、六半時出仕、四時頃為御使者罷越、供連若党三人、道具・手回・長柄・挟箱・合羽籠、騎馬口捕式人、杏籠持老人、着服者木綿吉岡麻上下也、副使御用部屋詰大島五兵衛先二行、其次御結納并御進物之御品共釣台七指、其次介添御歩行組米原岩之助、其次兩具釣台一指、其次余程間を置、予罷越、書院台所口通、表御門へ出、南御門通り、同所外へ乗馬、順路主水様御門前ニ而下馬、御玄関正面脇へ刀持上ル、其余之次第何も当六月十五日御使者相勤候節之通り、尤今日者御直答後御吸物等者不出、御祝義物被下候段、河瀬喜和馬へ被達、夫々頂戴御請申述、御品物者下方通り回し被呉候筈也、其外何も相更義無之、披キ之節者兼而裏御門通り之打合せニ相成居候故、表御門内へ御歩行筆頭案内有之、裏御門内ニ而会釈し別れる、御門外へ乗馬、八丁馬場へ小姓町通り西御門外ニ而下馬、裏御門通り帰ル、直ニ御館へ出、御直答之趣申上ル、今日日出会御用人不残、御出頭不残、御取次者木野一馬也、御書院奏者

右於忠様へ周防様方

同日從主水様拜領之御

祝義

一干鯛三枚 一折

一銀 貳枚

右何れも木地台据也

同日

一本使

御用人騎馬

村上彦右衛門

一副使

御用部屋詰

大島五兵衛

一介添

御歩行組

米原岩之助

一宰領

足輕 四人

一持人

小人 十九人

河瀬喜和馬、同所へ誘引栗原卓馬^{甚兵衛}、御使者之間方案内大矢幸左衛門、披キ之節送り

喜和馬并坪内久米之助・大矢幸左衛門・木野一馬也、御祝義物者干鯛一折、銀貳枚

也、御先例者於御前御刀被下、御盃も有之、御座敷ニ而御料理式汁七菜、鯉鶴之御

料理ニ有之由之処、当度者御双方様御大俵中、格別ニ被仰合ニ而右様御手輕之御取

計ニ相成候也、尤此方様ニ而御答礼之御使者江右御同様御祝義被下筈之被仰合故、

彼方様方者銀三枚被下候而、此後御祝用之節御輿渡之仁へ被下候御祝義ニ相当いた

し候事与兼而之御内評ニ有之候処、彼方様如何之御判断ニ哉、右之通貳枚被下候也、

去ル文政六年^{甲斐}出羽様之方御取引之節者御本使へ干鯛三枚、綿五卷被下候之由也、

右御使者相濟候後、無程主水様方御答礼之御使者来、御用人吉田藤馬、御副使御用

所詰勝矢幸之助、介添岡村嘉右衛門也、御本使受引者予月番ニ而勤之、何も彼方様

ニ而之御振合也、右御取引被為濟候後、御家司中皆共御次へ出、御用達中迄恐悦申

上、周防様・出衛様江之恐悦も同様ニ申上ル也、夕七時過何も相濟退、主水様ニ而

拜領之御祝義早速下方通り回り来、御用部屋方差越呉候ニ付、帰宅之上告于廟、家

内へ及吹聴也、当家ニ而長柄傘為持候而之勤向仕候者今度初而之義、本意之事也、

夜御輿へ被為召罷出候処、今日之御祝ひ被為在、予格別ニ骨折太儀ニ被為思召候与

の御事ニ而、御側ニ而御酒・御吸物等頂戴被仰付候也、大島五兵衛・相庭庄之助も

右同様之御振ニ而、御輿付部屋ニ於て御内々御酒頂戴被仰付候由也、夜半後雨、
今夕小林土佐守来候由也

○廿七日、乙巳、朝雨、已鼓後晴、朝辰鼓後主水様へ昨日御結納御取引首尾能被為濟、

〔廿九日

開衾炬

〔九月十日江戸御沙汰書

之内

加判之列

御免溜詰格

牧野備(忠雅)前守候

〔同十三日

加判之列

松平伊賀守候(忠國)

恐悦与して雅登・善大夫同道二而罷出、麻上下着、供列者若党・草履取、尤若党袴股立二而連る、御出頭大矢幸左衛門謁、今日者御差間不被為在候得者、御逢可被成与の事二而申上有之、無程御側御用達中川新太郎誘引有之、於御居間御目見仕ル也、脇差者恒之通り脱し而出ル也、〔今日六丁目御館江出羽様・御二所様・於竹様を御招二而、午後御出被成候二付、為御取持罷出候様被仰付、予午前方罷出、旦那様二も御出被遊、出羽様御出之節御玄関へ御出迎仕、夕方御二所様御目見被仰付、御酒出候而罷出御取持仕、前後御次二而御茶御夜食之御下夕頂戴仕ル也、子刻後御立坐被成、其後退、帰宅及丑刻也、於竹様始而御目見仕、御十歳二被為成候由、身振等御慰二被成、御可愛ら敷被為在候也、〔出掛御奥へ昨夜之御請二罷出、〔夜辻妹於恒を伴来宿、山泉娘も付来ル也、〔三宅春齡先日贈物之謝入来之由

○廿八日、丙午、晴、朝冷甚、初而有霜、後も寒し、〔御結納濟御飲として四ツ時揃二而御帳付候二付、右時刻出仕、御帳始候前御家司中同様御次へ罷出恐悦申上、於御居間御目見被仰付、猶恐悦申上ル、脇指者帯儘出ル也、其後本庄三大夫夜前六丁目様へ被為召候御札与して罷出候二付謁し、午鼓後退、〔夜慈君・家小・長槌白神社へ參、お梅等も一緒二參、森岡へ寄帰ル、同方二而饗有之候由也

○廿九日、丁未、晴或曇、〔朝為何御機嫌罷出、〔森岡万之進夜前矢川村御代參方帰候由、来、御札・供物等恵、祭酒を饗、夕辻清人・長武左衛門来、同断、〔夜家小・長槌木野へ行宿、〔小倉甚右衛門此間御使者無滞勤候悦与して昨日入来之由也、〔少々風邪之気味有之、夜早臥

○卅日、戊申、晴、寒、有霜、例時出勤、夕七時退、辻清人夕方来、於梅伴し帰ル、酒を饗ス、夕八時過地震、稍強し

十月 小

○朔日、己酉、晴、朝有霜、冷甚、後暖、当月予御米銀受也、朝御乘馬へ出、例時出勤、夕八半時頃退、於榮殿昨夕者又々御不例之由二付、出勤掛為伺罷出ル、夜家小・長槌從木野歸る、佐藤益之丞着具風入之謝二来、夕射場へ出

○二日、庚戌、晴、暄、朝永井仲之助養父三休喪を吊、妙風寺同人墓江も參ル也、佐藤・三宅へ養子願下之歎二行、辻へ寄、吉本恒之丞を訪、略法硝石邸を一覽し帰ル、菟角思敷不出来候由也、夜北御部屋へ御用向二而出ル

慈君夜中辻へ御出、御宿し被成也、又少々御逗留之筈也

○三日、辛亥、晴、暖、玄猪之祝、明四日晴峰院様十三回御忌御相当之処今日江御取越、於海藏寺御法事御執行有之二付、予為御寺詰罷越、夜引明頃出宅、九半時前

歸り、直二御館へ出、夕七時過退、留守中小林土佐守又々来、同方稻荷社再建致度志願二付、此御方様御領分内百姓方も信心之者者多少二限らす寄進之儀、御役方下方へ移合之義相願度趣家小迄咄居候之由也、御奥方今日御法事二付御茶被仰付候由二而、御重之内牡丹餅拝領被仰付候也、今日者玉林殿御七回忌御相当御法事も御執行有之候也、尤予者其節者不及御寺詰也、夜木野へ安産歎二行、母子共無滯由、酒出ル

○四日、壬子、晴、朝冷、後暖、今晚丑刻兩度地震、前之分稍強し、朝松本玄順入

六日

小雪節

来、岡部軍彌人造硝石速醸方經驗之儀二付内談之趣有之、四時過東方出火、有煙、騷く、早速出ル、無程鎮火、尾長御山屋敷之下人家少々焼失之由、直二相詰、夕七時前退、木野へ見舞使遣ス、愈無滞由也、渡辺四郎右衛門兼而頼置候十文字槍塗出来、持参しくれる、暫く話ス、酒を出ス、手間料至而廉二而、手際者殊外宜敷、厚謝し置也

○五日、癸丑、晴、寒冷、朝御用向二而大御目付衆御呼寄有之処、渡辺雅登御備立之方へ罷出候二付子出勤、及出会也、中井出衛殿被出、四半時頃退出、夜北御部屋へ御相手二出ル、木野へ見舞使遣ス、母子共弥無滞肥立候由也、相庭静義庄之助改名此度御婚禮御用向被仰付相勤候二付、右相濟迄素読所御多門御間之内御貸被下、夜前同所へ参候由二而今朝頼旁二来候由、辻清人今朝入来之由、夜北御部屋へ御相手二出ル

○六日、甲寅、晴、寒冷強、例時出勤、夕七時過退、森岡万之進射場へ出候由二而夕方来、酒飯を饗、夜迄話事也、山田多喜登・渡辺四郎右衛門・夜石井寿兵衛御用向二而入来

○七日、乙卯、晴、寒冷強、有霜、夕曇、暖、朝相庭静来、朝素読所会読へ出席、相濟出勤、夕七時前退、西向寺へ兵藏為参也、夕相庭静来、到来之品有之候間、今夕参候様申聞、及固辞候得共、先年同人不仕合之節子及異見候義を不忘相用候二付、此度々様御用向をも勤候事二相成候二付、聊述寸謝度由二而段々厚意之事二付、夜中卒与参ル、有饗、深更迄及寛話也

〔九日、蜜柑廿七顆北御部屋へ差出ス

○八日、丙辰、晴、暖、〔南北庭之蜜柑当年も多分なり、此節うれ候ニ付今日御奥并二六丁目様へ御内々差出ス也廿九顆、夕北御部屋へ出、夕相庭静夜前参候謝ニ来候由、〔三宅内外入来、約束之八部大祓大成与申册を持参、貸被呉也

○九日、丁巳、晴、暖、〔例時出勤、夕八時半頃退、〔退出後六丁目御館へ為伺御機嫌罷出、森岡へ寄、〔出衛様昨日古江へ御山獵ニ御出被成候処、兎三匹御手ニ入候由也

○十日、戊午、曇、微雨、又晴、時雨之気色あり、寒し、〔例時出勤、夕七時前退掛北御部屋へ出、暮前帰宅

○十一日、己未、晴、暖、〔夕松井庫人弓会ニ付射場へ出ル、〔夜渡辺へ左伝対読ニ行、〔極夕相庭静来

〔十二日、昼之内ニ一度地震あり、軽し

○十二日、庚申、晴、暖、〔例時出勤、夕七時退、〔夜北御部屋へ御相手ニ出ル、且那樣ニも御見物ニ御出被遊也、〔辻於恒此間内熱有之、困候由、見舞使遣ス、最早追々宜敷由也

〔十三日

浪人
山中権八

○十三日、辛酉、晴又曇、朝有霜、後暖、〔朝素読所講釈へ出席、直ニ出勤、夕七時退、〔六丁目御館ニ而今日香取流槍術試合周防様御覧被遊、其節浪人何某与歟申貫心流剣術者之門人之由、女子三人参り長刀入身致候筈之由、見物罷出候様ニとの御様子ニ候得共、御用向湊候ニ付不罷出、外兩人者被出也

○十四日、壬戌、晴、暖、〔朝御乘馬江出ル、〔午後射場へ出ル、〔夕辻江行、於恒弥快由也、慈君御安泰ニ御滞留被成、明後晚御帰被成候筈也、酒出、入夜帰、〔吉本恒之

十五日

一 御切米老石 老女格
御増 かね
勤向老女之通

連名除勤事之余暇並
女中之勤向も兼相勤
候事

一人扶持

一 御増 女中
老女並 きく
勤向唯今迄之通

右兩人共唯今迄御側之
御用向相勤候処、不及
其義旨御内々被仰出候
事

一 極御内々御祝義与し
て左之通被下之候由
銀五枚 かね
同三枚 きく

一 兩人共唯今迄御側之
御用向相勤候二付、
被仰付振も可被為在
候得共、追而御考之

丞・土屋政之進入来、御用向也

○十五日、癸亥、晴、暖、朝射場へ出、例時出勤、夕七時頃退、此度御奥向御取締
御普請有之、北之新御部屋へ南之御部屋を御引寄二而新御居間出来ル、今日見分致、
惣体殊之外御立派ニ出来致ス也、夜曇

○十六日、甲子、雨、暖、朝妙慶院へ参、御寄合ニ付例時少早く出勤、夕七時過退、
今朝岩崎へ昨日おきく結構被仰付候歎ニ行、夕岩崎常介入来、来ル十八日故喜東
次十七回忌ニ付明日夕夜二招度由案内也、且下女を貸呉候様頼有之也

○十七日、乙丑、晴、暖、慈君夜前辻へ御歸り被成候筈之処、一昨夜者お恒又々熱強、
閉之気味有之候由二而御歸り不被成、今午後清人入来、何分熱強、氣遣候由也、極
夕岩崎へ連夜ニ被招行、妙信院・西川理三郎・平野藤吉郎・桑原吉郎二・藤井音次
郎等会ス、有饗、夜北御部屋へ御相手ニ出

○十九日、丙寅、晴、寒し、例時出勤、夕七時過退、今朝岩崎寺明信院へ兵藏代参
ニ遣ス、今朝長束茂兵衛此間かね結構被仰付候普為聴ニ来ル也

○十九日、丁卯、曇、時々雨、寒し、例時出勤、夕七時過退、辻へ見舞使遣ス、於
恒追々快方之由也

○廿日、戊辰、晴或曇、寒冷、朝東城徳了寺来ル、他行掛ニ付辞而不遇、御加増之祝
意品々被惠也、御用向ニ付御勘定奉行湯川守衛殿へ行、初而謁ス、帰掛京橋町世羅
屋直次方ニ而徳了寺を訪、未帰候由二而不謁、木原慎齋を訪、岩崎へ此間之謝ニ行、
岩崎常介法事之謝入来、今夕参候様ニ申、夕岩崎へ行、此間於きく結構被仰付候

趣も被為在候間、左
様相心得候様御内達
有之候之由也

廿一日

大雪節

祝意之由二而酒を被饗、堀尾眠石・大島五兵衛会ス

○廿一日、己巳、晴、朝霜降、冷甚、大雪節也、例時出勤、夕七時過退、徳了寺明日東城へ帰候二付暇乞与して午後来、取合せ肴二而酒を出ス、尤予者出勤中、家小謁候也、助七殿今朝以来御困り被成候御様子二付、夜中為御伺罷出ル、御次二而御酒御下夕頂戴仕ル、夕方者御居合被成候御様子也、森岡へ寄、帰ル

○廿二日、庚午、曇、微雨、後罷、寒、朝素読所講釈へ出席、直二出勤、夕七時過退、西向寺江參詣怠、兵藏代參申付、堀尾善大夫風邪二而今日方煩案内有之也

○廿三日、辛未、晴、朝有霜、冷甚、又曇、夕温、夜雨、朝西向寺へ參、辻お恒不快を訪、最早追々快方、気軽二成候様子也、飯出、慈君御安泰二御滞留被成、来月朔日御戻可被成由也、御乗馬へ出、午後堀尾幾之進弓会江出、蜜柑持寄之景物有之也、助七殿夜前以来散々之御様子二被成御坐候由二付、夕方雅登為伺被出候処、益御不出来之御容子二被為在候趣二付、予亦暮過る罷出、乍恐倍御不出来、御太切之御様子、御内実者暮前二御事切二被為移候由、奉絶言語候事也、雅登交退、五時過迄相詰、引取掛御館へ出、亥鼓後退也

廿四日

助七殿御法号

寒霜露月禅童子

○廿四日、壬申、雨、温、例時出勤、夕七半時過退、直二上下用意二而六丁目御館へ出ル、雅登者今朝方罷出、何角被見合也、助七殿御死去之趣、七半時頃御家来中江も無屹御弘有之、其節平服二而御奥へ出、老女まで御機嫌を伺、北御部屋へも罷出、御側方迄右同断、六丁目御館二而者上下着二而老女迄伺也、今晚五時御出興、御病氣建り二而海蔵寺へ御出被成、同寺二而御葬送之式被為在候也、御出興之節御使者

〔江戸御沙汰書之内

廿一日

亜墨利加大統領

使節

右御目見御奏者番披露書

簡カ備中守請取之

御時服五下五ツ 使節

右被下候旨於大広間二之

之間二而御見送り申上ル、其後猶又御奥へ罷出、老女迄御機嫌伺、引取也、御家司中雅登も同様、善大夫者煩中也、〔江戸駒込辺、去ル十二日出火、五丁程焼失、夫々阿部侯御屋敷へ飛火、其辺猶又五丁余致焼失候由也、〔江戸表亜墨利加官吏登城之義、溜之間詰諸侯方始、御大名様方段々御不居合、夷人者下田表二於て種々我儘を働キ、輕蔑之所行不堪切齒様之事二而人氣洶々、甚以不案千万之事之由、虚実者不知、風説有之、可懼事也

○廿五日、癸酉、曇、夕晴、〔例時出勤、夕七時退、〔夜長武左衛門来話、宮市天満宮御守を恵、〔吉本恒之丞カ兼而之岡部軍弼伝之速醸硝石経験相調候由二而、泥煮之硝石を見せる、勢力余程宜敷様相見、誠ニ奇術也、西洋法二而も人造硝石種々術も有之由二候へ共、皆年数を以製候事二而、何程速なるも壹年を不経し而ハ不調由之処、右様十日を不出して硝石結芒いたし候者、実以珍敷発明也、過日松本玄順カ内覧之岩国有坂隆介誓紙、宛二人造硝石速醸開基岡部軍弼殿与認有之候も虚称二者あらず、誠ニ希代之珍事といふへき歟

○廿六日、甲戌、曇、又晴、寒、〔夕吉田藤馬を訪、内々御用向示談之儀も有之也、藤馬此間内者又々胸痛、吐も有之、難儀いたし候之由、殊外形容憔悴、何分大病与相見ゆる也、桜井応輔・佐久間市右衛門参居、困某有之、暫話し帰ル、〔今日右近様従三原被為入候由

○廿七日、乙亥、晴、寒冷稍進、〔昨日右近様三原より被為入候得共、為恐悦者不罷出候也、〔朝五半時頃出勤、夕七半時前退、〔町方帳元御歩行組森元忠八郎・御役者十

間老中列座、備中守申渡之、通弁官へ被下物之義且御料理被下候旨使節へ同人申渡之

但御料理虫損□於旅宿被下

之

右者下田奉行召連登城之由

河勝之進・伊藤雄三郎為御立入初而出候二付謁ス、肥後五家村之住人九度右衛門与

申者先達而以来当所二逗留、炮術其外武芸達人_之由、就中紙張筒を製候義功者_之由、

同人者真田左衛門幸村之末葉二而、紙炮も左衛門伝来之秘術_之由、右製之紙炮今日

岡田八十太郎伝手二而、渡辺宅迄取寄致一覽、玉目三百目筒也、筒之製作台之仕掛

誠二感心之至也、夜北御部屋へ御相手二出ル也

○廿八日、丙子、晴、朝霜繁、冷強、例時出勤、夕七時過退、朝桂辰馬入来、過日

楠公之壁書認遣候謝也、瓷瓶を患

○廿九日、丁丑、晴、朝有霜、冷強、朝御用向二而被為召罷出、六丁目様二而寒霜

殿御初七日二付御茶被仰付候由二而、御重之内牡丹餅頂戴被仰付也

十一月 大

○朔日、戊寅、曇、温、朝者寒冷、当月者予手明月也、例時出勤、夕七半時頃退、

例年之通今日物成切手并附足輕御切米切手共渡ル也、米価世羅米石二付百五匁替

之由、高価也、今朝辻清人入来、慈君夜從辻御帰り被成也、於恒愈快方之由也

○二日、己卯、晴或者曇、暖、午後風出、寒し、午後御馬場へ御備稽古見物二出ル、

先月廿七日記二有之九戸右衛門紙張筒、今日於江波放試有之由、吉本恒之丞出丁

之序与申振二而窃二放試候由、右二付此節炮術口塞り中二候へ共、表向者恒之丞打

試故、此御方様方御届有之、相濟候事也

○三日、庚辰、晴、寒冷稍進、朝素説所講釈へ出席、相濟勤、夕七時過退出掛御家司

七日

冬至

中宅へ御用向ニ而会し、暮頃帰宅、御縁女様来ル十五日御引越、同日直ニ御婚礼御整可被遊旨今日主水様の方へ御使者を以被仰合、相濟、其段御家来中江心得之御達し有之也、御道具者来ル八日御送り被進候筈之由也、昨日於江波九戸右衛門紙張筒放試有之、五丁・拾五町五放ツ、無滞相濟、見物之面々誠(虫損)感心之由也

○四日、壬子辛巳、晴、寒冷、例時出勤、夕七時過退、夕木野一馬為挨拶入来、酒を出ス、夜北御部屋へ御相手ニ出ル

○五日、壬午、晴、又曇、寒冷強、午後六丁目御館へ為伺窺御機嫌罷出、森岡へ寄帰ル、酒出ル、夜北御部屋へ御相手ニ出ル、夜長武左衛門来、兼而頼置候手箆筒之古物有之、世話致呉可申旨申聞、程能物之趣ニ付取次頼置也、松本玄順入来之由

○六日、癸未、晴、暖、後或曇、長槌昨夕以来熟氣有之、全感冒与被考、夜前致発汗、今日者快方也、夜前之手箆筒を取寄ス、直拾八箋也、御用向之書類入ニ充ル也

○七日、甲申、雨、寒、冬至也、例時出勤、夕七時過退、西向寺(森島)へ兵藏為参也、今夕波多野権祐入来、酒を出候由

○八日、乙酉、時雨、寒冷有力、今日就吉辰御縁女様御道具を被進候ニ付、五半時出勤、夕七時過退、御使者出会者善大夫被勤ニ付、平服ニ而出ル、四半時頃初立御道具被進、御使者御出頭中村忠左衛門、供連両若党、槍・草履取・合羽籠ニ而来候由、後立御道具者午後被進、前後廿五荷宛、合五十荷也

初立御道具

一 御厨子棚

一 御黒棚

一 御小袖箆筒(箆) 二 棹

一御塗長持 二棹 一春慶塗同 五棹 一御屏風箱 二棹

一白木御長持 七棹 一釣台 五指

後立 同

一春慶御箆筒 一棹 一同御長持 三棹 一御屏風箱 一棹

一白木御長持 十一棹 一釣台 九指

〔森岡後室姪兩人連被來、酒飯を饗し候由也、万之進も卒与來候之由也、今朝吉本恒之丞來〕

○九日、丙戌、晴、寒冷有力、朝微霰飛、例時出勤、夕七半時頃退、永井仲之助忌明之返礼來候由、今朝出勤掛、岩崎常介へ三男保之進武内純介へ養子願下之歎、山田多喜登へ去ル朔日後妻引越之怡二行也

○十日、丁亥、晴、寒冷強、朝雪初飛、例時出勤、極夕退出、小松屋徳左衛門來候由、右近様御到來之三原大根它本如例年拝領被仰付也、告于廟

○十一日、戊子、晴、寒冷強、有水、午前御通ひ稽古為見分御奥へ出ル、夫御表之分も見合せ、入夜退出、風呂を建、湯川兵馬殿來儀、謁ス

○十二日、己丑、雨、寒し、例時出勤、入夜退、夜中相庭靜を呼、此當御祝用之節、予等作舞之義及相談、渡辺雅登・堀尾善大夫・大島五兵衛入來、跡二而有合之振二而酒を出、五兵衛・靜等此御別而心配、繁務之勞を慰

○十三日、庚寅、晴或曇、時雨、寒冷有力、朝例時少々早く出勤、夕及暮退、々掛素読所へ參、此度御祝式之節御入用之品々仕立相調候を致見分也、相庭靜吉良流之

〔十五日、御土産拜領左之通

〕于たい 一おり

たる代 金三百ひき

〕以上

右御目録杉原横折、据台者木地也、朝之内御使者を以上々様方江之御土産之御品与一緒ニ来候也

〔十六日、御輿請取之御祝

義左之通

〕干鯛 一折

銀 式枚

〕以上

右御目録紙品、据台等何も前同様、御用人を紙面ニ而宅へ為持来候也

〔十六日、今朝主水様江御婚礼濟御飲与して左之通り差上ル

礼法を以夫々仕立、何も御立派ニ相調也、〔昨朝岡本主馬殿来儀、謁又

〕十四日、辛卯、晴、寒、〔休日ニ候得共何角御用向有之、朝方出勤、入夜退、〔辻清人入来、恒又々吐有之、氣遣候之由也

〕十五日、壬辰、晴或曇、寒冷強、〔朝六半時前出仕、今日者褐布上下着也、夜者木綿藍吉岡を着着、〔兼而之通り今日御縁女様御引越、昼九時之被仰合之処、短日故彼是御時刻延引ニ相成、此御方を御迎御番頭弓削左膳殿を御頼ニ而、九時頃主水様へ被罷越、無程被帰、夫方夕八ツ時三、四歩頃御入輿、其節御家司渡辺宗右衛門殿并二子・善大夫表御門内西側江御出迎仕ル、御通輿之節御輿脇御目付の姓名披露、予者兼而御輿請取被仰付候故、同所を御輿之跡御左へ付、御輿渡役吉田藤馬与並、御供を仕ル、供者若党上下着、小者看押着を連ル、尤足袋者不用、且莖草履也、藤馬も同様也、御広式御玄関前御場所構筵敷ニ而刀を脱、家来へ渡、御輿之御左御貝桶受取渡辺雅登着坐之上へ着坐、程合見繕、扇子脱し置、少し進而御輿江向平服、〔伏興棒端の壹尺許上之処へ跪居ル、吉田藤馬も同様之作舞ニ而双方出合、軽く辞宜合して藤馬を千秋万歳目出度御輿御渡申与の祝言有之、予も受而同様ニ祝言を述、畢而双方辞宜合して元之席へ披く、但祝言之時藤馬坐し候故予も同様ニ坐ス、夫方御輿挙り候之上藤馬并二御貝桶渡役河瀬喜和馬へ卒与及挨拶、直二家来を刀を渡但家来は御幕外ニ扣罷在也、御輿之跡ニ随ひ御暖簾口迄參、扣罷在、御縁女様竹之間御次ニ而御下輿被遊、御居間御通り被遊候上、竹之間御次例之処江出、老女格かねへ逢、御安坐之御様子を伺、直二御表へ出、申上を仕ル也、其後御祝式始り、九献之御祝

干鯛二枚 一折

右ぬり台据目録者不添、杉原裏付披露紙面を以御用人中三人へ宛、御勝手、御玄閣へ為持差出、同役三人二而釣台壹指、宰領者摸相二而壹人付ル、尤家来差間候故足輕を致借用、何も御用部屋二而計ひ呉る也、全体旧例者木地台二而干鯛員数も三枚なれ共、此度者御時節柄二付右之通也、且目録者旧例主水様之方与ハ御互二不添例なれ共、此度彼方様御用人中々之二者目録添有之候也、下札者双方共同様也

但弘化四年三月廿日之記二有之通凡同様也、宰領持手へ御祝義左之

盃中落間へ相詰、其後御供御用人兩人与祝盃もいたし、前後御座敷之御客衆へ者度々挨拶二出、御色直し之御祝盃等迄何も被為濟候処二而御奥へ出、恐悦申上、其節於御居間初而御目見被仰付、老女八十野御取合せ仕ル、夫々御表二而御次へ罷出、恐悦申上、御目見も被仰付、帯剣之儘罷出、御祝言申上、猶又於御次周防様・出衛様江之恐悦御用達迄申上ル、深更於御奥仕舞狂言少々有之、拜見与して罷出、彼是相濟、八ツ半時頃退出仕也、御縁女様を御土産干鯛一折三枚、御樽代金三百疋拝領被仰付、於御用所頂戴、御家司中江御請申述、猶御奥へ出、老女迄御受申上ル、今日御入輿之節八丁馬場を御城内共拜見之人殊外多候由、慈君・家小も御門外へ拜見二出ル、依て僕壹人別段二雇候而為連也、森岡家内不殘、三宅吉左衛門室・米原岩之助母・長束清次郎妻・吉本後室・波多野清太郎等来、酒飯を饗し候之由也、夜慈君辻へお恒見舞二御出被成、直二御宿し被成也、於江戸御年寄武田大炊殿大病二而御用向御差間二相成候二付、杉田駿河殿来年江戸詰之処、急二仕回次第出船被致候様被仰出候之由也

○十六日、癸巳、晴、寒冷強、今朝主水様与皆子餅之御取遣り有之候二付早朝出勤、午時一応退、主水様へ昨日於忠様御引越御婚禮被為濟候御歡与して罷出、御出頭坪内久米之助出会、夫々御側役山村静人出会、主水様御逢被下候与の事二而同人誘引、御居間へ出、御目見仕、御手付熨斗被下之、脇指者銅壺之御間例之処へ脱し置、渡辺雅登同道二而出候二付一緒二出ル、夫々御弓之間へ退、御用人中へ逢、昨日御土産拝領之御受申述候積二而久米之助へ申入候処、詰合無之由二付同人へ相頼置也、

通被下候之由也、依之

御請者不申出ル也

半紙壹束 宰領へ

料銀壹匁五分

鳥目拾疋ツ、持手江

同日

此御方様江も為御歎左之

通り差上ル

干鯛 一折二枚

右ぬり台据、真之下札有、

於御次御用達伊藤徳之助

へ謁、披露之義相頼、後

刻遂披露候所、御満足被

思召候之旨手紙ニ而申来

但服者平服之儘ニ而出

ル也

麻上下着、供連者若党・草履取、尤袴股立ニ而連ル也、今朝主水様之御用人中の手

紙ニ而、昨日御輿受取相勤候ニ付、為御祝義干鯛一折三枚、銀式枚被下置候旨申来、

御目録添、木地台ニ而頂戴仕ル也、御請返書ニ申出、別段罷出候ニ者不及申值也、

且持人・宰領へ之祝義も相互ニ不遺筈之申值故不及其義候也、九半時前主水様の婦

り猶又出勤、夜ニ入退、御二所様今日周防様へ御祝与して六丁目御館へ御出被遊候

ニ付、御宇衛様御供善大夫被罷越也、主水様御用人中の紙面ニ而、明日御三ツ目為

御祝義御方々様御出被成候ニ付、其節御供仕罷出候様ニ与思召候之旨申来、御請返

書差出、全体為御請早速罷出候筈なれ共、双方申合ニ而其義無之、別ニ紙面を以御

札申出候也、妙慶院へ參詣不能、兵藏を為參也、御輿の御部屋見舞之具御取開被

遊候由ニ而、御煮しめ・御すし等頂戴被仰付也、告于廟、猶又昨日御土産ニ被進候

御酒之御開も一陶頂戴仕ル也

○十七日、甲午、晴、寒冷強、朝凝、夕曇、寒紓、夜晴、朝辻清人来、お恒少々快方

之由也、朝御用向有之、出仕、午時退、今日御三ツ目御祝義ニ付、御二所様・周

防様・出衛様被為揃、主水様へ御出被遊、兼而之通子等も御供ニ而罷出候様ニとの

義ニ付、御二所様御出被遊候後無程罷出、外御両方様二者極夕御出被遊也、予等罷

出候者八半時頃也、初御弓之間へ着坐、御出頭中村忠左衛門出會、案内ニ而八畳之

御間へ通ル、雅登者御宇衛様御供ニ而先達而出被居、予者善大夫同道也、同所ニ而暫

休息、御用人河瀬喜和馬・福山覚右衛門、御出頭栗原甚兵衛・坪内久米之助出會、

休息中御出頭中江頼候而御坐敷回り御數奇屋之方拝見仕ル、栗原甚兵衛・中村泰真

休息中御出頭中江頼候而御坐敷回り御數奇屋之方拝見仕ル、栗原甚兵衛・中村泰真

休息中御出頭中江頼候而御坐敷回り御數奇屋之方拝見仕ル、栗原甚兵衛・中村泰真

案内也、其後御書院三之間へ通り候様ニ与の事ニ而通ル、同所ニ而御手付のし出ル、覺右衛門出會、於御居間御盃被成候間罷出候様被申聞、兼而之打合ニ而者御客之間ニ溜り居、忝人ツ、罷出ル筈之処今日者時刻も移り、且御奥向も外ニ御取持之御方も不被成御坐、御心迫りニ被為在候ニ付一同ニ罷出候様ニ与の義、下地喜和馬らも有之候ニ付三人一同ニ出ル、脇指者帶儘出ル、御取合覺右衛門名計披露、御五ツ目ニ付御方々様御出被進候之段御挨拶之御意有之、夫ら御機嫌窺、御五ツ目之御祝言申上ル、覺右衛門ら御盃被下候ニ付進候様挨拶有之、依之北側御帳付根へ順々ニ進む、塗木具ニ而ひれ之吸物出、したミも出ル平角据也、覺右衛門者何れ茂ら次ニ着坐也、夫ら御意ニ順ひ吸物を吸、主水様御盃を御始被成候而彦右衛門へ被下、御肴も被下、上盃被仰付、御肴も差上ル、雅登・善大夫同次第二相濟、御辞宜をして元之坐へ戻り、御盃之御請可申上与存候処、覺右衛門矢庭ニ被下候故、於御次同人迄申上ル也、御杯者内籠土器・木地三宝据、御取肴者のし昆布・するめ同木地三宝也、御使通者御兒小姓帶劍也、夫ら御書院へ戻ル、無程河瀬喜和馬御料理被下候旨被申出、覺右衛門相伴ニ而忝汁五菜御料理出ル、向詰台引喜和馬被引之、相濟御菓子・濃茶出、夫ら御酒出ル、吸物共ニ肴五種也、又喜和馬も被出、覺右衛門共取肴ニ而祝盃有之、御出頭中村忠左衛門主水様之御口上被申出、外同勤之御出頭中也、交らく出、取持有之、通者御中小姓也、夫ら御奥へ被為召候間、罷出候様忠左衛門申出、同人御広式迄誘引、御広式口ら者御奥重役須藤並人誘引、御次ニ而老女幾衛応対、夫ら御書院へ出ル、周防様・豊後様・御宇衛様・出衛様被成御坐、御目見仕、龜之

廿一日夕

御茶

点心

廿三日

主水様御土産拝領

紬 壹反

料二而銀壹枚

助様始而御目見仕ル、主水様方御盃被下、彼是御懇之御意も被為在、御酒肴頂戴仕、旨女老人罷出、段々御賑々敷被為在、其後御次休息之間二而壹汁式菜之夜食出、猶又肴老種二而御酒出ル、通ひ走女也、全体此夜食者御表二而被下候筈之処、及深更候二付御奥二而被下候由也、其内二御供回り被仰出候故、並人・幾衛へ逢、厚御礼申述置、御表へ披、御方々様御立座後退出、尤御勝手御玄闕へ一応下り、猶又御出頭中席迄出、今日之御礼忠左衛門迄申上置、退、帰宅正六時二相成ル也

○十八日、乙未、晴、夕曇、夜雨、朝素読所会読二付出席、夫方出勤、極夕退、一昨日主水様方御到来之皆子餅一重御分賜被仰付也、告于廟

○十九日、丙申、雨、夕罷、例時出勤、夕七半時頃退、達事少々間違之儀有之、恐入申出ル、善大夫重々勤向之義故同人も同断、書役野口金兵衛も申出ル也

○廿日、丁酉、晴、朝有霜、恐入不及其義旨被仰出也

○廿一日、戊戌、曇、暖、例時出勤、極夕退、受安廟御祥月、祭祀者九月二相済也

○廿二日、己亥、曇、夜雨、朝素読所講釈へ出席、相済出勤、及暮退出、西向寺參詣不能、兵藏代參申付、夜慈君辻方御帰り被成也、左之趣御移檄出ル

一宝曆九年方嘉永六年迄出差紙并小札、御藏預り厘米差紙共於御藏所相改、増印相加候二付来正月方三月迄御藏所へ可被差出旨、一通

一新開方御年貢上納之義、安永度御触示之趣を以心得違之義無之様二との義、一通

○廿三日、庚子、晴又曇、微雨、夜晴、去ル十九日御五ツ目之処、(淺野宗恒)鶴皇院様御祥月二

而御用捨、今日御五ツ目之御祝式被為在、主水様昼後御出被成、於御書院御持參之御品披露、雅登被勤之、於御奥御祝盃御式之御料理等一通り被為濟候処二而、御奥御居間二而主水様へ御目見仕、今日之御祝言申上ル也、彼方様御用人御招二而河瀬喜和馬・福山覚右衛門兩人出ル、吉田藤馬者不快之由二而御断也、御用所詰佐々木正之助も御招二候へ共不快二而不出、右御用人兩人御居間二而御盃有之、其節予御取合せ仕、並ニ於小書院二之御間ニ於て御料理出候節相伴仕ル也、入夜御奥へ被為召候、御饗応之御取持仕ル也、夜半後御立坐被成退出、凡寅鼓後二相成候也、主水様為御土産袖壹反、料銀壹枚拜領仕ル也、右者御奥通り之拜領故、老女迄御受申出ル也

○廿四日、辛丑、晴、寒、例時出勤、夕七時過退、御奥方御内々鱈尾拜領仕、御到来之御肴之由也、今夕吉田儀右衛門殿其外同流御相手二見へ候衆無屹御招二而、此度御慶事之御祝酒御振舞有之、挨拶二出ル、当御時合之事故真之御稽古二付被罷出候御序之御趣意也、極夕方御代官武内純介・渡辺廉^部之助を呼、村方御用向申談也、跡二而酒飯を出、深更二及也

○廿五日、壬寅、雨、寒、例時出勤、夕七時前退、於宅御用向取計也

○廿六日、癸卯、快晴、夕曇、夜雨、今夕右近様為御歎御出被成、出羽様御兩所様二も、お竹様二も御跡方御出被成候二付出勤、夜中御奥へ招、御取持被仰付、及深更退也、堀尾善大夫今日方風邪二而煩也

○廿七日、甲辰、雨又晴、温甚、例時出勤、及暮退、夜中又就御用向出勤

○廿八日、乙巳、曇、暖、例時出勤、夕七半時前退、夜辻妹來宿

○廿九日、丙午、雨、暖、水風呂入浴、六丁目御館へ為窺御機嫌罷出、夜中お梅帰ル、垂墨利加使節申立之通御聽届ニ相成、去月廿一日登城拜謁、御旅宿・御料理被下候之由、珍事也

○卅日、丁未、(マ)

十二月 大

○朔日、戊申、曇、寒威稍強、早朝御用向有之、出勤、一応退、今日者御宇衛様四半時御供揃ニ而白神社并禪林寺へ御參詣被遊候ニ付、為御供右時刻出勤、九半時頃御出宅、八半時過被為入、今日者上下着也、供連者若党二人・槍持・草履取・合羽籠、尤當時故騎馬ニ者無之、直ニ相詰、及暮退也

○二日、己酉、晴、寒威強、朝為何御機嫌罷出候処御用向有之、及午退、御用達普馬之進・伊藤徳之助兩人右連名手紙ニ而今般御婚禮濟御祝ニ付、於御居間御盃被下、并於御座敷吸物・御酒被下候間、明三日五ツ時罷出候様ニとの思召之旨申來、受而奉承知、忝仕合奉存候旨御請返書差出、猶為御札御次江出ル也、辻お恒夜前又々閉有之、氣遣候由、今朝も又々閉候由為知來、慈君午後急ニ見舞ニ御出被成、妙慶院当夏安産之歎、寒氣見舞旁入來、羊羹を被患、松尾善三郎(茂カ)問安入來、森岡万之進來

三日、於御前御祝義拝領
一干鯛 一折二

○三日、庚戌、晴、寒威嚴、朝凝、昨記之趣ニ付、五時頃麻上下着出仕、九時過御次

一御樽代 金三百疋
同於御奥御二所様御前

拝領

一御鉢肴 鯛一
鱸一

こち一

一白紬 壹反

へ罷出、御婚礼濟之恐悦申上、御目見被仰付、今般御婚礼首尾御整被遊、御祝式等万端無滞被為濟、奉恐悦候旨申上ル、夫於御次周防様・出衛様へ之御歡申上ル、夫於御帳始る、御小姓組並以上御家司中謁し有之也、右相濟、御前へ被為召、御盃被下之、但御家司中者御吸物之御相伴も有之、御取合せ予勤之、皆共者御吸物者無之、御取合御用達菅馬之進御盃被下、御肴も被下、上盃被仰付、御肴も差上ル、相濟御受者御直ニ申上候様御取合る挨拶有之、御直ニ申上、猶御取合へも厚御請申述退、御次ニ而も猶御礼之義及噂也、脇指者帶儘出ル也、右順々ニ相濟候上猶又御家司中を召、御祝義物被下、其節も予御取合せ仕ル、次ニ皆共次第ニ召、右同断、御取合前之通馬之進也、脇指帶而出、こちらへと御意ニ付進候節、脇指者脱し置、御品物を頂戴、元之席へ戻、脇指を差而御取合せ江向御受申上置退也、夫より御奥へ出、御宇衛様江恐悦申上、御表ニ而頂戴物之御受も申上ル、右相濟吸物・御酒被下候間、御座敷へ回り候様御用達申出、御家司中同様十畳敷江回り、吸物・御酒頂戴仕ル、其節旦那様御臨坐御挨拶被為在、坐を避平伏、御受者後刻御次へ出、御用達へ申述ル也、御用達も挨拶有之也、御小姓組並以上江挨拶ニ御家司中被出、続而皆共も出ル、御臨座者不被為在也、夕七時過相濟退、出掛御家司中宅へ御礼ニ參ル也、右吸物頂戴之前御奥へ被為召、御二所様御前ニ於て今般御婚礼ニ付而格別ニ心配仕、御満足ニ被思召候由ニ而、御鉢肴・白紬壹反被下置、誠ニ存掛も無御坐、難有仕合奉存候段厚御請申上也、退而於御用所猶御家司中同勤へ及吹調、御請申述ル也、夜御奥へ被為召、御酒頂戴被仰付、周防様・出衛様ニも御出被遊、彼是御賑々敷御

〔四日夕〕

吸物 蛤

鉢 〔ほらさし〕身
せり

井 酢かき

大盆 八寸 〔豆ふ
あら〕

井 したし物

鉢 〔たい
はらすし〕

鉢 〔こち
大根せんは煮〕

以上

右之内鯛すし・ほらさし
身少ツ、江白菊酒一陶六
合程添而贈る也、渡辺氏
へ贈る也

〔五日〕

主水様を拝領之御目錄左

之通

生鯛 一折二

羽二重 一疋

酒宴被為在候也、及深更退也

○四日、辛亥、朝雪飛、後晴、寒威、〔例時出勤

掛渡辺・堀尾へ昨日頂戴物之吹調二行、且今夕右頂戴之御肴開キ度候間被来呉候様
申置也、夕七時過退、〔極夕より左之通相招、追々入来、頂戴之御肴を開、吸物・酒
を出ス也、且渡辺氏へ初穂左之通贈之也

渡辺雅登

堀尾善大夫

大島五兵衛

岩崎常介

渡辺四郎右衛門

平野藤吉郎

長武左衛門

小島左源太

相庭 静

富永源五郎

高木来助

三ツ井滝次郎

岩崎良之進

右之外二堀尾眠石・辻清人・森岡万之進も招、尤清人者差間有之候由二而不来

○五日、壬子、晴、寒甚、〔朝御用向有之、永田完二殿へ行、不快二而不謁、直二湯川
守衛殿へ行、又不遇、出掛渡辺へ行、帰掛辻へ寄、於恒案外快方也、〔御館へ為伺御
機嫌罷出、〔夕主水様を御使被成下、今般御引越御婚礼御首尾能御整被成、前後不大
形心配之段、御大慶思召由之御口上二而、御目錄之通生鯛一折、羽二重壹匹、御樽
代千疋拝領被仰付也、御使者唯今留守二付御品物台共其儘留置候旨申候而帰ス也、
告于廟、御品々謹而頂戴之任也、不存寄御叮嚀之拝領物忝義共奉存候事也、〔極夕右
為御請吉田藤馬御用人筆上也宅へ行、玄関二而厚御礼申置、猶又勝手江通り候而藤馬
二謁し、厚御請申述、且抑以来之恐悦挨拶等申述ル也、藤馬御引越夜方尚不快二而
今以平臥之由、何分大病与見ゆる也、暫話し帰ル也、〔今般御祝用一卷抑る予専二御

御樽代 金千疋

以上

右何れもぬり台据也

右御使者・宰領・持手等
へ祝義者不贈、先例故此
度も不及其義候也

六日

大寒節

昨日主水様を拝領之品

据台・硯蓋等今日御用部

屋通返上仕ル也

十日御目錄

干鯛 一折二

御樽代 金貳百疋

右夫々塗台据也、今日者
右台類者直二返し候由也

用向相勤候処、一昨日迄二万端無御滞被為濟候恐悦を申上ル為、今日御鉢肴鯛二枚
御内々御輿へ差上ル也、石井之方稽古場昨日射場京矢代有之候由、万之進夕方来ル、
酒飯を饗ス也

○六日、癸丑、晴、寒強、例時出勤、夕及暮退、昨日主水様を拝領之御鯛初穂慈君
へ差上、渡辺・堀尾初一緒内近所へも少々、致拜分也、八木広次郎妻病死之由
昨日為知来也

○七日、甲寅、雪振、寒強、凝、朝小倉甚右衛門を呼、森岡世帯向之義予愚考之処
段々申値、其段頭書二して相渡置也、素読所会読へ出、有地震、稍有力、例時出、
夕及暮退

○八日、乙卯、晴、寒威強、朝為伺御機嫌罷出、夕六丁目御館江為伺御機嫌罷出、森
岡・木野・水谷へ見舞、木野・水谷二而酒出、水谷二而夜中迄話し帰ル、万之進朝

夕両度来候出不遇、御宇衛様今日海蔵寺へ御參詣被遊、御供善大夫被罷越也

○九日、丙辰、雨、寒、例時出勤、入夜退、今般御婚禮之節差上物仕ル二付、為御
答礼干鯛一折二枚、御樽代金百疋拝領、於御次御用達昔馬之進方御意被申達、御請
即席二申上相濟也、服も平服也、小倉甚右衛門今朝来、此間申談置候森岡世帯向之
一件、万之進并家内共へも夫々申聞候処何れも忝狩、何分世話致くれ候様厚相頼候
との旨申候由也

○十日、丁巳、午後雪成雨、例時出勤、今日者海蔵寺御非時二御招二付上下着二而出
ル、例之通前後挨拶二出、於御内廟御回向中落閑江詰、其後御方々様御拝被為濟、

引続御家司中皆共拝仕ル也、極夕退出、主水様を今般御慶事之節御肴差上候二付、為御祝義御目録之通干鯛・御樽代拝領仕ル也、出勤中二付御品物受取置也、就右早速為御請御用人中宅へ可参筈なれ共今日者退出遅く、且此間彼方様御用人中も翌朝御受二見へ候二付旁今日不出也

○十一日、戊午、晴、寒紓也、朝主水様御用人吉田藤馬宅へ昨日拝領物之御礼二参、玄関二而申置、同人不快引籠中二付、夫福山覚右衛門宅へ参、謁を乞、猶厚御請申述置也、此義者是迄例者無之候へ共、此間喜和馬・覚右衛門右之通二有之故、先方二准如此也、善大夫同道二而参ル、夫主水様・右近様へ寒氣御機嫌伺罷出、右近様之方二而者御用人中宅へも参候也、帰掛御館へ伺御機嫌罷出、今日者健徳院様御十七回忌御速夜御法事二付、雅登御用掛二而御寺詰二朝を被罷越、出衛様御参詣、御詰被成候也、東城へ明後日後納便有之候二付、例年之通徳了寺へ鉢米料相備

当年の三夕、二致ス也、宮崎其外へ寒氣之返書等出ス也

○十二日、己未、晴或雪飛、寒威強、例時出勤、夕七半時過退、今日健徳院様十七回御忌御相当、於海蔵寺昨日を一夜越之御法事有之、御用掛雅登早晚を被罷越、且那樣早朝を御出、初座御法事を御詰被遊、周防様二も後座を御詰被遊候由也、右御法事二付御茶被遊候由二而、御奥を頂戴被仰付也、夜雪降

○十三日、庚申、曇、雪飛、寒威嚴、又晴、早朝卒与出勤、一応退、素読所講釈へ出席、相濟、例時出勤、夕七半時頃退、昨日御内廟御備之品御下り老女八十野を配分致し呉、為持来、頂戴仕ル也、海蔵寺江御家来中拝参事、御家司中皆共初一同御参

〔十六日、高謙院様へ寒中御機嫌御伺、例年之通申値二而輕キ品差上、昨年迄者枝柿を差上候へ共、当年者海苔百枚差上ル、今日船便二幾田へ文を添差登、何も堀尾の方二而仕立相頼也

詣日・御代參詣日等之外者不相成旨文化中被仰出候趣も有之候処、此後御家司・御用人并女中向程者御用之暇勝手に拜參相調候事二被仰出候也

○十四日、辛酉、曇後晴、寒強、〔朝五時過方海藏寺健徳院様へ拜參仕ル也、九時過帰宅、今日者天氣合無心元候故、駕籠二而參ル也、〔炮術稽古取二付夕稽古場へ出席、

〔極夕為伺御機嫌罷出、阪田又市殿御稽古取二付挨拶二出ル

○十五日、壬戌、晴、寒威強、〔例時出勤、夕七半時頃退

○十六日、癸亥、午後雨、温、〔例時出勤、夕七半時頃退、〔御用向差湊妙慶院へ參詣不能、^(森島)兵藏代參申付

○十七日、甲子、晴、温、〔吉田藤馬不快を訪、十三日・十四日者嘔吐強、散々之難義二而甚氣遣敷様子二有之候由之処、昨日方居合宜敷方之由、何分不容易病症与相見ゆる也、丹羽庄司へ寒氣問安二行、夫方妙慶院へ參ル、帰掛御館へ出ル、〔夜北御部屋へ出ル

○十八日、乙丑、晴、寒、〔例時出勤、夕七半時退

○十九日、丙寅、晴、寒、〔例時出勤、夕七半時退、〔辻清人・平野藤吉郎入來、〔夜慈君辻方御帰り被成也、於恒此間藤森社二而重キ祈祷致し囉候後日々快方之由、名も於竹与改候由也、〔当年も御扶助渡少々御取捨有之、昨年之振二御仕向被下候与の旨、并二諸銀渡も当暮限七歩五厘渡二被成下候旨今日被仰出、委敷御移檄有之候へ共繁多二而不能記、〔周防様今夕御出被為在、出勤中御用達迄御機嫌を伺也

○廿日、丁卯、晴、寒威緩、〔節分也、〔今暁例年之通餅を製、田中実五郎・小人三次

廿一日
立春

を頼、栄作妻を頼来也、兵藏父佐兵衛あちら方来くれる也、早朝就御用向郡御奉行
 二而野村良之進殿へ行、謁ス、古江村吾作新開来春上方御竿入有之、御藏入二相成
 候趣二付、何卒此方様御所務二被遊度由之御内談事也、御用人並小島太郎作殿江も
 御挨拶事二付参、謁スル也、今日方休日無之ニ付例時出勤、夕七時過退、六丁目
 様より御庭之代々六顆頂戴被仰付也、夜相庭静来話、在中方到来致候由二而雄雉
 一隻を恵也

○廿一日、戊辰、晴、寒紆、立春也、例時出勤、及暮退、長植義昨日あたり方氣候
 二感候敷、少々氣重之方也

○廿二日、己巳、晴、余寒強、長植夜来熱氣有之、乳を睨々不飲、息迫敷、咳も有之、
 何分困り候様二相見候故、今早朝松本良伯を迎、診を乞、全感冒、大分熱も有之由
 申、薬を投、例時出勤、入夜退、西向寺へ参詣不能、代参申付

○廿三日、庚午、快晴、余寒破胆敷也、今朝五半時頃御年寄生田筑後殿御意為御達被
 罷出候二付、早朝方出勤、来午歳限御家中知行物成五歩通り、御扶持方御切米等も
 右ニ准し御甘メ被下候旨御意之趣被仰上候由也、夕七時過退、長植夜前も終夜困候
 二付、今朝池田加賀守江使を遣し、神田社二而当病平愈之祈禱を頼、銀式兩御初穗
 相備候也、今日御役料相渡、今夕六丁目様へ御歳暮二被為召、極方罷出ル、同
 役三人并堀尾眠石、御医師不残被為召候也、御吸物・御酒頂戴仕ル

○廿四日、辛未、晴、余寒紆也、長植昨夕以来少々快方也、例時出勤、夕七時過退、
 今午後良伯来診、長植脚湯いたし呉、少々発汗ニ相成候由、其後大二氣軽ニ相成也、

〔今日御仕向米切手、附足輕之分共相渡、米価久芳・壹歩米石二付百三拾式匁替之由、近頃之高価也、此節他国米入津無之候二付、右様致騰貴候之由、尤諸国共高価之由、大坂御米御壳概しも百四匁六分余之由也、〔夜北御部屋へ被為召、今晚御奥方御二所様被成御座、御取持被仰付也、御饗心御相伴仕ル也〕

○廿五日、壬申、晴、暖、〔例時出勤、夕七時前退、御役所今日限二而御用向相濟廢休、御勘定所も同断也、夕方御銀見分有之、当年者不時御物入等も有之、御世帯余程御逼迫二被為至、窃二恐懼罷在候也、〔波多野權祐此間御切米御増拝領いたし候由、藤井乙次郎へ伝言二而為知越ヌ也、〔松本良伯来診、長槌弥快方也、〔辻清人・森岡万之進入来〕

○廿六日、癸酉、晴又曇、〔例時出勤、夕七半時過退、御役所今日限二而廢休、昨日右之趣記者誤記也、余者何も昨記之通也、〔退出掛北御部屋へ御用向二而出、酉鼓後退、久野秀太郎方知せ有之、倅那太郎御兒小姓被召出、御合力米式拾俵被下候旨申来也〕

○廿七日、甲戌、晴、〔午後御機嫌伺罷出、〔風呂を立、〔長槌弥快、氣輕嬉笑いたす也、〔西向寺へ兵藏為參也〕

○廿八日、乙亥、曇、微雨、温、〔朝良伯来診、長槌弥快由申也、〔朝御機嫌伺罷出、〔夜万之進來〕

○廿九日、丙子、晴、暖、〔午前方西向寺・妙慶院へ歳暮之參詣旁二參、六丁目御館江歳暮・御機嫌伺二罷出、森岡・坪内・木野・水谷江見舞帰ル、森岡・木野・水谷二而酒出ル、水谷二而者去ル廿四日伯父君御馬回り上席御番外被蒙仰候歎を申也、昨

〔江戸御沙汰書之内〕

黄金百枚

時服三十

御使 内藤紀伊守（信親）

水戸前中納言様（信清）

右旭日丸御船製造之儀御引請被仰出、此程御成功相成、御軍艦造立之義者初而二付彼是手数相懸候処、厚く御世話被在之、出来方も宜、御満悦ニ被思召候、依之被遣之

日右之趣為知来也、此後者年頭・五節句・朔望并不時・御吉凶・非常之節計御出仕被成候様ニとの被仰付之由也、〔御館江夕方御機嫌伺罷出、〕夜良伯来、酒を出

○卅日、丁丑、晴、暖、〔朝堀尾・岩崎・小倉并相庭静飯居へ挨拶ニ行、且渡辺氏へも御用向ニ而行也、〕清人・万之進歳末祝詞ニ午前入来、酒を出、〔慈君午後風与御胸痛ニ而御困り被成御平臥也、〕夕七時頃方歳末之御祝詞与して罷出、於御居間例之通御目見、御祝詞申上、於御次周防様江之御祝詞御用達菅馬之進迄申上、夫方御奥へ罷出、御宇衛様御目見ニ而御祝詞申上、退出掛北御部屋へ罷出、出衛様御下屋敷へ御出、御留守中ニ付石井寿兵衛迄御祝詞申上、暮頃帰宅、〔堀尾眠石・小倉甚右衛門・岩崎常介・三宅内外・長武左衛門歳末祝詞入来、〕木野一馬歳末旁入来、酒を出、慈君御平臥ニ候へ共、例年之如田楽を焼、歳暮之盃を伝、長槌も弥快、全家欣然共ニ君恩之深厚を感戴仕ル也

むらかみかじょう
村上家乗

あんせいさんねん よねん
安政三年・四年

広島県立文書館資料集 10

令和元年（2019）6月1日発行

編集・発行 広島県立文書館

〒730-0052
広島市中区千田町三丁目7-47
TEL (082) 245-8444

編集・印刷 鯉城印刷株式会社

〒730-0805
広島市中区十日市町二丁目8-2
TEL (082) 232-8247

